

古墳時代阿蘇ルートの研究

—阿蘇地域に築かれた古墳に着目して—

課題番号：26284122

2014年度～2017年度科学研究費補助金

基盤研究（B）研究成果報告書

研究代表者 杉井 健

熊本大学大学院人文社会科学部准教授

2019年3月

熊本大学文学部

古墳時代阿蘇ルートの研究

—阿蘇地域に築かれた古墳に着目して—

課題番号：26284122

2014年度～2017年度科学研究費補助金

基盤研究（B）研究成果報告書

研究代表者 杉井 健

熊本大学大学院人文社会科学研究部准教授

2019年3月

熊本大学文学部

例 言

1. 本書は、独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金の交付を受けて実施した研究の成果報告書である。研究の種目、課題名、期間等は以下の通りである。

研究種目：基盤研究（B）

課題番号：26284122

研究課題名：阿蘇地域を中心とした古墳時代の九州島における情報伝達・文物交流の実証的研究

研究組織：研究代表者 杉井 健（熊本大学大学院人文社会科学部）

研究分担者 田中裕介（別府大学文学部）

志賀智史（九州国立博物館）

研究期間：2014年度（平成26）～2017年度（平成29）

交付額：2014年度 直接経費 4,500千円（補助金1,700千円、基金2,800千円） 間接経費 1,350千円

2015年度 直接経費 3,200千円（補助金2,300千円、基金 900千円） 間接経費 960千円

2016年度 直接経費 2,300千円（補助金1,600千円、基金 700千円） 間接経費 690千円

2017年度 直接経費 2,300千円（補助金1,700千円、基金 600千円） 間接経費 690千円

※平成28年（2016年）熊本地震の影響により上記総額のうち2,500千円を2018年度に繰越した。

研究成果：本書

2. 本書は5部構成をとる。第1部には本研究の目的と経過を、第2部には高塚横穴群（熊本県阿蘇郡高森町大字永野原字下境ノ口所在）出土遺物の調査報告を、第3部には上御倉古墳・下御倉古墳（熊本県阿蘇市一の宮町手野宮の前2295番地・2288番地所在）の測量調査報告を、第4部には本研究に参加していただいた研究分担者による個別研究の成果を、第5部には全体の総括を示した。なお、当補助金の一部を用いて実施した古墳の測量調査・発掘調査の成果については、すでに以下の文献でも公表している。

與嶺友紀也・入江由真編（杉井健監修著作）2015「平原古墳群調査報告3」『考古学研究室報告』第50集、熊本大学文学部考古学研究室：pp.1-66

安原真衣・山元瞭平編（杉井健監修著作）2018「上御倉古墳測量調査報告」『考古学研究室報告』第53集、熊本大学文学部考古学研究室：pp.53-68

井 大樹・安部和城・江口寛基・中嶋小春・田中裕介 2016「漆生古墳群第3次・第4次調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書6－平成26年度調査－』豊後大野市教育委員会：pp.5-13

大矢健太郎・中原彰久・村田仁志・田中裕介 2017「漆生古墳群第5次調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書7－平成27年度調査－』豊後大野市教育委員会：pp.5-14

塩見恭平・高木慎太郎・竹永昂平・玉川剛司・田中裕介 2018「漆生古墳群第6次調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書8－平成28年度調査－』豊後大野市教育委員会：pp.5-13

井 大樹 2016「大分県下の刳拔式石棺」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書6－平成26年度調査－』豊後大野市教育委員会：pp.14-19

3. 第2部で報告した高塚横穴群出土遺物は、熊本県教育委員会の所蔵品である。
4. 図版写真のうち、図版1は国土地理院撮影の空中写真CKU764-C10-41（1976年10月22日撮影）とCKU20072X-C5-77（2008年2月25日撮影）を、図版36はCKU763-C2-38（1976年12月1日撮影）とCKU201613-C3-16（2016年4月20日撮影）を複製したものである。図版2～12の写真は野田拓治氏の撮影、図版49・50の画像は株式会社とっぺんの作成による。これら以外の図版写真はすべて杉井が撮影した。
5. 本文中の図14は国土地理院発行の20万分の1地勢図（熊本および大分）を、図15は5万分の1地形図（高森および三田井）を複製したものである。図72～78のX線画像は鹿児島大学総合研究博物館の橋本達也氏より提供を受けた。
6. 付録のCDに収めた上御倉古墳石室・墳丘3Dモデルデータ（PDF）および石室オルソ画は株式会社とっぺんの作成による。オリジナルデータが必要な場合は、株式会社とっぺん（電話0952-28-7225）あるいは熊本大学の杉井（電話096-342-2421）まで問い合わせ願いたい。
7. 本書の編集は、杉井健が担当した。執筆分担は、目次および各文末に示した。

古墳時代阿蘇ルートの研究

—阿蘇地域に築かれた古墳に着目して—

目 次

例 言

第1部 研究の目的と経過	1
第1章 研究の目的と経過	杉井 健 … 3
第2章 謝辞	〃 … 5
第2部 高森町高塚横穴群出土遺物の調査報告	7
第1章 高塚横穴群の位置と調査経過	杉井 健 … 9
第2章 横穴の構造	〃 … 13
第1節 横穴の配置	13
第2節 1号墓	14
1 横穴の構造	14
2 遺物・人骨出土状況	15
第3節 2号墓	19
1 横穴の構造	19
2 遺物・人骨出土状況	21
第4節 3号墓	24
1 横穴の構造	24
2 遺物出土状況	25
第5節 出土遺物の種類と数	27
第3章 出土遺物	29
第1節 1号墓出土の遺物	29
1 第1屍床	29
(1) 鉄剣	三好栄太郎 … 29
(2) 鉄鏃	〃 … 29
(3) 刀子	山元瞭平 … 35
2 第2屍床	36
(1) 鉄刀	三好栄太郎 … 36
(2) 鉄鏃	〃 … 36
(3) 刀子	山元瞭平 … 40
(4) 玉類	杉井 健 … 41
①管玉	41
②ガラス玉	42
3 出土位置不明	42
(1) 鉄剣	三好栄太郎 … 42

(2) 鉄鏃	三好栄太郎	42
第2節 2号墓出土の遺物		43
1 第1屍床		43
(1) 鉄刀	杉井 健	43
(2) 鉄鏃	三好栄太郎	43
(3) 刀子	山元瞭平	44
2 第2屍床		45
(1) 鉄刀	杉井 健	45
(2) 鉄鏃	三好栄太郎	45
(3) 骨鏃	”	48
(4) 刀子	山元瞭平	48
3 中央通路		48
(1) 鉄鏃	三好栄太郎	48
(2) 馬具		49
①轡	田中麻里子	49
②辻金具	山元瞭平	49
③鉸具	”	52
4 出土位置不明		52
(1) 鉄鏃	三好栄太郎	52
(2) 刀子	山元瞭平	53
第3節 3号墓出土の遺物		53
1 第1屍床		53
(1) 鉄刀	杉井 健	53
(2) 鉄鏃	三好栄太郎	53
(3) 刀子	山元瞭平	56
(4) 砥石	杉井 健	57
(5) 鉄釧	”	57
2 第2屍床		58
(1) 鉄鏃	三好栄太郎	58
(2) 刀子	山元瞭平	61
3 出土位置不明		62
(1) 鉄鏃	三好栄太郎	62
第4節 不時発見(出土横穴不明)の遺物		62
(1) 短甲	西嶋剛広	62
①概要		62
②各部の観察		63
③小結		69
(2) 鉄剣	三好栄太郎	77
(3) 鉄鏃	”	77
第4章 まとめ	杉井 健	79
第1節 発掘調査資料・出土遺物の調査の成果		79
1 横穴群および横穴の構造		79
2 出土人骨		80
3 出土遺物		80

(1) 種類と数	80
(2) 1号墓出土遺物	80
(3) 2号墓出土遺物	81
(4) 3号墓出土遺物	81
(5) 不時発見遺物	82
第2節 横穴群の評価	82
1 横穴群の時期	82
2 横穴群の史的意義	82
第3部 阿蘇市上御倉古墳・下御倉古墳の測量調査報告	89
第1章 上御倉古墳・下御倉古墳の位置と調査経過	杉井 健 91
第2章 上御倉古墳・下御倉古墳の墳丘の構造	安原真衣・杉井 健 94
第3章 上御倉古墳の石室の構造	山元瞭平 99
第4章 上御倉古墳採集遺物	〃 106
第5章 まとめ	山元瞭平・杉井 健 107
第4部 古墳時代阿蘇地域に関わる遺跡・遺物の研究	109
第1章 豊後大野市の古墳群からみた地域社会と首長像	田中裕介 111
第2章 熊本県阿蘇地域の墳墓から出土した赤色顔料について	志賀智史 135
第5部 総括	145
総括	杉井 健 147

図 版

図 版 目 次

高塚横穴群

図版 1	1 空からみた高塚横穴群とその周辺（丸が横穴群の所在地）（発掘調査実施の12年前、1976年10月22日撮影）
	2 空からみた高塚横穴群の所在地（2008年2月25日撮影）
図版 2	1 調査地から東の宮崎県方向を望む（1988年調査時）
	2 調査地から東下方を望む（1988年調査時）
図版 3	1 下方の道路から横穴群の方向を望む（1988年調査時）
	2 横穴群検出状況（もともと手前が2号墓）
図版 4	1 1号墓玄室全景（奥壁を望む）
	2 1号墓第2屍床（右屍床）全景
図版 5	1 1号墓第2屍床（右屍床）西半部（奥壁側）
	2 1号墓第2屍床（右屍床）東半部（前壁側）

- 図版 6 1 1号墓第1屍床(左屍床)東半部(前壁側)
2 1号墓第1屍床(左屍床)西半部(奥壁側)
- 図版 7 1 2号墓閉塞石の状況
2 2号墓玄室全景(奥壁を望む)
- 図版 8 1 2号墓第2屍床(右屍床)東半部(前壁側)
2 2号墓第2屍床(右屍床)の人骨と遺物の重なり(南から)
- 図版 9 1 2号墓第1屍床(左屍床)東半部(前壁側)
2 2号墓中央通路遺物出土状況(南から)
- 図版 10 1 3号墓全景(奥壁側から)
2 3号墓玄室全景(奥壁を望む)
- 図版 11 1 3号墓第2屍床(右屍床)全景(奥壁側から)
2 3号墓第2屍床(右屍床)遺物出土状況(南から)
- 図版 12 1 3号墓第1屍床(左屍床)全景(奥壁側から)
2 3号墓第1屍床(左屍床)遺物出土状況(北から)
- 図版 13 1 高塚横穴群所在地の現状(1)(2018年12月4日撮影,西から)
2 高塚横穴群所在地の現状(2)(2018年12月4日撮影,北から)
- 図版 14 1号墓出土鉄刀・鉄剣(第1・2屍床,不明)、刀子(第1・2屍床)
- 図版 15 1号墓出土鉄鏃(1)(第1屍床)
- 図版 16 1号墓出土鉄鏃(2)(第2屍床(1))
- 図版 17 1 1号墓出土鉄鏃(3)(第2屍床(2),不明)
2 1号墓出土鉄鏃(4)(第2屍床(3))
3 1号墓出土玉類(第2屍床)
4 管玉 No. 1 端面
5 管玉 No. 2 端面
6 ガラス玉細部(左から No. 3・4・5・6)
- 図版 18 2号墓出土轡(中央通路)(下は上の裏面)
- 図版 19 1 2号墓出土辻金具・鉸具(中央通路)
2 2号墓出土刀子(第1・2屍床,不明)
3 2号墓出土鉄鏃(1)(第1屍床,中央通路,不明)
- 図版 20 2号墓出土鉄鏃(2)・骨鏃(第2屍床)
- 図版 21 1 3号墓出土刀子(第1・2屍床)
2 3号墓出土鉄釧(第1屍床)
3 3号墓出土砥石(第1屍床)
- 図版 22 1 3号墓出土鉄鏃(1)(第1屍床)
2 3号墓出土鉄鏃(2)(不明)
- 図版 23 3号墓出土鉄鏃(3)(第2屍床)
- 図版 24 1 2・3号墓出土鉄刀(1:2号墓第1屍床,2:同第2屍床,3:3号墓第1屍床)(左:佩表,右:
佩裏)
2 出土横穴不明(不時発見)鉄剣・鉄鏃(2002年7月個人寄託品)
- 図版 25 1 鉄鏃根挟みの糸巻き(1号墓第2屍床 No. 30)
2 鉄鏃に刻まれた円文(1号墓第2屍床 No. 31)
3 鉄鏃付着繊維(1号墓第2屍床 No. 29)
4 轡鏡板鍛接部(2号墓)
5 辻金具繫装着用の革紐(2号墓 No. 5)

- 6 辻金具鉢内面の有機物（2号墓 No. 2）
- 7 鉄釧鉄棒固定箇所糸巻き（3号墓 No. 1-a）
- 8 鉄釧小環（3号墓 No. 2-a）
- 図版 26 短甲（正面）（出土横穴不明）
- 図版 27 短甲（背面）（出土横穴不明）
- 図版 28 短甲（左側面）（出土横穴不明）
- 図版 29 短甲（右側面）（出土横穴不明）
- 図版 30 短甲（右前胸外面）（出土横穴不明）
- 図版 31 短甲（右前胸内面）（出土横穴不明）
- 図版 32 1 短甲（後胸上半部外面）（出土横穴不明）
2 短甲（後胸内面）（出土横穴不明）
- 図版 33 1 短甲（左前胸上半部外面）（出土横穴不明）
2 短甲（左前胸上半部内面）（出土横穴不明）
- 図版 34 1 短甲懸緒孔とワタガミ
2 短甲左前胸に付着するワタガミ
3 短甲右前胸に付着するワタガミ
- 図版 35 1 短甲後胸右脇部上位の蝶番金具
2 同蝶番金具に挟まれる有機物
3 短甲後胸右脇部下位の蝶番金具
4 短甲右前胸上位の蝶番金具
5 短甲左前胸引合板外面の上端部
6 同上辺左側突出部の折り返し（内面から）
7 短甲右前胸引合板外面の上端部
8 同上辺右側突出部の折り返し（内面から）

上御倉古墳・下御倉古墳

- 図版 36 1 空からみた上御倉古墳・下御倉古墳とその周辺（丸が古墳の位置、左側の小丘が上御倉古墳、右側の小丘が下御倉古墳）（水槽建設以前、1976年12月1日撮影）
2 空からみた上御倉古墳・下御倉古墳（2016年4月20日撮影）
- 図版 37 1 上御倉古墳・下御倉古墳が立地する谷筋を南から望む
2 下御倉古墳と阿蘇五岳の根子岳（北から）
- 図版 38 1 上御倉古墳の現状（北西から）
2 上御倉古墳の横穴式石室開口部（南から）
- 図版 39 1 下御倉古墳の現状（南から）
2 下御倉古墳横穴式石室の現状（南から）
- 図版 40 上御倉古墳石室の玄室奥壁
- 図版 41 上御倉古墳石室の玄室前壁
- 図版 42 1 上御倉古墳石室の玄室右側壁の腰石
2 上御倉古墳石室の玄室左側壁の腰石
- 図版 43 1 上御倉古墳石室の石屋形床面
2 上御倉古墳石室の石屋形屋根石
3 上御倉古墳石室の玄室天井部（右が奥壁側）
- 図版 44 1 上御倉古墳石室の前室後壁
2 上御倉古墳石室の前室前壁
- 図版 45 1 上御倉古墳石室の前室右側壁

- 2 上御倉古墳石室の前室左側壁
- 3 上御倉古墳石室の前室天井部（右が玄室側）
- 図版 46 1 羨道側からみた上御倉古墳石室の前門
- 2 羨道から上御倉古墳石室の羨門部を望む
- 図版 47 1 上御倉古墳石室の羨道右側壁
- 2 上御倉古墳石室の羨道右側壁の羨門立柱石
- 3 上御倉古墳石室の羨道左側壁
- 図版 48 1 上御倉古墳石室の羨門
- 2 上御倉古墳採集須恵器
- 図版 49 上御倉古墳石室オルソ画像
- 図版 50 1 上御倉古墳石室石屋形の現状（3次元モデル）
- 2 上御倉古墳石室石屋形の復元イメージ（3次元モデル）

挿 図 目 次

図 1	阿蘇火山の位置	3
図 2	漆生古墳群大久保 3 号墳主体部の調査（2016 年）	3
図 3	平原古墳群第 5 次調査現地説明会（2014 年）	4
図 4	上御倉古墳横穴式石室の実測（2015 年）	4
図 5	熊本地震によるコンテナ箱の倒壊（2016 年）	4
図 6	熊本地震による埴輪・甕棺の倒壊（2016 年）	4
図 7	上御倉古墳調査宿舎ミーティング（2017 年）	5
図 8	下御倉古墳墳丘の測量（2018 年）	5
図 9	上御倉古墳・下御倉古墳調査時の宿舎	5
図 10	高塚横穴群出土短甲の調査	5
図 11	調査研究成果報告会（豊後大野市，2015 年）	6
図 12	調査研究成果報告会（阿蘇市，2016 年）	6
図 13	阿蘇地域の古墳分布と高塚横穴群の位置	9
図 14	阿蘇カルデラと高塚横穴群の位置（黒丸）	10
図 15	高塚横穴群の位置（黒丸）	10
図 16	高塚横穴群の発掘調査に携わった方々	11
図 17	高塚横穴群発見の記念碑	11
図 18	高塚横穴群 1～3 号墓の配置	13
図 19	1 号墓実測図	14
図 20	1 号墓閉塞石実測図	15
図 21	1 号墓人骨・遺物出土状況図 (1)	16
図 22	1 号墓人骨・遺物出土状況図 (2)	17
図 23	1 号墓遺物出土状況部分図	17
図 24	1 号墓人骨出土状況図	18
図 25	2 号墓実測図	20
図 26	2 号墓閉塞石実測図	20
図 27	2 号墓人骨・遺物出土状況図	22
図 28	2 号墓遺物出土状況部分図	23

図 29	2号墓人骨出土状況図	23
図 30	3号墓実測図	24
図 31	3号墓閉塞石実測図	25
図 32	3号墓遺物出土状況図	26
図 33	3号墓遺物出土状況部分図	27
図 34	1号墓第1屍床出土鉄剣実測図	29
図 35	1号墓第1屍床出土鉄鍬実測図(1)	30
図 36	1号墓第1屍床出土鉄鍬実測図(2)	31
図 37	1988年に描かれた高塚横穴群出土鉄鍬実測図抜粋	34
図 38	1号墓第1屍床出土刀子実測図	35
図 39	1号墓第2屍床出土鉄刀実測図	36
図 40	1号墓第2屍床出土鉄鍬実測図(1)	37
図 41	1号墓第2屍床出土鉄鍬実測図(2)	38
図 42	1号墓第2屍床出土鉄鍬実測図(3)	39
図 43	1号墓第2屍床出土刀子実測図	41
図 44	1号墓第2屍床出土玉類実測図	42
図 45	1号墓出土位置不明鉄剣実測図	42
図 46	1号墓出土位置不明鉄鍬実測図	42
図 47	2号墓第1屍床出土鉄鍬実測図	44
図 48	2号墓第1屍床出土刀子実測図	45
図 49	2号墓第2屍床出土鉄鍬実測図	46
図 50	2号墓第2屍床出土鉄鍬・骨鍬実測図	47
図 51	2号墓第2屍床出土刀子実測図	48
図 52	2号墓中央通路出土鉄鍬実測図	48
図 53	2号墓中央通路出土轡実測図	50
図 54	2号墓中央通路出土辻金具実測図	51
図 55	2号墓中央通路出土鉸具実測図	52
図 56	2号墓出土位置不明鉄鍬実測図	52
図 57	2号墓出土位置不明刀子実測図	53
図 58	3号墓第1屍床出土鉄鍬実測図(1)	54
図 59	3号墓第1屍床出土鉄鍬実測図(2)	55
図 60	3号墓第1屍床出土刀子実測図	56
図 61	3号墓第1屍床出土砥石実測図	56
図 62	3号墓第1屍床出土鉄釧実測図	57
図 63	3号墓第2屍床出土鉄鍬実測図(1)	59
図 64	3号墓第2屍床出土鉄鍬実測図(2)	60
図 65	3号墓第2屍床出土刀子実測図	61
図 66	3号墓出土位置不明鉄鍬実測図	62
図 67	高塚横穴群不時発見短甲実測図(1)	64
図 68	高塚横穴群不時発見短甲実測図(2)	65
図 69	高塚横穴群不時発見短甲実測図(3)	66
図 70	高塚横穴群不時発見短甲実測図(4)	67
図 71	高塚横穴群不時発見短甲実測図(5)	68
図 72	高塚横穴群不時発見短甲X線CT画像(外面)	70

図 73	高塚横穴群不時発見短甲 X線 C T 画像 (内面)	71
図 74	高塚横穴群不時発見短甲 X線 C T 画像 (上面・断面)	72
図 75	高塚横穴群不時発見短甲 X線透過画像	73
図 76	高塚横穴群不時発見短甲片 X線 C T 画像 (外面)	74
図 77	高塚横穴群不時発見短甲片 X線 C T 画像 (内面)	74
図 78	高塚横穴群不時発見短甲片 X線透過画像	75
図 79	大分県竹田市扇森山横穴出土短甲	76
図 80	高塚横穴群不時発見鉄剣実測図	77
図 81	高塚横穴群不時発見鉄鏃実測図	77
図 82	五ヶ瀬川上流域および大野川上流域の横穴の諸例	84
図 83	小環を付す釧の諸例	85
図 84	熊本県西原村さつね塚古墳群石棺出土鉄鏃実測図	85
図 85	大分県竹田市扇森山横穴出土短甲実測図	86
図 86	阿蘇地域の古墳分布と上御倉古墳・下御倉古墳の位置	91
図 87	1962 年報告掲載の上御倉古墳・下御倉古墳石室実測図	93
図 88	上御倉古墳・下御倉古墳墳丘測量図	95-96
図 89	上御倉古墳墳丘横断面図・縦断面図	97
図 90	上御倉古墳墳丘形態復元想定図	97
図 91	下御倉古墳墳丘断面図	98
図 92	上御倉古墳石室実測図	101-102
図 93	原口長之によって示された板石と装飾文様	104
図 94	上御倉古墳採集須恵器実測図	106
図 95	上御倉古墳と鬼ノ岩屋 1 号墳の石室の比較	107

表 目 次

表 1	高塚横穴群 1～3 号墓出土遺物の種類と数	28
表 2	高塚横穴群不時発見遺物の種類と数	28
表 3	高塚横穴群出土鉄鏃・骨鏃各部位の形状・計測値 (1)	32
表 4	高塚横穴群出土鉄鏃・骨鏃各部位の形状・計測値 (2)	33
表 5	2 号墓中央通路出土辻金具各部位の形状・計測値	51
表 6	高塚横穴群出土刀子各部位の形状・計測値	62
表 7	測量基準点の現場座標	92
表 8	測量基準点の国土座標	92

第1部 研究の目的と経過

第1章 研究の目的と経過

研究の目的 九州島は南北（鹿児島県大隅町佐多岬―福岡県北九州市遠見ヶ鼻）約330km、東西（大分県佐伯市鶴御崎―長崎県西海市鴨岬）約230km、面積約36,782km²の大きさをもつ。そのほぼ中央に、阿蘇火山が位置する（図1）。阿蘇火山は、カルデラとその中央に屹立する中央火口丘群、およびその周囲の火山噴出物が堆積した台地から成る。中央火口丘群は東西に長く、それを境として阿蘇カルデラ盆地は北側の阿蘇谷と南側の南郷谷に分かれている（図13）。

九州島東側の別府湾からは、大野川をさかのぼり菅生台地を経由して外輪山を西に下ると阿蘇谷の東端部に達する。日向灘からは、五ヶ瀬川をさかのぼり高千穂を経て高森峠あるいは中坂峠を越えると南郷谷の南西端部に到達する。一方、九州島西側の島原湾からは、白川を東にさかのぼり立野火口瀬を抜けて北に向かうと阿蘇谷に、南に向かうと南郷谷に至る。有明海北部からは、筑後川をさかのぼり途中の日田盆地から南に向かうと阿蘇谷の中央部に到達する。このように、阿蘇地域は、九州島の沿岸部とは複数の河川で結ばれており、古来、九州島の東西あるいは南北を結ぶ内陸交通の結節点となり得た場所であることは容易に想像できる。

本研究では、こうした点に着目し、九州島の熊本県側および大分県側の古墳動向を具体的資料の調査・分析を通じて明らかにし、さらにそれらを比較することによって、古墳時代における阿蘇地域を介した内陸ルートのあり方を解明することを目的とした。

研究の経過 こうした研究目的の達成を目指し、阿蘇地域に所在する古墳（首長墓）を対象としたフィールド調査、および既存重要資料の調査・分析の2つを研究の柱にすえた。

フィールド調査では、研究代表者・杉井健が熊本県側、研究分担者・田中裕介が大分県側を担当した。

田中裕介は、大野川中流域の豊後大野市をフィールドに選び、漆生古墳群^{うるしゅう}において毎年着実に測量・発掘調査を推進した（第3～6次調査）（図2）。漆生古墳群は、6基の前方後円墳のある豊後大野市三重地域から少し西に大野川をさかのぼった緒方地域に築かれている。そこは三重地域とさらに西の竹田地域との中間地点にあたり、別府湾から阿蘇地域に至るルートを考えるうえで、きわめて重要な場所の1つといえる。当研究にかかわる漆生古墳群の調査成果については、3冊の報告書にまとめられているため詳細はそれらに譲るが〔井ほか2016、大矢ほか2017、塩見ほか2018〕、本書第4部第1章には、そうした調査成果を加味しながら豊後大野市域における古墳築造の歴史的背景について田中が検討した結果を掲載した。また、漆生古墳群の調査と並行して、大分県下の石棺の悉皆的な調査も進められた〔井2016〕。

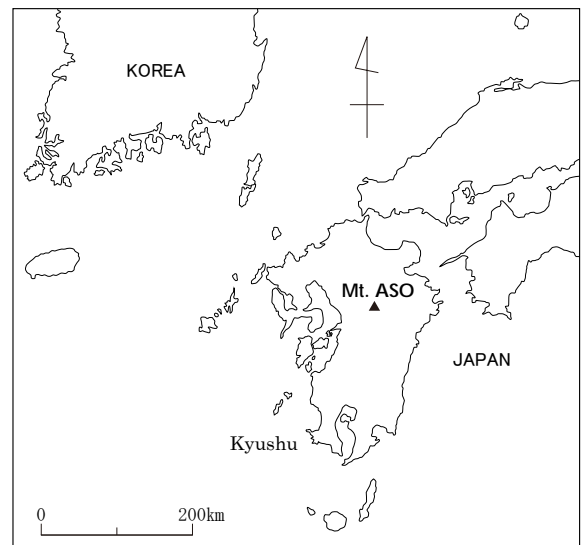


図1 阿蘇火山の位置



図2 漆生古墳群大久保3号墳主体部の調査(2016年)



図3 平原古墳群第5次調査現地説明会(2014年)



図4 上御倉古墳横穴式石室の実測(2015年)



図5 熊本地震によるコンテナ箱の倒壊(2016年)



図6 熊本地震による埴輪・甕棺の倒壊(2016年)

杉井健は、白川上流域の阿蘇谷をフィールドとし、古墳の測量・発掘調査を進めた。2014年度は、それ以前から調査を行っていた阿蘇市平原古墳群を対象とし、その6号墳の墳丘発掘調査、2・3号墳の墳丘測量調査、既調査だが未報告であった1号墳石棺およびその出土遺物の調査を実施した(第5次調査)(図3)。この調査成果についてはすでに報告しているためそれに譲るが[與嶺・入江編2015]、未測量の古墳がいくつか残されていること、1・6号墳以外の古墳の内容が不明であることなど、多くの検討課題が今後に残された。しかし、2015年度以降しばらくは、熊本大学考古学研究室の内部事情により、阿蘇地域での長期間にわたる発掘調査を実施することができなくなった。そのため、2015年度からは、著名かつ重要な横穴式石室墳であるが、基礎資料の少ない上御倉古墳・下御倉古墳の測量調査を行うこととし、2015年度は上御倉古墳横穴式石室の実測調査および3次元計測を実施した(図4)。そして、この翌年度も測量調査を継続する予定で準備を進めた。ところが、2016年4月14日の前震、16日の本震に始まる一連の地震活動ー平成28年(2016年)熊本地震ーが発生した。これにより、熊本大学は少なくない被害を受け(図5・6)、またフィールドとしていた阿蘇地域にも甚大な被害がもたらされた。そのため、2016年度は阿蘇谷でのフィールド調査の実施を断念した。なお、このことが強く影響し、当科学研究費の補助事業期間の1年延長を申請することとなった。翌2017年度になると、関係各位のご理解とご援助のもと、阿蘇谷でのフィールド調査を再開することができた。2017年度には上御倉古墳墳丘の測量調査および3次元計測を(図7)、補助事業延長期間の2018年度には下御倉古墳墳丘の測量調査を実施することができ(図8・9)、なんとか調査はひととおりの完結をみた。この2015・2017年度の調査成果についてはすでに報告しているが[安原・山元編2018]、その内容と2018年度の調査成果を総合したものを本書第3部に掲載した。

一方、既存重要資料の調査・分析に関しては、研究分担者・志賀智史によって、新たに採取した資料を加えての赤色顔料の調査・分析が進められた。阿蘇カルデラ盆地のうち阿蘇谷の西半部ではベンガラ素材となる褐鉄鉱が豊富に産出し、弥生時代から古墳時代には、その褐

鉄鉾を用いたベンガラ生産が阿蘇谷で行われていたことが推測されている。褐鉄鉾起源のベンガラの流通範囲を明らかにすることは、阿蘇地域と九州島各地とを結ぶ交通ルートの実態解明にも大きな示唆を与えると考えられる。こうした観点にもとづく志賀の調査・分析結果は、本書第4部第2章に掲載した。

杉井は、熊本県高森町高塚横穴群出土遺物を対象に調査・分析を進めた(図10)。高塚横穴群は、阿蘇カルデラ盆地の南郷谷を南東に離れた凝灰岩台地に築かれており、その場所は五ヶ瀬川の支流に面している。つまり、宮崎県側と南郷谷とを結ぶ交通ルート上に位置しており、その横穴の形態および副葬品の内容を明らかにすることは両地域の関係を探るうえできわめて重要な意味をもつ。また、事前調査によって当横穴群から出土した横板鉾留短甲の存在を確認していたが、それは当地と近畿中央政権との関係を示すものである。すなわち、未報告の高塚横穴群出土遺物の内容を明らかにすることは、九州島内のみではなく少なくとも西日本における情報伝達・文物交流のあり方を示す可能性がある。そのような見通しのもと当横穴群出土遺物の調査・分析を実施したが、その成果は本書第2部に掲載した。

なお、メンバー各人がそれぞれの調査・研究成果を共有し、また相互に批判・点検するために、お互いのフィールド調査現場を逐次訪問し、また熊本大学を会場にして打合会を実施するとともに、本研究で得られた成果を広く一般市民に向けて披露することを目的として、豊後大野市および阿蘇市を会場に2度の調査研究成果報告会を開催した(図11・12)。

(杉井 健)

第2章 謝 辞

本研究を実施するにあたっては、じつに多くの方々、諸機関のお世話になった。以下にご芳名を記し、心からの感謝の念を捧げたい(順不同)。

阿蘇市教育委員会 緒方徹・宮本利邦・入江捺月・福田拓也(2014・2015年度)

豊後大野市教育委員会 諸岡郁

平原古墳群の調査 佐伯朋史(6号墳地権者)、小西誠(3号墳地権者)、佐藤ちはる(2号墳地権者)、日野満



図7 上御倉古墳調査宿舎ミーティング(2017年)



図8 下御倉古墳墳丘の測量(2018年)



図9 上御倉古墳・下御倉古墳調査時の宿舎



図10 高塚横穴群出土短甲の調査



図11 調査研究成果報告会（豊後大野市，2015年）



図12 調査研究成果報告会（阿蘇市，2016年）

司（仮設トイレ設置）、廣石勝之・大田黒元吉・市原育郎（山田地区歴代区長）、後藤克博（1号墳調査時作成図面提供・出土遺物調査，熊本県教育委員会）、阿蘇市山田地区住民の皆様

上御倉古墳・下御倉古墳の調査 宮川経幸（地権者，國造神社）、工藤輝光（阿蘇淡水魚センター）、工藤徹雄・山部今朝範・山部勝也（古城6区歴代区長）、岩永昭次（阿蘇公民館古城分館長）、村上浩明・田中健一郎・石丸凌（3次元計測，株式会社とっぺん）、阿蘇市立一の宮温泉センター、阿蘇市古城地区住民の皆様

高塚横穴群出土遺物の調査 甲斐裁・甲斐國子・甲斐美穂（地権者，横穴群発見時の状況等教示，有限会社甲斐興業）、野田拓治・野田民子（甲冑発見時・発掘調査等の情報教示，調査時作成図面・写真の提供，熊本県教育委員会）、松下孝幸（人骨図面使用許可，土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）、岡本真也・水上公誠・濱田洋（出土遺物借用，熊本県教育委員会）、山代浩二・後藤克博（出土遺物調査，熊本県教育委員会）、今津節生・赤田昌倫（短甲X線CT画像撮影，九州国立博物館）、橋本達也（短甲X線CT画像撮影・加工・提供，鹿児島大学総合研究博物館）、

長谷中利昭・宮縁育夫（砥石石材教示，熊本大学理学部・教育学部）、岩本崇・鈴木一有（鉄釧類例教示，島根大学法文学部・浜松市役所）、工藤心平（短甲類例調査，竹田市教育委員会）、緒方俊輔（関連文献提供，高千穂町教育委員会）、古城史雄・高木恭二（肥後考古学会総会資料探索，熊本県教育委員会・宇土市教育委員会）、三好栄太郎・西嶋剛広・山元瞭平・田中麻里子・松ヶ野（後藤）恵・入江由真（遺物実測・分析，研究協力）

調査全般 熊本大学考古学研究室の学生諸氏、別府大学考古学研究室の学生諸氏

（杉井 健）

第1部 引用・参考文献

- 井 大樹 2016「大分県下の刳抜式石棺」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書6－平成26年度調査－』豊後大野市教育委員会：pp. 14-19
- 井 大樹・安部和城・江口寛基・中嶋小春・田中裕介 2016「漆生古墳群第3次・第4次調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書6－平成26年度調査－』豊後大野市教育委員会：pp. 5-13
- 大矢健太郎・中原彰久・村田仁志・田中裕介 2017「漆生古墳群第5次調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書7－平成27年度調査－』豊後大野市教育委員会：pp. 5-14
- 塩見恭平・高木慎太郎・竹永昂平・玉川剛司・田中裕介 2018「漆生古墳群第6次調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書8－平成28年度調査－』豊後大野市教育委員会：pp. 5-13
- 安原真衣・山元瞭平編 2018「上御倉古墳測量調査報告」『考古学研究室報告』第53集、熊本大学文学部考古学研究室：pp. 53-68
- 與嶺友紀也・入江由真編 2015「平原古墳群調査報告3」『考古学研究室報告』第50集、熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-66

第1部 挿図出典

図2～12：杉井健撮影

第2部 高森町高塚横穴群出土遺物の
調査報告

第1章 高塚横穴群の位置と調査経過

横穴群の立地 高塚横穴群は、阿蘇外輪山の南東部、熊本県阿蘇郡高森町大字永野原字下境ノ口に所在する。そこは、宮崎県延岡市から日向灘に流れ出る五ヶ瀬川の最上流域にあたり、五ヶ瀬川の支流、河内川の右岸に注ぐ下切川の右岸である（図13～15、図版1）。国道325号の^{ねいせい}寧静ループ橋のすぐ北側で、宮崎県との県境に接している。有限会社甲斐興業の砕石プラントが営まれている場所である。熊本側から国道325号を宮崎方向に進み、ループ橋の手前で左に折れて坂道を下りきったあたりであるが、現在は採石のため横穴群が築かれていた丘陵は完全に失われている（図版13）。かつて横穴群が立地した場所の標高はおよそ500m、位置は国土地理院電子国土Webによれば北緯32度46分15秒、東経131度14分40秒の付近である。

発掘調査 高塚横穴群1～3号墓の発掘調査が実施されたのは、1988年6月9日から28日までの20日間である。調査主体は高森町教育委員会、調査担当者は熊本県教育庁文化課の野田拓治氏である。氏は2013年12月30日に逝去されたが、その遺品のなかに、肥後考古学会の総会で当調査について報告した際に配布されたと思われる資料の草稿の一部があった。発掘調査に至る経緯が詳しく記されているので、それをそのまま以下に引用する。なお、この資料の完成版は、探索したが入手することができなかった。

昭和63年5月3日午後から4日にかけて、中部九州地方は10年に一度ともいわれる集中豪雨に見舞われた。特に阿蘇地方を中心とした山岳地帯は、土砂崩れや道路の決壊等大変な被害を受けた。横穴発

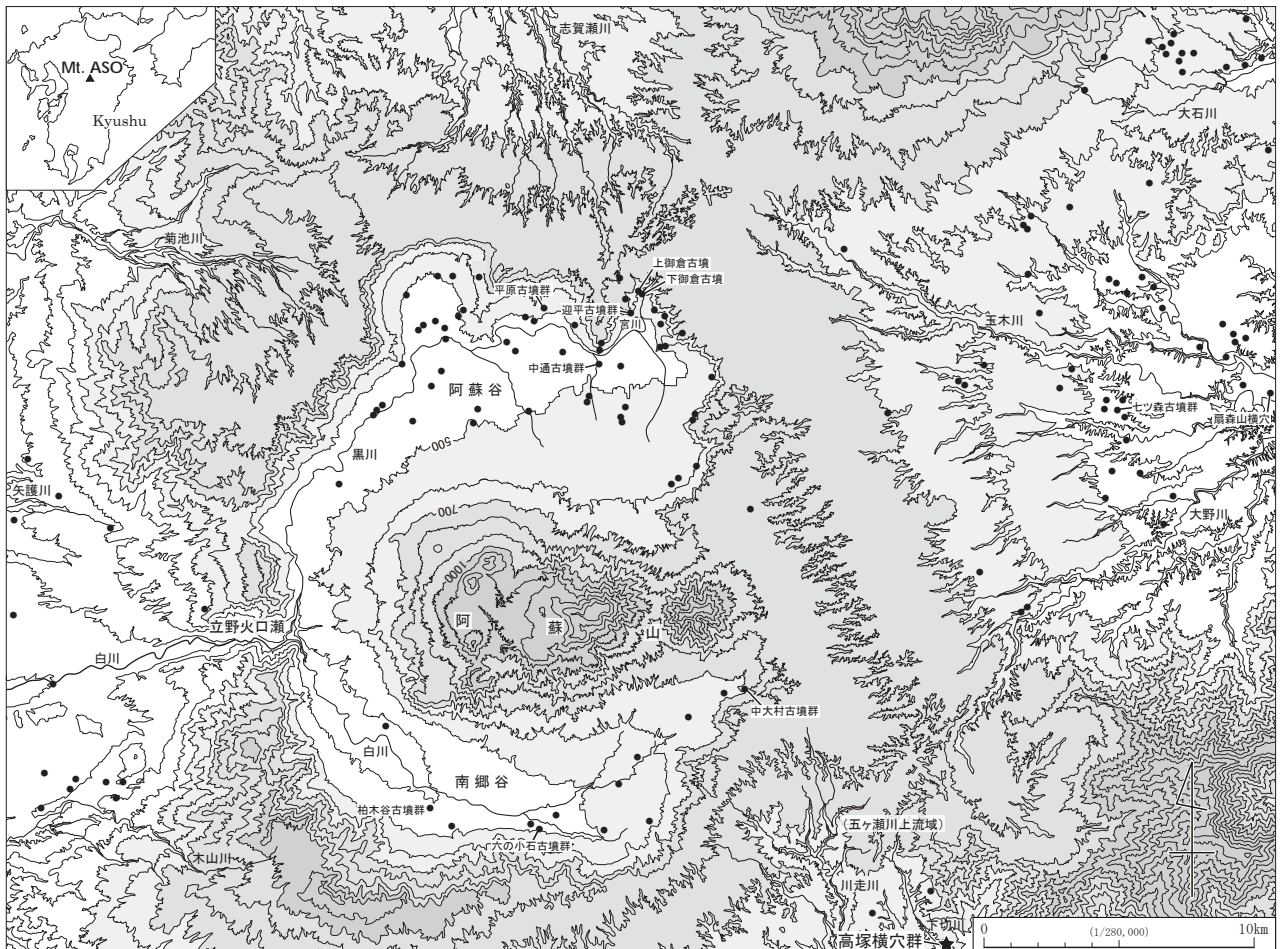


図13 阿蘇地域の古墳分布と高塚横穴群の位置

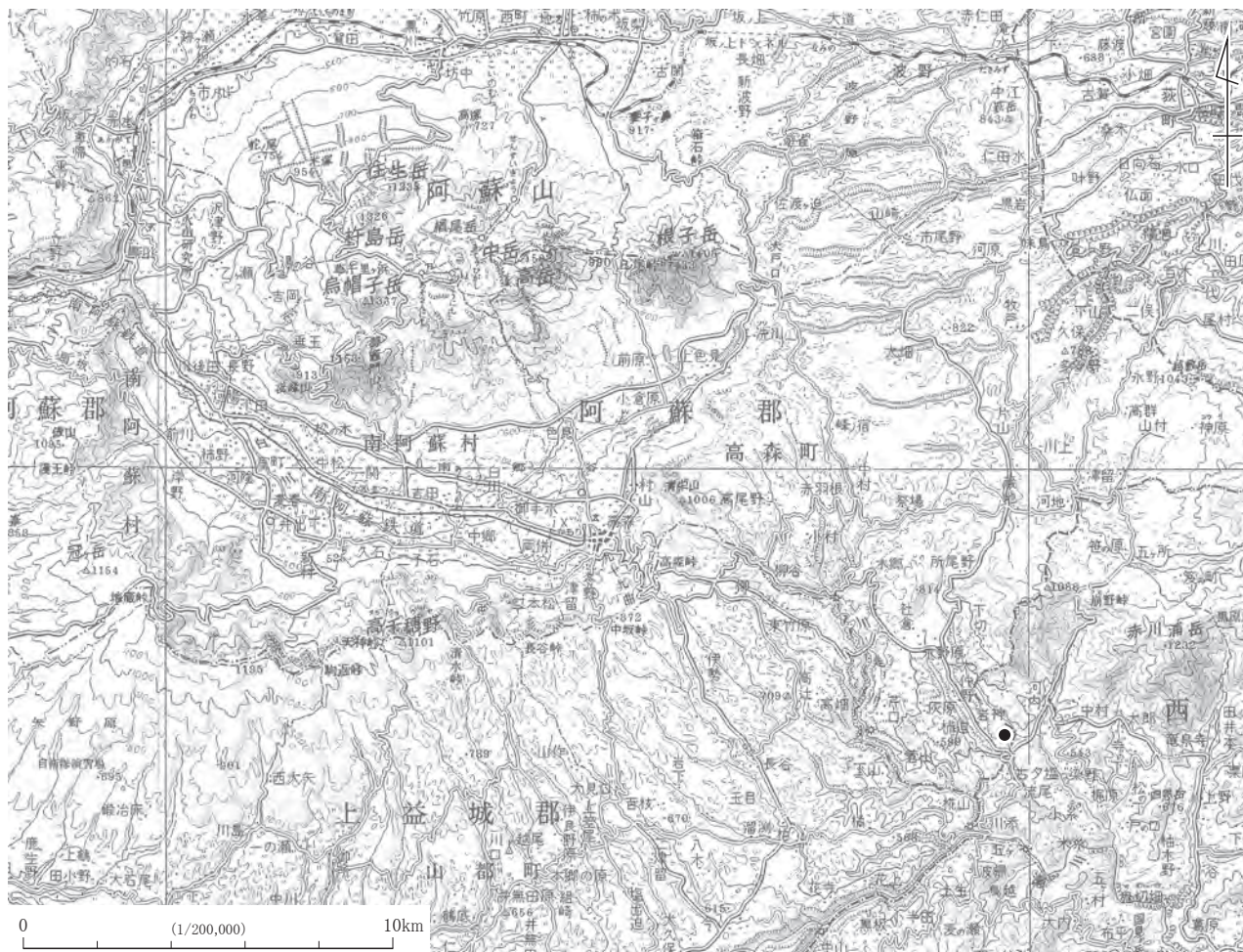


図14 阿蘇カルデラと高塚横穴群の位置 (黒丸)



図15 高塚横穴群の位置 (黒丸)



図16 高塚横穴群の発掘調査に携わった方々



図17 高塚横穴群発見の記念碑

見の現場も、この5・3水害によって大きな被害を受けた砕石プラント（甲斐興業所有）が、二次災害を防止するため、採石場に生じた亀裂部分の表土を除去している地点であった。

採石場の表土掘削中に横穴の天井部が陥没して、数体の人骨が出土した為、遺跡発見の第一報は、業者―地元警察署―県警察本部の順で通報され、県文化課には報道機関からの問い合わせによって事実を知るにいたるといふ皮肉な結果となった。早速、県文化課では現地の踏査を行った。遺跡は高森町と宮崎県高千穂町との〔県境〕の地にあつて、現地踏査で偶然宮崎県文化課及び高千穂町の文化財担当者との出会い、地形図を広げて「県境論議」を行ったこと一つを取っても、まさしく〔国境の山野〕を実感した。

しかし緊急事態とはいえ、遺跡が崩壊の危機にあることから、高森町教育委員会は早速調査費等の予算措置に奔走され、遺跡発見からわずか2週間たった6月9日、現地での発掘調査を開始することができた。

当初2基の横穴を確認していたが、その後1基増えて3基となった。この内1・3号墓は調査後自然崩壊に任せ、2号墓は現状で保存することにした。

甲斐興業の甲斐國子、甲斐美穂両氏にうかがったところ、1988年（昭和63）5月3日の水害では、砕石プラントの施設や重機が流されるなど大変な被害を受けたそうで、その復旧作業のさなかに未知の横穴が新たに発見されたのである。そのような災害直後の非常時にもかかわらず発掘調査にすぐさま着手できた背景に、関係各位の多大な努力と理解があつたことは想像に難くない。平成28年（2016年）熊本地震を経験した今、実感をもってそのことを思う。地権者の甲斐興業の理解が深かつたことは、横穴群の道路を挟んだ向かいの高台に横穴群発見の記念碑が甲斐興業の手で建てられていることからもうかがえる（図17）。

しかし、その後、野田拓治氏によって簡単な報告はなされたが〔野田1988・2007〕、現在まで正式な発掘調査報告書が刊行されることはなかつた。

短甲等の不時発見 ところで、高塚横穴群からは、横矧板鋌留短甲（図版26～35）が不時発見されている。野田拓治氏は、この短甲について、1988年の調査「以前に発見され、後に消滅したとされる群中の一基の横穴からは横矧板鋌留短甲が出土したと伝えられている」と記している〔野田2007：p.116〕。すなわち、発掘調査された3基とは別の横穴に副葬されていた短甲であることがわかる。なお、この短甲は、発見後しばらく、地権者（甲斐裁氏^{はかる}）宅で保管されていた。その後、野田氏が自宅に預かり整理作業を進めていたが、完了しないままとなっていた。

この短甲以外に、熊本県教育委員会には、高塚横穴群出土遺物として、2002年7月個人寄託品とされる鉄剣片1点、鉄鏃3点が保管されている（図版24-2）。これら鉄剣・鉄鏃の発見時の状況はまったくわからないが、少なくとも野田氏が地権者の甲斐裁氏から預かつたものであるのは間違いないと思われる。とすれ

ば、短甲発見と同時に回収されたものである可能性が想定されるのではないだろうか。

今回の出土遺物整理作業 杉井は、国立歴史民俗博物館所蔵のマロ塚古墳出土品に関する共同研究〔杉井・上野編 2012〕を 2002 年に開始したが、その過程で高塚横穴群出土短甲の存在を知った。そして、2010 年 12 月 4 日に野田拓治氏宅を訪問し、その遺存状態および構造の概要を確認した。その結果、大分県竹田市扇森山横穴出土の短甲に構造が酷似することを認めた。また、2011 年 2 月 21 日、熊本県文化財資料室にて高塚横穴群の発掘調査で検出された遺物の現状を調査した。さらに、杉井は、阿蘇谷に築かれた古墳時代中期中葉の前方後円墳、長目塚古墳出土遺物の検討も進めていた〔杉井編 2014〕。そうした調査・研究を進めるなかで、古墳時代の九州島における地域間交流の内容を探るためには、阿蘇地域を介した情報伝達・文物交流のあり方の検討がきわめて重要であることを認識した。そして、そのための分析資料として、高塚横穴群出土遺物は最適なものの 1 つであると考えようになった。

その後、本科学研究費の採択をきっかけに、高塚横穴群出土遺物の本格的な調査・分析に着手した。発掘調査関係者との調整をすませたのち、2015 年 3 月 25 日には野田拓治氏宅で保管されていた横切板鋌留短甲を熊本大学に移した。また、熊本県教育委員会に保管されていた発掘調査出土遺物のうち、鉄刀 3 点（図版 24-1）および透孔を有す大型鉄鏃 1 点（図版 17-2）以外の保存処理がなされたものについて借用・調査の許可を受け、同年 5 月 8 日に熊本大学に運んだ。こうして、高塚横穴群に関連する遺物の大半を一堂に集めて整理することが可能となった。そして、同年 7 月 27 日には、九州国立博物館にて短甲の X 線 CT 撮影を実施し、裾部が失われて正立させることが困難な短甲の実測図作成に備えた。

こうして遺物の調査・分析を進めたが、熊本県教育委員会に発掘調査時作成の実測図や写真が保管されていなかったことから、詳細な遺物出土状況を知ることができないままの状態が続いた。

そうしたなかで平成 28 年（2016 年）熊本地震が発生した。2016 年 4 月 14 日の前震、4 月 16 日の本震に始まる一連の地震活動により、熊本大学も少なくない被害を受けた。考古学資料室もその例外ではなく、積み上げていたコンテナ箱が倒れ、棚からコンテナ箱が落下、完形に復元していた円筒埴輪の一部が倒壊した（図 5・6）。しかし、奇跡的に高塚横穴群の遺物は無事であった。とはいえ、整理作業はしばらく中断せざるを得なくなった。

ただ、地震によって散乱した野田氏宅の片付け作業の過程で、発掘調査時作成の実測図や写真の多くが発見されたことは不幸中の幸いであった。実測図は 2016 年 6 月 21 日、写真は 2017 年 11 月 7 日に熊本大学に届けられた。それにより、ようやく遺物とその出土位置との照合が可能となり、鉄鏃のグループ分けにつながった。また、遺構についての報告を行うことも可能となった。

今回の整理作業では、保存処理がなされていなかった 3 点の鉄刀の実測図を作成することができなかった。また、鉄器の形状の詳細を X 線画像で確認することができなかった。出土人骨についての分析も掲載することができなかった。そうした点に不足はあるが、30 年余の時を経て資料を世に出すことができたことは率直にうれしい。資料の実測作業や分析に携わって下さった方々をはじめ、協力をいただいたすべての方に感謝の念を捧げたい。

（杉井 健）

第 2 部第 1 章 引用・参考文献

杉井 健編 2014 『長目塚古墳の研究—有明海・八代海沿岸地域における古墳時代首長墓の展開と在地墓制の相関関係の研究—』2010 年度～2013 年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書、熊本大学文学部

杉井 健・上野祥史編 2012 『マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第 173 集、国立歴史民俗博物館

野田拓治 1988 『高塚横穴群発掘調査報告会資料』熊本県教育庁文化課・高森町教育委員会

野田拓治 2007 「古墳時代」『白水村史』白水村史編纂委員会：pp. 86-120

第2章 横穴の構造

本章では、発掘調査時に作成された実測図や写真にもとづき、遺構について記述する。

野田拓治氏の自宅には、おそらく報告書作成に向けて製図（トレース）されたと思われる線画も残されていたが、横穴の配置図については原図が見当たらなかったことから、ここでは製図された線画をそのまま提示した（図18）。横穴の遺構図も、明らかな間違いを訂正した以外は、基本的に製図済みの線画をそのまま用いた（図19・25・30）。なぜなら、遺構の原図と製図された線画を比べてみると、表すべき線の取捨選択や線幅を含めた線表現の仕方には明確に調査担当者である野田氏の意向が現われていると考えられたからである。現場を知らないものがそれをむやみに改変することは適切でないと判断した。ただし、製図された遺物出土状況図については、製図時の誤りがやや多く認められたため、遺物のすべてを書き改めた。また、表されていない人骨を書き加えた。

なお、横穴の左右は羨道から玄室をみた場合の左右で示す。北は磁北である。屍床の名称は、野田拓治氏の命名にならい、左屍床を第1屍床、右屍床を第2屍床と呼称する。後述するように、横穴の開口方向は1・2号墓が東寄りの南東、3号墓が南寄りの南東であるが、横穴の各部位や出土遺物の向きを方位で表す場合は、混乱を避けるため、いずれの横穴についても前壁側を東、奥壁側を西として記述する。また、野田氏が1988年に作成した『高塚横穴群発掘調査報告会資料』を指し示すときは、野田1988文献と記述する。

（杉井 健）

第1節 横穴の配置（図18，図版3-2）

横穴の配置は図18に示した。北から順に1号墓、3号墓、2号墓である。1・2号墓は当初に、3号墓はのちに発見されたものである。隣り合う横穴どうしの距離は5mほどで、3基はほぼ等間隔に並んでいる。開口方向はいずれも南東である。中央通路の床面レベルは、1号墓が標高約497m、3号墓が約497.5m、

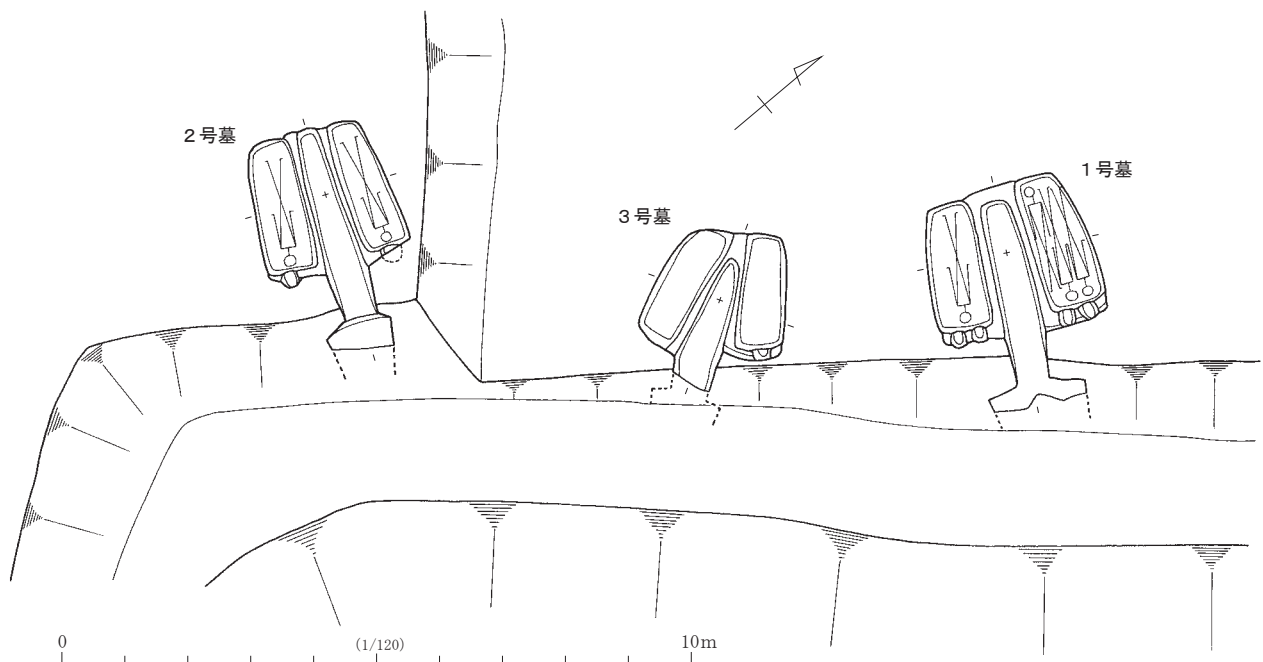


図18 高塚横穴群1～3号墓の配置

2号墓が約498.3mで、南へ向かうほど徐々に高くなっている。横穴群を構成する横穴の総数は不明であるが、短甲が副葬されていた横穴が別に存在したことは確実で、また野田拓治氏が「三基を調査し、さらに数基の存在を確認した」と記していることから〔野田2007：p.104〕、5基以上の存在が想定できる。

(杉井 健)

第2節 1号墓 (図19～24, 図版4～6)

1 横穴の構造 (図19・20)

写真(図版3-2)をみると、調査時には玄室の天井部が遺存しているように思われるが、遺構実測図(図19)には天井部が表現されていない。前庭部の多くは削平のため失われている。

横穴の主軸方向はN63°Wで、開口方向は東寄りの南東である。

玄室の平面形は、奥壁側がやや狭くなる台形状である。長さは左側壁沿いで約2.05m、中軸上で約2.3m、右側壁沿いで約2.2m、幅は前壁沿いで約2.6m、奥壁沿いで約2.0mである。壁面の高さは奥壁で50～60cm、前壁では枕上面より50～55cm、枕下辺より約70cmである。天井部の形状はごく低いドーム形と推測され、棟線や軒先線はみられない。壁面にはベンガラと思われる赤色顔料が塗布されている。

屍床は中央通路を挟んで左右に設置される。いわゆる川の字形の屍床配置である。屍床の大きさは、第

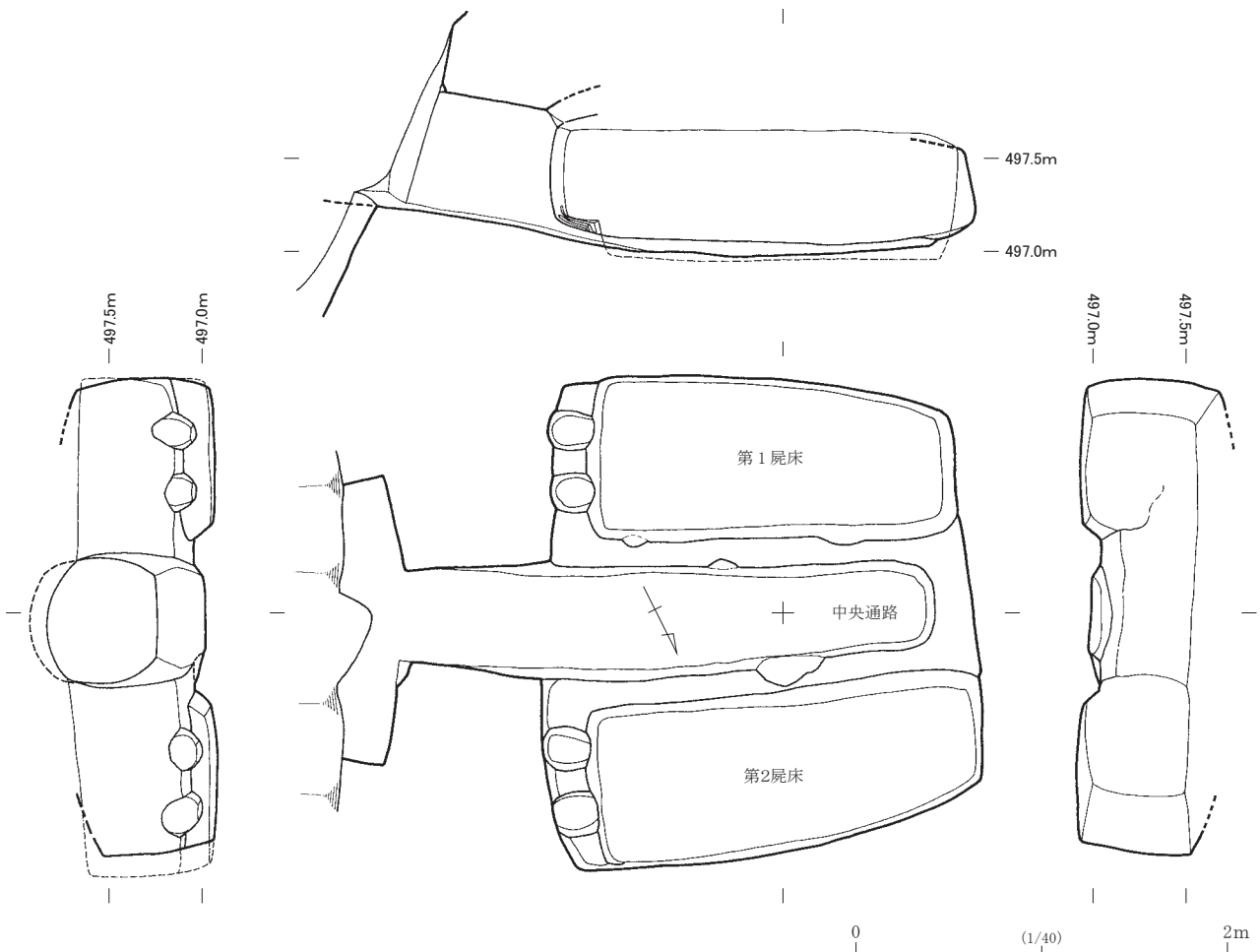


図19 1号墓実測図

1 屍床（左屍床）が長さ約 2.15 m、前壁側の幅約 85cm、奥壁側約 65cm、第 2 屍床（右屍床）が長さ約 2.35 m、前壁側の幅約 85cm、奥壁側約 65cm である。中央通路とは削り残された仕切りによって区画されている。仕切り上面から屍床床面までの高さは、いずれの屍床も約 10cm である。第 1 屍床、第 2 屍床とも、前壁側に 2 つずつの枕が造り付けられている。枕は削り残しによる構築である。枕部分の窪みの幅は約 20cm、長さは約 25cm で、隣り合う枕どうしの間隔は約 10cm である。窪み頂部の平面的位置は、前壁面とほぼ一致している。屍床床面から枕上面までの高さは 10～15cm である。

中央通路の幅は 50cm ほどで、屍床よりも狭い。また、中央通路の床面は屍床床面よりも高い位置にあり、そこから仕切り上面までの高さは約 5cm である。中央通路は、奥壁まで達していない。

羨道は長さ約 75cm、幅約 50cm の大きさである。その床面は羨門から玄門に向かっておよそ 10° の傾斜でレベルを下げ、幅を変えずに中央通路につながっている。玄門はその中位の幅約 70cm、高さ約 85cm、羨門は中位の幅、高さとも約 65cm である。玄門、羨門とも上辺が丸みを帯びていることから、羨道の天井部はゆるやかなボールド形をなすと推測できる。

前庭部は大きく削平されているため詳細な形状は不明だが、逆台形状の平面形をなす可能性がある。羨門位置での幅は約 1.55 m である。

遺構図や写真には表されていないが、閉塞石の実測図が残されている（図 20）。下辺と左右の側辺は直線をなすが、上辺は左辺近くの頂点から右辺に向かって傾斜する板石で、表裏面は平坦に整えられている。幅 70cm、最大高 102cm、厚さ 15cm の大きさである。次に述べる 2 号墓の閉塞石と同じ石材であるとすれば、凝灰岩製と考えられる。

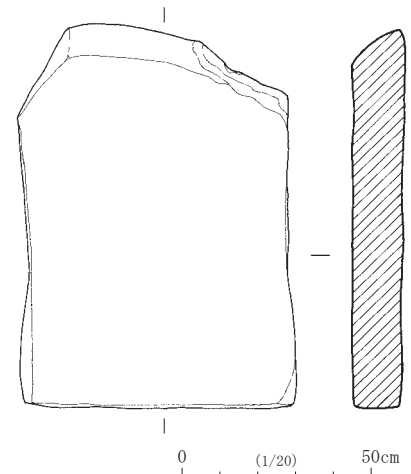


図 20 1号墓閉塞石実測図

（杉井 健）

2 遺物・人骨出土状況（図 21～24）

1～3号墓からの出土遺物の種類と数については、野田 1988 文献のなかで整理されてる [野田 1988]。しかし、それに示された内容と現存する遺物とのあいだには若干の異同が認められる。そのあたりに関しては、第 5 節で 1～3 号墓を合わせたかたちで表にまとめるが（28 ページの表 1）、ここでは、その差異を念頭に置きつつ出土状況について記述する。

なお、上述したように、横穴の左右は羨道から玄室をみた場合の左右で示し、方向を方位で表す場合は前壁側を東、奥壁側を西とする。

第 1 屍床 2 つの造り付け枕のうち、左側（南側）の枕に頭を置いたかたちで 1 体の人骨が出土した（1 号人骨）。東頭位、仰臥伸展葬である。野田 1988 文献をもとにすれば、男性と思われる。

1 号人骨の骨盤（左寛骨）と左側壁にはさまれた場所で鉄剣 1 点（図 34）が出土した。残存長 29.1cm の短剣で、鞘に収められている。把を骨盤近くに置き、切先を東（頭位方向）に向ける。人骨の足下では刀子と鉄鏃がまとまって出土した（図 23-1）。出土位置が確認できる刀子は 1 点（刀子 1）のみで、鉄鏃群の南に接した場所にあり、切先を東（頭位方向）に向ける。抜き身と思われる。鉄鏃は、現状で、鏃身部を含む個体が 24 点（鉄鏃 1～24）、頸部以下のみの個体が 3 点（同 25～27）存在する。長頸鏃と平根系の鏃が混在しており、すべてが 1 つのグループにまとめられると思われる。一部に向きを違えるものがあるが、総じて

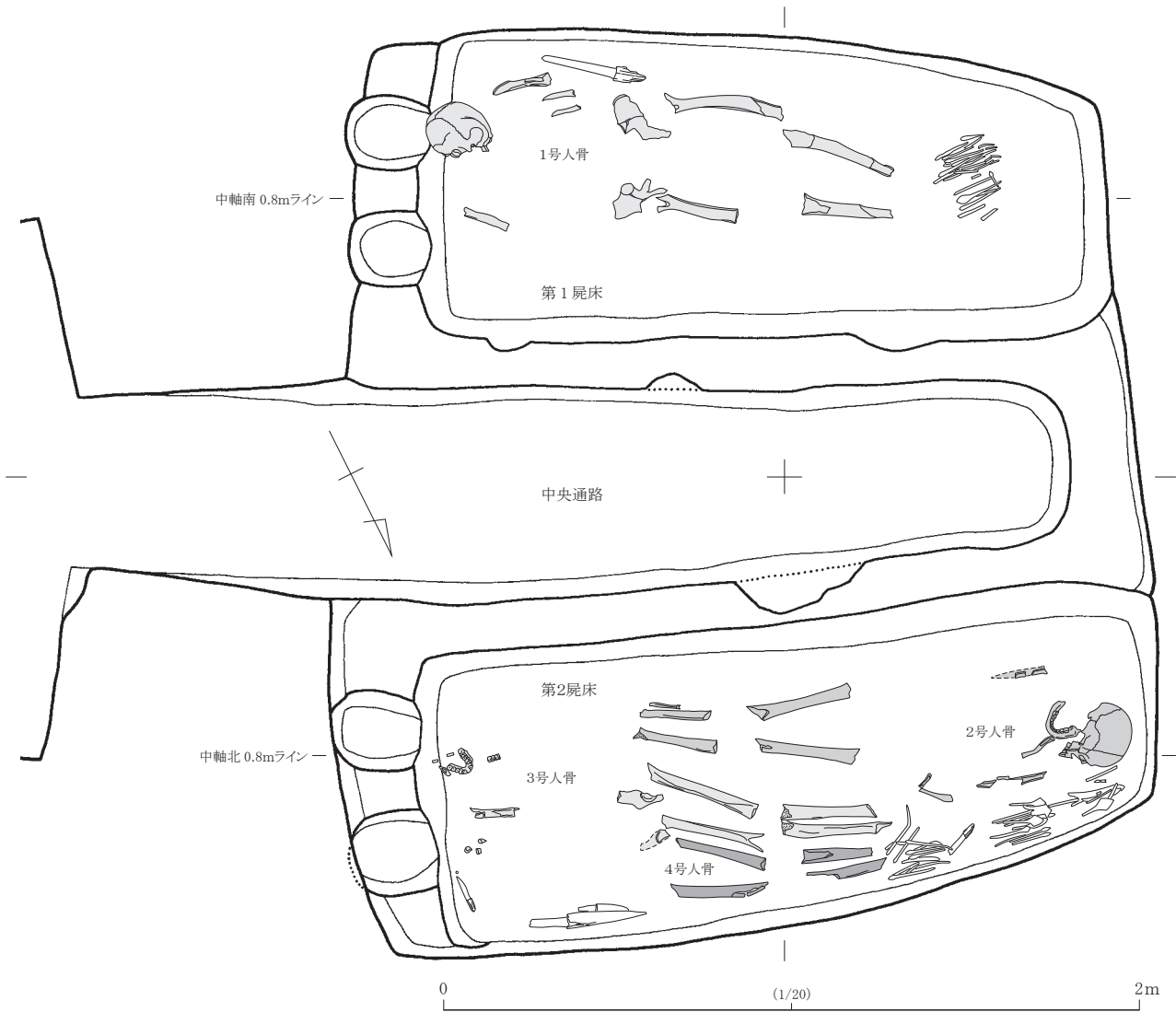


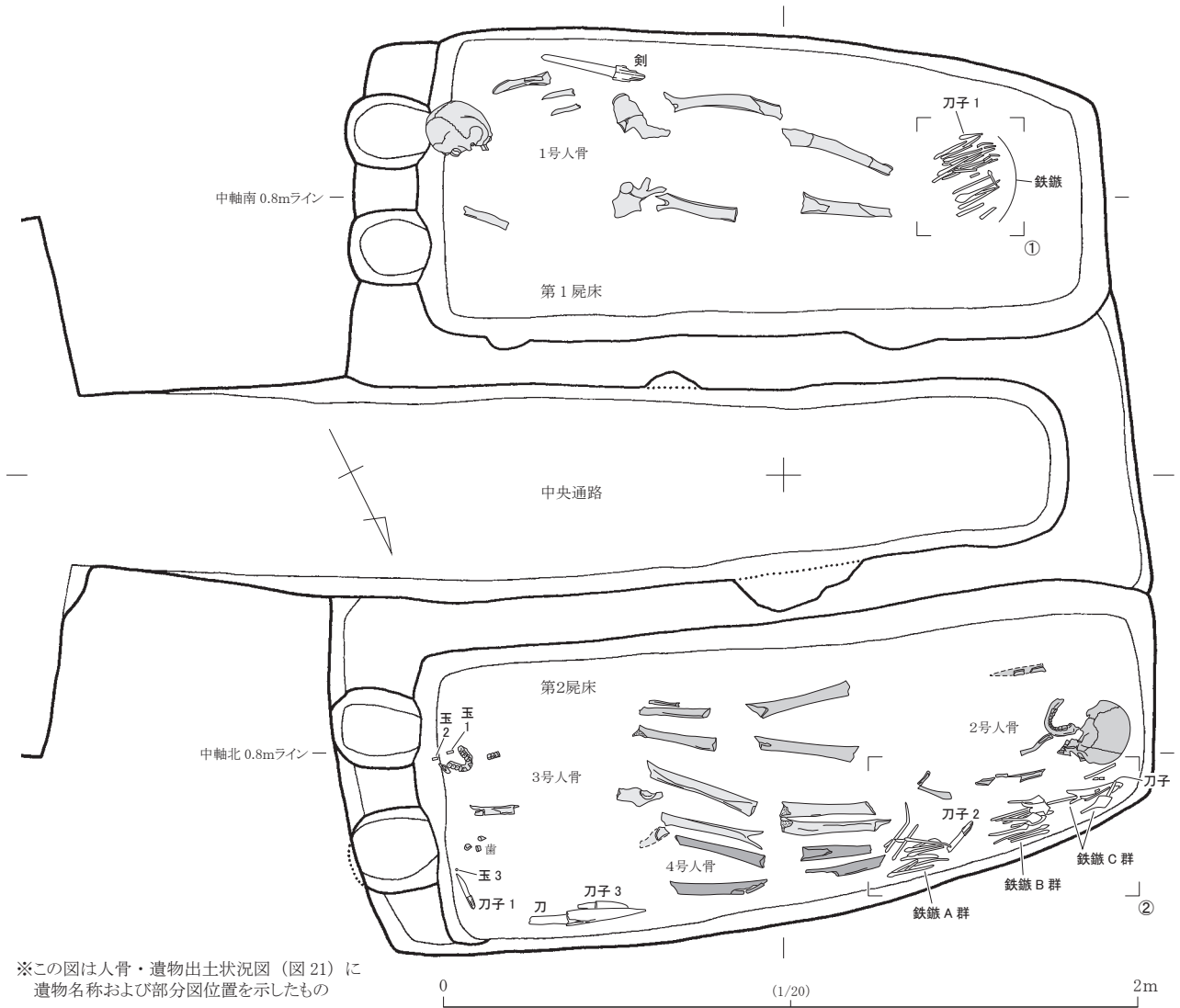
図 21 1号墓人骨・遺物出土状況図(1)

切先を東（頭位方向）に向ける。鉄鏃の茎付近から奥壁までの距離が 30cm ほどしかないため（図 22）、矢柄が通常の長さを有していた場合、床面に矢を横たえて副葬することは困難である。したがって、鏃側を下にして奥壁に立てかけられていた可能性も考慮する必要がある。

刀子は 3 点出土しているが、うち 2 点（刀子 2・3、いずれも抜き身）の出土位置は発掘調査時作成の原図に示されていないため不明である。また、野田 1988 文献では、鉄剣は 2 点出土したとされているが、原図に出土位置が示された鉄剣は上述の 1 点のみである。鉄鏃については、頸部以下のみの個体もそれぞれ 1 点と数えれば、野田 1988 文献で示された出土数と現存数は一致する。

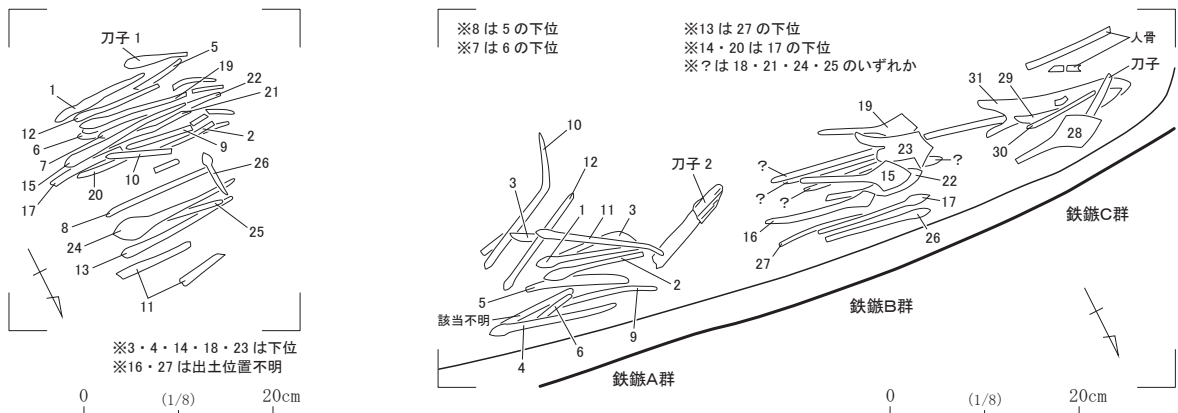
なお、第 1 屍床で検出された人骨は 1 体のみであるから、これら遺物の副葬時期の同時性は高い。

第 2 屍床 3 体の人骨が出土した。中央通路側（南側）から順に 2 号、3 号、4 号人骨とすれば、もともと中央通路寄りの 2 号人骨のみ頭を西（奥壁側）に向けている。3 号・4 号人骨は東頭位であり、3 号人骨は左側（南側）の枕に頭を置いていたと思われる。それに対し 4 号人骨は右側（北側）の枕に頭を置いていたとみる方が素直であるが、発掘調査時作成の人骨出土状況図では右側（北側）枕の前で検出された人歯は 3 号人骨のものとして色分けされている。出土位置からすれば 4 号人骨にともなう人歯としたいところだが、現状では判断するすべがない。今後の重要な検討課題である。なお、いずれも仰臥伸展葬で、野田



※この図は人骨・遺物出土状況図(図21)に遺物名称および部分図位置を示したもの

図22 1号墓人骨・遺物出土状況図(2)



1. 1号墓遺物出土状況部分図①(第1屍床)

2. 1号墓遺物出土状況部分図②(第2屍床)

図23 1号墓遺物出土状況部分図

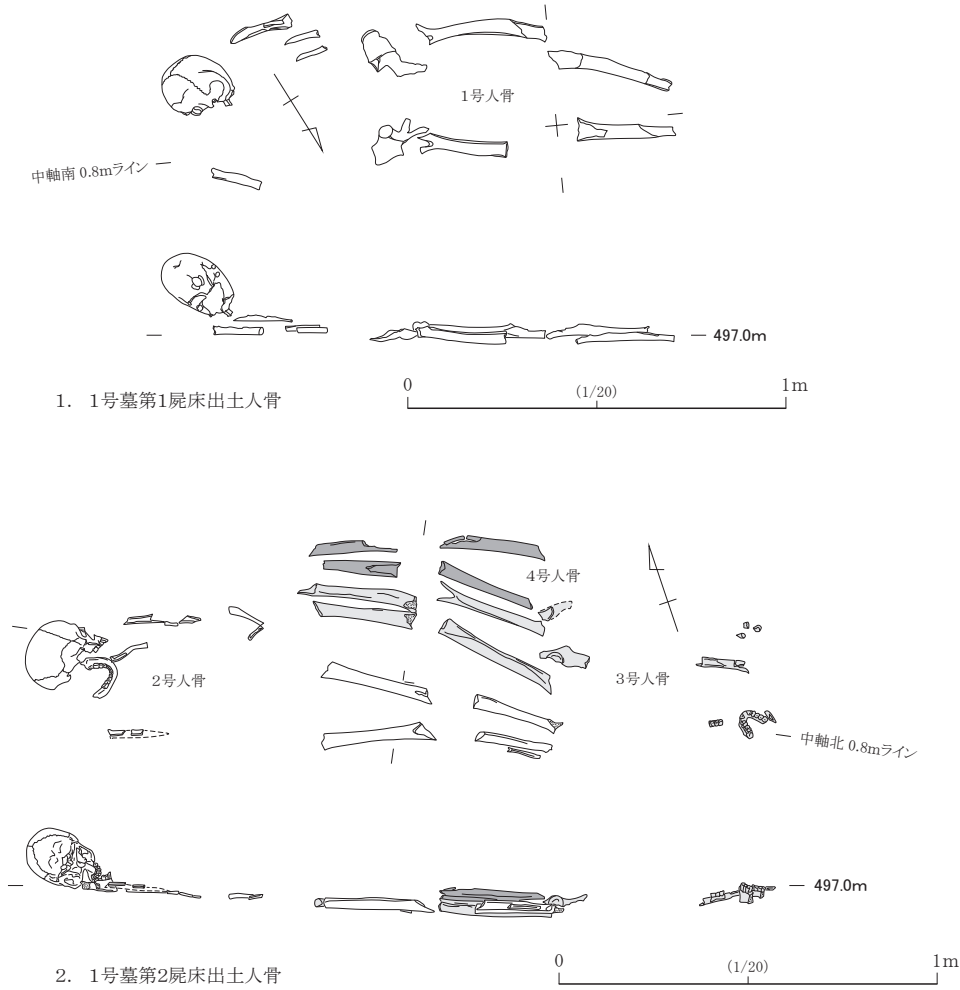


図24 1号墓人骨出土状況図

1988 文献をもとにすればすべて男性と思われる。

3号人骨の下顎骨の近く、すなわち左側（南側）枕のすぐ前（西側）で管玉2点（玉1・2）が出土した。ガラス玉4点のうち出土位置が明らかなのは1点（玉3）のみで、右側（北側）枕のすぐ前（西側）で出土している。ほかの3点（玉4～6）は埋土の水洗作業による検出である。こうした出土位置からすれば、管玉は3号人骨に、ガラス玉は4号人骨にとまなう可能性がある。

屍床の北東隅付近では、刀子2点（刀子1・3）と鉄刀1点（図39）が出土した。刀子1はガラス玉（玉3）のすぐ北側、屍床の東小口に沿った位置で出土した。抜き身と思われ、切先を南（中央通路側）に向ける。刀子3と鉄刀は、右側壁沿いで並列して出土した。刀子3は鉄刀身部の左側（南側）に接した位置にある。抜き身と思われ、切先を西（奥壁側）に向ける。鉄刀は残存長約31cmの短刀で、抜き身にしようえで繊維にくるまれていた可能性がある。刀子3と同じく、切先を西（奥壁側）に向けている。

右側壁沿いの奥壁側では、多数の鉄鏃と刀子1点（刀子2）がまとまって出土した（図23-2）。鉄鏃は、そのまとまりの状態からA～Cの3群に分けられる。A群（鉄鏃1～12）はもともと東側の一群で、長頸鏃のみで構成される。切先を東（前壁側）に向けている。B群（同13～27）は中央の一群で、長頸鏃と平根系の鏃が混在する。切先を西（奥壁側）に向ける。C群（同28～31）はもともと西側の一群で、透孔を有する大型鉄鏃をはじめとした平根系の鏃のみで構成される。B群と同様、切先は西（奥壁側）を向いている。刀子2は、鉄鏃A群の西側に接した位置で出土している。鉄鏃A群と同じく切先を東（前壁側）に向けてい

る。こうした点から、刀子2は鉄鏃A群と同じまとまりに属している可能性がある。抜き身である。

ここまでみてきた右側壁沿いに副葬された鉄刀や刀子、鉄鏃であるが、それらがどの人骨にともなうものなのかを明確にするのは不可能である。切先の向く方向から、鉄鏃A群と鉄鏃B・C群のあつかいが異なっていたことは明らかであるが、はたしてそれが副葬時期の差に結び付くのかどうかといえ、後述するように鉄鏃の時期からそれを示すのは容易ではない。また、右側壁沿い奥壁側の鉄鏃群と前壁側の刀子・鉄刀との関係もよくわからない。ただ、鉄鏃相互に大きな時期差がみられないことから、3体の埋葬時期が大きく異なる可能性は低いと思われる。

なお、野田1988文献で示された鉄鏃総数と現存数には若干の差異があり、また野田1988文献では骨鏃の出土も指摘されているが、現在その存在は確認できない。出土状況が示された原図を検討したところ、現存の鉄鏃の出土位置がほぼ特定されること、原図には骨鏃の出土位置がまったく示されていないことから、野田1988文献の記載が誤っている可能性が高いと思われる。

出土位置不明の遺物 1号墓出土として保管されている遺物であるが、出土位置が特定できないものに鉄剣1点(図45)と鉄鏃茎部1点(図46)がある。それらのうち鉄鏃茎部については、第1屍床あるいは第2屍床のいずれかから出土したが、保管中にその所属が不明になったものとみなしてよいと思われる。しかし、鉄剣は長さおよそ33cmで完形に近い残存状態であるから、出土状況図に描かれていないことが不思議である。あるいは、1号墓出土ということ自体が間違っているのだろうか。そのあたりは不明とせざるを得ないが、野田1988文献では1号墓出土の鉄剣・鉄刀の総数は4点となっており、しかし現存数はこの出土位置不明の鉄剣を含めても3点しかないから、どこかに何らかの誤認があることは確実である。しかし、いまそれを明らかにするすべがない。

(杉井 健)

第3節 2号墓(図25～29, 図版7～9)

1 横穴の構造(図25・26)

写真(図版3-2)をみると、調査時にはすでに玄室の天井部が陥没していることがわかる。前庭部の多くも失われているが、閉塞石は原位置(閉塞状態)で検出されたようである(図25, 図版7-1)。

横穴の主軸方向はN70°Wで、開口方向は東寄りの南東である。

玄室の平面形は、奥壁側がやや狭くなる台形状である。長さは左側壁沿いで約2.0m、中軸上で約2.2m、右側壁沿いで約2.1m、幅は前壁沿いで約2.3m、奥壁沿いで約1.7mである。壁面の高さは奥壁で50～55cm、前壁では枕上面より50～60cm、枕下辺より60～70cmである。天井部の形状はごく低いドーム形と推測され、棟線や軒先線はみられない。壁面にはベンガラと思われる赤色顔料が塗布されている。

屍床は中央通路を挟んで左右に設置される。いわゆる川の字形の屍床配置である。屍床の大きさは、第1屍床(左屍床)が長さ約2.15m、前壁側の幅約80cm、奥壁側約60cm、第2屍床(右屍床)が長さ約2.1m、前壁側の幅約65cm、奥壁側約40cmである。中央通路とは削り残された仕切りによって区画されている。仕切り上面から屍床床面までの高さは、第1屍床が約5cm、第2屍床が約8cmである。第1屍床、第2屍床とも、前壁側に1つずつの枕が造り付けられている。枕は削り残しによる構築である。枕部分の窪みの幅は第1屍床が約20cm、第2屍床が約30cm、長さはいずれも約25cmである。窪みの頂部は前壁面を10cm程度めぐり込んだ位置にある(図版9-1)。屍床床面から枕上面までの高さは5～10cmである。

中央通路の幅は前壁側約45cm、奥壁側約25cmで、屍床よりも狭い。中央通路床面の高さは屍床床面とほ

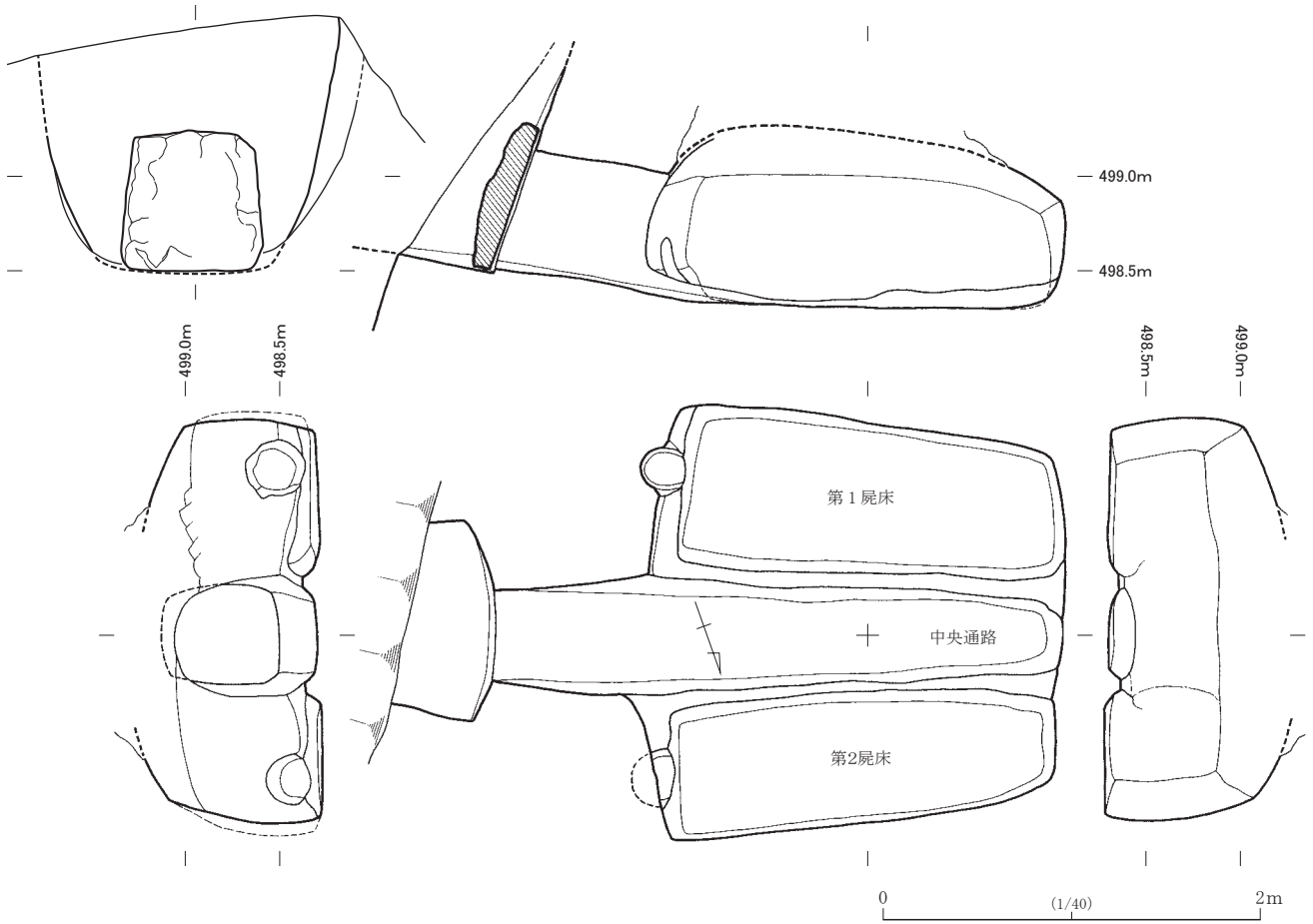


図 25 2号墓実測図

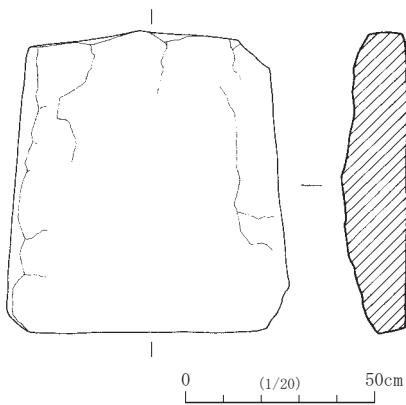


図 26 2号墓閉塞石実測図

ぼ同じであり、この点は1号墓や3号墓と異なっている。仕切り上面から中央通路床面までの高さは5～6cmである。1・3号墓とは異なり、中央通路は奥壁に達している。

羨道は長さ約80cm、幅約45cmの大きさである。その床面は羨門から玄門に向かっておよそ7～10°の傾斜でレベルを下げ、幅を変えずに中央通路につながっている。玄門は最大幅63cm、高さ75cm、羨門はその中位の幅53cm、高さ62cmである。玄門の上辺は丸みを帯びるが、羨門の上辺はそれよりも平坦になっている。したがって、羨道の天井部は、玄門側ではゆるやかなボルト形だが、羨門に向かうにしたがって次第に平坦になるものと推測できる。

前庭部は大きく削平されているため全体の形状は不明であるが、逆台形状の平面形をなす可能性がある。羨門位置での幅は約1.05mで、1号墓に比べてかなり狭い。

上述したように、羨門は立てかけられた閉塞石で完全にふさがれている(図版7-1)。閉塞石の大きさは下方の幅74cm、上方の幅64cm、最大高80cmで、幅・高さとも羨門より10～20cm大きい(図26)。閉塞石の四辺は直線近くに整えられており、裏面も平坦である。表面は、写真をみると多数の加工痕が観察でき平坦に思えるが、実測図からすれば平滑ではなく凹凸が激しい。そのため、厚さは一定せず、中位で17cm、上端で9cm、下端で7cmとなっている。石材は、写真から判断すれば、凝灰岩と思われる。

(杉井 健)

2 遺物・人骨出土状況（図27～29）

1号墓と同じく、横穴の左右は羨道から玄室をみた場合の左右で示し、方向を方位で表す場合は前壁側を東、奥壁側を西とする。また、野田1988文献では、中央通路出土の遺物を第2屍床出土として集計しているが、ここでは両者を区別して記述する。

第1屍床 前壁沿いの造り付け枕に頭を置いた状態で1体の人骨が出土した（1号人骨）。東頭位、仰臥伸展葬である。野田1988文献には、女性であると記されている。

人骨の右側、屍床の右側辺に沿った位置で鉄刀1点（図版24-1-1）が出土した。出土時の全長105cm程度（現存長90.9cm）の大刀である。切先を西（足位方向）に、刃部を南（人骨側）に向ける。鞘に収められている。

人骨の左側、左側壁沿いの中央付近では鉄鏃6点（鉄鏃1～6）と刀子の切先1点（図48）が出土した（図28-1）。鉄鏃はひとまとまりとなっており、長頸鏃と平根系の鏃が混在する。切先を西（足位方向）に向ける。刀子の位置は鉄鏃群のすぐ北側で、これも切先を西（足位方向）に向ける。出土状況図からすれば、検出時点ですでに切先のみのものであり、刀子の切先のみを折り取って副葬した可能性も想定できる。

第1屍床で検出された人骨は1体のみであるから、これら遺物の副葬時期の同時性は高い。また、被葬者が女性であるとの記述が正しいとすれば、鉄鏃や鉄刀などの武器がともなっていることが注目される。

なお、野田1988文献には骨鏃1点の出土が示されているが、現状では存在しない。野田氏の記述に誤りはないのだろうか。

第2屍床 前壁沿いの造り付け枕から少し西側の屍床床面に頭を置いたかたちで1体の人骨が出土した（2号人骨）。東頭位、仰臥伸展葬である。野田1988文献をもとにすれば、男性と思われる。

人骨の左側、屍床の左端で鉄刀1点（図版24-1-2）が出土した。把を屍床の南東隅に置き、切先を西（足位方向）に向ける。刃部は北（人骨側）を向く。全長104.3cmの鞘入りの大刀である。

人骨の右側では、鉄鏃と骨鏃、刀子がひとまとまりになって出土した（図28-2）。被葬者の右腰のあたりであり、右大腿骨の上端部付近が一部の鉄鏃のうえに乗っている。鉄鏃は、そのまとまりの状態からA・Bの2群に分けられる。A群（鉄鏃1～16）は南側（人骨側）の一群で、長頸鏃のみで構成される。切先を西（足位方向）に向けている。B群（同17～20）はその北東側の一群で、こちらは平根系の鏃のみで構成される。一部に乱れはあるが、総じて切先を西（足位方向）に向ける。鉄鏃B群の南に接して、骨鏃2点（骨鏃21・22）が出土している。1つは切先を西（足位方向）に、もう1つは南に向ける。これら骨鏃は、その出土位置から鉄鏃B群のまとまりに含まれると思われる。1点の刀子（図51）は、鉄鏃A群とB群のあいだ、骨鏃の南側で出土している。鉄鏃とは異なり、切先を南東に向けている。抜き身である。

第2屍床出土の遺物は、検出された人骨が1体であることから、その副葬時期の同時性は高いと考えられる。長頸鏃と平根系の鏃の取り扱いが、同じ葬送儀礼のなかで区別されていた状況をうかがい知ることができる事例である。

なお、野田1988文献で示された鉄鏃数、骨鏃数と現存の個数とのあいだにはそれぞれ1点ずつの差異がみられるが、その理由は不明である。

中央通路 中央通路の第2屍床沿いで馬具と鉄鏃が出土している。

馬具は、第2屍床の左端で出土した大刀の切先南側、中央通路中位の右端でまとまって出土した（図28-3）。轡1点（図53）、辻金具5点（図54）、鉸具2点（図55）がある。轡がもっとも西側（奥壁側）にあり、引手を西に、兵庫鎖立間を東に向けた状態で置かれている。轡のすぐ東側に5点の辻金具（辻金具1～5）が散在している。辻金具5は中央通路と第2屍床を隔てる仕切りの斜面部に位置しているが、そのすぐ北側で鉸

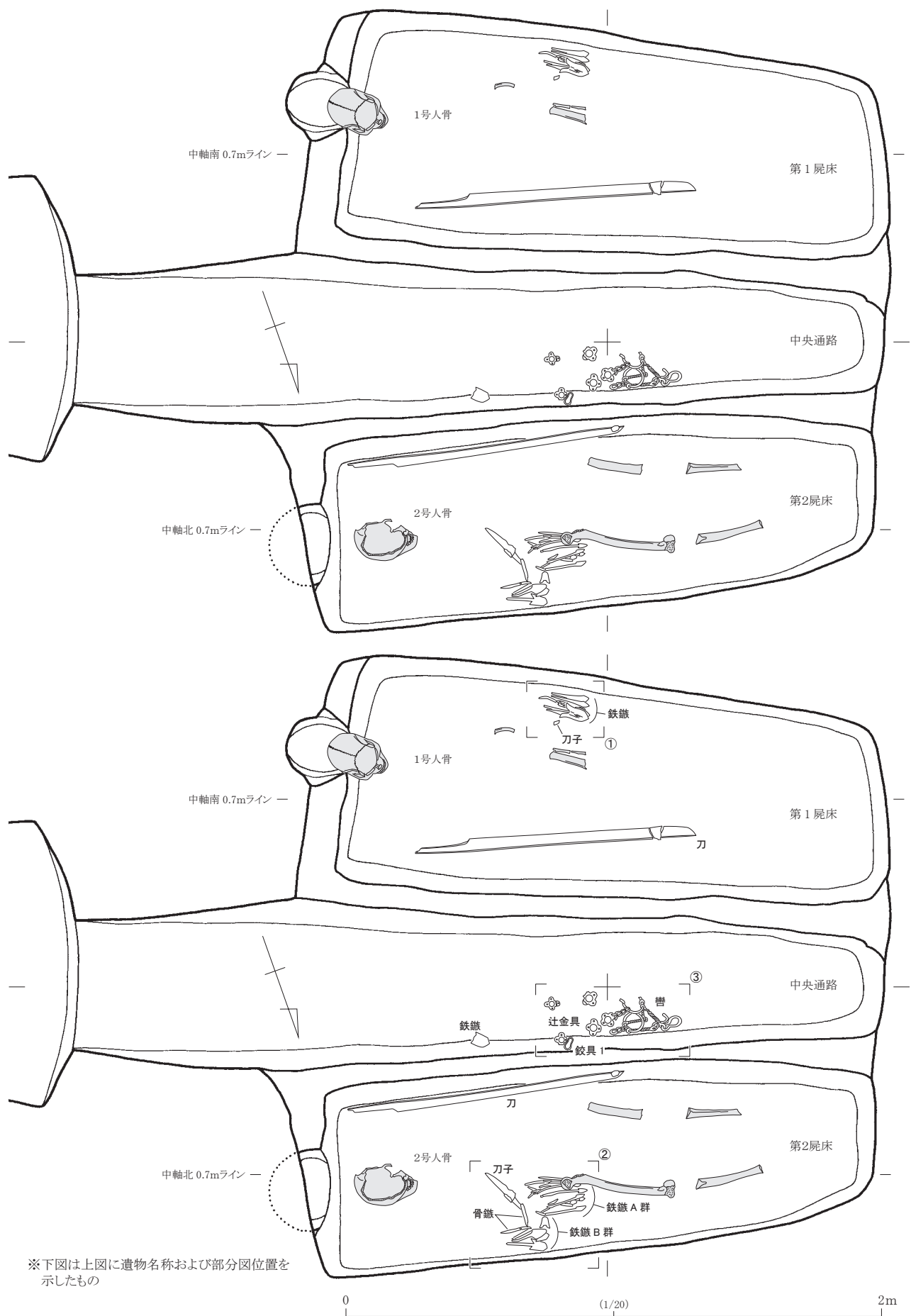
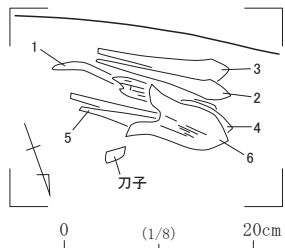
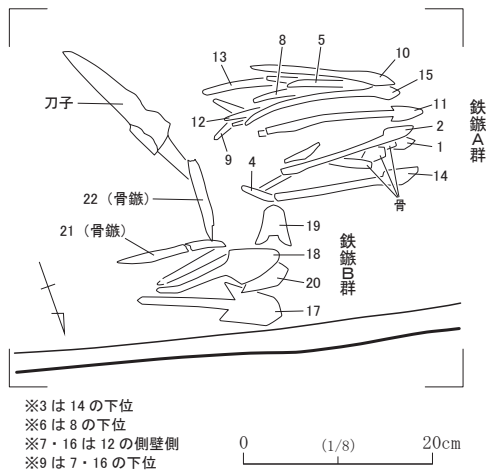


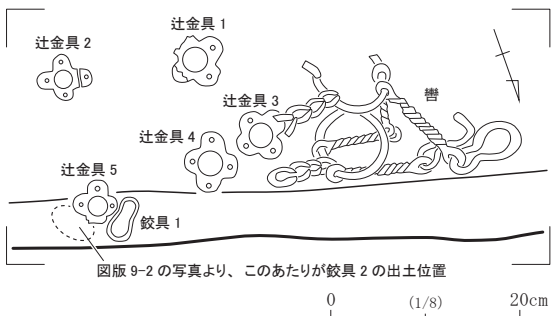
図27 2号墓人骨・遺物出土状況図



1. 2号墓遺物出土状況部分図①(第1屍床)

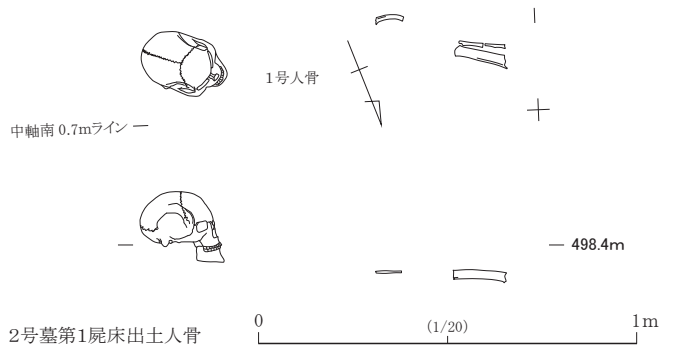


2. 2号墓遺物出土状況部分図②(第2屍床)

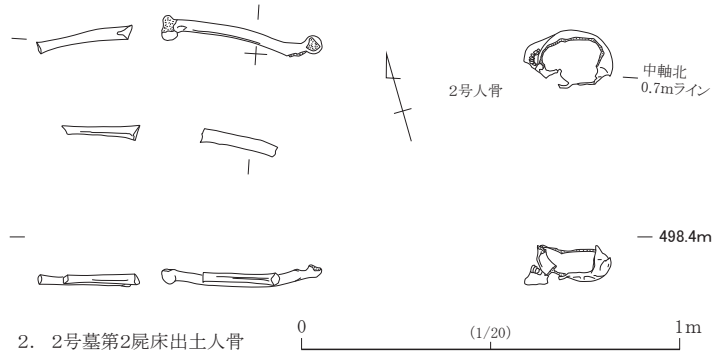


3. 2号墓遺物出土状況部分図③(中央通路)

図28 2号墓遺物出土状況部分図



1. 2号墓第1屍床出土人骨



2. 2号墓第2屍床出土人骨

図29 2号墓人骨出土状況図

具の輪金2点(図55-1・2)が出土したようである(出土状況図と写真からの判断)。ただし、鉸具の刺金1点(同3)の出土位置は特定できない。鉄鍬は短茎鍬の1点(図52)で、馬具のまとまりから東へ30cmほどの仕切り沿いで出土している。切先はおおよそ西(奥壁側)を向いている。

これら中央通路出土の遺物は、その出土位置が第2屍床に近接していることから、野田拓治氏は第2屍床の被葬者にとまなうものと判断しているようである。後述する第2屍床出土鉄鍬と中央通路出土轡の時期的位置づけに大きな齟齬がないことも考慮すれば、その可能性は高いと思われる。

出土位置不明の遺物 2号墓出土として保管されているが、出土位置を特定できないものに鉄鍬基部2点(図56)と刀子1点(図57)がある。これらのうち鉄鍬基部2点については、第1屍床あるいは第2屍床出土鉄鍬のいずれかにとまなうものと考えられる。刀子1点については、出土状況図に示されていないため、その出土位置についてはまったくの不明とせざるを得ない。しかし、第2屍床の鉄鍬A群・B群の出土状況を表した図面のなかで器物を特定できないものがあることから(図28-2)、あるいはそういったものに該当する可能性も考えられる。調査時に刀子と判断できなかったものなのではないだろうか。野田1988文献では2号墓出土刀子の総数は2点となっており、それに対してこの出土位置不明刀子を含めると現存する2号墓出土刀子の数は3点となるが、この1点増加の理由は、調査時に認識できなかった刀子が加わったことにあるのかもしれない。

(杉井 健)

第4節 3号墓 (図30～33, 図版10～12)

1 横穴の構造 (図30・31)

写真 (図版10) をみると、調査時には横穴の天井部が完全に失われていたようである。前庭部も完全に失われている (図30)。

横穴の主軸方向はN 31° Wで、開口方向は南寄りの南東である。

玄室の平面形は、奥壁側が狭くなる台形状である。ただし、1・2号墓とは異なって、全体形状がいびつである。奥壁ラインは中軸ラインに対して左に傾斜し、それに合わせるかのように、前壁ラインも中央通路の左右で一致せず、左側の方が羨道方向に突出している。したがって、大きさを正確に示すのは難しいが、長さは左側壁沿いで約1.7m、中軸あたりで1.9～2.0m程度、右側壁沿いで約1.7m、幅は前壁沿いで約2.2m、奥壁沿いで約1.3～1.4mである。壁面の高さは、奥壁で40～50cm、前壁では上半部の多くが失われているため正確に示し得ないが40～50cm程度である。天井部の形状も正確には分からないが、写真や実測図から判断すれば、1・2号墓と同様のごく低いドーム形と思われる。写真 (図版10～12) をみるかぎり、壁面に明瞭な赤色をみることができない。したがって、赤色顔料 (ベンガラ) が塗布されていなかった、あるいは、塗布されていたとしても1・2号墓にみられるほどの厚いものではなかった可能性が考えられる。

屍床は中央通路を挟んで左右に設置される。いわゆる川の字形の屍床配置である。ただし、前壁に比べて奥壁の幅がかなり狭くなっているため、左右の屍床の主軸は平行せず、奥壁に向かうにしたがって接近する。屍床の大きさは、第1屍床 (左屍床) が長さ約1.8m、前壁側・奥壁側とも幅約50cm、第2屍床 (右屍床) が長さ約1.8m、前壁側の幅約60cm、奥壁側約40cmである。中央通路とは削り残された仕切りによって区

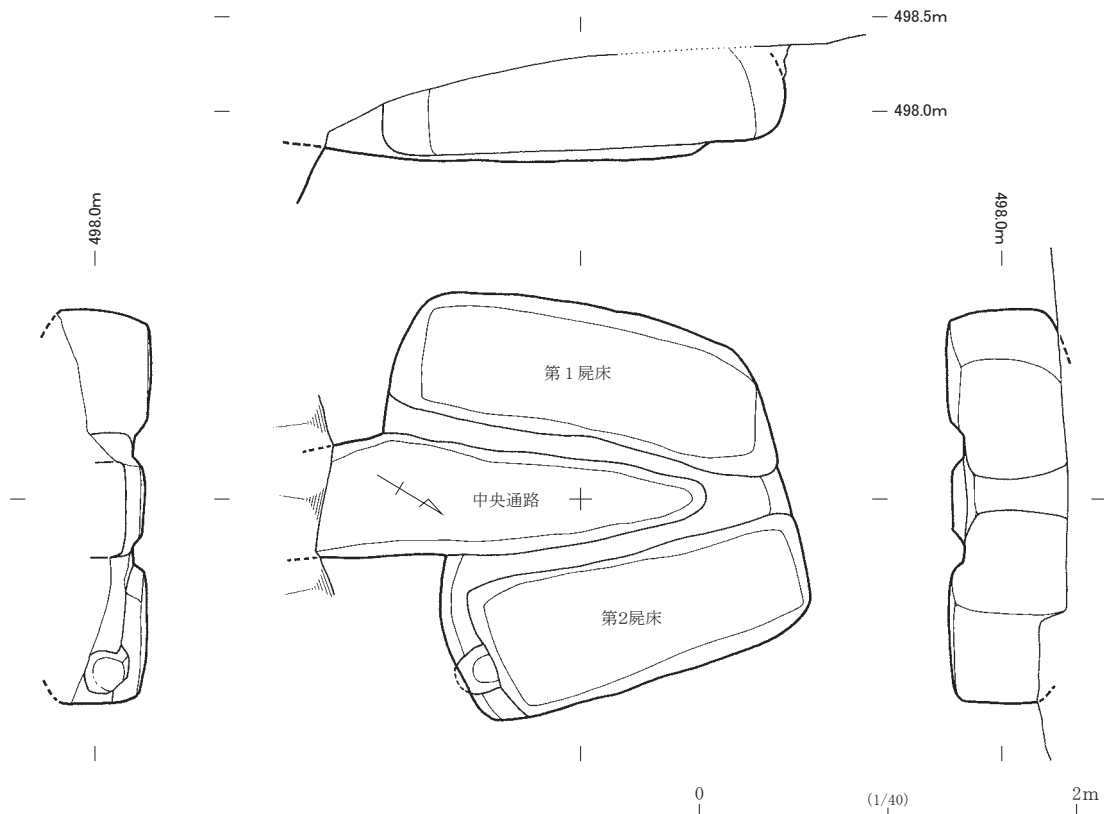


図30 3号墓実測図

画されている。仕切り上面から屍床床面までの高さは、いずれの屍床も約8cmである。第2屍床の前壁側には枕が1つ造り付けられている。枕は削り残しによる構築である。枕部分の窪みの幅は約25cm、長さは約20cmである。窪みの頂部は前壁面をわずかにえぐり込んでいる(図版11-1)。屍床床面から枕上面までの高さは約13cmである。一方、第1屍床には明確な枕は設置されていない。ただし、実測図(図30)ではわかりにくいですが、写真(図版12-1)をみると、前壁沿いが1段高く削り残されている様子が見える。窪みは設けられていないが、この高まりが枕の役割を果たしていたとも考えられる。

中央通路は、奥壁側に1つの頂点を有する細長い三角形形状をなす。奥壁から40cmほどのところで途絶えている。前壁付近での幅は約50cmであり、それは第2屍床よりは狭いが第1屍床とはほぼ同じである。中央通路の床面は屍床床面よりもわずかに高い位置にあり、そこから仕切り上面までの高さは5~6cmである。

羨道は、その先端が失われている。残存長は40~50cmほど、幅は約50cmである。羨道の床面は羨門から玄門に向かっておよそ8°の傾斜でレベルを下げる。羨道の左側辺は中央通路との接点付近で屈曲するが、右側辺は直線的に中央通路とつながっている。羨道の天井部の形状は不明である。

前庭部の形状もまったく不明である。しかし、閉塞石については、実測図が残されている(図31)。それによれば、上辺と両側辺は弧をなすが、下辺は直線的に整えられた板石で、表裏面も平坦に調整されている。角部が丸く収められている点は、1・2号墓の閉塞石とは異なった特徴である。大きさは最大幅75cm、最大高90cm、最大の厚さ15cmである。2号墓の閉塞石と同じ石材だとすれば、凝灰岩製と考えられる。なお、現場で作成された実測図には、石材の表面に「丹塗り」の注記がなされているから、赤色顔料(ベンガラ)の塗布が認められたのであろう。これと同じだとすれば、1・2号墓の閉塞石にも赤色顔料の塗布がなされていた可能性があるが、判断のすべがない。

(杉井 健)

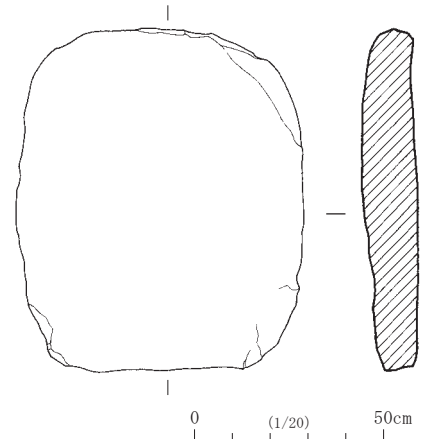


図31 3号墓閉塞石実測図

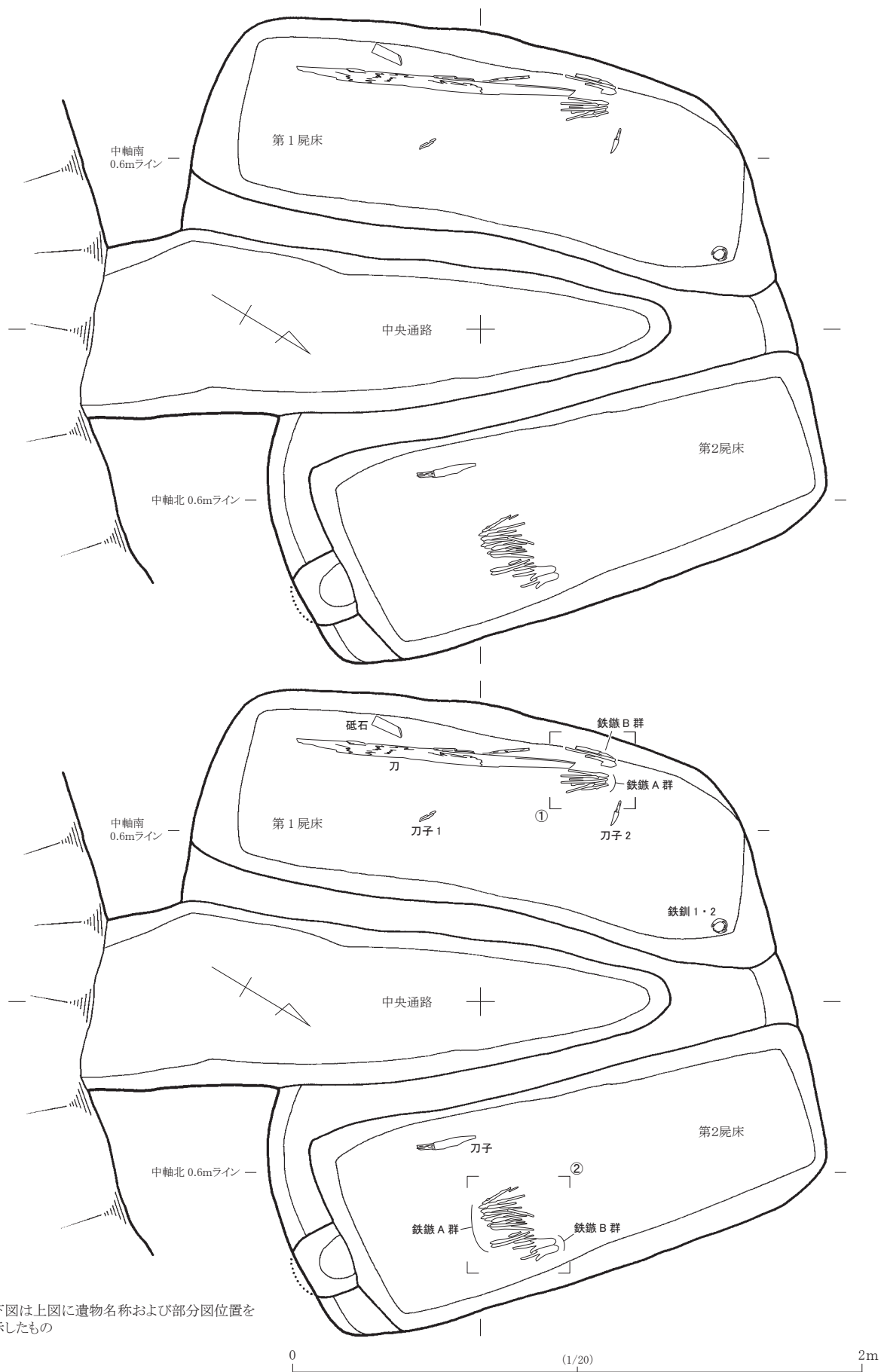
2 遺物出土状況(図32・33)

1・2号墓と同じく、横穴の左右は羨道から玄室をみた場合の左右で示し、方向を方位で表す場合は前壁側を東、奥壁側を西として記述する。

第1屍床 人骨は出土していない。

遺物の多くは、屍床の左側壁沿いで出土している。左側壁沿いのやや前壁寄りの位置で、鉄刀1点(図版24-1-3)が出土した。残存長98.1cmの大刀である。鞘に収められ、切先を西(奥壁側)に、刃部を北(中央通路側)に向けている。鉄刀と左側壁とのあいだでは砥石1点(図61)が出土した。一端が欠失しており、その欠失部を東(前壁側)に向ける。欠失した状態で副葬されたものと思われる。鉄刀切先のすぐ西側(奥壁側)では、鉄鏃がまとまって出土した(図33-1)。そのまとまりの状態から、鉄鏃はA・Bの2群に分けられる。A群(鉄鏃1~17)は鉄刀切先右側(北側)の一群で、長頸鏃と短茎鏃のみで構成される。切先を西(奥壁側)に向けている。B群(同18~20)は鉄刀切先左側(南側)の一群で、平根系の鏃のみで構成される。切先はこれも西(奥壁側)を向く。

刀子2点(刀子1・2)は、この左側壁沿いの鉄刀・鉄鏃から離れた屍床の中央寄りで、それぞれ単独で



※下図は上図に遺物名称および部分図位置を示したもの

図32 3号墓遺物出土状況図

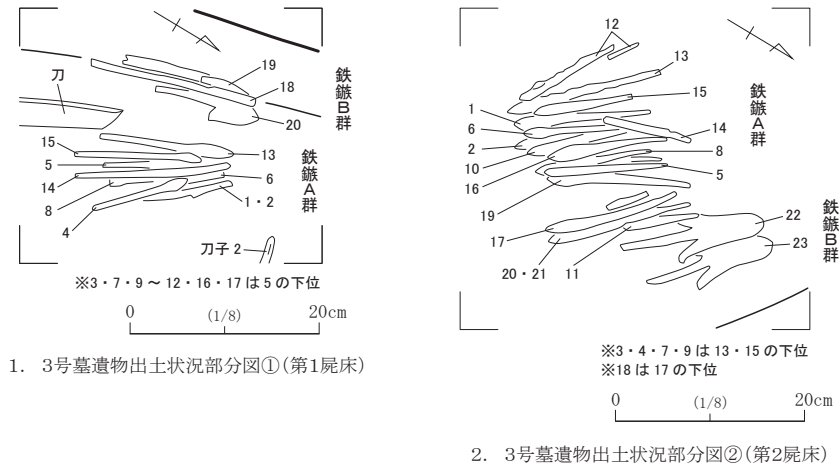


図 33 3号墓遺物出土状況部分図

出土している。刀子1は屍床中央のやや東寄りの位置で出土した。切先を東（前壁側）に向けている。抜き身で繊維にくるまれていたと思われる。刀子2は鉄鏃A群の少し北側で出土した。切先を北東（中央通路側）に向ける。これも抜き身にしたうえで繊維にくるまれていたと思われる。

屍床の北西隅（奥壁沿いの中央通路際）では、鉄釧2点（鉄釧1・2）が重なって出土した。その出土位置から、被葬者に装着されることなく、単独で副葬されたと思われる。

なお、野田1988文献と比べると、鉄鏃数が大きく増加している。

第2屍床 人骨は出土していない。

屍床東側の中央通路沿いで刀子1点（図65）が出土した。全長が21cmあり、高塚横穴群出土刀子のなかではもっとも大型である。切先を西（奥壁側）に向けている。繊維が付着するが、刀身の一面にのみわずかに認められるだけであるから、全体が繊維にくるまれていたと明確に判断するまでには至らない。

屍床東側の中央から右側壁にかけて、鉄鏃がまとまって出土した（図33-2）。刀子とは横に並ぶような位置関係である。鉄鏃は、そのまとまりの状態からA・Bの2群に分けられる。A群（鉄鏃1～21）は切先を東（前壁側）に向ける南側の一群で、長頸鏃のみで構成される。それに対してB群（同22・23）は切先を西（奥壁側）に向ける北側の一群で、平根系の鏃のみで構成される。ほかの屍床でもみられたように、鉄鏃が長頸鏃と平根系鏃で明確に区別されて取り扱われていたことがよくわかる。

なお、野田1988文献とは、鉄鏃数に若干の相違が認められる。

出土位置不明の遺物 3号墓出土として保管されているが、出土位置を特定できないものは鉄鏃2点（図66）である。1点は長頸段違い鏃、もう1点は茎部片である。これらのうち前者は、その鉄鏃型式から、第2屍床に帰属する可能性がきわめて高いと判断できる。

（杉井 健）

第5節 出土遺物の種類と数

1～3号墓出土遺物、不時発見遺物に分けて、高塚横穴群出土遺物の種類と数を表のかたちでまとめる（次ページの表1・2）。

（杉井 健）

表1 高塚横穴群1～3号墓出土遺物の種類と数

		武器				工具		馬具			装身具			
		鉄剣	鉄刀	鉄鏃	骨鏃	刀子	砥石	轡	辻金具	絞具	鉄釧	玉類		
												管玉	ガラス玉	
1号墓	第1屍床	野田1988文献 記載数	2	0	27	0	3	記載無	0	0	記載無	0	0	0
		現存数	1	0	24 頸部以下3	0	3	0	0	0	0	0	0	0
	第2屍床	野田1988文献 記載数	2	0	38	4	3	記載無	0	0	記載無	0	2	4
		現存数	0	1	31	0	3	0	0	0	0	0	2	4
	位置不明	現存数	1	0	茎部1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
現存総数		2	1	55 頸部以下3 茎部1	0	6	0	0	0	0	0	2	4	
2号墓	第1屍床	野田1988文献 記載数	0	1	6	1	1	記載無	0	0	記載無	0	0	0
		現存数	0	1	6	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	第2屍床	野田1988文献 記載数	0	1	19	3	1	記載無	1	5	記載無	0	0	0
		現存数	0	1	20	2	1	0	0	0	0	0	0	0
	中央通路	野田1988文献 記載数	記載無	記載無	記載無	記載無	記載無	記載無	記載無	記載無	記載無	記載無	記載無	記載無
		現存数	0	0	1	0	0	0	1	5	2	0	0	0
位置不明	現存数	0	0	茎部2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
現存総数		0	2	27 茎部2	2	3	0	1	5	2	0	0	0	
3号墓	第1屍床	野田1988文献 記載数	0	1	12	0	2	記載無	0	0	記載無	2	0	0
		現存数	0	1	17 頸部以下3	0	2	1	0	0	0	2	0	0
	第2屍床	野田1988文献 記載数	0	0	21	0	1	記載無	0	0	記載無	0	0	0
		現存数	0	0	22 茎部1	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	位置不明	現存数	0	0	1 茎部1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
現存総数		0	1	40 頸部以下3 茎部2	0	3	1	0	0	0	2	0	0	

表2 高塚横穴群不時発見遺物の種類と数

		武器	
		短甲	鉄剣
不時発見	現存総数	1	3

第2部第2章 引用・参考文献

- 野田拓治 1988『高塚横穴群発掘調査報告会資料』熊本県教育庁文化課・高森町教育委員会
 野田拓治 2007『古墳時代』『白水村史』白水村史編纂委員会：pp. 86-120

第3章 出土遺物

第1節 1号墓出土の遺物

1 第1屍床

(1) 鉄剣 (図34, 図版14)

第1屍床出土の鉄剣を1点図示している。剣身部はほぼ完存しているが茎部の下方を欠損している。残存長29.1cm、剣身長21.6cmで、剣身最大幅が関付近で2.4cmを測る。茎部は残存長が7.5cm、最大幅が関付近で2.2cmとなっている。剥離により厚くなっている部分を除き、全体の厚さは関付近で最大となっており0.5cmを測る。

剣身部と茎部には剣身長軸に平行な木質が認められる。鞘や把に由来するものであろう。茎部の把縁付近には鹿角装具の痕跡も残存している。茎部には目釘孔が2箇所認められる。また関部にも片側に円孔が1箇所認められる。反対側には確認できない。拵を装着するための造作であろうか。

(三好 栄太郎)

(2) 鉄鏃 (図35・36, 図版15)

第1屍床から出土した鉄鏃は、鏃身部を含む個体を24点、頸部以下のみの個体を3点図示している。各個体の計測値等は一覧表(表3・4)にまとめて記載する。

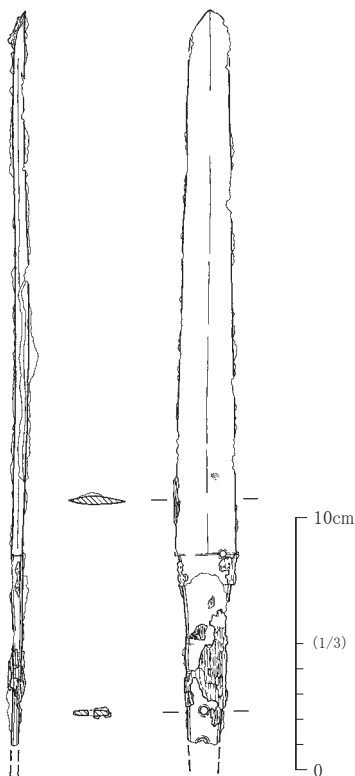


図34 1号墓第1屍床出土
鉄剣実測図

まずはじめに、鉄鏃の所属(出土位置)の確認について説明しておく。調査時、鉄鏃は出土状況図を作成したうえで番号を付して取り上げられている。そのため、各鉄鏃の取り上げ番号を確認することで大部分は所属を特定することが可能だが、番号が不明になっているものも一部ある。そこで1988年に描かれた鉄鏃の実測図(図37)とも比較を行い、対照ができたものは実測図に記された取り上げ番号等の情報から所属を特定している。ただし、すべての鉄鏃の実測図があるわけではないので所属が判明しないものもある。加えて、1988年の実測図と比較した結果、現在付いているラベルの番号と実測図に書かれた番号が異なっているものもある。その場合、より原情報に近いと考えられる実測図の情報を優先させている。こうした所属照合の結果は一覧表に明示している。

さて、1～18は長頸柳葉鏃である。これらは、1～8の鏃身部形状が圭頭鏃に近いものと、9～18の鏃身部形状が腸袂を有した柳葉形のものに大別できる。1～8のような長頸鏃と圭頭鏃が融合したような鉄鏃は、南九州に多いことが指摘されているものである[橋本2003]。長頸圭頭鏃ともいえそうだが、個別にみたときに長頸柳葉鏃等と区別が難しいことがある。1・2は比較的頸部が短いため短頸鏃に分類できそうであるが、2～8の鏃身部の形状が似ているうえにこれらがどれも頸部の長さによらず大ききことから、同一型式のなかでの個体差だと考えた方がよいだろう。9～18のように鏃身間に腸袂を有したものは、切先まで残存してい

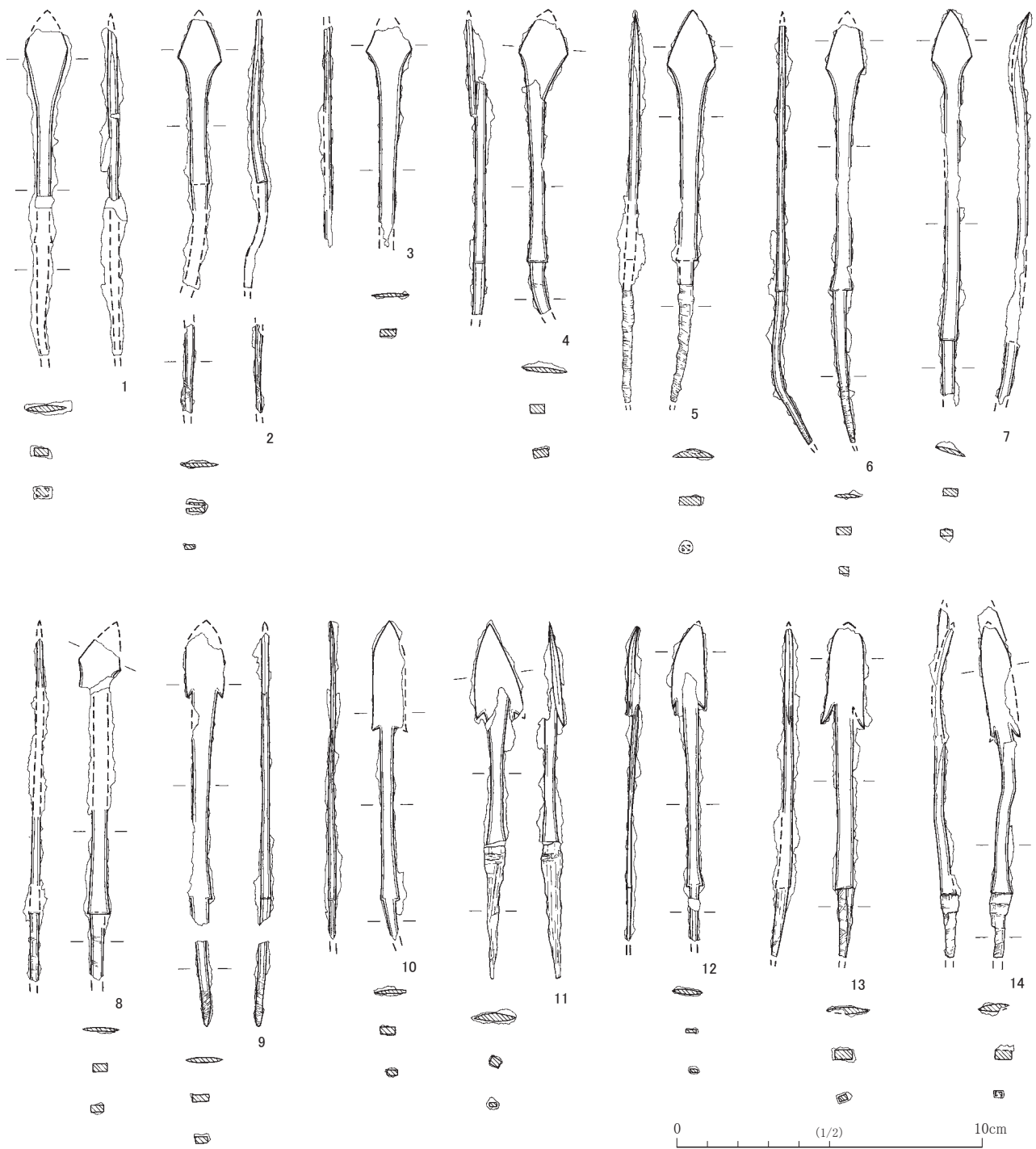


図35 1号墓第1屍床出土鉄鏃実測図(1)

るものをみると鏃身部がやや長めのものが多いようである。腸袂は浅いものもあるが、浅くないものもある。10は1988年の実測図(図37-a)では鏃身部から頸部上位までしか残存しておらず、それ以下は欠損している。11・12は鏃身部と頸部の接合が大きくずれている。16は鏃身部から頸部の破片と頸部から茎部の破片が銹着したものであるが、両者は別個体である可能性が高い。また1988年の実測図(図37-b)では13は24と銹着している。

19～21は長頸片刃鏃である。残存状態がよいものをみると腸袂はまだ浅くはない。頸部の長さにはばら

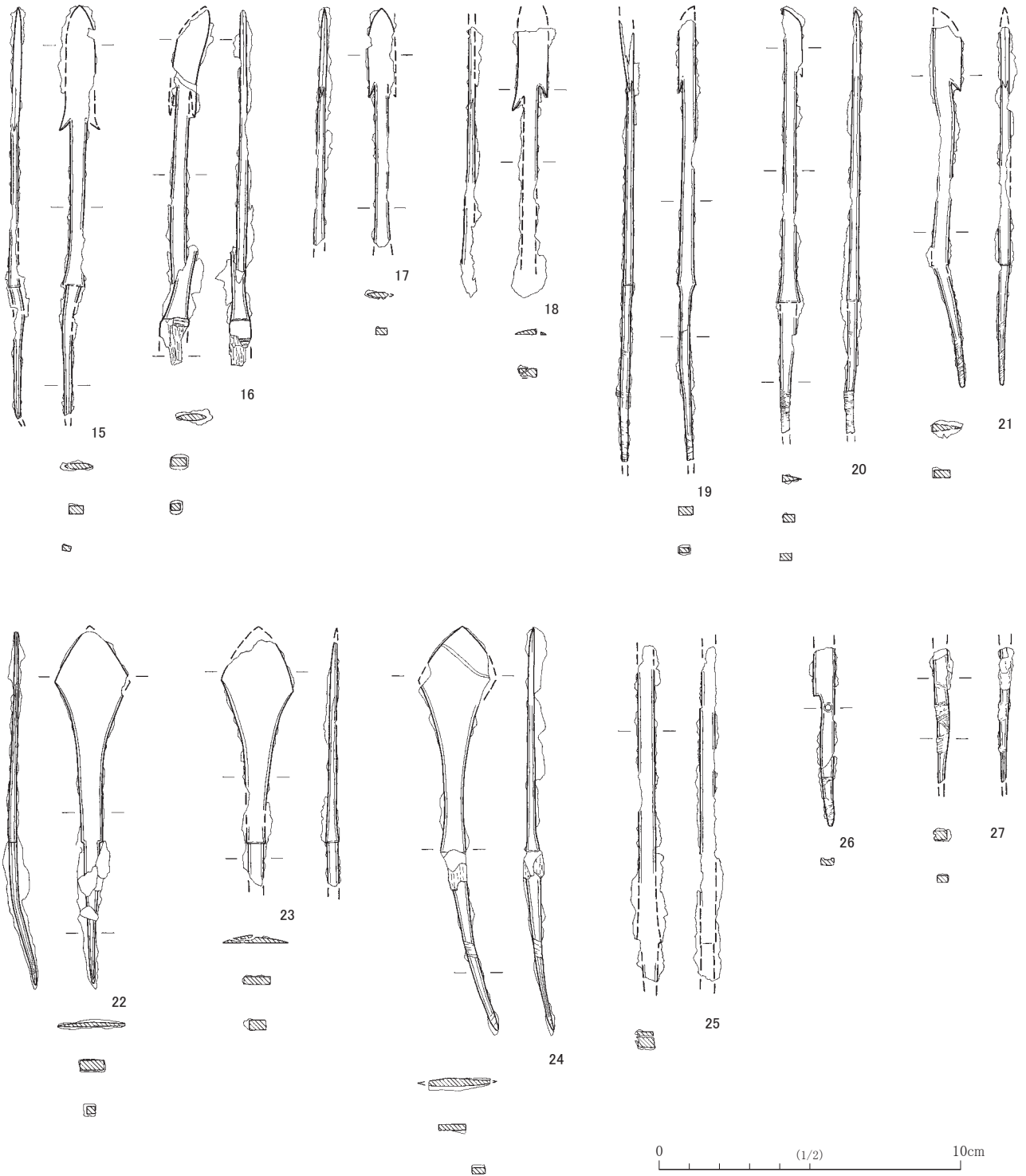


図36 1号墓第1屍床出土鉄鏃実測図(2)

つきがあるようである。

22～24は圭頭鏃である。刃部のラインはやや曲線を描いている。鏃身部と茎部の境には茎関がある。1～8の鏃身部が圭頭状の鉄鏃に比べると明らかに幅広い造りの別型式のもので、平根系の鉄鏃である。

25は長頸鏃の頸部から茎部片である。26も頸部から茎部の破片であるが、茎関が明瞭に観察できるのは片側のみである。また茎部の上位には円形の凹みがある。27は茎部の破片である。

これらの第1屍床から出土した鉄鏃には長頸鏃や平根系の鉄鏃が混在しているが、出土状況図をみると1

表3 高塚横穴群出土鉄鏃・骨鏃各部位の形状・計測値(1)

横穴	屍床	番号	型式(部位)	全長	鏃身〜頸長	鏃身長	鏃身幅	頸長	茎長	鏃身間	茎間	照合
1号	第1	1	長頸柳葉鏃	10.7~	7.0?~	0.7~	1.6	6.3?	3.7~	ナデ		◎
1号	第1	2	長頸柳葉鏃	8.8~	5.4?~	1.4~	1.4	4.0?	3.4?~	ナデ		◎
1号	第1	3	長頸柳葉鏃	7.2~	7.2~	0.8~	1.5	6.4~		ナデ		◎
1号	第1	4	長頸柳葉鏃	9.7~	8.0~	1.2~	1.6	6.8~	1.7~	ナデ		◎
1号	第1	5	長頸柳葉鏃	12.8~	8.2?	1.8	1.6	6.4?	4.6~	ナデ		◎
1号	第1	6	長頸柳葉鏃	13.7~	8.7~	1.5~	1.3	7.2	5.0~	ナデ		◎
1号	第1	7	長頸柳葉鏃	12.6~	10.8	1.6	1.3	9.2	1.8~	ナデ		◎
1号	第1	8	長頸柳葉鏃	11.2~	9.0~	0.8~	1.4	7.4~	2.2~	ナデ		◎
1号	第1	9	長頸柳葉鏃	9.6~	8.7~	2.1~	1.3	6.8	0.9~	腸袂		◎
1号	第1	10	長頸柳葉鏃	10.4~	9.1	3.6?	1.2?	5.6	1.3~	腸袂		◎
1号	第1	11	長頸柳葉鏃	11.7~	7.3~	3.3	1.6?	4.8~	4.4	腸袂		◎
1号	第1	12	長頸柳葉鏃	10.3~	8.6~	2.9?	1.1	5.9~	1.7~	腸袂		◎
1号	第1	13	長頸柳葉鏃	10.8~	8.5~	3.3~	1.4	6.0	2.3~	腸袂		◎
1号	第1	14	長頸柳葉鏃	10.8~	8.8?~	3.8?	1.0?		2.1~	腸袂		◎
1号	第1	15	長頸柳葉鏃	13.6~	9.3	4.2	1.4~	5.4	4.3~	腸袂		◎
1号	第1	16	長頸柳葉鏃	11.8~		3.6~	1.0?		1.5~	腸袂		▲
1号	第1	17	長頸柳葉鏃	8.0~	8.0~	3.0	0.9~	5.4~		腸袂		◎
1号	第1	18	長頸柳葉鏃	9.0~		2.7~	1.2			腸袂		◎
1号	第1	19	長頸片刃鏃	14.6~	8.8~	2.4~	0.7	6.8	5.8~	腸袂		○
1号	第1	20	長頸片刃鏃	14.1~	9.8	2.1~	0.6	7.7	4.3~	腸袂?		◎
1号	第1	21	長頸片刃鏃	12.0~	7.9~	2.1~	0.9	6.1	4.1	腸袂		○
1号	第1	22	圭頭鏃	11.9?		7.2?	2.5?		4.7		○	◎
1号	第1	23	圭頭鏃	8.1~		6.7~	2.4		1.3~		○	◎
1号	第1	24	圭頭鏃	13.4		7.5	2.7?~		5.9		○	◎
1号	第1	25	(頸〜茎部)	11.1~				9.8?~	1.3?~			◎
1号	第1	26	(頸〜茎部)	5.9~				1.6~	4.3			◎
1号	第1	27	(茎部)	4.5~					4.5~			▲
1号	第2	1	長頸柳葉鏃	12.8?	7.9?	1.2?	1.3?	6.7?	4.9	ナデ		◎
1号	第2	2	長頸柳葉鏃	11.7~	7.7~	1.1~	1.5	6.6	4.0~	ナデ		◎
1号	第2	3	長頸柳葉鏃	13.6	8.5	1.1	1.3	7.4	5.1	ナデ		◎
1号	第2	4	長頸柳葉鏃?	13.7	9.2				4.5	ナデ?		◎
1号	第2	5	長頸柳葉鏃	7.5~	7.5~	1.4	1.1~	6.1~		角		◎
1号	第2	6	長頸柳葉鏃	6.6~	6.6~	1.9~	1.2?	4.8~		腸袂		▲
1号	第2	7	長頸柳葉鏃	12.3~	8.9	2.4	1.1	6.6	3.3~	腸袂		◎
1号	第2	8	長頸柳葉鏃	11.2~	8.2?	3.4?	1.2~	5.0	3.0~	腸袂		◎
1号	第2	9	長頸柳葉鏃	10.6	7.3	4.0		4.4	3.3	腸袂		○
1号	第2	10	長頸独立片腸袂鏃	15.1	9.0	1.2	1.0	7.9?	6.1	角?		◎
1号	第2	11	長頸独立片腸袂鏃	14.4	8.9	1.0	1.2	7.9	5.5	角?		◎
1号	第2	12	長頸独立片腸袂鏃?	11.7~	9.0~	0.7~	0.9	8.3	2.7~	ナデ?		◎
1号	第2	13	圭頭鏃	10.5~		7.0?~	3.6		3.5?			◎
1号	第2	14	圭頭鏃	9.9~			2.9?					◎
1号	第2	15	圭頭鏃	12.7			3.4					◎
1号	第2	16	圭頭鏃	11.6~		7.3~	2.4		4.9~		○	◎
1号	第2	17	圭頭鏃	12.1?	7.1?	1.8?	1.9	5.3	5.0		○	◎
1号	第2	18	圭頭鏃	9.9		6.6?	2.6?		3.3?			▲
1号	第2	19	圭頭鏃	10.2		7.0	2.4		3.2		○	◎
1号	第2	20	圭頭鏃	14.0?		7.6?	2.2		6.4		○	▲
1号	第2	21	圭頭鏃	14.0		6.8	2.7?		7.2		○	▲
1号	第2	22	柳葉鏃	10.9~		4.9	2.5		6.0~			◎
1号	第2	23	短茎鏃	7.9~		7.9~	5.8~					▲
1号	第2	24	長頸片刃鏃	14.3~	11.3~	2.6~	0.8	9.0	3.0~	腸袂		▲
1号	第2	25	長頸片刃鏃	14.9~	9.9~	2.4~	0.7	8.0		腸袂		▲
1号	第2	26	長頸片刃鏃	11.8~	10.5?	2.1?	0.7?	8.4	1.3~	?		◎
1号	第2	27	長頸片刃鏃	16.6	11.3	2.6	0.7	8.7	5.3	角?		◎
1号	第2	28	圭頭鏃	9.8~			4.3					◎
1号	第2	29	短茎鏃	12.5?		12.5?	6.4~		0.8			◎
1号	第2	30	短茎鏃	7.7~		7.7	5.2		0.7~			◎
1号	第2	31	特殊有茎鏃	17.7~		15.1~	6.5~		5.8~			◎
1号	不明	1	(茎部)	5.2~					5.2~			×
2号	第1	1	長頸柳葉鏃	10.3~	6.9?	1.4	1.8	5.5?	3.6~	ナデ		◎
2号	第1	2	長頸柳葉鏃	10.3~	6.7?	1.2?	1.6?	5.5?	3.3~	ナデ		◎
2号	第1	3	圭頭鏃	13.2		7.3	2.0?		5.9		○	◎
2号	第1	4	圭頭鏃	14.3~			4.5?					◎
2号	第1	5	腸袂柳葉鏃	13.0~		8.1~	4.7~					◎
2号	第1	6	短茎鏃	8.8		8.8	7.0~					◎
2号	第2	1	長頸柳葉鏃	14.6~	10.6~	2.1~	1.3	8.5	4.0	ナデ		◎
2号	第2	2	長頸柳葉鏃	15.8	10.3	1.1	0.9	9.2	5.5	ナデ		◎
2号	第2	3	長頸柳葉鏃	14.4	7.6	2.2	1.2?	5.4	6.8	角		◎
2号	第2	4	長頸柳葉鏃	17.8	11.4?	2.0	0.9~	9.4?	7.0	角		◎

法量の「~」は残存値、「?」は推定値を表す。単位はcm。
 「照合」は現在のラベルと1988年の鉄鏃実測図との番号の比較の結果を示し、「◎」は両者の番号一致、「○」は実測図なしのためラベルを優先、「▲」は両者が不一致のため実測図を優先、「×」は両者に番号なしを表す。空欄は比較を行っていないことを表す。

表4 高塚横穴群出土鉄鏃・骨鏃各部位の形状・計測値(2)

横穴	屍床	番号	型式(部位)	全長	鏃身〜頸長	鏃身長	鏃身幅	頸長	茎長	鏃身闊	茎闊	照合
2号	第2	5	長頸柳葉鏃	12.5~	8.0	1.7	0.9	6.3	4.5~	腸袂		◎
2号	第2	6	長頸柳葉鏃	10.8~	8.7?	1.8?	1.0	7.1?	2.1~	腸袂		◎
2号	第2	7	長頸柳葉鏃	14.0~	9.4	2.0	1.0?	7.5	4.6~	腸袂		◎
2号	第2	8	長頸柳葉鏃	14.0	10.0	2.5	1.4	7.6	4.0	腸袂		◎
2号	第2	9	長頸柳葉鏃	15.0~	10.0?	2.4	0.9~	7.6?	5.0?	腸袂		◎
2号	第2	10	長頸柳葉鏃	15.1~	10.5	1.7	0.9	8.8	4.6~	腸袂		◎
2号	第2	11	長頸柳葉鏃	11.2~	10.9?	1.8	1.0	9.3?		腸袂		◎
2号	第2	12	長頸段違い鏃	16.0~	9.9~	1.2~	0.9	8.8	6.1	腸袂		◎
2号	第2	13	長頸片刃鏃	19.1	11.1	3.2	0.7	8.2	8.0	腸袂		◎
2号	第2	14	長頸片刃鏃	18.4	11.1	3.4	0.8	7.8?	7.3	腸袂		◎
2号	第2	15	長頸片刃鏃	15.2?	10.9	3.1	0.7	7.9	5.3?	腸袂		◎
2号	第2	16	長頸片刃鏃	14.8~	9.9~	2.5~	0.8	7.5	4.9	腸袂		◎
2号	第2	17	腸袂柳葉鏃	14.3~		9.2~	3.7		5.2		○	◎
2号	第2	18	柳葉鏃	12.5~		8.0	3.7?		4.5~		○	◎
2号	第2	19	短茎鏃	5.4~		5.4~	4.1		0.2~			◎
2号	第2	20	短茎鏃	5.2		5.2	4.4?		0.5			◎
2号	第2	21	骨鏃	13.3		9.6	1.2		3.7			◎
2号	第2	22	骨鏃	9.1~		8.0~	1.0		1.1~			◎
2号	通路	1	短茎鏃	6.3~		6.3~	4.5~		0.3			○
2号	不明	1	(茎部)	3.4~					3.4~			×
2号	不明	2	(茎部)	4.1~					4.1~			×
3号	第1	1	短頸柳葉鏃	11.7	7.2	3.2	1.4?	4.0	4.5	ナデ		◎
3号	第1	2	短頸柳葉鏃	10.8~	7.0	3.2	1	3.8	3.8~	ナデ		◎
3号	第1	3	短頸柳葉鏃?	9.6?~	7.1?	2.0?	1.1?	5.1?	2.5~	ナデ?		◎
3号	第1	4	長頸柳葉鏃	11.3~	7.2?	1.6?	1.4?	5.6	4.3~	ナデ		◎
3号	第1	5	長頸柳葉鏃	11.4	6.8	1.7	1.8?	5.1	4.6	ナデ		◎
3号	第1	6	長頸柳葉鏃	10.7	7.5	1.0	1.2	6.5	3.2	ナデ		◎
3号	第1	7	長頸柳葉鏃	12.3?	7.9	1.1	1.1?	6.8	4.4?	角		◎
3号	第1	8	長頸柳葉鏃	9.0~	9.0~	1.4	1.5	7.6~	2.4~	角		◎
3号	第1	9	長頸柳葉鏃	13.8~	7.1	1.6	1.3	5.5	6.7~	角		◎
3号	第1	10	長頸柳葉鏃	13.2	8.0	1.5	1.5	6.5	5.2	腸袂		◎
3号	第1	11	長頸柳葉鏃	11.9~	8.2	1.6	1.0	6.6	3.7	ナデ		◎
3号	第1	12	長頸柳葉鏃	15.8~	10.1~	1.3~	1.2	8.8	5.7~	ナデ		◎
3号	第1	13	長頸柳葉鏃	13.8~	9.2~	1.8~	1.0	7.4	4.6	角?		◎
3号	第1	14	長頸柳葉鏃	15.8~	11.3~	1.8~	1.0	9.5	4.5~	腸袂		◎
3号	第1	15	(頸〜茎部)	10.8~	8.8~			8.8~	2.0~			◎
3号	第1	16	(茎部)						3.5~			◎
3号	第1	17	(茎部)						1.6~			◎
3号	第1	18	方頭鏃	11.0~		9.9	2.8?		1.1~		○	◎
3号	第1	19	腸袂柳葉鏃	13.7~		9.8~	3.6~		4.0~		○	◎
3号	第1	20	腸袂柳葉鏃	11.5~		9.1	3.1~		2.4~		○	◎
3号	第2	1	長頸柳葉鏃	8.2~	5.7~	1.3~	1.3~	4.2~	2.5~	?		○
3号	第2	2	長頸柳葉鏃	11.1~	8.4?	1.7	1.1	6.9?	2.7?~	腸袂		○
3号	第2	3	長頸柳葉鏃	11.4~	7.5	1.4	1.0~	6.1	3.9~	角		○
3号	第2	4	長頸柳葉鏃	9.8~	7.9	1.5	1.2?	6.3	1.9~	角		○
3号	第2	5	長頸柳葉鏃	11.8~	7.8	1.6	1.1	6.2	4.0~	角		○
3号	第2	6	長頸柳葉鏃	10.5~	7.6	1.2?	1.0~	6.3?	2.9~	角?		○
3号	第2	7	長頸柳葉鏃	10.9~	7.7	1.5	1.2	6.2	3.2~	角		○
3号	第2	8	長頸柳葉鏃	12.9	7.9	1.6	1.0?	6.3	5.0	角		○
3号	第2	9	長頸柳葉鏃	11.7	7.5	1.6	1.0	5.9	4.2	角		○
3号	第2	10	長頸柳葉鏃	9.9~	9.2	1.4	1.0	7.8	0.7~	角		○
3号	第2	11	長頸柳葉鏃	11.5~	9.6~	1.0~	1.0~	8.6	1.9~	角		○
3号	第2	12	長頸柳葉鏃	12.8	7.6	1.3?	0.9~	6.3?	5.2	ナデ		○
3号	第2	13	長頸柳葉鏃	14.1~	9.9	1.5	1.0	8.4	4.2~	ナデ		○
3号	第2	14	長頸段違い鏃	12.0~	9.1?	2.4?	0.8	6.7	3.0~	ナデ		○
3号	第2	15	長頸段違い鏃	13.6~	9.8	1.5?	1.0	8.3?	3.8~	ナデ		○
3号	第2	16	長頸段違い鏃	12.0~	9.5	1.8?	1.1?	7.7?	2.5~	ナデ		○
3号	第2	17	長頸段違い鏃	14.2	9.4	1.3	1.0	8.1	4.8	角		○
3号	第2	18	長頸段違い鏃	14.5	9.7	1.2	1.1?	8.5	4.8	角		○
3号	第2	19	長頸段違い鏃	14.0~	9.5	1.3	1.0	8.2	4.5~	角		○
3号	第2	20	長頸段違い鏃	13.7~	9.5?	2.1?	1.0	7.7	4.1~	腸袂		○
3号	第2	21	(茎部)	6.7~					6.7~			○
3号	第2	22	腸袂柳葉鏃	14.9		8.9	5.0		7.5			○
3号	第2	23	腸袂柳葉鏃	13.3?		8.6?	4.7~		4.8			○
3号	不明	1	長頸段違い鏃	11.6~	10.0	1.3	0.9?	8.7	1.6~	腸袂		×
3号	不明	2	(茎部)	4.3~					4.3~			×
不時発見	1		短頸腸袂柳葉鏃	12.2	8.0	4.7~	1.6~	4.4	4.2	腸袂		
不時発見	2		長頸片刃鏃	13.2~	10.9	2.7	0.8	8.2~	2.3~	腸袂		
不時発見	3		短茎鏃	7.3~		7.3~	5.0~					

法量の「~」は残存値、「?」は推定値を表す。単位はcm。

「照合」は現在のラベルと1988年の鉄鏃実測図との番号の比較の結果を示し、「◎」は両者の番号一致、「○」は実測図なしのためラベルを優先、「▲」は両者が不一致のため実測図を優先、「×」は両者に番号なしを表す。空欄は比較を行っていないことを表す。

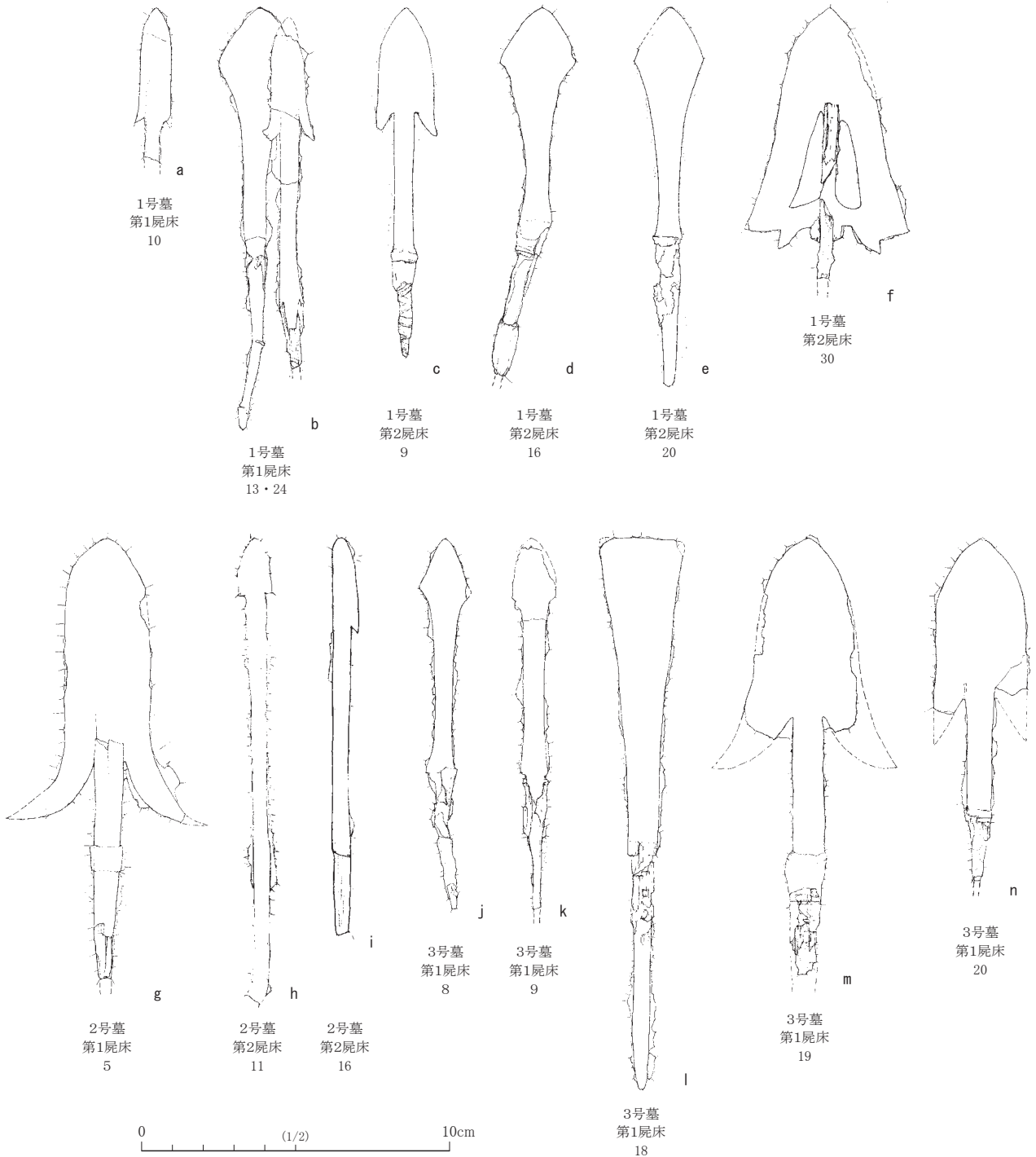


図37 1988年に描かれた高塚横穴群出土鉄鍬実測図抜粋

グループにまとまって検出されている(図22, 23-1)。平根系の鉄鍬は長頸鍬と区別して副葬される傾向があるが、圭頭鍬の出土位置を確認してみると偏った位置から出土している状況はないようである。第1屍床で検出された人骨は1体(1号人骨)であり、出土状況を考えてもこれらの鉄鍬は一括性が高いと判断できる。鉄鍬の切先は被葬者の頭位方向と同じ東を向いているようである。

鉄鍬の時期については、圭頭鍬が茎関を有していること、長頸鍬の腸袂の深さ、棘関が認められないことなどから、古墳時代中期後葉から後期初頭、須恵器型式でいえばTK 23～MT 15型式段階頃を想定しておきたい。鉄鍬組成の特徴としては、南九州の影響が一定程度認められることが挙げられる。平根系の圭頭鍬

が南九州に多いことは高木恭二の研究〔高木 1981・1982〕以来広く知られるが、上述したように長頸鏃と圭頭鏃の特徴を併せ持つ長頸柳葉鏃も南九州色が強い鉄鏃である。

(三好 栄太郎)

(3) 刀子 (図 38, 図版 14)

第1 屍床から出土した刀子は3点あるが、2・3は出土状況の記録がなく、明確な出土位置は不明である。

1は、茎がわずかに欠損するが、ほぼ完形である。全長10.3cm、刀身長6.4cm、茎長3.9cm、刀身関部幅1.6cm、茎幅0.4～1.3cmである。刀身は

切先から徐々に幅を広げて関部へと至る形状をなす。刃は切先から茎部にかけてわずかに内彎し、棟は斜め方向にのびる。関は棟部分のみの片関で、直角関である。茎は茎尻に向かって幅を減じ、茎尻は栗尻を呈する。茎には把の鹿角がわずかに残る。刀身に有機物の付着はなく、抜き身と思われる。出土状況を確認すると、まとめて出土した鉄鏃群に含まれており、切先は鉄鏃と同様に東(1号人骨の頭位方向)を向く。

2は、刀身と茎に一部欠損がみられるが、ほぼ全形をうかがうことができる。推定全長12.2cm、刀身長8.5cm、茎推定長3.5cm、刀身関部幅1.9cm、茎幅1.2～1.3cmである。刃は枯れたふくらから徐々に幅を広げて関部に至る形状をなす。棟部もわずかに幅を広げながら直線的にのび、関部に達する。関は両関で、いずれも直角関である。茎幅は茎元から茎尻にかけてほぼ変わらない。茎尻は欠損しているが、残存部から栗尻と判断できる。茎には幅2mm程の樹皮が横および斜め方向に巻かれた痕跡が確認でき、その上に把となる鹿角が遺存する。把縁端は関部よりわずかに下部に位置する。刀身に有機物の付着は確認できないことから、抜き身と思われる。

3は、刀身先端および茎尻が欠損する。残存長13.8cm、刀身残存長8.6cm、茎残存長5.2cmである。刀身は徐々に幅を広げて関部に至る形状をなす。刃は大部分が欠損しているが、斜め方向に直線的にのびるものと思われる。一方、棟はほぼ垂直に関部へ至る。関は刃部側を欠失するが、残存状況から両関とみられる。棟部関は直角関である。茎は茎元から茎尻に向けてわずかに幅を減じる。茎尻は欠損しているため、形状は不明である。把には鹿角が用いられており、把縁端は刀身下部を呑んでいる。刀身に有機物の付着はなく、抜き身とみられる。

なお、刀子の時期的位置付けは、3号墓第2 屍床出土の刀子について記述したのちに、高塚横穴群出土刀子を総合するかたちで考えたい。

(山元 瞭平)

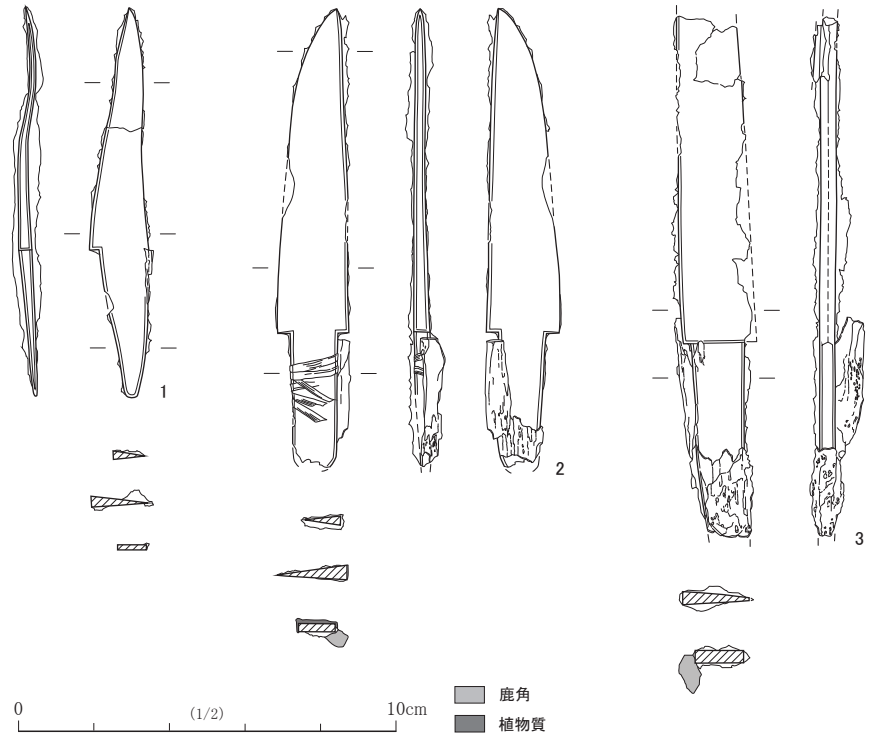


図 38 1号墓第1 屍床出土刀子実測図

2 第2屍床

(1) 鉄刀 (図39, 図版14)

第2屍床から出土した鉄刀を1点図示している。切先と茎尻付近を欠損している。刀身部は残存長が21.7cm、最大幅が関付近で2.9cmを測り、茎部は残存長が8.8cm、最大幅が関付近で2.0cmとなっている。剥離により厚くなっている部分を除き、全体の最大の厚さは刀身部下半の0.6cmである。

茎部には刀身長軸に平行な木質が残存しており、把に由来するものと考えられる。身部には木質が認められず、繊維の付着がある。抜き身で繊維に覆われていたのであろうか。関は刃側と棟側の両側にある。茎部には目釘孔が1箇所認められ、目釘も部分的に残存している。

(三好 栄太郎)

(2) 鉄鏃 (図40～42, 図版16, 17-1・2)

第2屍床から出土した鉄鏃を31点図示している。出土状況から1～12のA群、13～27のB群、28～31のC群の3つのまとまりに分けられる(図22, 23-2)。

1～9は長頸柳葉鏃である。これらのうち1～3は鏃身部が圭頭状を呈するもので、4も鏃身部形態が不明瞭であるが同様のものであろうか。5は鏃身関が角関である。6～9は鏃身部が腸袂を有した柳葉形を呈するものである。9は鏃身部と頸部のバランスが短頸鏃に近いものがある。腸袂も6～8に比べてかなり深い。1988年の実測図(図37-c)では腸袂が屈曲しておらず、鏃身部幅は2.0cmである。

10～12は長頸独立片腸袂鏃である。鏃身部形態は10・11が三角形を呈し、12は柳葉形かと思われる。

12の鏃身部と独立片腸袂とは関を有さず連続しているように修復されているが、本来は関があったものだろう。それぞれの独立片腸袂部の形態は頸部に平行して直線的で、腸袂の深さは浅いようである。

13～21は圭頭鏃である。16・17・18・20は刃部のラインが曲線を描き、加えて16・17は刃部関を有する。16は1988年の実測図(図37-d)では鏃身部が割れておらず、鏃身部長は6.9cmとなっている。茎関については矢柄の残存等で観察しにくいものもあるが、16・17・19・20・21では関があることを確認できる。20は1988年の実測図(図37-e)では茎部が完存しているように見え、その長さは4.7cmとなっている。現状の茎部はそれよりもかなり長く、別個体の茎部を接合したものであろうか。

22は柳葉鏃である。接合の際に切先が傾いている。

23は短茎鏃である。切先と腸袂の先端を欠損している。重腸袂を有し、根挟みが部分的に残存している。

24～27は長頸片刃鏃である。24・25は鏃身部に腸袂を有し、26は鏃身関がナゲ関もしくは角関、27は角関であろうか。24・25は切先が残存していないが、頸部の長さから独立片腸袂部とは考えにくく長頸片刃鏃と考えてよいだろう。腸袂はまだ浅くない。

28は圭頭鏃である。刃部のラインはやや曲線気味で、茎関は有していないようである。

29・30は短茎鏃である。29は図の上下方向に4mm、左右方向に5mmの長方形の透孔が1箇所ある。茎部は完存しており、長さが0.8cmである。

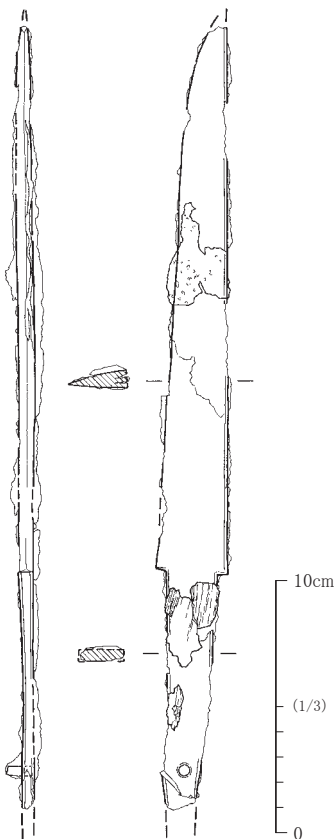


図39 1号墓第2屍床出土鉄刀実測図

30は重腸袂を有し、鍔身部中央付近に2つの三角形の透孔が左右対称になるように配置されている。2つの透孔間の軸状部分には根挟みが部分的に残存し、それを緊縛するような糸巻きも観察できる(図版25-1)。この根挟みの部分から茎部を通るように接合されている頸部は別個体のもので、1988年の実測図(図37-f)

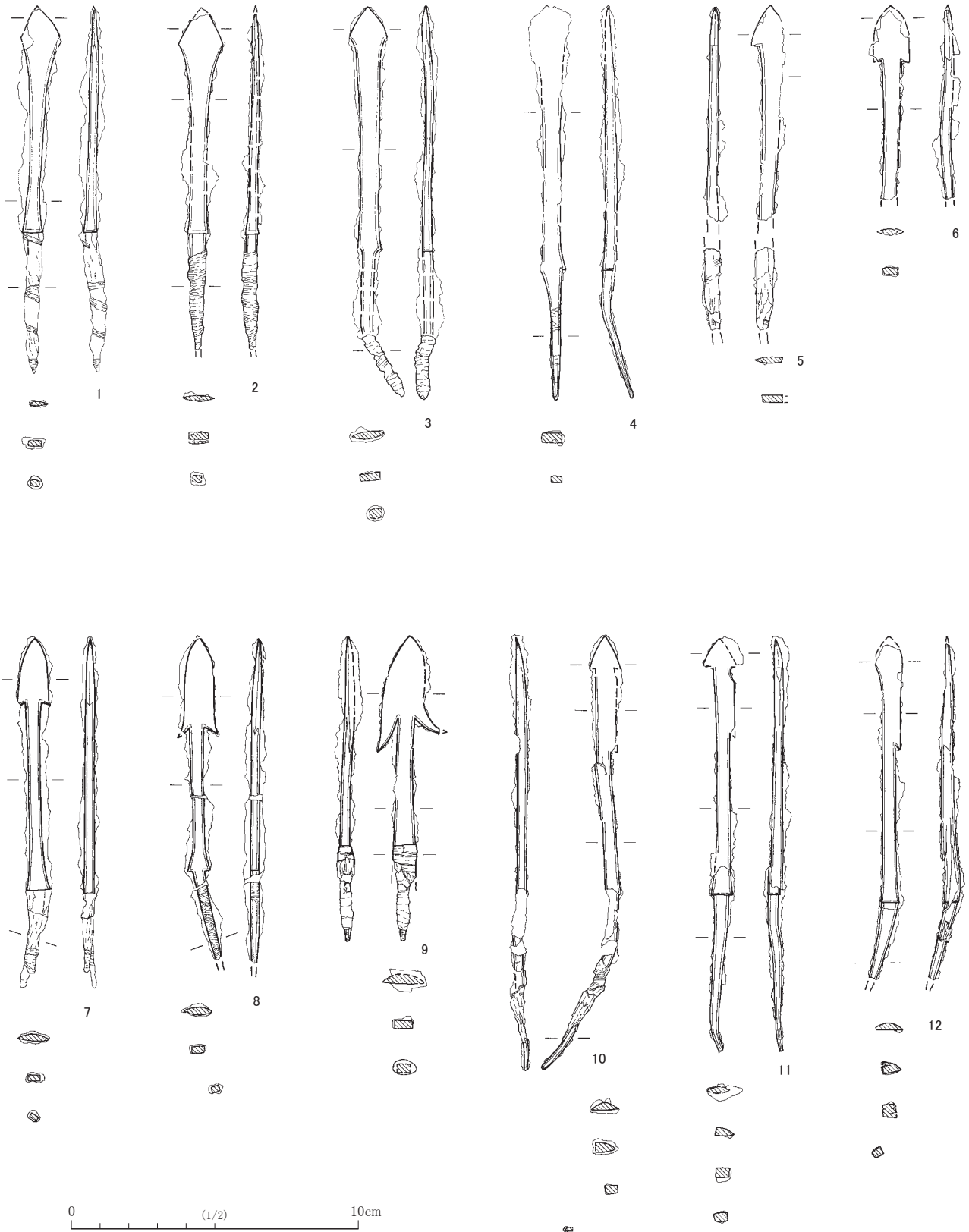


図40 1号墓第2屍床出土鉄鍔実測図(1)

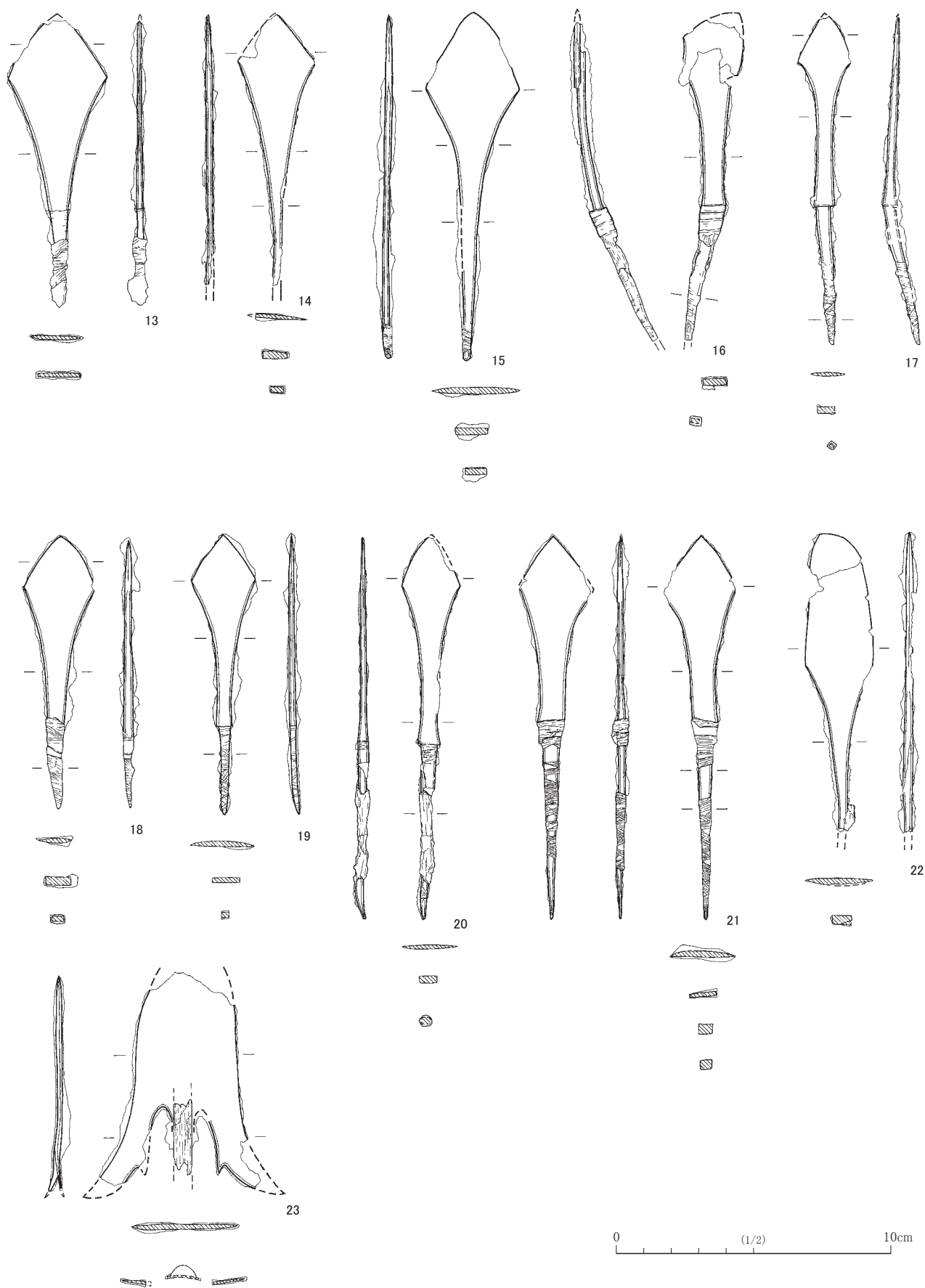


图 41 1号墓第2屍床出土鉄鏃実測図(2)

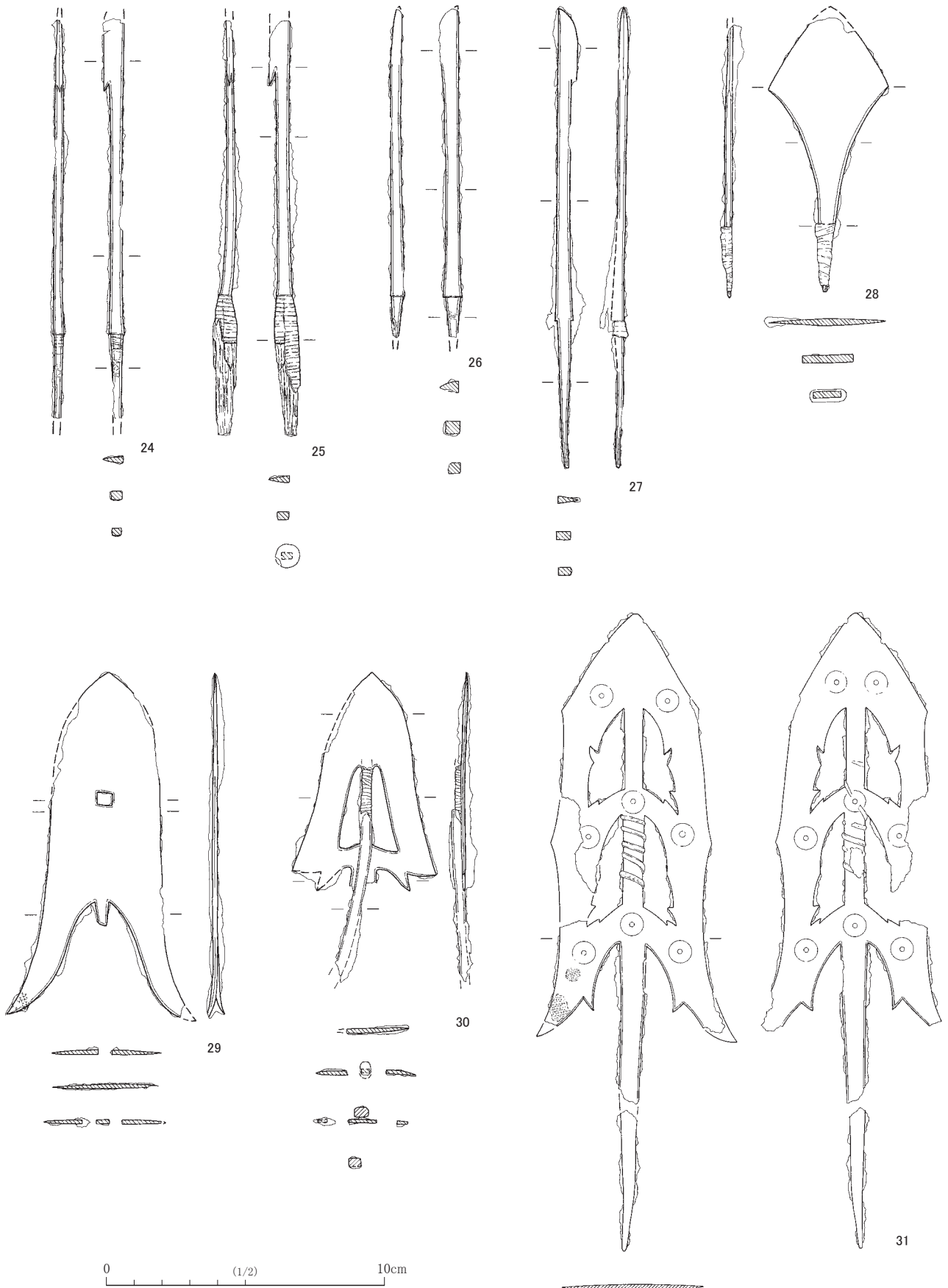


図42 1号墓第2屍床出土鉄鍬実測図(3) (31の図は鈴木2012より転載)

にはない。

31は鈴木一有により報告された特殊な鉄鏃である〔鈴木2012, 実測図はこの文献より転載〕。1号墓の第2屍床から出土したもので、出土状況図からC群であることが分かる。鏃身部の形態は短茎鏃と類似性が高いが、根挟みを必要としない長い茎部を有しているのが特徴的である。鏃身長は15cmをこえる大型のものである。また鏃身部の各部分に複雑な造作が施されている。三角形に近い形状の透孔が左右対称になるよう4箇所あり、鏃身部両面に表裏が対応するように8箇所ずつ、合計16箇所の円文がある。円文の直径は約7mmである。各円文の中心には直径約1.5mmの点状の窪みがみられる(図版25-2)。鏃身部の全体的な形状は腸袂のある柳葉形に近いものの流麗な外形ではなく、ふくらと鏃身部中位に頂点をもった直線的もしくはやや内彎した外形ラインである。重腸袂を有するとともに、4箇所の透孔にも重腸袂を思わせるような切れ込みが入っている。外形ラインと相まって、非常に刺々しい印象を受ける。透孔間の軸状部分にはS撚りの糸が巻かれている。糸の太さは約1.5mmである。短茎鏃の場合、30のように左右対称な透孔間の軸上部分に根挟みを装着してその上に糸状のものを巻きつけるというのはよくあることである。それを考えると、31も鉄鏃の造りは短茎鏃と異なるが、矢柄まで装着したときの矢としての外見や雰囲気は、短茎鏃に近いものがあつたのではないだろうか。そうだとすれば、性格や機能としては短茎鏃と同種だったと考えていいだろう。なお、重腸袂の先端部付近には繊維が付着している。繊維目の経は鉄鏃の縦方向に走る。5mm当り経8本、緯5本の平織りの繊維で、用いられている糸はS撚りである。織り目が粗いため、植物由来の繊維である可能性がある。同種の繊維は、29の腸袂先端部にも付着している(図版25-3)。

これらの第2屍床から出土した鉄鏃は、上述したように出土状況からA群～C群の3つのグループに分けられる。A群は1～12で、長頸鏃ばかりであり、明確に平根系に分類できる鉄鏃は出土していない。調査時には切先が東を向いた状態で検出されている。B群は13～27で、長頸片刃鏃とともに圭頭鏃や柳葉鏃、それに短茎鏃といった平根系の鉄鏃が出土している。切先が西を向いた状態で検出されている。C群は28～31で、平根系の鉄鏃のみで長頸鏃は出土していない。切先はB群と同様西を向いた状態で検出されている。人骨は頭位方向が東のものが2体(3・4号人骨)、西のものが1体(2号人骨)の計3体分が検出されているが、鉄鏃のグループとの対応は明らかでない。各グループ内での一括性は基本的に認めてよいだろうが、すべてのグループの間で一括性があるのか、または時期差があるのかは判断が難しい。そこでグループごとに鉄鏃の時期をみていくと、A群では長頸独立片腸袂鏃が時期を決めやすい。長頸独立片腸袂鏃は独立片腸袂部の形状や腸袂の深さ等が時期を反映しやすく〔関1991〕、本例では中期末、須恵器型式でいえばTK47型式段階を中心とした時期に位置付けられる。B群は平根系の圭頭鏃に鏃身関を有するものがあること、長頸片刃鏃の腸袂が浅くなりきっていないこと、重腸袂を有する短茎鏃が盛行するのは中期であることを考えると、中期後葉から後期初頭、須恵器型式でいえばTK23～MT15型式段階頃に収めていいだろう。C群は時期を絞り込む決め手に欠けるが、鏃身部に複雑な造作を施した鉄鏃が盛行するのは中期であること〔水野2003〕等を考え、A群やB群と同様の時期と想定しておきたい。

また16・17のような刃部関を有する圭頭鏃をはじめ多数の圭頭鏃とともに、1～3のような長頸柳葉鏃が出土している点は、第1屍床と同様に南九州の影響が認められる。

(三好 栄太郎)

(3) 刀子(図43, 図版14)

第2屍床から出土した刀子は3点であり、おおむね同一法量のものが2点とこれらより大型のものが1点ある。

1は、刀身と茎尻を一部欠損するが、ほぼ全形をうかがうことができる。全長11.7cm、刀身残存長7.5cm、

茎残存長 4.2cm である。刀身の刃と棟はほぼ直線で平行をなしており、切先はふくら付く。関および茎は、把に用いられた鹿角に覆われており確認できない。しかし、鹿角が一部剥離し、茎が露出している部分がある。この部分を観察すると、茎尻は欠失するもののその周囲に錆が付着していることから、茎の長さは 2.5cm 前後と思われる。先述の通り茎は鹿角に覆われており、その上端は刀身下部を呑んでいる。抜き身と思われる。出土状況を見ると、右側壁側の枕付近に配されており、切先は南(中央通路側)を向いている。

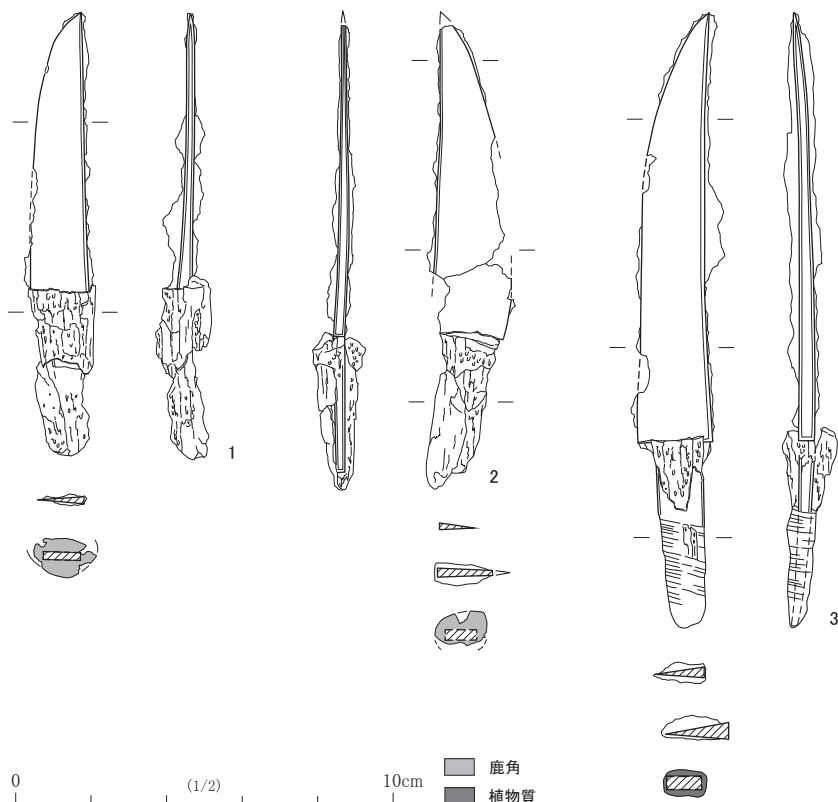


図 43 1号墓第2屍床出土刀子実測図

2は、刀身の一部を欠損するが、おおよそ全形をとらえられる。残存長 12.2cm、刀身残存長 8.1cm、

茎長 4.2cm である。刃部は枯れたふくらから大きくカーブを描き、棟部はほぼ直線にのびて関部へと至る。関は棟部側を欠失するが、残存状況から両関とみられる。刃部関は直角関である。茎は茎元から茎尻に向けてわずかに幅を減じ、茎尻は栗尻である。茎には樹皮巻きの痕跡がみられ、その上に鹿角製の把が遺存する。鹿角上端は茎元まで達している。刀身に有機物の付着はなく、抜き身と思われる。出土状況を確認すると、鉄鏃A群と同じまとまりに属していると思われる。また、切先はA群の鉄鏃と同様に東を向く。

3は、刃部をわずかに欠損するがほぼ完形で、全長 16.2cm、刀身長 11.3cm、茎長 4.9cm、刀身関部幅 2cm、茎幅 0.8～1.4cm である。刀身は関部に向かってわずかに幅広となる形状をなす。刃は枯れたふくらから直線的にのび、棟は刃側にわずかに彎曲し関部へ至る。関は両関で、いずれも直角関である。茎幅は茎元から茎尻に向かってわずかに減じ、茎尻は栗尻である。茎の下半部には樹皮巻きの痕跡が観察できるが、その幅や単位は不明瞭である。把には鹿角が用いられ、その上端は刀身下部をわずかに呑んでいる。刀身に有機物の付着はなく、抜き身である。出土状況を見ると、右側壁沿いに配された鉄刀に寄り添うように置かれている。切先は鉄刀と同様に西を向いている。

なお、刀子の時期的位置付けについては、3号墓第2屍床出土刀子の記述後に検討する。

(山元 瞭平)

(4) 玉類 (図 44, 図版 17- 3～6)

1～3号墓のうち玉類が出土したのは1号墓第2屍床のみである。管玉2点とガラス玉4点がある。ガラス玉のうち3点(図 44- 4～6)は、埋土の水洗作業による検出である。管玉2点(同1・2)は第2屍床玄関側に造り付けられた2つの枕のうちの左側、ガラス玉1点(同3)は右側の枕付近からの出土である。

①管玉 (図 44- 1・2)

出土した管玉2点は、いずれも碧玉製である。1は濃い深緑色を呈し、長さ 2.04cm、幅 0.69～0.70cm

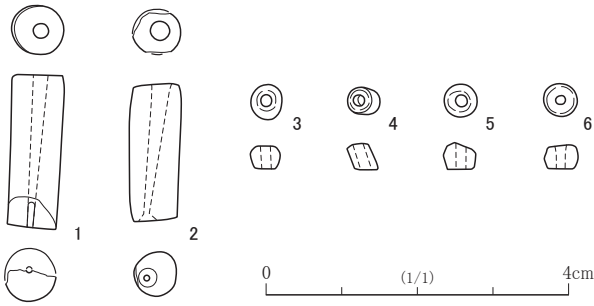


図44 1号墓第2屍床出土玉類実測図

の大きさである。孔は片面穿孔で、穿孔開始面の孔径は2.1mm、穿孔終了面では1.0mmである。穿孔終了面側の端面が一部欠失している。

2は青緑色を呈し、長さ1.80cm、幅0.65cmの大きさである。完形である。孔は片面穿孔で、穿孔開始面の孔径は2.4～2.5mm、穿孔終了面では1.0mmである。穿孔終了面の孔周囲は浅いすり鉢状に削られている。穿孔終了面では、孔は面の中心から大きく片寄った位置にある。

②ガラス玉 (図44-3～6)

3は出土位置が明らかなガラス玉で、黄緑色を呈す。直径4.0mm、高さ3.2mm、孔径1.5mmである。小口面は丸みを帯び、再加熱処理されたものと思われる。

4～6は埋土の水洗作業により検出されたもので、いずれも淡い青色を呈す。4は直径3.4mm、高さ3.6mm、孔径1.2～1.4mmである。縦方向が垂直からやや傾いており、小口面には小さな平坦面をもつ。再加熱後に押圧処理されたものと思われる。5は直径4.1～4.3mm、高さ3.5mm、孔径1.6mmである。小口面は丸みを帯びており、再加熱処理がなされたものと思われる。6は直径4.2mm、高さ3.0mm、孔径1.1～1.5mmである。孔は円形を呈さず、一方向から押しつぶされたような楕円形をなす。小口面は平坦である。再加熱後に押圧処理されたものと思われる。この個体は、4つのガラス玉のうちもっとも気泡が明瞭で、器面にも気泡によって形成された窪みが多数観察される。

(杉井 健)

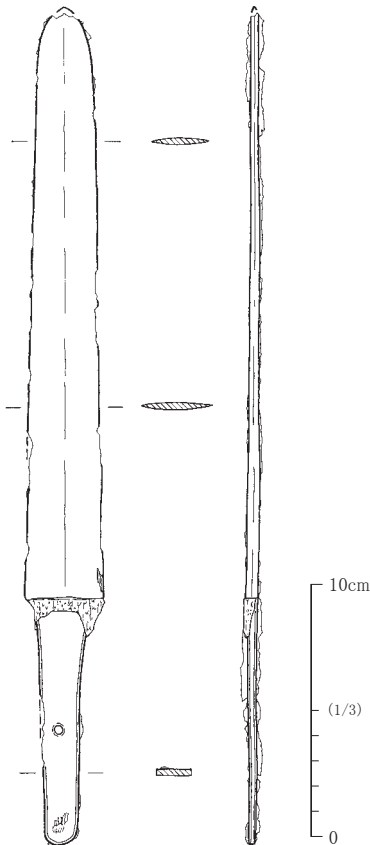


図45 1号墓出土位置不明鉄剣実測図

3 出土位置不明

(1) 鉄剣 (図45, 図版14)

1号墓の出土位置不明の鉄剣を1点図示している。切先をわずかに欠損しているが、完形に近い残存状態である。剣身部は残存長23.1cm、最大幅が関付近で3.1cmを測り、茎部は長さ9.8cm、最大幅が関付近にあり推定で2.2cmとなっている。厚さは身部の下半から関付近にかけてが最大となっており0.5cmを測る。

剣身長軸に平行な木質が剣身部、茎部ともにわずかに残存している。おそらく鞘や把に由来するものであろう。茎部の把縁付近には鹿角装具の痕跡が残存している。茎部には目釘孔が1箇所ある。

(三好 栄太郎)

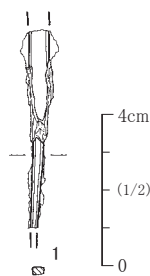


図46 1号墓出土位置不明鉄剣実測図

(2) 鉄鏃 (図46, 図版17-1)

1号墓出土鉄鏃で帰属する屍床が不明なものを1点図示している。茎部片で残存長が5.2cmであり、矢柄の木質が付着している。

(三好 栄太郎)

第2節 2号墓出土の遺物

1 第1屍床

(1) 鉄刀 (図版 24- 1- 1)

鉄刀は1号墓から1点、2号墓から2点、3号墓から1点出土している。それらのうち全長が1m前後の大刀は2・3号墓出土の計3点である。それら3点は現在、同じ木箱に収められているが、注記がなされていない。そのため出土位置の判別にやや困難がともなったが、発掘調査時撮影の出土状況写真との照合により出土位置を確定した。なお、3点とも銹化による器面剥離がかなり進行しているため、実測作業は行わず、佩表および佩裏の写真を撮影するにとどめた (図版 24- 1)。

さて、2号墓第1屍床の右側辺 (中央通路側) で出土した鉄刀は図版 24- 1- 1 である。全体に銹化が著しいが、器面は比較的よく遺存している。切先が欠失している。残存長 90.9 cm、刀身部残存長 70.6 cm、茎部長 20.3 cm、刀身部の幅は関付近で 4.0 cm、残存する先端付近で 3.5 cm、茎部の最大幅は関付近で 2.8 cm、全体における最大の厚さは刀身部下半で 0.9 cm である。出土状況図 (図 27) に描かれた姿を計測すれば、本来 105 cm ほどの長さを有していたと考えられるから、切先から 14 cm 程度が失われていることになる。出土状況図には、刀身部の切先付近に亀裂が表現されており、おそらくその亀裂箇所から先端が失われたのであろう。

刀身は断面三角形の平造りである。関は片関で、一部欠失するが切れ込み幅 1 cm 程度の直角関と判断できる。茎は茎尻に向かって幅を減じる先細茎、茎尻は隅抉尻である。このことから、白杵勲分類の直角片関隅抉尻先細茎タイプに分類できる [白杵 1984]。目釘孔は2箇所である。

佩表に、刀身長軸に平行する木目の木質がわずかに付着している。刀身部の関付近および茎部の目釘孔付近に比較的多く残存する。目釘の木質も遺存している。刀身部の木質の存在から、鞘に収めて副葬されたと推測できる。

(杉井 健)

(2) 鉄鏃 (図 47, 図版 19- 3)

第1屍床から出土した鉄鏃を6点図示している。1・2は長頸柳葉鏃である。鏃身部が圭頭状を呈するもので、1号墓第1屍床出土鉄鏃の1や2、同第2屍床出土鉄鏃の1や2に近い。

3・4は圭頭鏃である。3は細身であり1や2のような長頸柳葉鏃にも似るが、刃部関を有し切先が発達した鏃身部形態が、南九州で中期後半に発達する圭頭鏃にきわめて近い。4は平根系の圭頭鏃である。

5は平根系の腸抉柳葉鏃である。腸抉が弧を描きながら外側に開く特徴的な形態で、中期後半以降の南九州によくみられるものである [三好 2015]。1988年の実測図 (図 37- g) では切先まで残存しており、それによれば全長が 14.3 cm、鏃身長が 9.2 cm となっている。

6は重腸抉を有した短茎鏃である。鏃身部には根挟みの痕跡が残存しており、根挟みを挟むように2箇所の穿孔がある。穿孔の間には根挟みを糸状のもので巻いたような痕跡が残っている。

これらの鉄鏃は、出土状況をみるとすべてひとまとまりになって出土している (図 27, 28- 1)。第1屍床で検出された人骨は1体 (1号人骨) で、この人骨に対して鉄鏃の切先は足元の方、西を向いている。鉄鏃の一括性は高いと考えられるが、時期の決め手には欠ける。刃部関を有した圭頭鏃の切先の発達具合、そして茎関を有していることから中期後葉以降と考えられる。重腸抉を有した短茎鏃は中期に盛行していることや、4の圭頭鏃に茎関が認められない点、棘関が出現していない点を積極的にとらえれば、下っても後

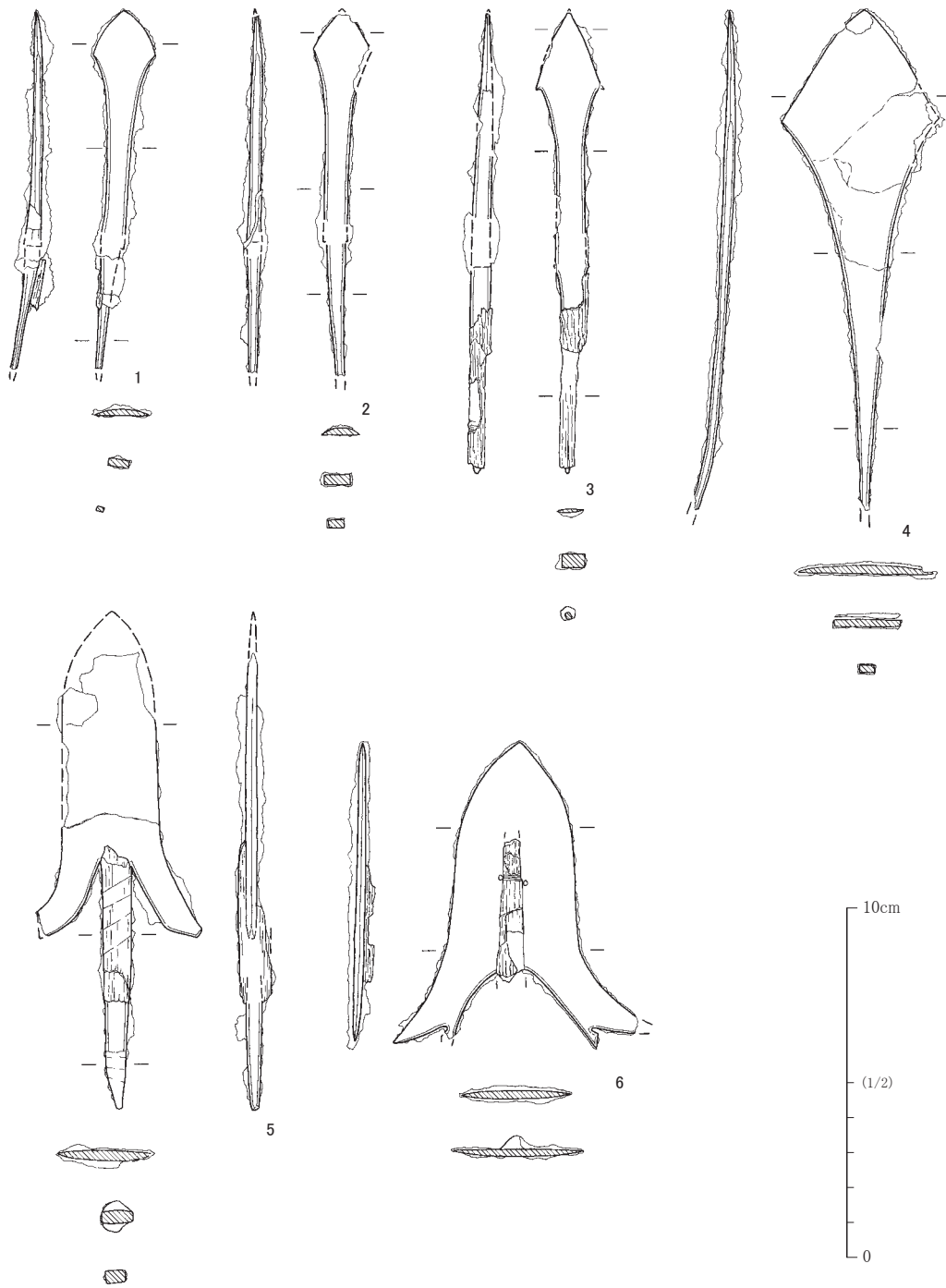


図47 2号墓第1屍床出土鉄鏃実測図

期前半までに位置付けられるだろう。須恵器型式でいえばTK 23～TK 10型式段階頃としておきたい。また、上述したように鉄鏃の組成には南九州的な様相が認められる。

(三好 栄太郎)

(3) 刀子 (図48, 図版19-2)

第1屍床から出土した刀子は1点のみである。これは切先部分の破片であり、残存長3.4cm、残存最大幅1.6cmを測る。棟側は直線的にのび、刃は枯れたふくらから直線的に垂下する。出土状況をみると、鉄鏃群と同一のまとまりに属していることがわかる。切先も鉄鏃と同様に西(1号人骨の足位方向)を向いている。

なお、刀子の時期的位置付けについては、3号墓第2屍床出土刀子の記述後に検討する。

(山元 瞭平)

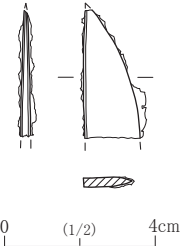


図48 2号墓第1屍床
出土刀子実測図

2 第2屍床

(1) 鉄刀 (図版24-1-2)

2号墓第2屍床の左端(中央通路際)で出土した鉄刀は図版24-1-2である。全体に錆化が著しいが、全体形状はよく残り、完存する。器面も比較的よく遺存している。全長104.3cm、刀身部長84.7cm、茎部長19.6cm、刀身部の幅は関付近で3.9cm、中央付近で3.6cm、切先付近で3.0~3.1cm、茎部の幅は関付近で3.3~3.4cm、斜めの切れ込み端で2.6~2.7cm、茎尻付近で2.0cm、全体における最大の厚さは刀身部下半で0.9cmである。

刀身は断面三角形の平造りである。ふくら付く切先である。関は片関で、関の形状は、一部欠損しているため不明瞭だが、切れ込み幅0.4cmほどの浅い直角関から斜めに切れ込むものと思われる。茎は先細茎、茎尻は隅抉尻である。関の形状に不明瞭な部分を残すが、臼杵勲分類の直角片関隅抉尻先細茎タイプに分類できると思われる〔臼杵1984〕。目釘孔は2箇所である。

刀身部および茎部ともに、刀身長軸に平行する木目の木質が若干付着している。目釘の木質も遺存する。刀身部の木質の存在から、鞘に収めて副葬されたと推測できる。関付近に残る木質の状況から、把縁は茎尻から19.0cmの位置にあると判断でき、それは関より若干茎部寄りである。茎の棟には把本体の木質がおよんでおらず、刀身長軸直交方向に繊維目が走る有機物が付着している。判然としないが、繊維製の紐である可能性がある。そうした紐状の繊維が茎の棟に直接乗っている様子から、把構造は落とし込み式B類〔豊島2010〕となる可能性が考えられる。

(杉井 健)

(2) 鉄鏃 (図49・50, 図版20)

第2屍床から出土した鉄鏃を20点図示している。出土状況から1~16のA群、17~20のB群の2つのまとまりに分けられる。後述する骨鏃もB群からの出土とみられる(図27, 28-2)。

1~11は長頸柳葉鏃である。鏃身関が1・2はナデ関、3・4は角関となっている。5~11は腸抉を有する。11は同じ袋に保管されていた折れた茎部も並べて図示しているが、1988年の実測図(図37-h)の茎部と異なっているようであり、今回図示している茎部が同一個体であるかどうかは不明である。これらの長頸鏃は腸抉がまだ確かなものもあるが、頸部が短小化しているものが認められる。

12は長頸段違い鏃である。鏃身部と段違い部は浅い腸抉になっている。

13~16は長頸片刃鏃である。鏃身部には腸抉があり、13はまだはっきりしているが全体的にやや浅い。16は1988年の実測図(図37-i)では茎部の下半を欠損している。

17・18はともに平根系の鉄鏃で、17は腸抉柳葉鏃、18は柳葉鏃である。ともに茎関を有している。

19・20は短茎鏃である。19には根挟みの木質がわずかに残存している。20には鏃身部の中央付近に2箇所の穿孔が対になるように左右に配置されている。根挟みを装着するためのものであろう。

第2屍床からは頭位方向が東の人骨が1体検出されており(2号人骨)、鉄鏃は2群とも切先を足元の方角である西に向けている。A群は1~16で長頸鏃のみ、B群の鉄鏃は17~20で平根系のみであるが、後述する骨鏃もB群に含まれるだろう。遺存しなかった人骨がある可能性を考慮する必要はあるが、鉄鏃が明

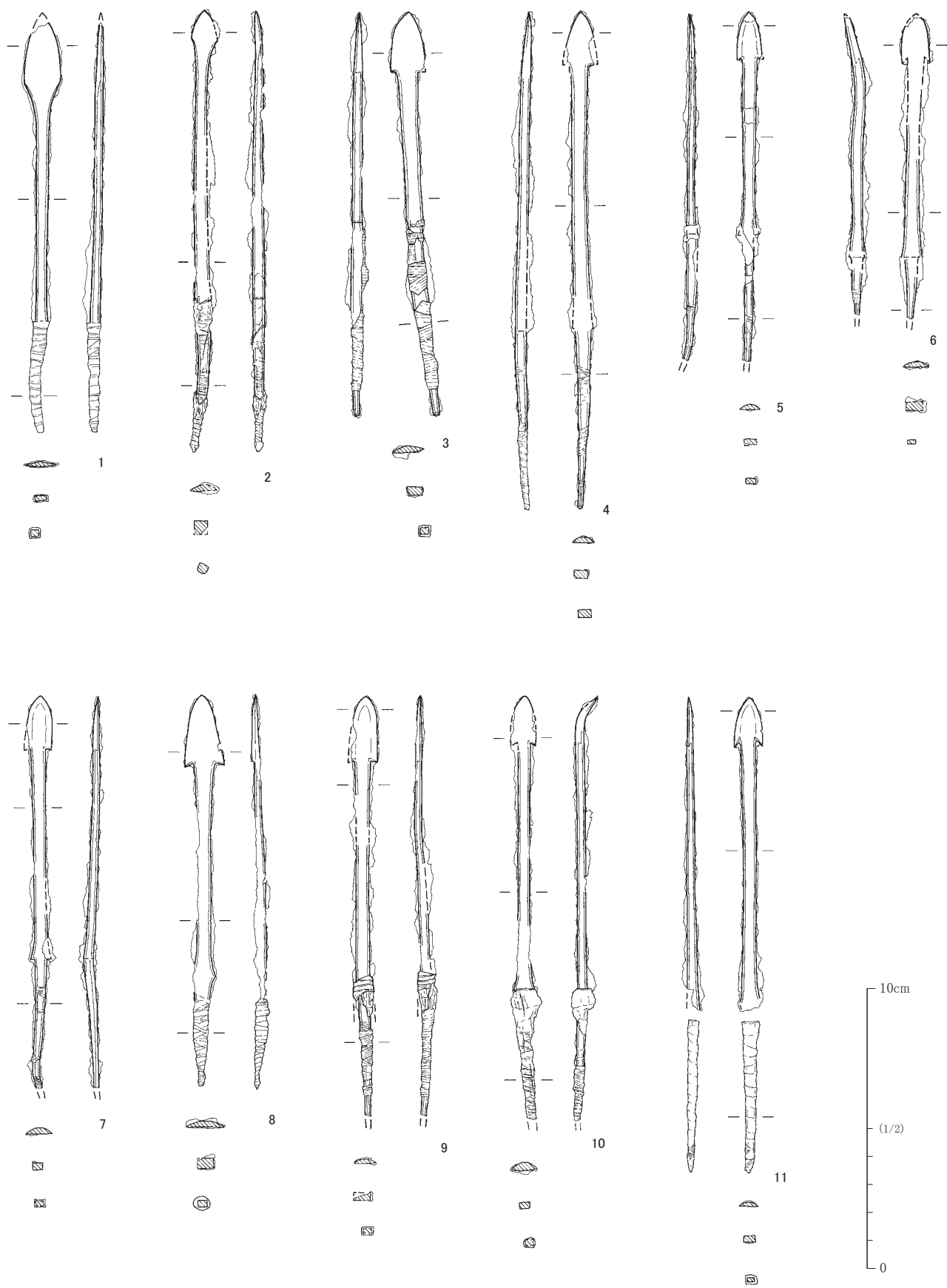


图49 2号墓第2屍床出土鉄鏃実測図

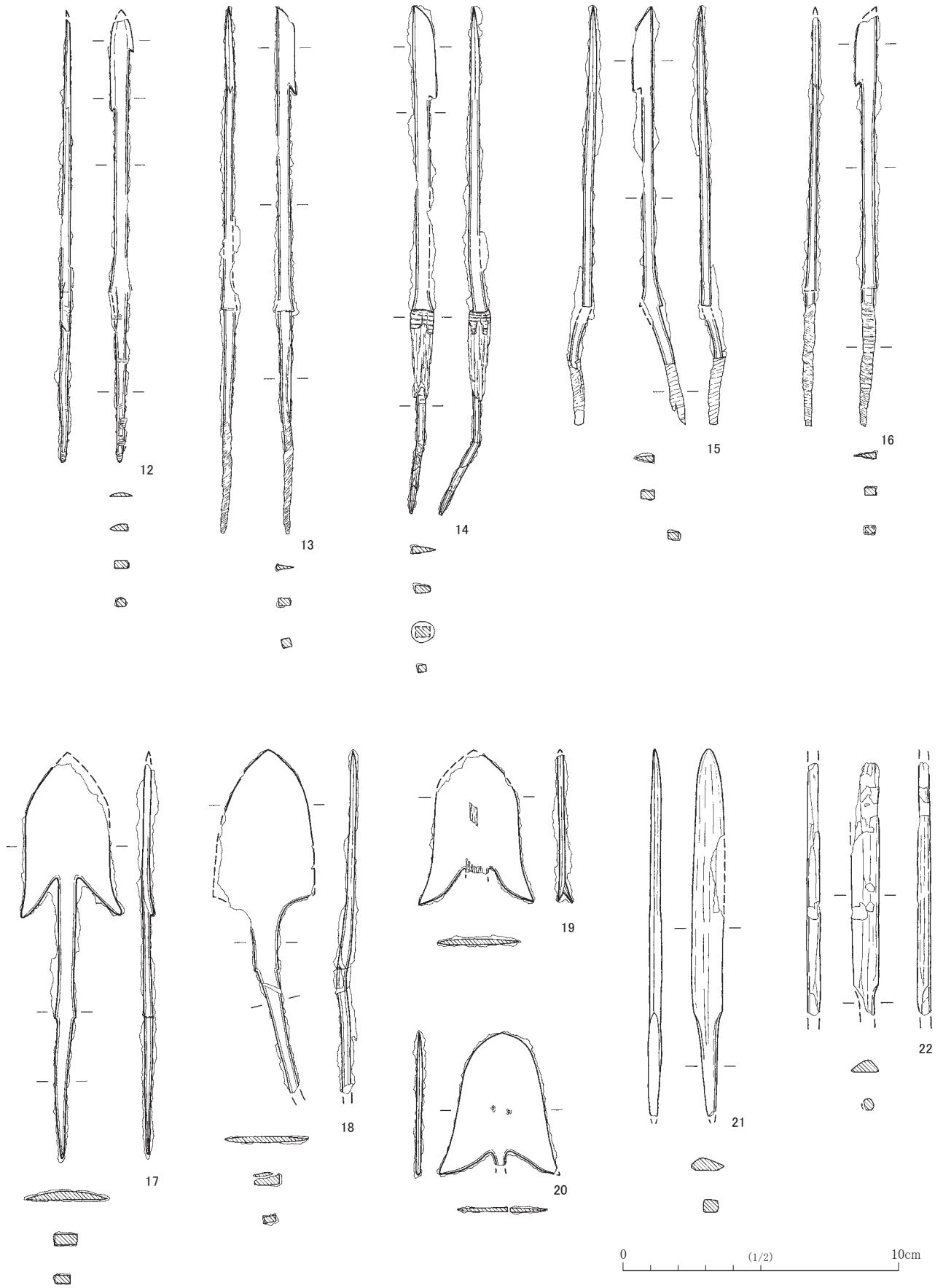


図50 2号墓第2屍床出土鉄鏃・骨鏃実測図 (21・22が骨鏃)

確に型式別に副葬されていることと検出された人骨が1体であることを重視すれば、同一の被葬者にもなう矢鏃が種類や性格別に副葬されたものである可能性は高いといえるだろう。鉄鏃の時期については、長頸段違い鏃の存在から後期と考えられるとともに、長頸独立片腸挟鏃が出土している1号墓第2屍床よりも後出的だととらえられる。茎関に棘関がないことや浅くともまだ腸挟がある点を見ると、須恵器型式のTK 43 型式段階以降には下らないと考えられるが、長頸鏃の頸部に認められる短小化傾向が後出的の要素だとすればTK 10 またはMT 85 型式段階に位置付けられるだろう。

(三好 栄太郎)

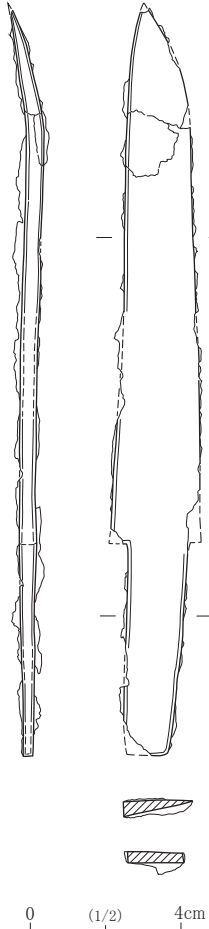


図51 2号墓第2屍床出土
刀子実測図

(3) 骨鏃 (図50, 図版20)

第2屍床からは骨鏃が出土している。21・22の2本で、出土位置からB群の鉄鏃と一緒に副葬されたと考えられる。22は切先を欠損しているが両方とも鏃身部は柳葉形を呈しているものとみられる。鏃身部の断面は、片丸造りに近い三角形状を基本としている。

なお、遺構の環境も考慮する必要があるが、地下式横穴墓でしばしば出土する骨鏃が存在する点には注意する必要がある。

(三好 栄太郎)

(4) 刀子 (図51, 図版19-2)

第2屍床から出土した刀子は1点のみである。刀身から茎にかけて一部欠損するが、おおよそ全形をとらえられる。残存長18.7cm、刀身残存長14.1cm、茎長4.6cm、茎幅1.1~1.6cmである。刀身は切先から関部に向かってわずかに幅広となる形態をなす。刃は枯れたふくらから直線的にのび、関部へと至る。棟は切先近くがやや膨らんだあと、直線的にのびる。関は刃部・棟部ともに欠失しているが、残存状況から両関と判断できる。茎は茎尻に向かって徐々に幅を減じる。茎尻は一文字尻である。刀身に有機物の付着はなく、抜き身である。出土状況を確認すると、鉄鏃群と同一のまとまりに含まれることが分かる。しかし、鉄鏃は切先が西を向いているのに対し、この刀子は南東を向いている。

なお、刀子の時期的位置付けについては、3号墓第2屍床出土刀子の記述後に検討する。

(山元 瞭平)

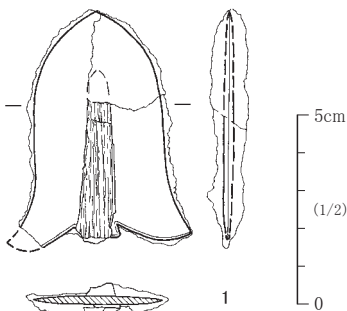


図52 2号墓中央通路出土
鉄鏃実測図

3 中央通路

(1) 鉄鏃 (図52, 図版19-3)

中央通路からは鉄鏃が1点出土している。短茎鏃で根挟みの痕跡が鏃身部の両面に残存している。時期の判断は難しい。

(三好 栄太郎)

(2) 馬具

①轡 (図53, 図版18)

2号墓の中央通路から鉄製の兵庫鎖立聞素環状鏡板付轡1点が出土している。鏡板、引手、銜のそれぞれ2点から構成され、引手と銜は鏡板の環に別々に独立して連結されている。なお、引手においては、鏡板と連結している環を引手内環、引手壺と連結している環を引手外環と呼称する。銜においては、銜同士を連結している環を銜内環、銜と鏡板を連結している環を銜外環と呼称する。

鏡板 (1・2) 1の鏡板は直径約7.9～8.3cmのやや縦長の円環で、厚さ約0.7cmである。4連の兵庫鎖が立聞として取り付けられており、その大きさは鏡板との連結部の1連目が高さ2.1cm、幅1.8cm、2連目が高さ2.5cm、幅1.5cm、3連目が高さ2.6cm、幅1.7cm、4連目が高さ3.2cm、幅2cmである。鏡板側面においては鍛接部が認められ(図版25-4)、一本の棒の両端付近を斜め方向に平坦にし、その平坦面同士を圧着させて円環を形成した様子がうかがえる。2は鏡板の約半分を欠損しており、兵庫鎖も四連目の一部を欠いている。鏡板は直径約8.1cmの円環と推定され、厚さ約0.7cmである。残存部では鍛接跡は確認できない。1と同様に4連の兵庫鎖の立聞が付き、その大きさは鏡板との連結部の1連目が高さ2.7cm、幅1.5cm、2連目が高さ2.5cm、幅1.6cm、3連目が高さ2.6cm、幅1.7cm、4連目が残存部の高さ2.3cm、幅推定2cmである。

引手 (3～6) 3の引手は残存長12.5cm、引手内環の径2.2cm、引手外環の径推定2.3cmで、柄に振りが施されており、1本の棒を振った1條振り〔諫早2005〕である。引手内環の断面において、片方(図の下方の断面)は円形を呈しているが、もう一方(図の上方の断面)は内側の孔に向かって傾斜のある形状を呈しており、使用による摩滅の可能性が考えられる。4は全長約13.5cm、引手内環の径1.9cm、引手外環の径1.9cmで、柄は1條振りである。3・4の引手外環に5・6の別造りの引手壺が付属している。引手壺は過半を欠損し、全体の大きさは不明であり、残存部から瓢形を呈すると推定されるものの、形状も明らかでない。なお、出土状況図(図27, 28-3)から引手同士が隣り合っていたことが確認できるため、6の引手壺に銹着している破片は、5の引手壺の一部であると判断できる。

銜 (7・8) 7・8のいずれの銜も銜内環が欠損している。7は残存長5.7cm、銜外環の径2.1cmである。柄は銹膨れをなし、欠損部も多いため、形状が明確でないが、振りが施されていることがわかる。8は残存長6.9cm、銜外環の径2cmである。柄は引手と同様に1條振りである。また、出土状況図(図27, 28-3)には7と8の銜内環同士が連結している様子が描かれており、二連銜であると判断できる。調査以後の今日までの年月のなかで、銜内環の周囲が失われたものと考えられる。

型式学的位置付け この轡は、鏡板が素環状鏡板で正円形に近いこと、複連兵庫鎖の立聞を繋ぐこと、別造りの引手壺を連結する一本柄引手であり、その柄には強い振りが施されていること(1條振り)、銜の柄も1條振りであり、その銜先の環の径は小さく、二連銜であること、鏡板の環に引手内環と銜外環が別々に独立して連結される引手・銜別連法であることなどの特徴をもつ。こうした点から、岡安光彦による分類の北山2号墳型に相当する。当型式は環状鏡板付轡の第I段階とされ、時期は後期前葉、MT15～TK10型式段階に位置付けられる〔岡安1984〕。

(田中 麻里子)

②辻金具 (図54, 表5, 図版19-1, 25-5・6)

中央通路から5点の辻金具が出土した。辻金具はいずれも4脚で鉢部は半球形を呈するが、脚部の鋳数が異なり、1つのものと2つのものに大別できる。なお、各資料の脚部の個々を指し示す場合は、図示した位置における上下左右で表す。

1は、4脚の辻金具であるが3脚を欠失する。残存幅3.2cm、残存長3.1cm、鉢部高0.7cmである。鉢部は、

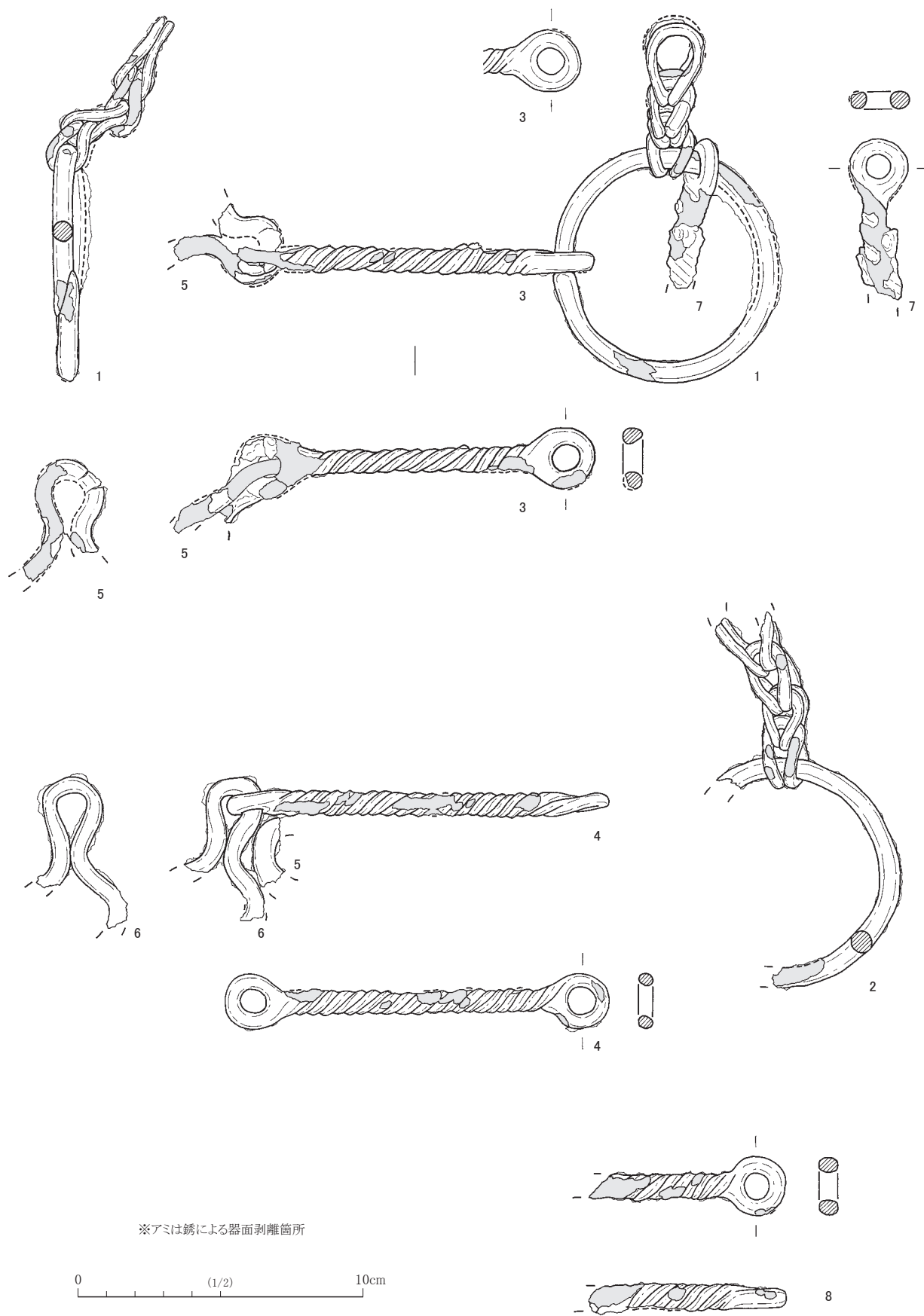


図 53 2号墓中央通路出土轡実測図

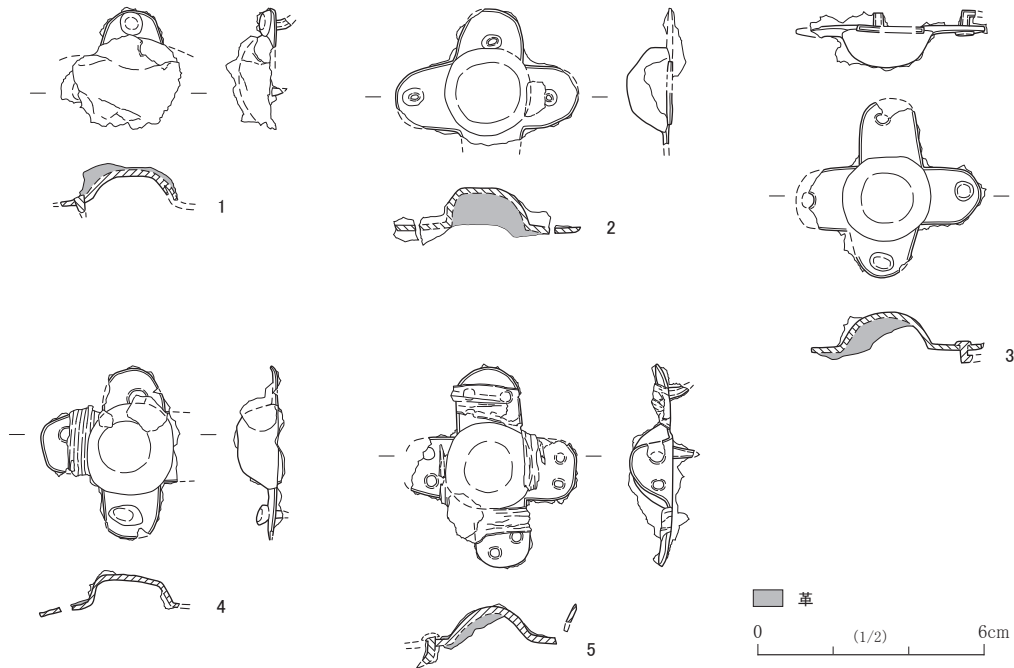


図 54 2号墓中央通路出土辻金具実測図

ややつぶれた半球形を呈する。脚部は半円形をなし、その中心に鉾が1箇所打たれている。鉾頭は円形で、径0.6cm、高さ0.3cmである。鉾脚は先端を欠損するが、中央付近から外側へと折り曲げられている。鉢部外面には革紐とみられる有機物の付着が確認できる。本来鉢部外面に革紐は装着されないことから、副葬時、繫が折り重なった際に付着したものと考えられる。

2は、4脚の辻金具であるが1脚を欠損する。残存幅4.8cm、残存長3.6cm、鉢部径2.3cm、鉢部高1.1cmである。鉢部は半球形を呈し、頂部はややつぶれて平坦気味となる。脚部はすべて半円形で、鉾はいずれも欠失する。しかし、鉾を設ける部分に穿孔が1箇所ずつ確認できるため、各1鉾であったと判断できる。鉢部の内面には革紐とみられる有機物が付着している(図版25-6)。

3は、4脚の辻金具であり、残存幅4.6cm、残存長4.6cmである。鉢部は半球状を呈し、径2.3cm、高さ1cmである。脚部はすべて半円形で、鉾はいずれも1箇所に打たれる。鉾頭は円形もしくは楕円形で、径0.5~0.6cm、高さ0.1cmである。鉾脚は中央部分で外向きに折り曲げられている。なお、鉢部内面には革紐の付着が確認できる。

4は、4脚の辻金具であるが1脚を欠損する。残存幅3.7cm、長さ4.6cmである。鉢部は半球形をなし、頂部がややつぶれて平坦気味となる。鉢部径は2.3cm、高さ0.7cmを測る。脚部は半円形をなし、鉾は1箇所に打たれる。鉾頭はいびつな楕円形で、幅0.9cm、長さ0.6cm、高さ0.3cmである。なお、左側脚部の外面には革紐を巻いた痕跡が確認できる。この革紐は、後述の5と同様に責金具のような役割を果たしたものの

表 5 2号墓中央通路出土辻金具各部位の形状・計測値

番号	長さ	幅	鉢部			脚部			付着物	
			形状	径	高さ	形状	脚数	鉾数	鉢部	脚部
1	(3.1)	(3.2)	半球	—	0.7	半円	4	1	革紐(外面)	
2	(3.6)	(4.8)	半球	2.3	1.1	半円	4	1	革紐(内面)	
3	(4.6)	(4.6)	半球	2.3	1.0	半円	4	1	革紐(内面)	
4	4.6	(3.7)	半球	2.3	0.7	半円	4	1		革紐(外面)
5	5.3	(4.3)	半球	2.3	1.0	半円	4	2	革紐(内面)	革紐(外面)

※ () は現存値を示す。単位はcm。

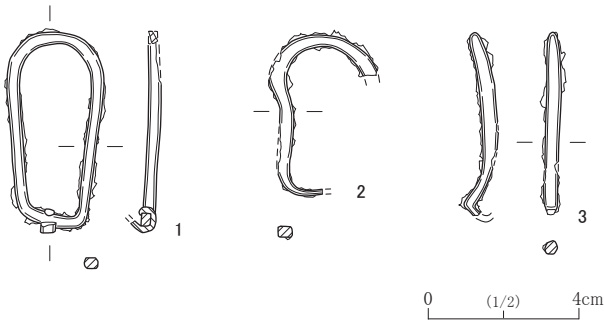


図55 2号墓中央通路出土鉸具実測図

と推測できる。

5は、4脚の辻金具であり、脚部をわずかに欠損するが全体をうかがうことができる。残存幅4.3cm、長さ5.3cmである。鉢部は半球形を呈し、径2.3cm、高さ1.0cmを測る。脚部はすべて半円形で、鉸はいずれも2箇所被打れる。鉸頭は欠失しており確認できないが、鉸脚は中央付近で外向きに折り曲げられている。すべての脚部に革紐を巻いた痕跡が確認できるが(図版25-5)、これは繫に装着する際、責

金具と同等の役割を果たしたものと判断できる。

以上5点の辻金具の出土状況を見ると(図27, 28-3)、轡や鉸具とともに中央通路のなかほどでまとまって出土していることから、馬具一式が副葬されたと考えられる。また、辻金具の5点という数量から、面繫だけの馬装と推定できる。この想定をもとに装着案を示すと、まず頬革と鼻革の交差部に各1点ずつ、さらに頬革と額革の交差部に各1点ずつ配置されたとみられる。残りの1点は額革の中央に装着されたと考えるのが適当といえるだろう。

(山元 瞭平)

③鉸具(図55, 図版19-1)

中央通路から鉸具を構成する輪金2点、刺金1点が出土した。1は第1屍床と書かれたラベルとともに保管されていたが、調査時に作成された出土状況図と比較したところ、その形状から中央通路右側辺中央に図示されたものであると判断できる(図27, 28-3)。2は出土状況図に示されていないが、図版9-2の写真右側に写っている鉸具と破損状態が同じであるので、それと同定できる。図示から漏れたのであろう。なお、2と3はセットで保管されていたことから同一個体の可能性が高く、鉸具の最小個体数は2点となる。この場合、咽喉革および項革にそれぞれ1点ずつ装着されたものと推定できる。

1は、刺金が別づくりのもので、輪金の長さは5.3cm、最大幅2.5cmである。鉄棒を折り曲げて鉸具の形状に成形したものであると思われるが、接合部分は不明である。鉄棒の断面形は四角形を呈する。なお、輪金の基部(実測図の下部)には刺金の一部が残存しており、基部に巻き付けるように装着されたことが分かる。

2は、刺金が別づくりのもので、輪金は3分の1程度欠損する。輪金の長さは4.2cm、残存最大幅は2.9cmである。側面は内側にややくびれた後、基部に向かって次第に細くなる。鉄棒の断面は四角形を呈する。

3は刺金であり、2とともに保管されていることから同一個体となる可能性が高い。長さは4.8cmで、鉄棒の断面形は円形をなす。側面からみると、やや彎曲していることが分かる。下端部(実測図の下部)は折り曲げられており、1と同様に輪金に巻き付けるようにして装着されたことが分かる。

(山元 瞭平)

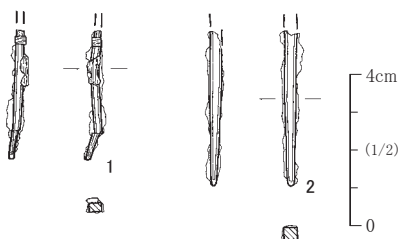


図56 2号墓出土位置不明鉄鏃実測図

4 出土位置不明

(1) 鉄鏃(図56, 図版19-3)

2号墓の出土位置不明の鉄鏃として、茎部片を2点図示している。鉄鏃型式や時期の判断は難しい。

(三好 栄太郎)

(2) 刀子 (図57, 図版19-2)

2号墓出土とされるが、出土位置が不明な刀子が1点存在する。これは刀身の一部を欠損するが、全形をうかがうことができ、残存長9.7cm、刀身残存長6.5cm、茎長3.2cm、茎幅0.7～1.0cmを測る。刀身は切先から関部に向かって徐々に幅広となる形態を呈する。刃は切先付近を残し大部分が欠損しているが、枯れたふくらから直線的にのび、関部へ至ると思われる。棟は切先から中央付近にかけてわずかに膨らんだあと、関部に向かって外側へゆるやかに開く。関は両関で段違いに設けられており、いずれも直角関である。茎は茎元から茎尻にかけて徐々に幅を減じる。茎尻は一文字尻である。茎には鹿角製の把が遺存しており、把縁端の位置は関部に一致する。刀身に有機物の付着はなく、抜き身である。

なお、刀子の時期的位置付けについては、3号墓第2屍床出土刀子の記述後に検討する。

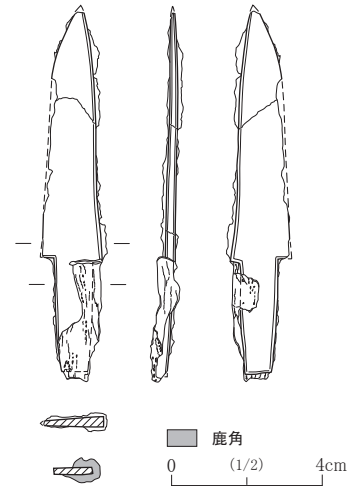


図57 2号墓出土位置不明刀子実測図

(山元 瞭平)

第3節 3号墓出土の遺物

1 第1屍床

(1) 鉄刀 (図版24-1-3)

3号墓第1屍床の左側辺で出土した鉄刀は図版24-1-3である。全体に錆化が著しく、器面の多くが失われている。切先先端部や関部が欠失し、刃部もその多くが欠損している。茎部の遺存状態も不良である。残存長98.1cm、関の位置が判然としないので明確ではないが、刀身部長は78.5cm程度、茎部長は19.6cm程度、刀身部の幅は関付近で3.1cm、中央付近で3.0cm、切先付近で2.5cmほど、茎部の幅は関付近で2.3cm、茎尻付近で1.4cm、全体における最大の厚さは刀身部下半で0.8cmである。

刀身は断面三角形の平造りである。切先は先端を欠失するが、ふくら枯れると思われる。関は片関で、関の形状は欠損しているため定かでないが、撫角関の可能性はある。茎は細茎、茎尻は隅抉尻である。関の形状が不明確だが、臼杵勲分類の撫角片関隅抉尻細茎タイプとなる可能性がある [臼杵1984]。目釘孔は2箇所である。

刀身部および茎部ともに、刀身長軸に平行する木目の木質がわずかに付着している。目釘の木質も遺存する。刀身部の木質の存在から、鞘に収めて副葬されたと推測できる。

(杉井 健)

(2) 鉄鏃 (図58・59, 図版22-1)

第1屍床から出土した鉄鏃として鏃身部を含む個体を17点、頸部以下の個体を3点図示している。出土状況から1～17のA群、18～20のB群の2つのまとまりに分けられる (図32, 33-1)。

1・2は短頸柳葉鏃である。鏃身部が比較的長く、鏃身関はナゲ関であるが変化点不明瞭である。3は鏃身部の形状が錆化のため不明瞭だが、1や2、もしくは後述する4と似た形状になるのであろう。

4～14は長頸柳葉鏃である。4～6は鏃身部が圭頭状のものである。長頸鏃というには頸部が短い印象だが、1号墓出土例でみたように長頸鏃としている。7～10は鏃身部の形状が三角形に近い。7～9は鏃

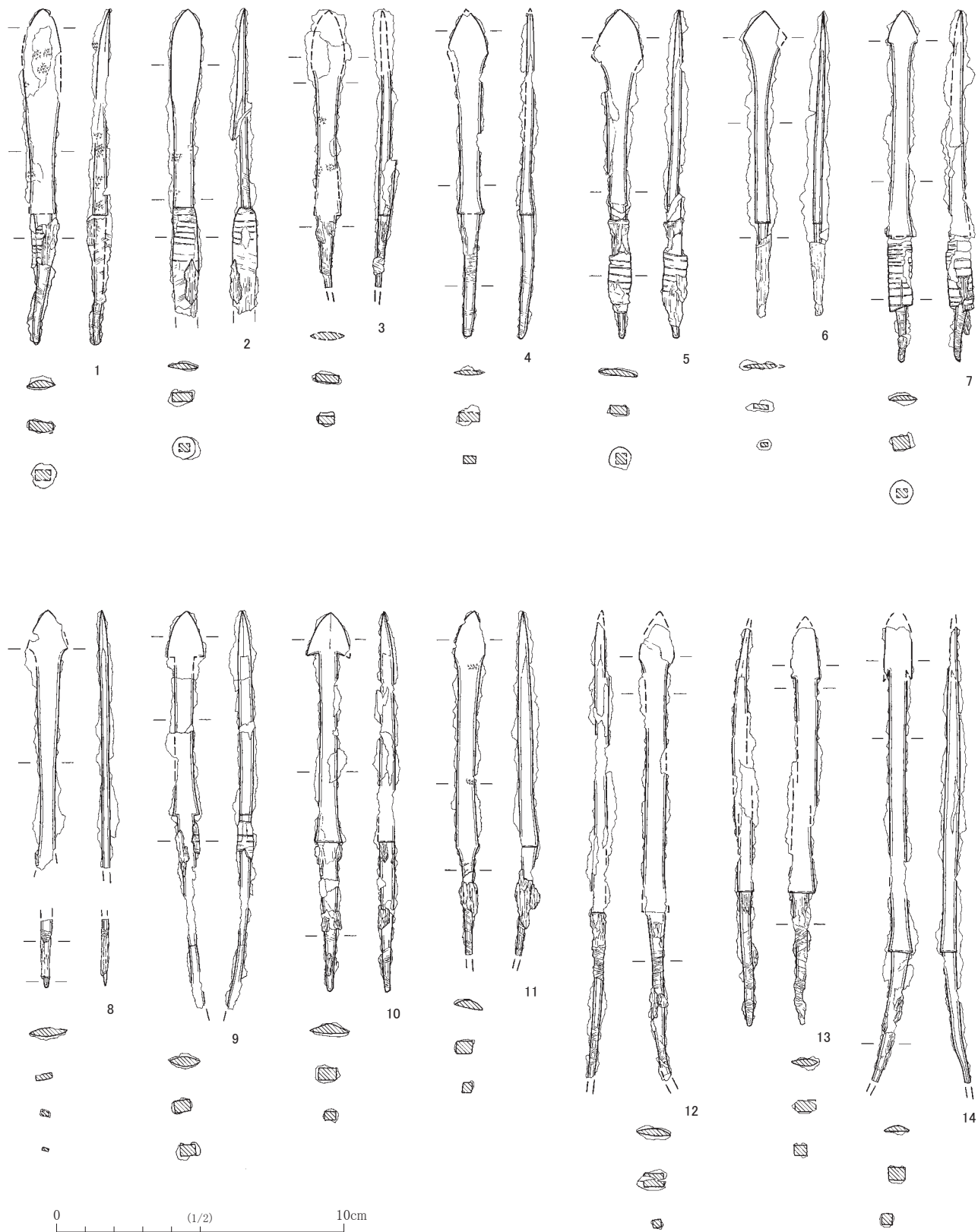


图 58 3号墓第1 屍床出土鉄鏃実測図(1)

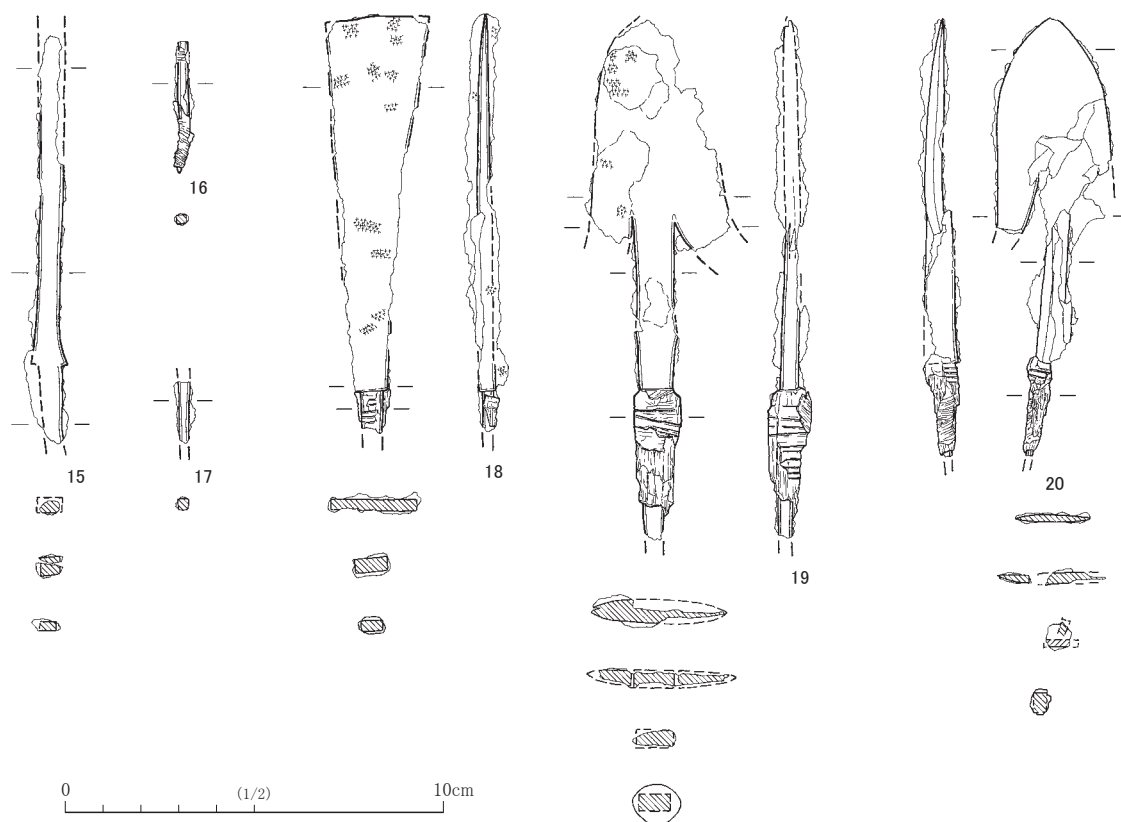


図59 3号墓第1屍床出土鉄鏃実測図(2)

身関が角関であると判断しているが、10は浅い腸袂を有している。8は頸部の上位から中位にかけて幅を減じ、茎関に向かってまた幅が広くなるという特徴を明確に有している。一概にはいえないが、これは1号墓第2屍床出土鉄鏃の3のように、圭頭鏃と長頸鏃が融合したような型式の鉄鏃にしばしばみられるものである。また、8は1988年の実測図(図37-j)では茎部まで完存しており、それによれば鏃身部から頸関までの長さが7.1cm、全長が12.0cmとなっている。9は茎部が長すぎるように感じるが、1988年の実測図(図37-k)では茎部の下方がない。割れを表現している接合部分以下は別個体のものが接合された可能性がある。11～14は鏃身部が柳葉形を呈している。鏃身関は11・12がナデ関で13は角関であろうか。14は腸袂を有すると判断している。ただし、11～13はいずれの鏃身関も退化傾向にあり判別しにくい。

15～17は頸部以下の破片である。15は長頸鏃と思われる。

18は平根系の方頭鏃である。茎関を有する。1988年の実測図(図37-1)では茎部まで完存しており、全長は17.9cmとなっている。

19・20は平根系の腸袂柳葉鏃である。19は腸袂の大部分を欠損しているが、曲線的に外側に開く南九州に特徴的な形態であると思われる。茎関より1cm強上には、突出度が非常に弱い山形突起が作り出されている。1988年の実測図(図37-m)では切先が残存しており、それによれば切先から茎関までの長さは10.2cmになる。20は鏃身部と頸部の接合の際に、位置と向きにずれが生じている(図37-n)。形状が分かりにくいだが、19と同様南九州系の腸袂柳葉鏃であろう。

上述したように第1屍床の鉄鏃はA群、B群の2群に分けられ、鉄刀を挟むように検出されている。A群は1～17で長頸鏃や短頸鏃のみが、B群は18～20で平根系鉄鏃のみが含まれており、両者で様相が明確に異なる。被葬者の数や頭位の方向は不明であるが、鉄鏃は2群とも西に切先を向けた状態で出土している。2号墓第2屍床のように同一被葬者にとまなうものと考えられる余地もあるが、人骨が残存していないため

検証は難しい。時期についてA群からみていくと、鏃身部が長い柳葉形を呈した短頸鏃が出現していることを1号墓や2号墓と比べて後出的な様相と評価したい。九州では後期の短頸鏃がしばしば確認でき、熊本市の打越稲荷山古墳ではTK 43 型式段階という時期的位置付けが与えられている〔宮代・林田・美濃口 2014〕。また全体的に長頸鏃の頸部に短小化の傾向がみられる点や、11～13では鏃身関が退化している点も後出的な様相ととらえられるだろう。本例では棘関が認められないことからTK 43 型式段階に位置付けてよいかは疑念が残るが、MT 85 型式段階を中心にTK 43 型式段階までの時期を想定しておきたい。B群は根拠に乏しいが、方頭鏃に鏃身関があることや腸袂柳葉鏃の山形突起が非常に退化したものであることから後期と考えてよいのではないかと。明らかにTK 43 型式段階以降に下る要素や形態変化は認めたいが、A群と同時期であってもおかしくはないと思われる。

また、4～6のような長頸柳葉鏃や19・20のような腸袂柳葉鏃は南九州の鉄鏃の影響を感じさせる。

(三好 栄太郎)

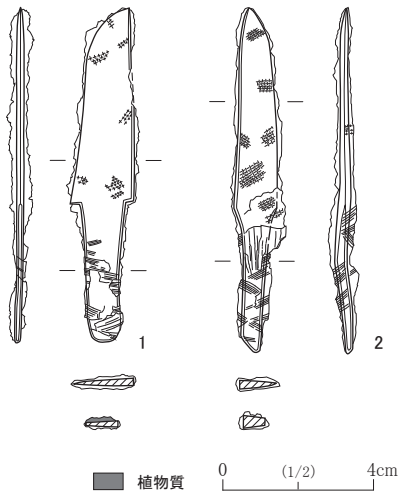


図60 3号墓第1 屍床出土刀子実測図

(3) 刀子 (図60, 図版21-1)

第1 屍床からはおおむね同一法量の刀子が2点出土している。

1は、刀身棟部分がわずかに欠損するのみで、完形に近い。全長8.8cm、刀身長5.1cm、茎長3.7cm、刀身関部幅1.8cm、茎幅0.7～1.2cmである。刀身は切先から徐々に幅広となる形態をなす。刃はふくら付く切先からゆるやかに外反りし、関部へ至る。棟はほぼ直線的にのびる。関は両関で、直角関である。茎は茎元から茎尻に向かってわずかに幅を減じる。茎尻は栗尻である。茎の断面形をみると、棟側に比べて刃側の方が薄くなっている。茎には幅3mm程度の樹皮が巻かれた痕跡がみられる。刀身の両面に繊維が付着していることから、刀身は繊維にくるまれていた可能性がある。出土状況を見ると、屍床中央のやや東寄りに独立して配置されている。切先は東を向いている。

2は完形で、全長9.1cm、刀身長5.3cm、茎長3.8cm、刀身関部幅1.1cm、茎幅0.6～1.1cmである。刀身は切先から関部に向かってわずかに幅広となる。刃は枯れたふくらからゆるやかに曲線を描き、関部へ達する。棟は切先がやや膨らんだ後、直線的にのびる。関は両関で、いずれもナデ関である。ナデ関は高塚横穴群出土刀子でこれが唯一である。茎は関に沿うかたちで茎元から徐々に幅を減じる。茎尻は刃側から棟側へと斜め上がりになるもので、刃部側が突出した形態をとる。棟上栗尻と呼称すべきような形状である。また茎の断面形をみると、棟側に比べて刃側の方が薄くなっている。茎には糸巻きの痕跡がみられ、一部に鹿角製の把が遺存している。把縁端の位置は関部よりも下部にある。刀身の両面に繊維が付着していることから、刀

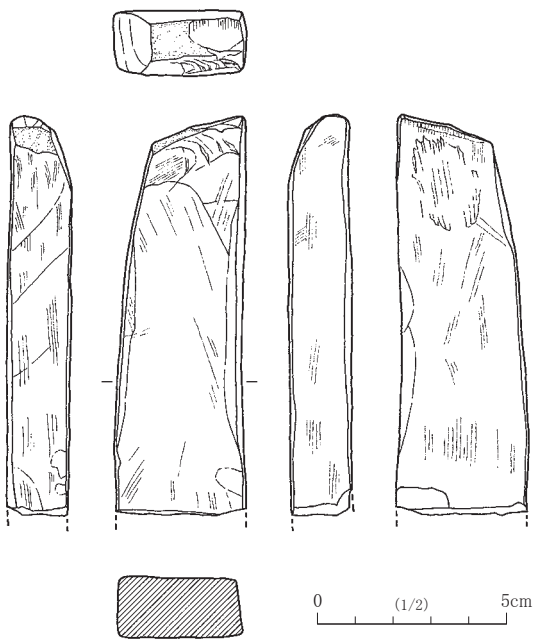


図61 3号墓第1 屍床出土砥石実測図

身が繊維にくるまれていた可能性がある。出土状況を確認すると、鉄鏃群からやや北に離れた位置に独立して存在する。切先は北東（中央通路側）を向いている。

なお、刀子の時期的位置付けについては、次の第2屍床出土刀子の記述後に検討する。

(山元 瞭平)

(4) 砥石 (図61, 図版21-3)

3号墓第1屍床左側壁沿いの前壁寄り出土した砥石である。一端が欠失している。残存長10.5cm、最大幅3.5cm、厚さ1.6cmである。欠失部を下方とした場合、上方に向かって少しずつ幅を減じている。厚さはほぼ一定である。欠失面以外の5面は非常に平滑で、よく使い込まれている様子がうかがえる。石材はきわめて堅硬な溶結凝灰岩である。

(杉井 健)

(5) 鉄釧 (図62, 図版21-2, 25-7・8)

3号墓第1屍床の北西隅、すなわち奥壁沿いの中央通路際で出土した鉄釧である。2点存在する。いずれも断面円形の鉄棒を曲げることによって主環が形成されている。

1は4片に分割している。それぞれの破片は明確に接合しないが、ほぼ釧の全周が遺存していると思われる。主環をなす鉄棒の直径はおよそ3mmである。1-aの破片には、鉄棒の端部どうしを重複させて固定した箇所が観察できる(図版25-7)。鉄棒両端の重複長は約1cmで、その部分にごく細い糸を幾重にも巻き付けることによって固定され、主環の円周が形成されている。糸の巻幅は約0.9cmである。厳密に計測できないが糸の太さは0.3~0.4mm程で、一部にゆるやかなS撚りがみられる箇所もあるが、総じて撚りは明確でない。絹糸の可能性があるだろう。鉄棒の両端は、先端に向かって徐々に細くなり、丸みをもって収められている。なお、復元される釧の直径は6cm程度である。

2の主環をなす鉄棒も4片に分割している。それぞれが明確には接合せず、また釧の全周をなすにはやや長さが足りないため、主環の一部は失われていると思われる。1でみら

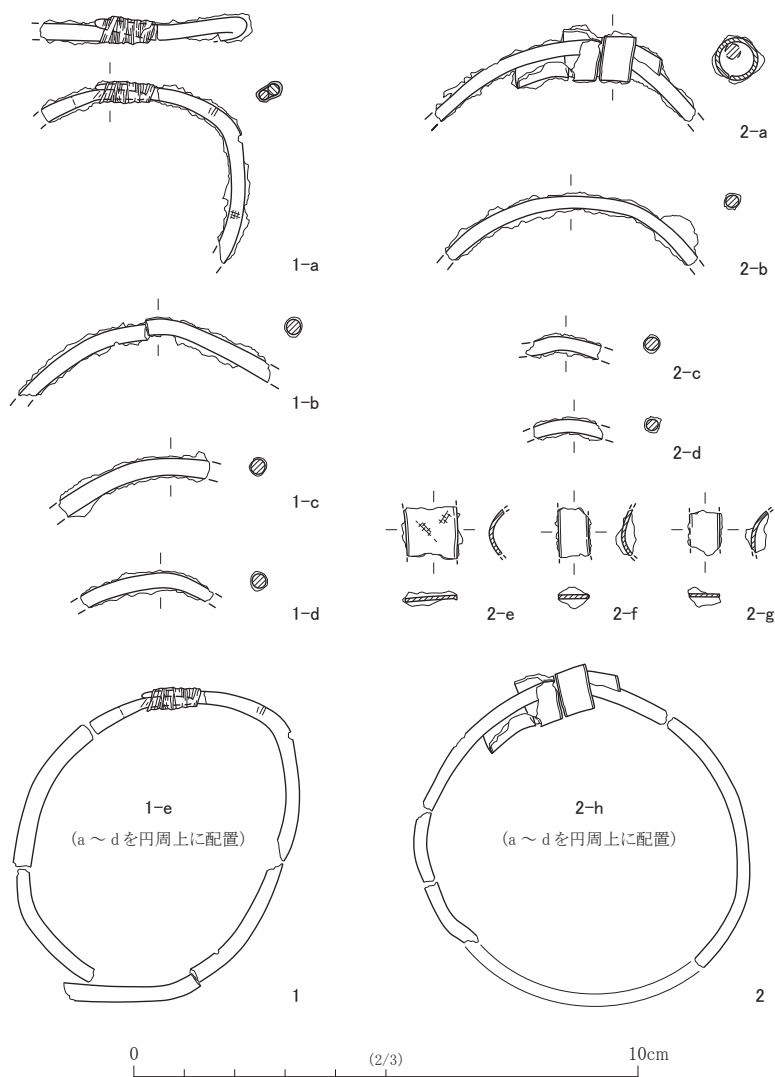


図62 3号墓第1屍床出土鉄釧実測図

れたような鉄棒の固定箇所は観察できない。鉄棒の直径はおよそ3mmである。特徴的なのは、2-aの破片にみられるように、主環に小環が付属することである(図版25-8)。小環は薄い鉄板を曲げることによって形成される。小環をなす鉄板には幅約1cmの幅広のもの(2-e)と、幅約0.6cmの幅狭のもの(2-f・g)の2種類がある。現状では幅広の小環が1個、幅狭の小環が3個取り付けられているように観察できる。小環の直径は0.8cm程である。なお、復元される釧の直径は6~6.5cm程度である。ところで、渡辺みどりによる集成を参照すれば、小環付釧は西日本で比較的多く出土しているようである[渡辺1998]。ただし、主環をなす鉄棒の断面形が円形であるものに限ると事例はそれほど多くないと思われる。類例として福岡市博多遺跡群祇園町工区出土例[福岡市埋蔵文化財センター2009]や宮崎県高千穂町吾平原北横穴群6号墓出土例[緒方編2006]、同県都城市築池地下式横穴群2号墓出土例[岩永・田ノ上1978]、銅釧だが和歌山県御坊市岩内3号墳出土例[岩井編2014]等をあげることができる。

(杉井 健)

2 第2屍床

(1) 鉄鏃(図63・64, 図版23)

第2屍床から出土した鉄鏃は鏃身部を含む個体を22点、茎部片を1点図示している。出土状況から1~21のA群、22・23のB群の2つのまとまりに分けられる(図32, 33-2)。

1は鏃身関付近の形状が不明であるが、長頸柳葉鏃になると思われる。鏃身部が頸部の途中に接合されている。2~13は長頸柳葉鏃である。2は腸袂を有し、3~11は鏃身関が角関、12・13はナデ関と判断しているが、10・11は関が退化しており判別しにくい。また10・11は頸部の形状が中位で幅狭くなっているようにみえる。7と13の鏃身部には接合のずれがあり、13には別個体の鏃身部も接合されている。10・11・13を除いて全体的に頸部がやや短い印象を受ける。

14~20は長頸段違い鏃で、鏃身関が14~16はナデ関、17~19は角関、20は腸袂になっている。14・15の鏃身関には退化傾向が認められる。段違い部には非常に浅いものもあるがすべて腸袂を有している。また、2号墓第2屍床出土鉄鏃の12と比べれば明瞭であるが、全体的に頸部幅がやや広がっている印象を受ける。頸部の長さは比較的個体差が少ないが、17は段違い部の長さが他に比べて短い。

21は茎部片である。鏃身部等の形状は分からない。

22・23は平根系の腸袂柳葉鏃である。ともに腸袂が曲線気味に外に開く南九州に多い鏃身部形態で、退化傾向のある弱い山形突起を有している。

これら第2屍床の鉄鏃は2群に分かれて出土しており、A群は1~21で切先を東に向け、B群は22・23で切先をA群とは逆の西に向けている。A群には長頸鏃のみ、B群には平根系鉄鏃のみが含まれ、第1屍床と同様、両者で明確に様相が異なる。人骨が検出されていないため被葬者数や頭位方向は不明であるが、枕が東側(前壁側)に造り付けられている点は注意される。時期についてみると、A群は長頸段違い鏃の存在から後期と考えられ、棘関がみられない点がTK43型式段階までは下らせにくい要素であるが、長頸鏃の頸部が短い点や鏃身関に退化傾向がみられる点は時期が下る様相ととらえていいだろう。また長頸段違い鏃の頸部幅が広がっていることは2号墓第2屍床よりも後出的な要素と考えられる。これらのことからA群の鉄鏃についてはMT85型式段階を中心にTK43型式段階までの時期を考えておきたい。B群は根拠に乏しいが、第1屍床と同様に山形突起の退化傾向と鏃身部形態からはA群と同時期としても問題はないと思われる。また、他の屍床と同様、22・23のような南九州に多い鉄鏃が含まれている点も注目できる。

(三好 栄太郎)

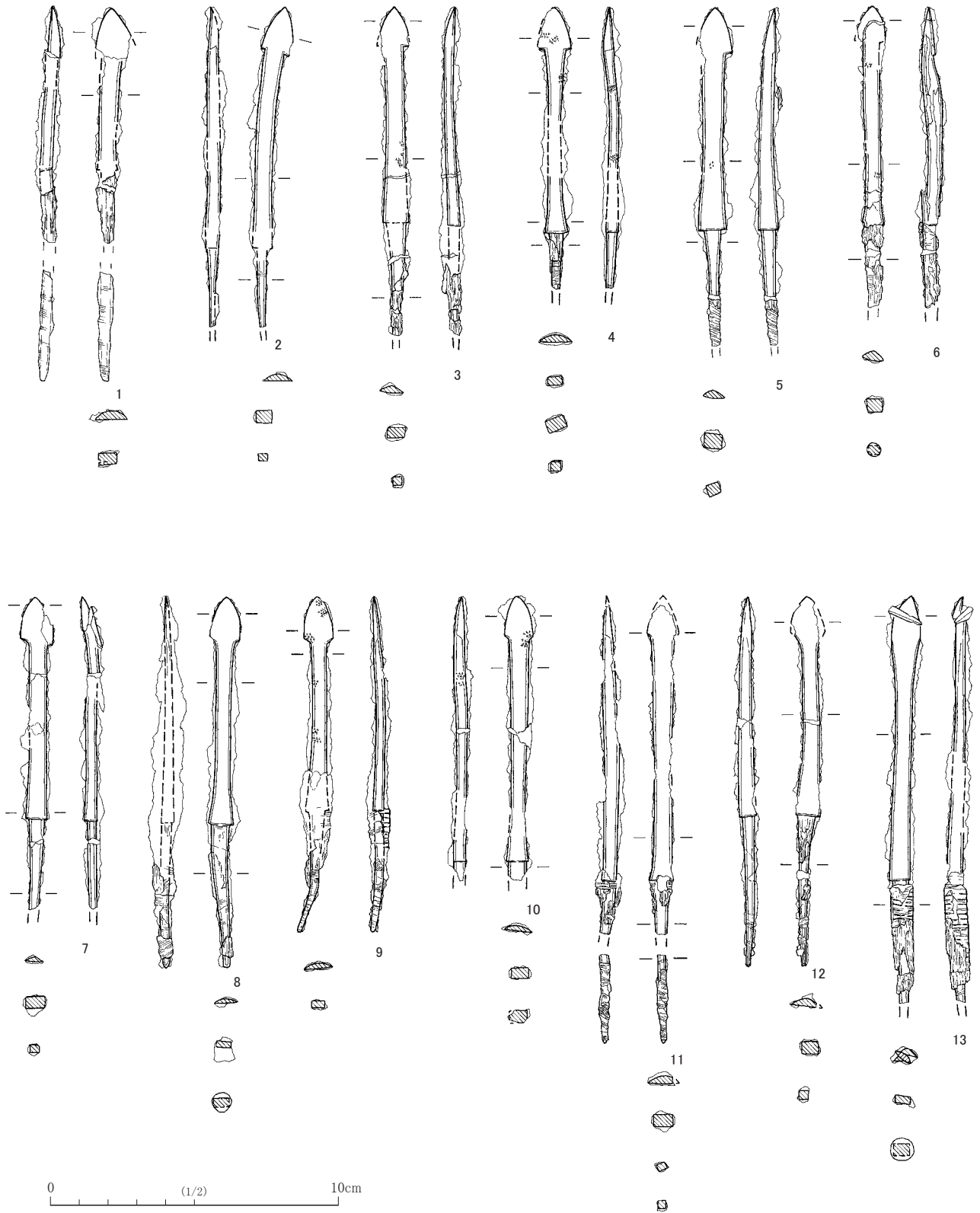


图63 3号墓第2屍床出土鉄鏃実測図(1)

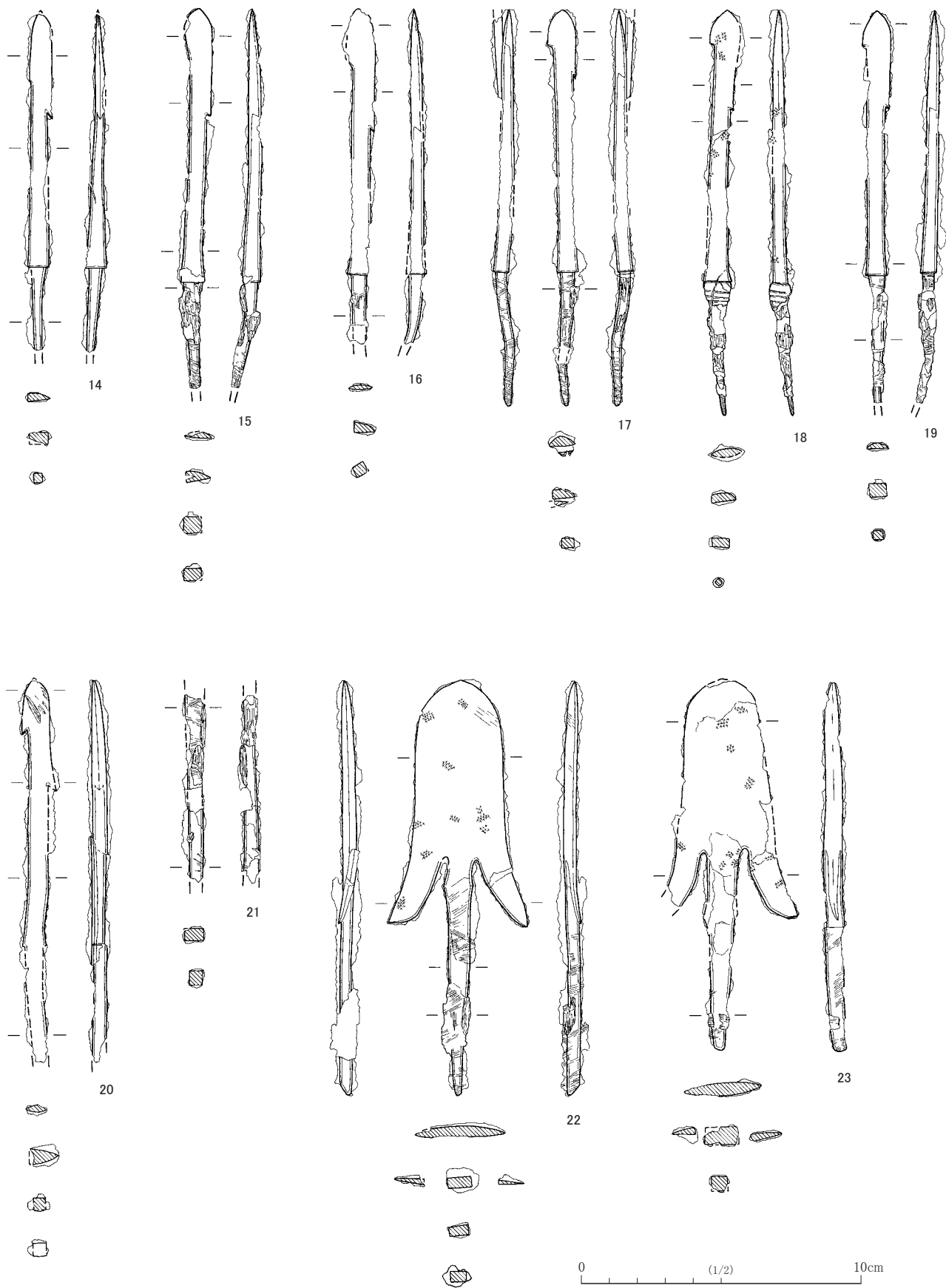


图64 3号墓第2屍床出土鉄鏃実測図(2)

(2) 刀子 (図 65, 図版 21- 1)

第2屍床からは1点の刀子が出土しており、刀身の一部を欠損するものの全形をとらえることができる。高塚横穴群出土刀子のなかでもっとも大型で、全長 21cm、刀身残存長 14.3cm、茎長 6.7cm、刀身関部幅 2.8cm、茎幅 1.2～2.0cmを測る。刀身は切先から関部に向かって徐々に幅広となる。刃はふくら付く切先から関部に向かって直線的にのびている。棟も同様に直線的に垂下する。関は両関で、直角関である。茎は鹿角製の把により覆われているため、観察は困難であるが、茎幅は茎元から茎尻に向かって徐々に減じるものと思われる。茎尻の形状は不明である。把縁端は関部よりわずかに下部に位置する。刀身の一面にのみ繊維が付着するが、刀身全体に付着するものではないため、刀子をくるんでいた繊維の可能性は低い。出土状況を確認すると、鉄鏃群から南にやや離れた位置に単独で存在しており、切先は西（奥壁側）を向いている。

高塚横穴群出土刀子の時期的位置付け 高塚横穴群出土刀子は全 12 点を数え、各横穴の屍床から 1 点以上が出土している。このことから、刀子は主要な副葬品として位置付けられていたことがわかる。刀子は実用品という性質上、時期的変化に乏しく、個々の時期的位置付けは難しい。そこで、高塚横穴群出土刀子をひとつのまとまりととらえ、特徴を抽出するとともに、大まかな時期的位置付けについて述べる。なお、以下の記述においては、次ページの表 6 に示した通し番号①～⑫を用いることとする。

まず、大きさについてみてみたい。

砥ぎ減りを考慮すると刀身で比較することは適当でないため、刀身関部幅に着目すると、2.8cm の大型 (⑫)、1.6～2.0cm の中型 (①・②・⑥・⑨・⑩)、1.1cm (⑪) の小型に区分できる。また、形態上の共通点としては、①を除きすべて両関式であることがあげられる。さらにこれらの関形状は⑪のナゲ関を除き、いずれも直角関である。また把が残存するものについては、いずれも鹿角装である点も共通する。

時期的位置付けについては、大和地域の刀子を分析した渡邊加奈子の研究を参照する [渡邊 2010]。渡邊は須恵器の T K 208 型式段階を境に片関式から両関式に変化し、T K 23・T K 47 型式段階は両関式が主体を占めることを示した。これに従うと、高塚横穴群出土の資料はほぼ両関式であることから、T K 23・T K 47 型式段階以降に位置付けられる。さらに渡邊は茎長に対する茎幅の割合を数値化し、時期が下るにつれて茎が細長化することを指摘した。高塚横穴群出土資料の場合、茎長に対する茎幅の割合は 23～37% の範囲におさまる。渡邊が提示した分析グラフによれば、T K 43 型式段階以降になると 20% を下まわるものの割合が増加するようだ。一概にはいえないかもしれないが、この渡邊の分析結果を参考にすれば、高塚横穴群の資料は T K 43 型式段階よりも以前に顕著な特徴を保有していると評価してもよいと思われる。

以上の検討を踏まえると、高塚横穴群出土刀子は T K 23 型式段階から T K 43 型式段階頃というやや幅をもつ時期に位置付けることができる。

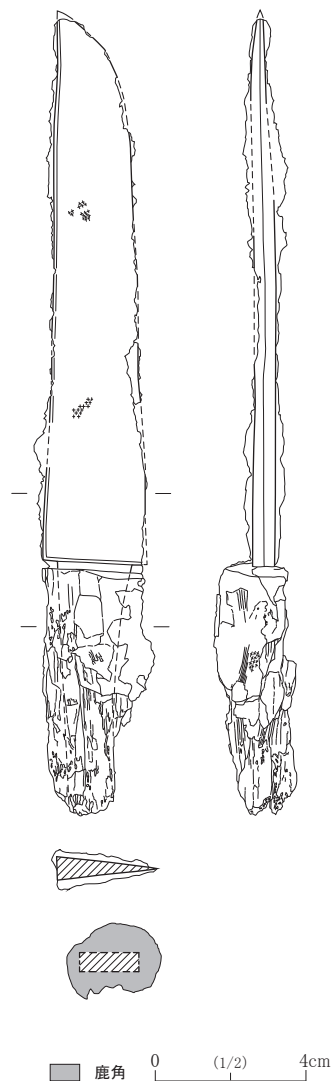


図 65 3号墓第2屍床出土刀子実測図

(山元 瞭平)

表6 高塚横穴群出土刀子各部位の形状・計測値

出土地点	図番号	通し番号	部位	開		茎尻形状	全長	刀身長	茎長	幅		厚さ		付着物	
				位置	形状					刀身開部	茎	刀身	茎	刀身	茎
1号横穴	第1屍床	1 ①	刀身～茎	片開(棟部)	直角	栗尻	10.3	6.4	3.9	1.6	0.4～1.3	0.3	0.3	無	鹿角
		2 ②	刀身～茎	両開	直角	栗尻	推12.2	8.5	推3.5	1.9	1.2～1.3	0.4	0.4	無	樹皮巻き・鹿角
		3 ③	刀身～茎	両開	直角	不明	(13.8)	(8.6)	(5.2)	推2.0	1.2～1.4	0.4	0.4	無	鹿角
	第2屍床	1 ④	刀身～茎	不明	不明	不明	(11.7)	(7.5)	4.2	—	—	0.4	—	無	鹿角
		2 ⑤	刀身～茎	両開	直角	栗尻	(12.2)	(8.1)	4.2	—	0.7～1.0	0.3	0.3	無	鹿角
		3 ⑥	刀身～茎	両開	直角	栗尻	16.2	11.3	4.9	2.0	0.8～1.4	0.4	0.4	無	樹皮巻き・鹿角
2号横穴	第1屍床	— ⑦	刀身	—	—	—	(3.4)	(3.4)	—	—	—	0.3	—	無	無
	第2屍床	— ⑧	刀身～茎	両開	直角	一文字	(18.7)	(14.1)	4.6	推2.5	1.1～1.6	0.5	0.5	無	無
	位置不明	— ⑨	刀身～茎	両開	直角	一文字	(9.7)	(6.5)	3.2	1.6	0.7～1.0	0.3	0.3	無	鹿角
3号横穴	第1屍床	1 ⑩	刀身～茎	両開	直角	栗尻	8.8	5.1	3.7	1.8	0.7～1.2	0.2	0.2	繊維両面	樹皮巻き・鹿角
		2 ⑪	刀身～茎	両開	ナデ	棟上栗尻	9.1	5.3	3.8	1.1	0.6～1.1	0.4	0.4	繊維両面	糸巻き
	第2屍床	— ⑫	刀身～茎	両開	直角	—	21.0	(14.3)	6.7	2.8	1.2～2.0	0.6	0.6	繊維片面	鹿角

※ () は現存値、推は推定値を示す。単位はcm。

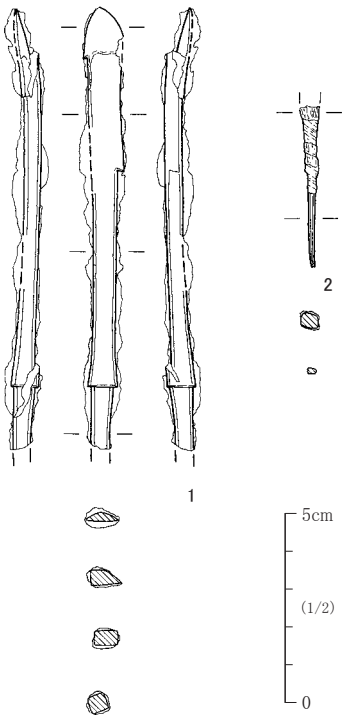


図66 3号墓出土位置不明鉄鍬実測図

3 出土位置不明

(1) 鉄鍬 (図66, 図版22-2)

3号墓から出土した鉄鍬で出土位置が不明なものとして、長頸段違い鍬が1点、茎部片が1点ある。1の長頸段違い鍬は、出土している鉄鍬型式から第2屍床に帰属するものである可能性が非常に高い。頸部の幅はやや広い。2の茎部片は帰属が分からない。

(三好 栄太郎)

第4節 不時発見 (出土横穴不明) の遺物

(1) 短甲 (図67～71, 72～78, 図版26～35)

①概要

構成 高森町教育委員会と熊本県教育庁文化課による1988年の1～3号墓発掘調査以前の土木工事の際に不時発見された横穴から出土したと伝えられる [野田2007: p.116]。前後胴7段構成で右前胴開閉式の横矧板鉾留短甲である。裾板付近の遺存状態が悪く、裾板の大部分を欠損している。このことは、本短甲が立位で副葬されていたことを示している。

しかし、それ以外の部分については遺存状態が良好で、鉄板の状態を詳細に観察することが可能である。現状における規模は、左前胴高が37.9cm、右前胴高が32.2cm、後胴高が41.5cmである。幅が最大になるのは後胴押付板肩部付近であり、その幅は45.2cmである。もっとも幅が狭くなるのは下段地板部分で、その幅は28.5cmである。

本短甲に使用された板の枚数は、欠損の大きい裾板を除き現存部分から判断できる。すなわち、堅上板2枚、押付板1枚、引合板2枚、蝶番板1枚、上段帯金3枚、下段帯金3枚、上段地板3枚、中段地板3枚、下段地板3枚である。裾板は、欠損のため枚数を確定できないが、おそらく右前胴、左前胴、後胴に各1枚の鉄板が用いられていたと推測できる。その場合、本短甲に用いられた鉄板の枚数は合計で24枚となる。そのほか、前後胴脇部に4個の蝶番金具および、短甲の上下縁と後胴右脇には鉄包覆輪のために薄い帯状鉄板が用いられている。

前後胴には、着用時の緒を懸けるための孔が存在する。前胴には左右上段地板に横位2孔一組のワタガミ受緒孔が1箇所ずつ、後胴には上段地板部分に2箇所および上段帯金部分に1箇所の2孔一組のワタガミ懸緒孔が存在し、ワタガミ緒もその一部が短甲表面に付着して残存している。また、前胴の左右下段地板には横位2孔一組の腰緒孔が1箇所ずつ存在する。

結合 各鉄板は鉄鉾によって結合されている。鉾頭の平面形態は円形、断面形態は半球形である。鉾の直径は0.9から1.1cmである。各鉄板の結合は基本的に二枚留によってなされるが、左右前胴の上段帯金下縁と堅上板および中段地板が結合される部分と、後胴上段帯金下縁と押付板および中段地板が結合される部分が三枚留となっているほか、前後胴の地板や帯金が結合される左脇周辺では四枚留となっている箇所もある。

②各部の観察

引合板 左右各1枚の鉄板で構成される。左右とも下端を欠損しているが、左前胴部板下端は本体と接合されない状態で現存する。いずれも縦方向に長い帯状鉄板である。本短甲引合板は、それぞれ上辺の堅上板側が舌状に突出した特徴的な形態をしている(図版35-5~8)。この突出部は堅上板を包むように短甲内面側に折り返されている。引合板と短甲本体との固定を強固にするための造作と考えられるが、通有の短甲には認められない特徴である。左右の板ともに短甲本体と結合する側辺の外面には幅広の面取りがなされている。短甲本体との結合は8鉾でなされ、いずれも帯金を避けて二枚留になる位置に配置されている。

堅上板 左右各1枚の鉄板で構成される。板の形状は脇部に向かい次第に縦幅を減じる通有の形態であるが、右堅上板の脇側端部上辺は角が裁断されている。下辺の外面には幅広の面取りがなされている。短甲本体との結合は左堅上板が7鉾、右堅上板が6鉾でなされており、左右の板ともに上辺には鉄包覆輪が取り付けられている。

前胴上段地板 左右各1枚の鉄板で構成される。地板の平面形態はいずれも六角形状で、各頂点は鉾留位置に対応している。各辺は直線的でなく、外彎あるいは内彎するなどいびつである。左右の板ともに横位2孔一組のワタガミ受緒孔があり、ワタガミ緒を懸けるための繊維が一部残存している。

前胴上段帯金 左右各1枚の鉄板で構成される。横長の帯状鉄板で、脇側の短辺は斜めに裁断されており緩やかに外彎している。上下辺の外側には幅広の面取りがなされている。短甲本体との結合は左右の板ともに上下辺各1鉾でなされている。右前胴板の内面中央付近には、円形で直径2mmほどの用途不明の工具痕跡が認められる。

前胴中段地板 左右各1枚の鉄板で構成される。平面形態は通有の形態に近いが、引合板側では上段地板同様に鉾留位置に合わせて裁断あるいは整形されており、とくに右前胴板では下辺の一部が三角形状に突出したような形状をしている。また、右前胴板の蝶番板側は上下幅が狭くなっており、その形状から下辺側の不要部分を裁断したものと推測される。全体的に板の各辺はいびつであり、不整形な印象を受ける。

前胴下段帯金 左右各1枚の鉄板で構成される。横長の帯状鉄板である。上下辺の外側には幅広の面取りがなされている。上下の地板との結合は、左前胴板は上下辺ともに5鉾、右前胴板は上下辺ともに3鉾でなされている。右前胴板の内面中央付近には右前胴上段帯金内面と同様の、円形で直径2mmほどの工具

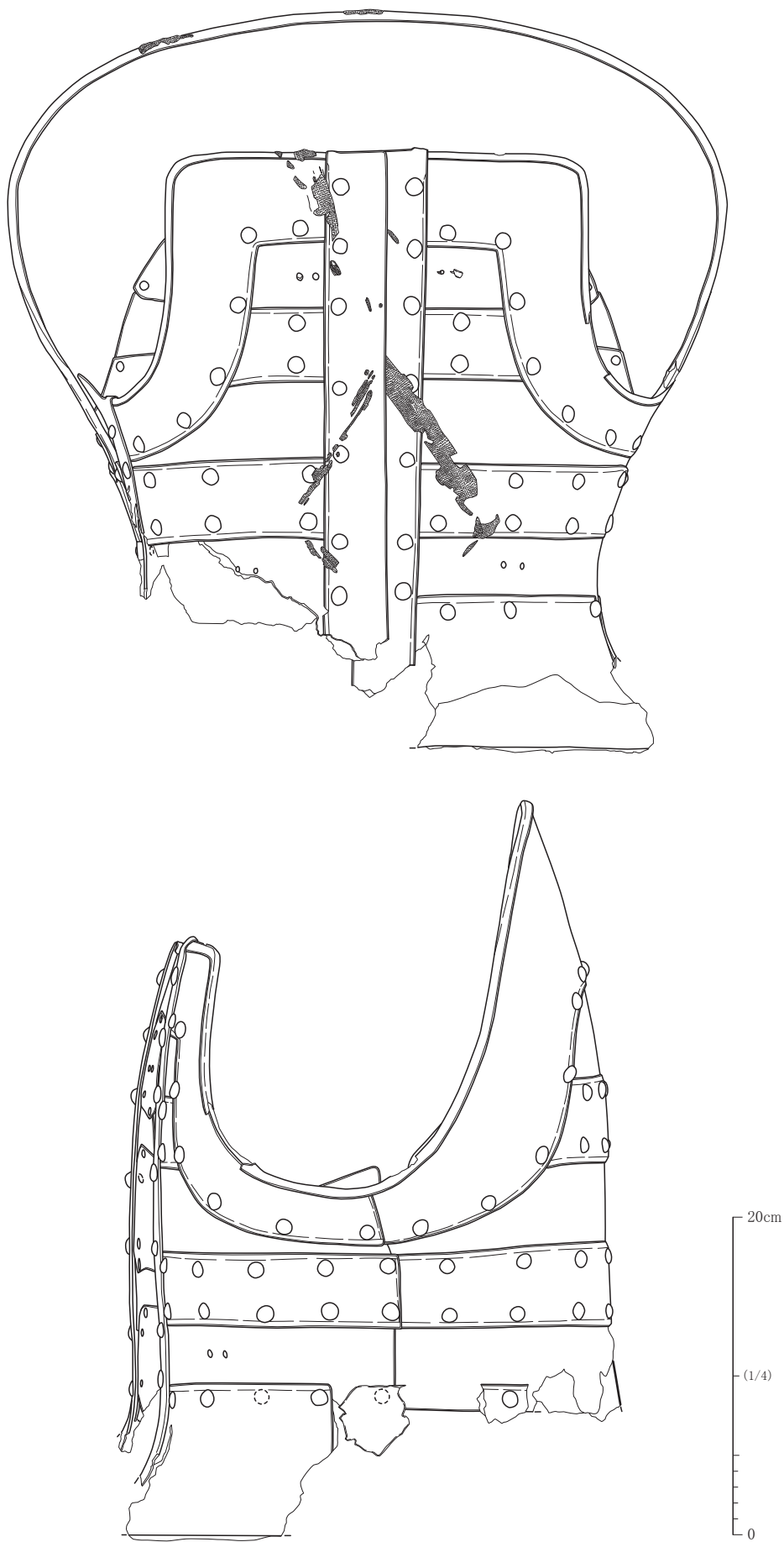


图 67 高塚横穴群不時発見短甲実測图 (1)

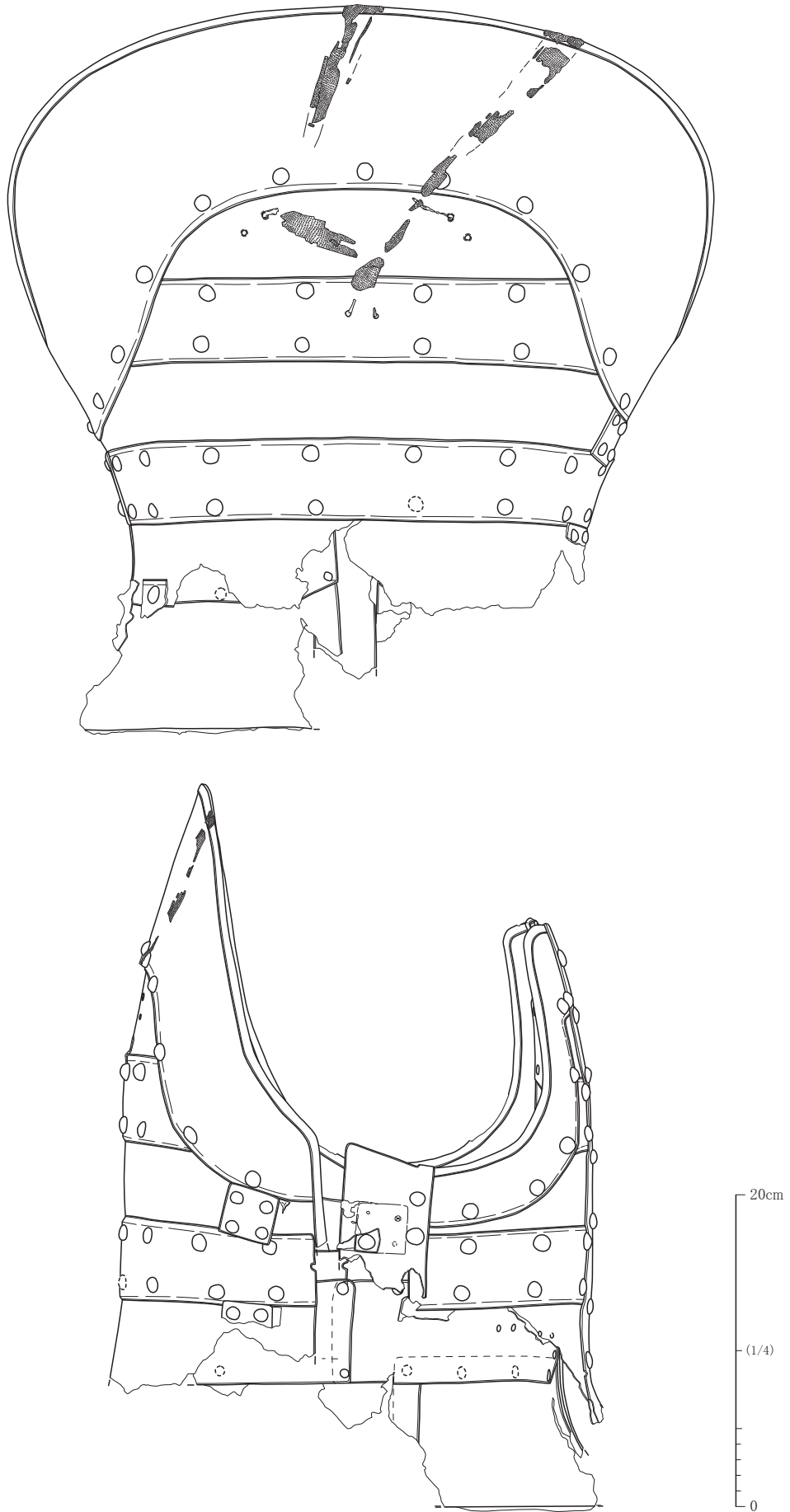


図 68 高塚横穴群不時発見短甲実測図 (2)

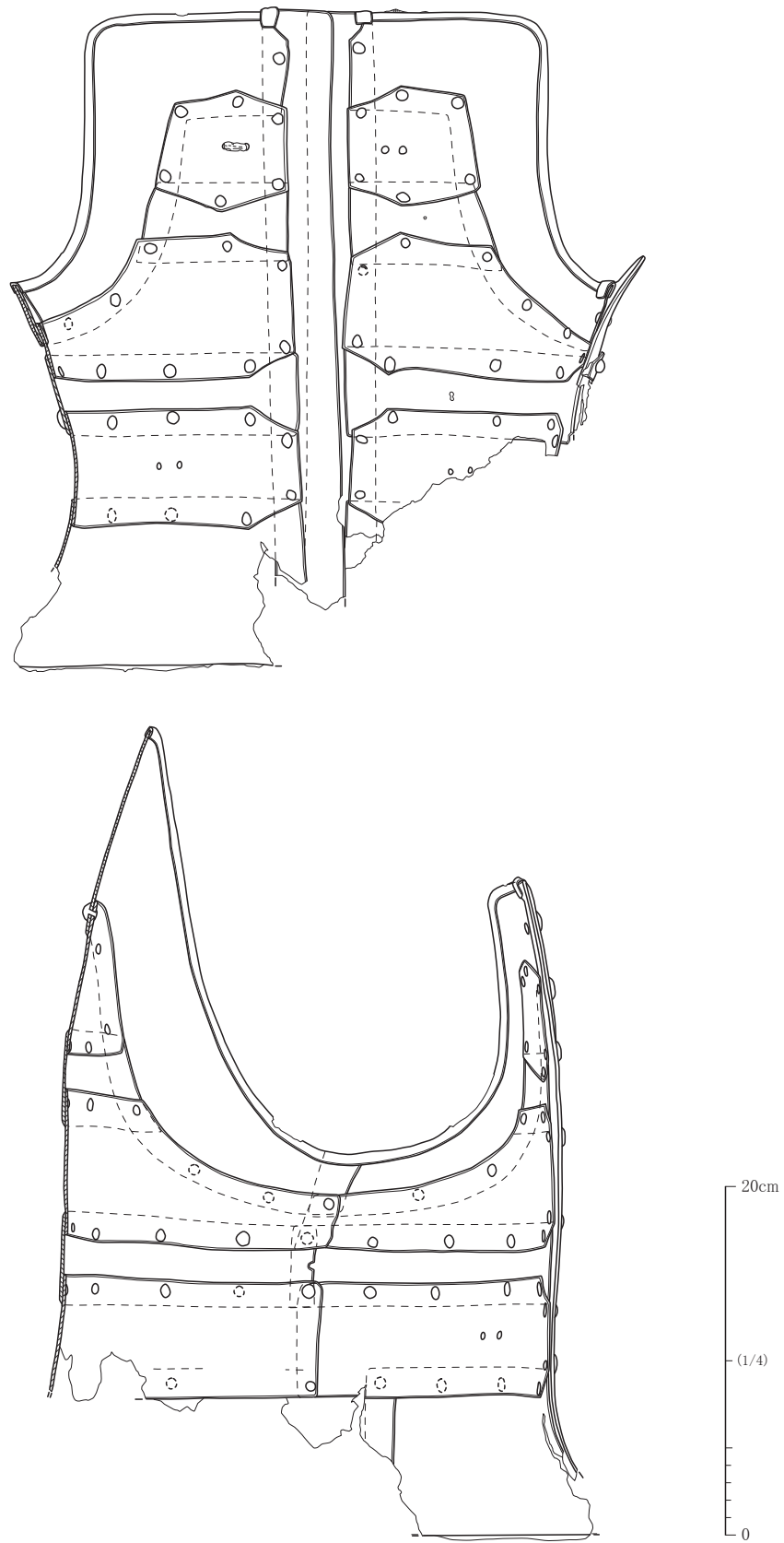


图 69 高塚横穴群不時発見短甲実測图 (3)

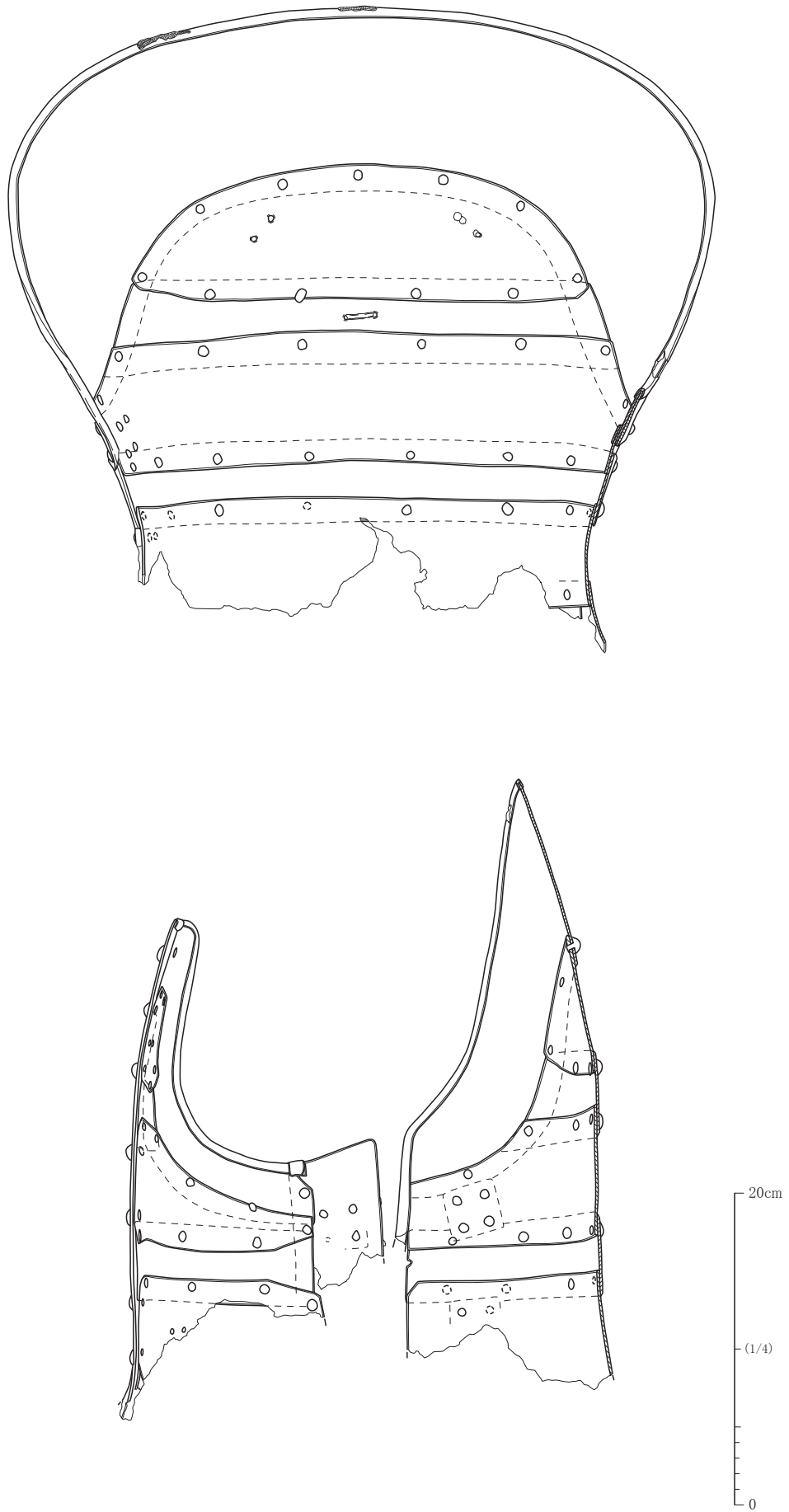


图70 高塚横穴群不時発見短甲実測図(4)

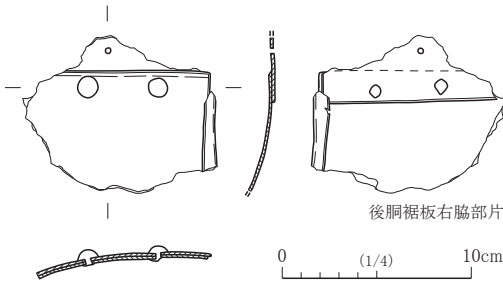


図 71 高塚横穴群不時発見短甲実測図 (5)

痕跡があり、その形状から何らかの工具によって少なくとも2回の敲打がなされたことがわかる。

前胴下段地板 右前胴部板を大きく欠損するが、左右各1枚の鉄板で構成されると判断できる。平面形態は長方形状であるが、左右の板ともに隅角が裁断されている。ただし、前後胴が接合される左前胴板脇部側の隅角は裁断されていない。全体的に板の各辺は直線的でなくいびつである。左右の板ともに横位2孔一組の腰緒孔があるが、有機物は残存して

いない。

前胴裾板 実測時には左前胴板の大部分が残存していたが、現状では全体的に大きく欠損している。明確でないが、左右各1枚の鉄板で構成されると考えられる。全体形を推定できる左前胴板の平面形態は長方形ないし台形状であり、下段地板との結合は4鉋でなされている。右前胴板は欠損のため詳細不明である。左前胴板下辺には、鉄包覆輪が取り付けられている。

蝶番板 右前胴側にのみ取り付けられている。下半部を欠損しているため全体形は知れないが、幅広の縦方向に長い帯状鉄板で、上辺が脇側に向かってわずかに傾斜する切り出しナイフ状の形態である。また、上辺の豎上板側は、引合板と同様に舌状に突出しており、その突出部は豎上板を包むように内面に折り返されている。引合板と同様、本体との結合を強化する目的をもっていたものと考えられる。外面には蝶番金具が取り付けられていた痕跡が1箇所認められる。

押付板 1枚の鉄板で構成される。通有の形態で、上辺は緩やかな弧状をなし、肩部は大きく張り出している。下辺外面側には幅広の面取りが施されている。下辺と上段地板、上段帯金、中段地板との結合は12鉋でなされている。上辺には鉄包覆輪が取り付けられている。

後胴上段地板 1枚の鉄板で構成される。平面形態は、押付板と上段帯金で形成される空間形状に近似したカマボコ形であるが、全体にいびつな形状であり、右端部付近はとくにその度合いが著しい。また左端部は先端部が裁断調整されている。左右肩部側にはそれぞれ斜位2孔一組のワタガミ懸緒孔が存在し、左側の懸緒孔には内外面に、右側の懸緒孔には外面にワタガミ緒を懸けるための繊維が残存している。

後胴上段帯金 1枚の鉄板で構成される。横方向に長い帯状の鉄板で、短辺は左右とも緩やかに外彎している。上下辺の外面側には幅広の面取りがなされている。中央付近には横位2孔一組のワタガミ懸緒孔が存在し、内外面にワタガミ緒を懸けるための繊維が残存している。地板との結合に用いられる鉋の数は上下辺とも4鉋である。

後胴中段地板 1枚の鉄板で構成される。通有の形態で、上辺の脇側は緩やかに内彎しながら縦幅を減じている。板の各辺は、いびつな形態で直線的ではないが、右脇側の短辺は上下の板に合わせて直線的に裁断されている。

後胴下段帯金 1枚の鉄板で構成される。横方向に長い帯状の鉄板で、短辺と長辺とのなす角度は左右とも直角に近い。短辺には左右とも辺の中央付近に半円形の抉れが認められる。上下辺は直線的ではなく、ややいびつな形態であるが、外面側には上下辺ともに幅広の面取りが施されている。地板との結合は上下辺ともに8鉋でなされている。

後胴下段地板 1枚の鉄板で構成される。下辺は左脇部付近を除いて欠損している。平面形態は長方形の鉄板であるが、右脇側上辺の隅角は裁断調整がなされている。また、左脇側上辺の隅角は丸みを帯びている。残存する各辺はいびつな形態で直線的ではなく、全体に不整形な印象を受ける。

後胴裾板 欠損により大部分が失われており、左脇部付近に上辺付近の一部がわずかに残存しているに

過ぎない。そのため、板構成や形態、規模など不詳である。残存部分から下段地板と結合する上辺外面側には幅広の面取りが施されていたことがわかる。

開閉装置 本短甲は、右脇に開閉装置をもつ右前胴開閉式である。蝶番金具は完存するものが1箇所、一部を残すものが2箇所にあるが(図版35-1~4)、本来は4つの金具があったものと判断できる。前後胴のそれぞれ上位に取り付けられた2つの蝶番金具の形態は方形4鉸形式[滝沢1991:p.24]である。欠損しているものの、下位の2つの金具も同じ形式であったものと推測する。現存する金具の周囲には留められていた革帯の一部が残存している。

覆輪 本短甲の左右堅上板、押付板の上辺と裾板下辺、および後胴右脇部には鉄包覆輪が取り付けられている。使用された鉄板は、錆などで不明確だが現状の観察では、右前胴上辺で1枚、左前胴から後胴右脇にかけても長い1枚の鉄板で構成されるとみられる。裾板下辺は錆のため詳細不明である。覆輪の折返し幅は5~6mmで、横断面形は丸みを帯びている。覆輪施工に関わる作業痕跡は確認できなかった。

付着物 本短甲に由来する付着物には、ワタガミ緒に関する繊維および蝶番に関わる皮革がある。繊維は、ワタガミ緒と緒を通すための繊維がある(図版34)。ワタガミ緒は平織でやや目の粗い繊維であり、後胴上段帯金のワタガミ受緒孔付近から押付板にかけて、および前胴の左右堅上板から下段地板にかけて付着している。繊維が複数枚重なって付着している部分があることから、ワタガミ緒は幅広で1枚の繊維を折り重ねたもの、あるいは複数枚の繊維を重ねたものであると思われる。ワタガミ緒を通すための繊維は紐状のもので、ワタガミ受緒孔、懸緒孔の周辺に付着している。皮革は、蝶番金具で留められている状況は確認できるものの、状態が悪く詳細は不明である(図版35-2)。

短甲に由来しない付着物には、前胴裾板に付着している鉄鏃がある。錆化した土塊の中に埋もれた状態で付着しているためその形態は明らかでないが、X線CT画像やX線透過画像を観察すると長頸鏃の破片であるとみられる(図72・75)。このことは、短甲の周辺に鉄鏃が副葬されていた可能性を示すものであり、ほんの一端ではあるものの、詳細不明の本短甲出土横穴の状況をうかがう手がかりとなりうる。

③小 結

形態的特徴 本短甲は前後胴7段構成の横矧板鉸留短甲である。開閉装置は右前胴開閉式で、蝶番板は前胴側にのみ取り付けられている。蝶番金具のうち形態がわかるものは方形4鉸形式であり、覆輪は鉄包覆輪である。地板の構成や枚数も横矧板鉸留短甲に通用のもので、全体の構成としてはもっとも普遍的にみられる横矧板鉸留短甲の範疇にあるといえる。

そのなかにおいて、引合板、蝶番板上辺の突出部の存在や六角形状の地板形態をはじめとする鉸留位置に合わせたかのような特徴的な地板の形状など、他の横矧板鉸留短甲と比較してやや特異な点は、本短甲の形態的特徴としてあげることができるだろう。

設計・製作技術 本短甲に用いられている地板は、きわめて不整形な形状をしており、各辺も直線的でなくいびつであることが特徴である。鉸留短甲の地板の形状は、しだいに不整形になっていくことが指摘されている[田中1978:p.39, 古谷1996:p.68, 滝沢2008:p.17, 西嶋2012:p.389, 川畑2015:p.197]が、これは「鉄板の裁断や部品の組上げといった作業に省力化をうながす余地を多分に持つ」[阪口2008:p.42]という鉸留技法の特性を踏まえた、製作の簡略化に起因するものと理解される。この点を踏まえれば、本短甲に用いられる地板の、①帯金などによる輪郭と一致しないこと、②鉸留位置部分が突出するような形状であること、③不要部分を適宜裁断調整していることといった特徴は、まさに鉸留技術の特性を最大限に活かした地板の設計および製作原理が働いているものといえる。つまり、本短甲の製作にあたっては、地板は厳密な設計がなされず、充填すべき空間を満たすに足る形態であることのみが志向されたものと考えられる。おそらく地板は、短甲本体の枠組みを構成する帯金などとは分離して設計されており、帯金・地板分離設計



图 72 高塚横穴群不時発見短甲X線CT画像（外面）

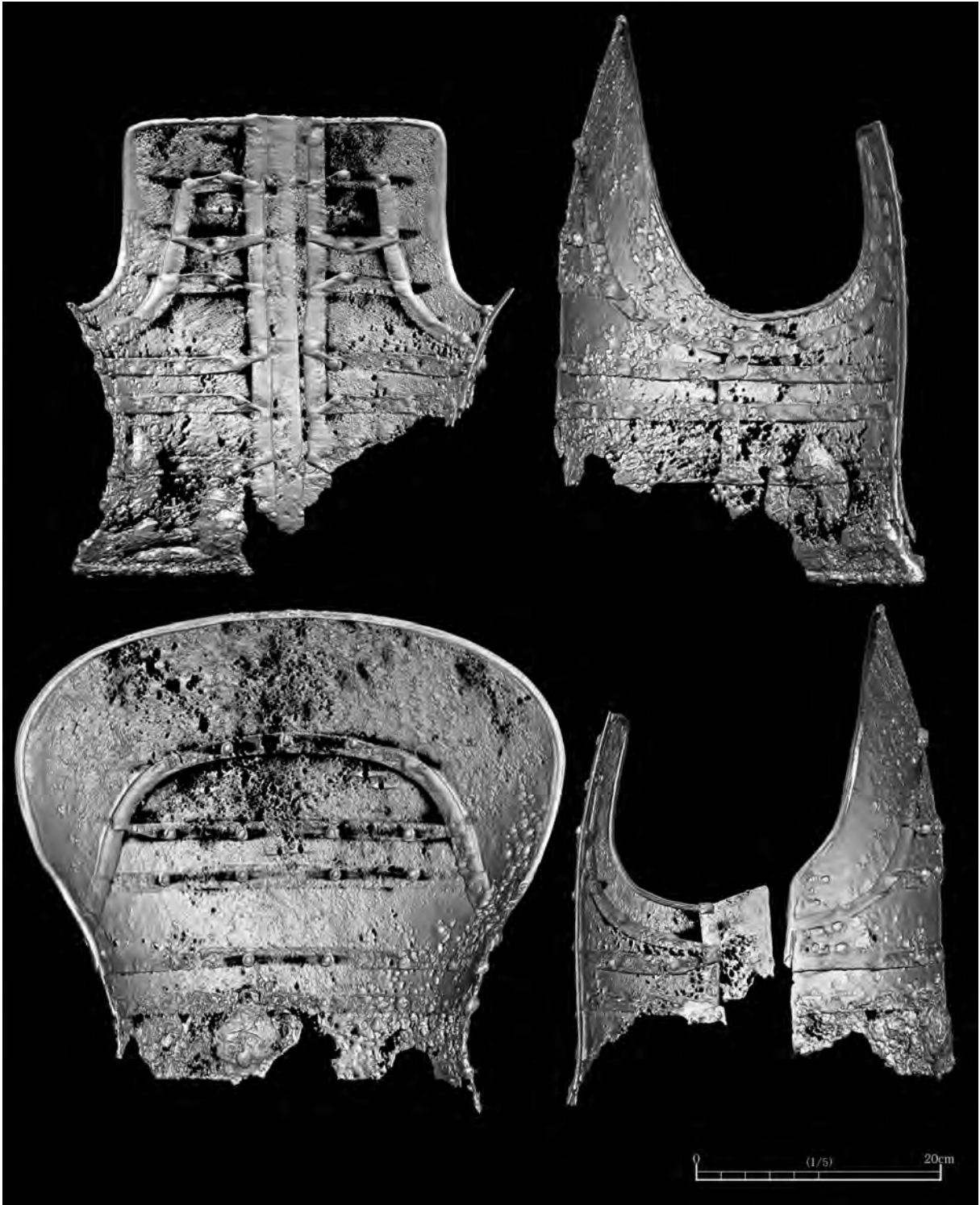


図 73 高塚横穴群不時発見短甲X線CT画像（内面）

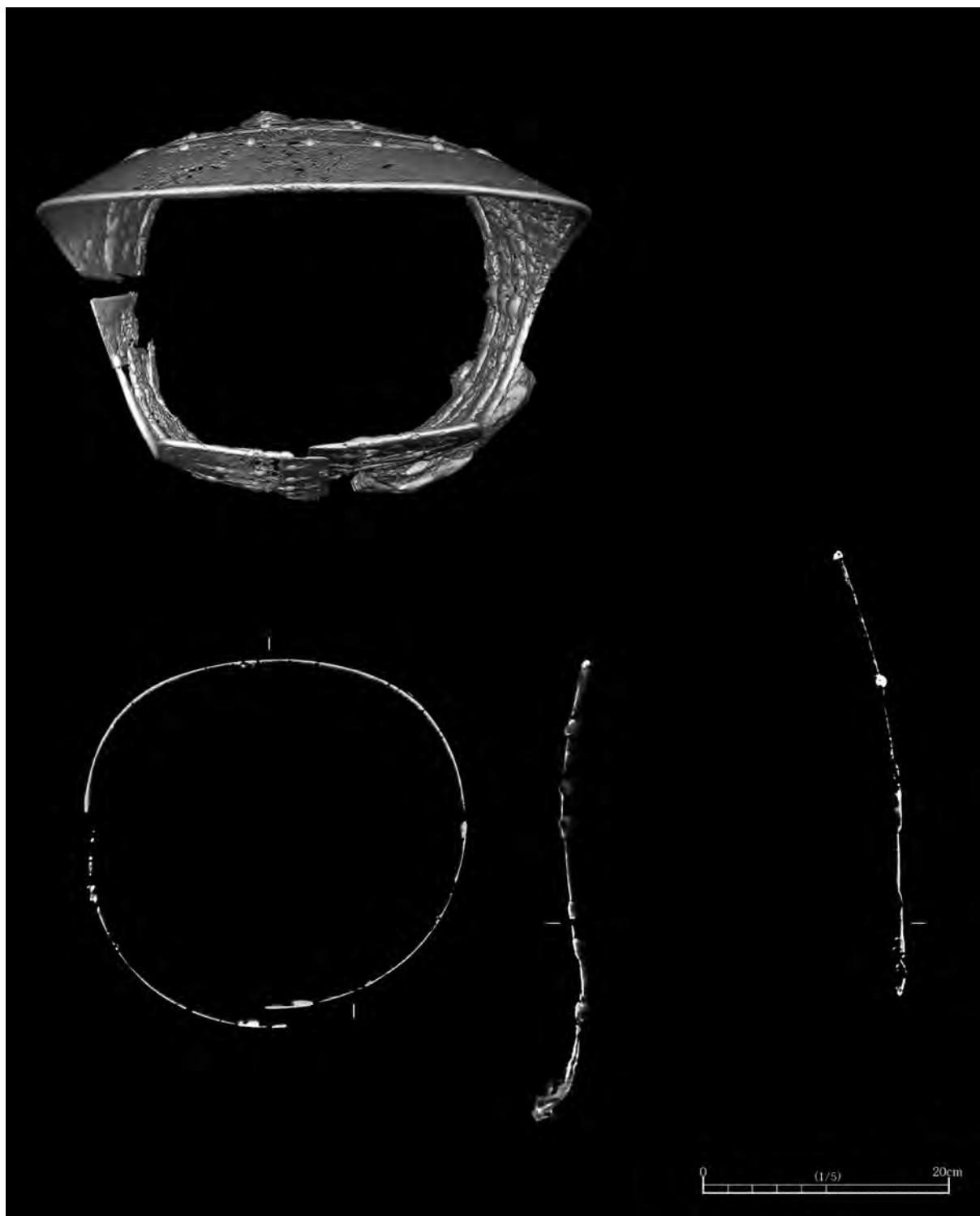


図 74 高塚横穴群不時発見短甲 X 線 C T 画像 (上面・断面)

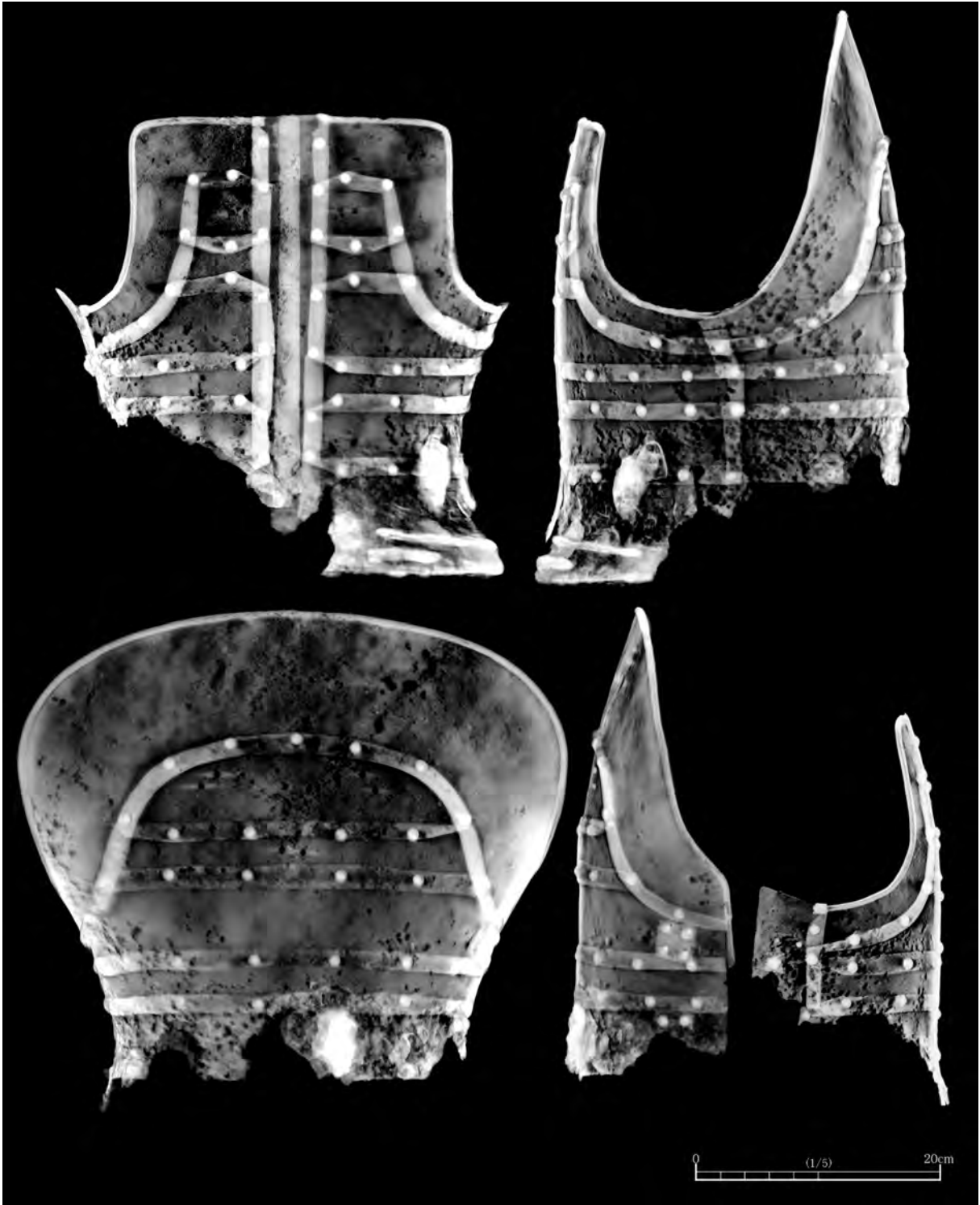


図 75 高塚横穴群不時発見短甲 X線透過画像

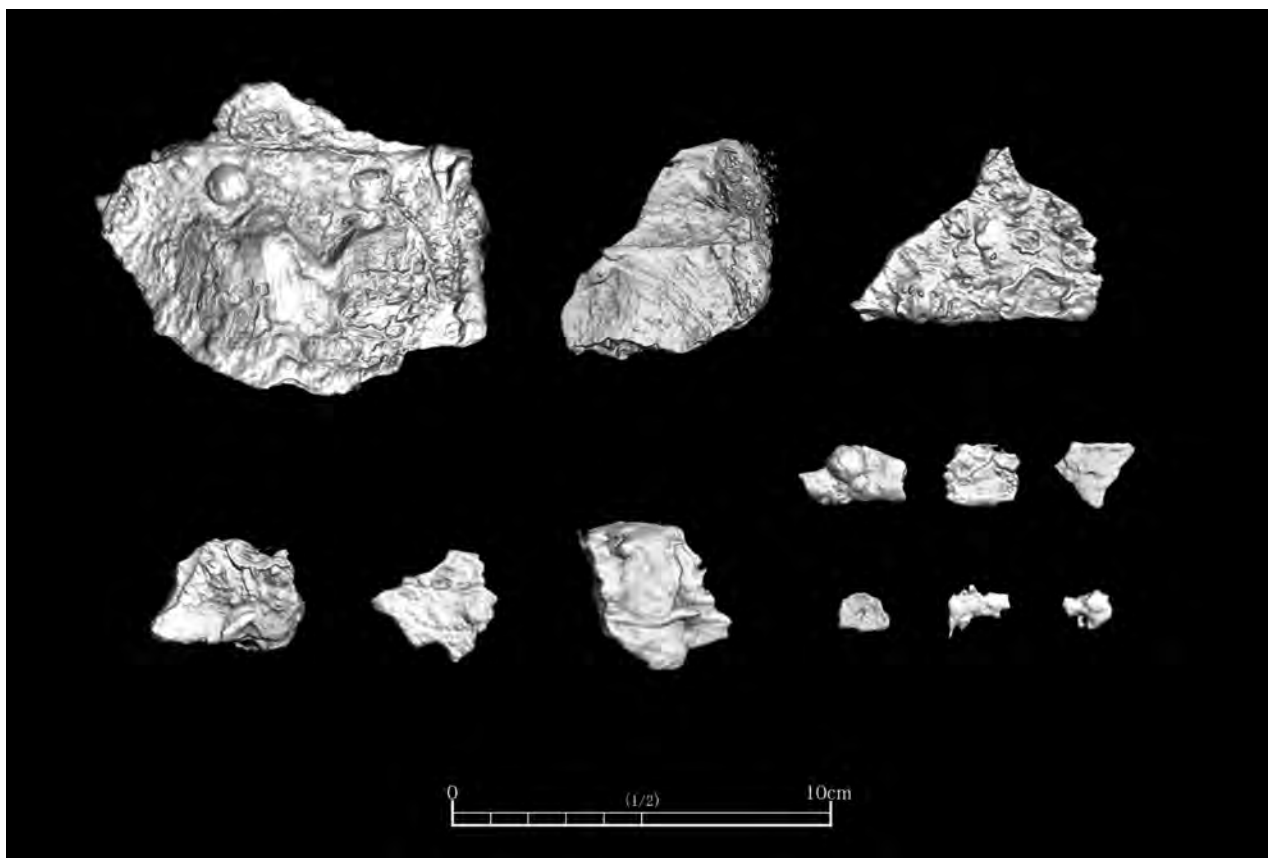


図 76 高塚横穴群不時発見短甲片X線CT画像（外面）

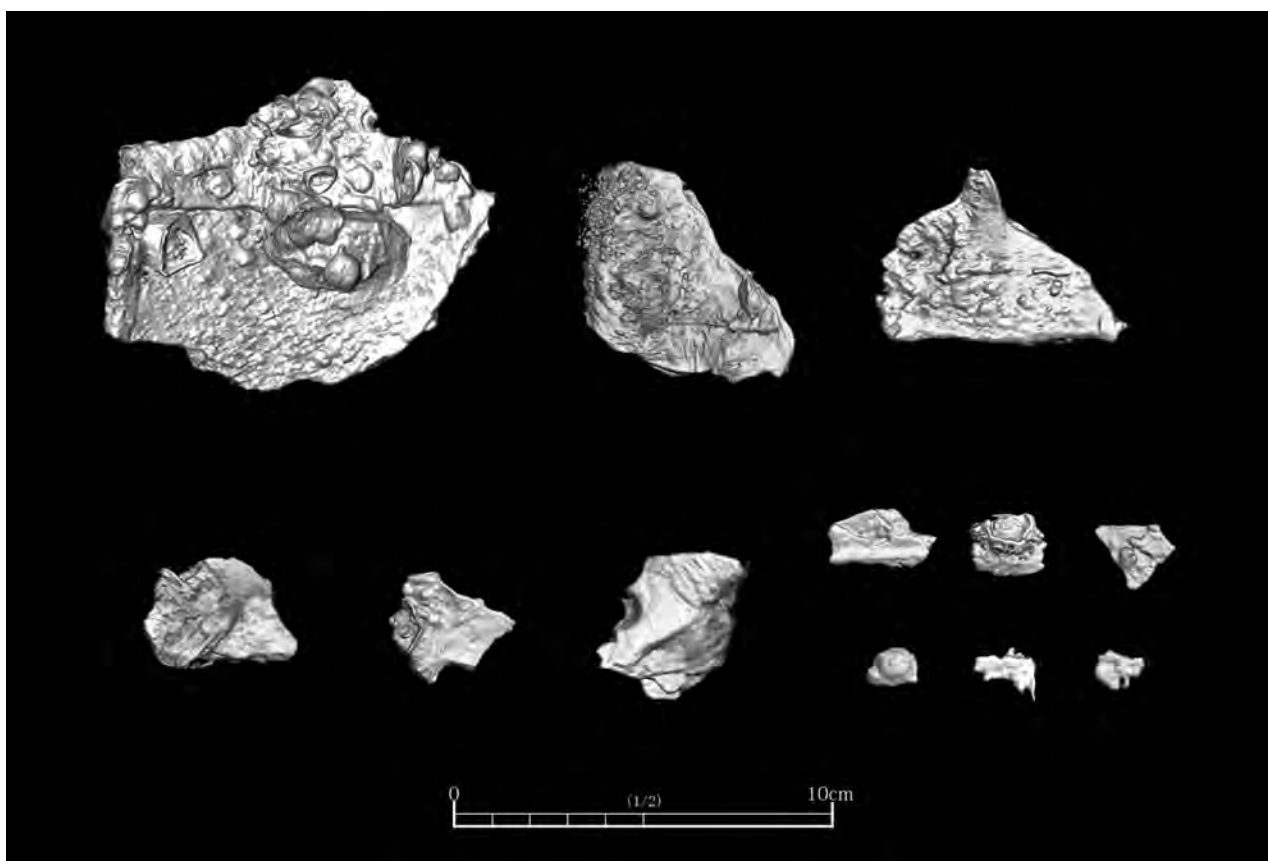


図 77 高塚横穴群不時発見短甲片X線CT画像（内面）

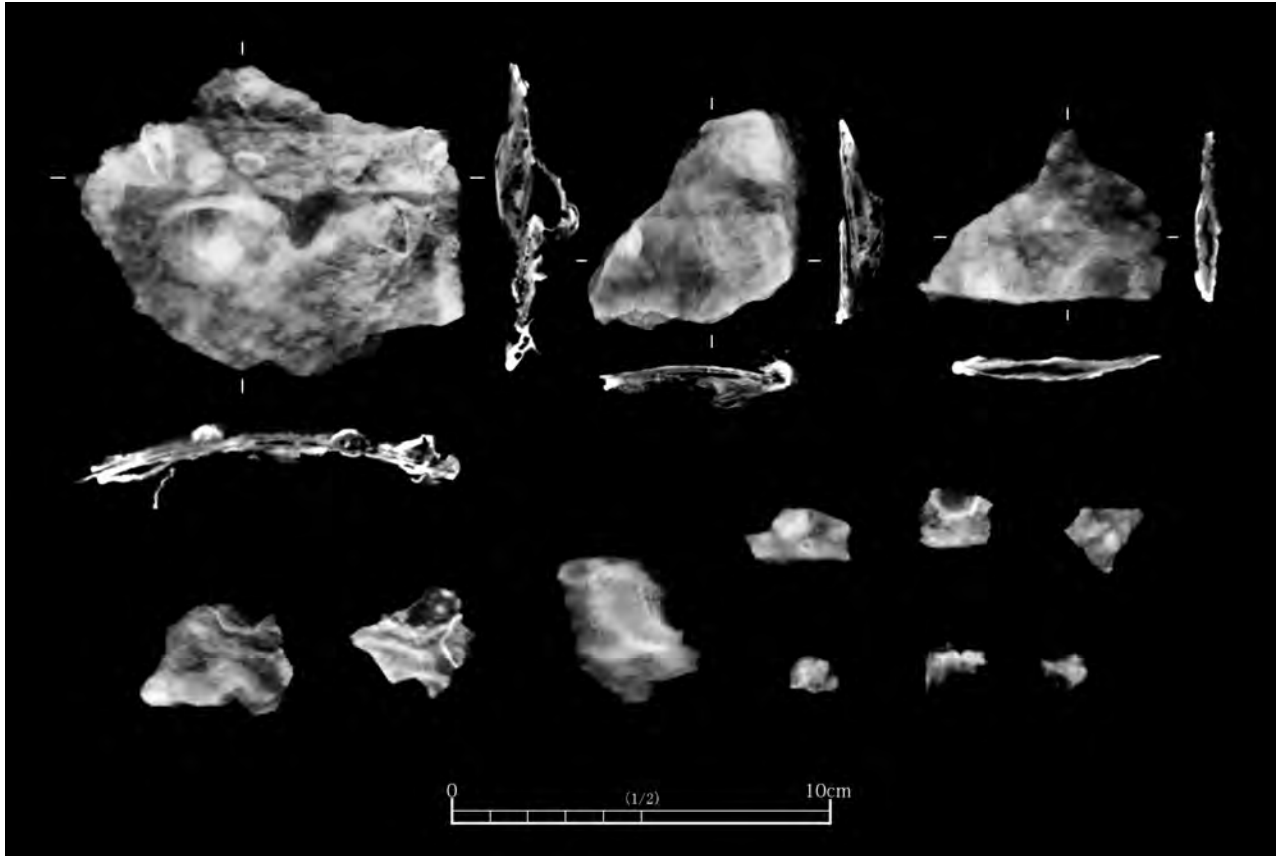


図 78 高塚横穴群不時発見短甲片X線透過画像

型とでもいえるような設計原理により製作されたものと考えられる。

本短甲の組立順序に関しては、それを判断する材料となる部分が少ない。鋌留帯金式甲冑の組立順序について、鋌留位置から推測した古谷毅の検討結果〔古谷 1996 : pp. 64-70〕を参照すれば、本短甲は隣り合う上下の段が結合され、それから各段を跨いで結合される押付板、豎上板の結合がなされたものと考えられる。その後、引合板、蝶番板の結合と鉄包覆輪の取り付けがなされるが、これらの順序については、鉄包覆輪の取り付け後に、引合板、蝶番板が結合されたことが、それぞれの重なる順序から明らかである。蝶番金具はその位置関係からみて、最後に短甲本体に結合されたものと考えられる。

型式学的位置付け 本短甲は、前後胴7段構成で右前胴開閉式であり、横矧板鋌留短甲としてもっとも通有の構造を有する横矧板鋌留短甲であるといえる。鋌留短甲の型式学的な位置を検討する際には、主に使用される鋌の直径や数、配置などが指標とされ、加えて地板の形状などの諸特徴が取り上げられてきた〔吉村 1988, 滝沢 1991・2001, 川畑 2015 など〕。

本短甲に用いられた鋌は平面円形で、直径0.9から1.1cmであり、大型鋌〔滝沢 1991 : p. 21〕や鋌頭径大〔川畑 2015 : p. 195〕にあたる。また鉄板の結合に用いられている鋌の数は、後胴上段帯金で上下各4鋌、前胴上段帯金が2鋌で、これまで確認されている鋌留短甲のなかでもっとも少数で注目される。引合板と本体との結合のための鋌配置は、帯金を外した二枚留であり、滝沢分類のC類〔滝沢 1991 : p. 23〕に該当する。地板の形状は上記のように省力化された設計に基づいた不整形な形態で、とくに六角形状の前胴上段地板は鋌留短甲全体のなかでも際立って異形のものである。そのほか、引合板および蝶番板上辺に作り出された舌状の突出部を折り返すなど、通有の短甲製作から逸脱した造作が存在することも見逃せない。また本短甲には新相の短甲にしては三枚留や四枚留となる箇所が比較的目立つが、これは古相を示す要素というよりむしろ



図79 大分県竹田市扇森山横穴出土短甲

る、本短甲の製作者がより鋳留技術についての理解、習熟度が高いことによるものと考えられる。

こうした諸特徴を踏まえれば、本短甲は鋳留短甲のなかでももっとも新しい段階の所産であると判断することが妥当であろう。したがって、本短甲の製作年代は古墳時代中期末、須恵器型式でいえばTK 47 型式段階に位置付けられる。

本短甲に関連する資料に大分県竹田市扇森山横穴出土の横矧板鋳留短甲がある（図79）。短甲上辺に用いられている覆輪が革包覆輪であること、引合板と蝶番板上辺の突出部がみられないことなど細かな差異はあるものの、後胴上段帯金に用いられている鋳の数がともに上下各4鋳であることや、特異な地板形状など、この2領だけに認められる共通点を有しており、同一工人あるいは同一工房での製作によるものと判断しても差し支えないだろう。時期的にも、わずかに本短甲の方が新相とみられるが、ほぼ同時期の所産である。

こうした2領の短甲が、一方は阿蘇谷を、一方は南郷谷を経由するという違いはあるものの、阿蘇地域を介して九州島の東と西をつなぐ交通のルート上に存在していることには、阿蘇カルデラ盆地の古墳時代中期における役割を検討するうえで重要な示唆を含んでいることは間違いない。

（西嶋 剛広）

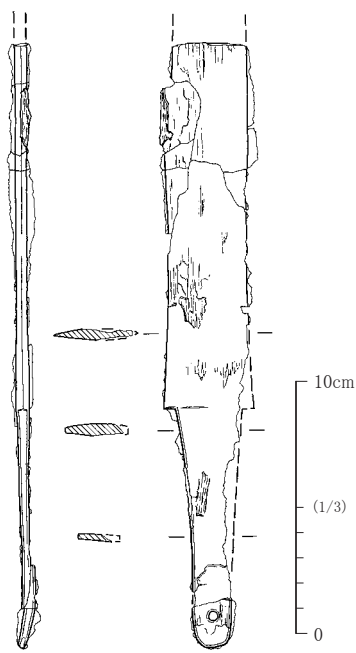


図80 高塚横穴群不時発見
鉄剣実測図

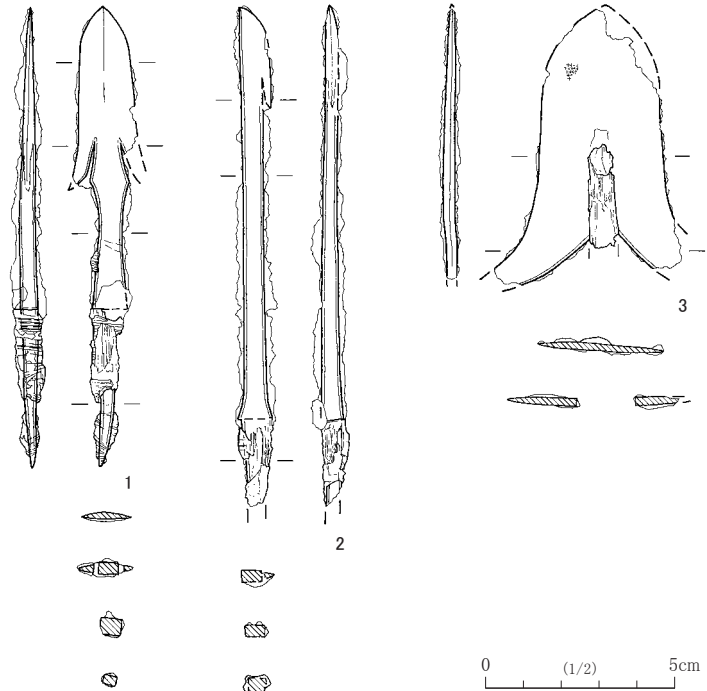


図81 高塚横穴群不時発見鉄鏃実測図

(2) 鉄剣 (図80, 図版24-2)

不時発見の鉄剣が1点ある。剣身上半を欠損しており、残存長が23.9cm、残存剣身長が14.5cmである。剣身ラインが直線でないのは接合時のずれのためである。茎部は完存しており長さが9.4cmである。全体の厚さは関付近が最大となっており0.5cmを測る。

剣身長軸に平行な木質が剣身部、茎部ともに付着している。鞘や把に由来するものであろう。ちょうど関の部分に横方向の痕跡があり、ここが鞘と把の境に当たると考えられる。茎部には目釘孔が1箇所ある。関は角関であるが片側を欠損している。剣身部の断面形態はレンズ状を呈しており、茎部も身部に近い方はレンズ状に近い断面形である。茎尻に近い部分では断面形が扁平な長方形になっている。

(三好 栄太郎)

(3) 鉄鏃 (図81, 図版24-2)

不時発見の鉄鏃が3点ある。1は短頸腸挟柳葉鏃である。頸部には山形突起を有する。中期前半に盛行する型式の鉄鏃であるが、頸部が非常に伸長している本例はTK 216 型式段階以降の中期後半に位置付けてよいだろう。

2は長頸片刃鏃である。鏃身部の腸挟は深さがはっきりとはしないが、少なくとも0.7cmはあるとみられる。1点のみの寸法では不安を残すが、頸部の長さや幅や頸関の形状、腸挟がまだ深いことなどを評価するとTK 23～TK 47 型式段階に位置付けられようか。

3は短茎鏃である。根挟みの痕跡を残す。これのみでの時期決定は困難である。

(三好 栄太郎)

第2部第3章 引用・参考文献

諫早直人 2005 「朝鮮半島南部三国時代における轡製作技術の展開」『古文化談叢』第54集、九州古文化研究会：pp. 109-138
 岩井顕彦編 2014 『和歌山県御坊市岩内3号墳―日高川流域の中期古墳―』岩内3号墳刊行会
 岩永哲夫・田ノ上哲 1978 「築池地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第20集、宮崎県教育委員会：pp. 77-87

第3章 出土遺物

- 臼杵 勲 1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号、古墳文化研究会：pp. 49-70
- 緒方俊輔編 2006『吾平原北第6号横穴墓』高千穂町文化財調査報告書第15集、高千穂町教育委員会
- 岡安光彦 1984「いわゆる『素環の轡』について—環状鏡板付轡の型式学的分析と編年—」『日本古代文化研究』創刊号、古墳文化研究会：pp. 95-120
- 小高幸男 1989「古墳出土銅の基礎的研究—金属製銅について—」『君津都市文化財センター研究紀要』第3号、君津都市文化財センター：pp. 19-90
- 鹿野 墨 2006「古墳出土の砥石」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2004年度共同研究成果報告書』財団法人大阪府文化財センター：pp. 175-188
- 川畑 純 2015『武器が語る古代史—古墳時代社会の構造転換—』京都大学学術出版会
- 楠本哲夫・朴美子編 1986「出土遺物地名表」『宇陀北原古墳』大宇陀町文化財調査報告書第1集、大宇陀町役場：pp. 133-175
- 小林謙一 1974a「甲冑製作技術の変遷と工人の系統（上）」『考古学研究』第20巻第4号、考古学研究会：pp. 48-68
- 小林謙一 1974b「甲冑製作技術の変遷と工人の系統（下）」『考古学研究』第21巻第2号、考古学研究会：pp. 37-49
- 阪口英毅 2008「いわゆる『銀留技法導入期』の評価」『古代武器研究』vol. 9、古代武器研究会：pp. 39-51
- 鈴木一有 2012「線刻鉄鏃の系譜」『マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第173集、国立歴史民俗博物館：pp. 457-475
- 鈴木 勉・松林正徳・戸高真知子 1992「宮崎、熊本県から出土した鉄鏃に残る6世紀の彫刻加工技術」『1992年度精密工学会秋季大会学術講演会講演論文集』精密工学会：pp. 667-668
- 角南聡一郎・田部剛士 2002「古墳出土砥石の基礎的研究—近畿地方の事例—」『奈良大学大学院研究年報』第7号、奈良大学大学院：pp. 303-328
- 関 義則 1991「逆刺独立三角・柳葉形鉄鏃の消長とその意義」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団：pp. 683-709
- 高木恭二 1981「圭頭斧箭式鉄鏃について」『城二号墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第3集、宇土市教育委員会：pp. 44-71
- 高木恭二 1982「圭頭斧箭式鉄鏃再考」『肥後考古』第2号、肥後考古学会：pp. 36-41
- 滝沢 誠 1991「銀留短甲の編年」『考古学雑誌』第76巻第3号、日本考古学会：pp. 16-61
- 滝沢 誠 2001「多田大塚古墳出土の短甲をめぐる」『静岡県の前方後円墳—個別報告編—』静岡県文化財報告書第55集、静岡県教育委員会：pp. 61-67
- 滝沢 誠 2008『古墳時代中期における短甲同工品に関する基礎的研究』静岡大学人文学部
- 田中新史 1978「御嶽山古墳出土の短甲」『考古学雑誌』第64巻第1号、日本考古学協会：pp. 28-44
- 豊島直博 2010『研究論集16 鉄製武器の流通と初期国家形成』奈良文化財研究所学報第83冊、奈良文化財研究所
- 西嶋剛広 2012「熊本地域出土銀留短甲の検討—編年的位置付けと配布の背景—」『マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第173集、国立歴史民俗博物館：pp. 381-409
- 野上文助編 1991『論集 武器』学生社
- 野田拓治 2007「古墳時代」『白水村史』白水村史編纂委員会：pp. 86-120
- 橋本達也 2003「副葬鉄器からみる南九州の古墳時代」『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』第6回九州前方後円墳研究会発表資料集、九州前方後円墳研究会：pp. 197-218
- 福岡市埋蔵文化財センター 2009「資料紹介2：博多遺跡群祇園町区から出土した古墳時代の鉄銅と鏡」『福岡市埋蔵文化財センター年報』第27号、福岡市教育委員会：pp. 21-22
- 古谷 毅 1996「古墳時代甲冑研究の方法と課題」『考古学雑誌』第81巻第4号、日本考古学会：pp. 58-85
- 水野敏典 2003「古墳時代中期における鉄鏃の分類と編年」『橿原考古学研究所論集』第14号、橿原考古学研究所：pp. 255-276
- 宮代栄一・林田和人・美濃口紀子 2014「熊本市稲荷山古墳出土遺物の研究」『古文化談叢』第71集、九州古文化研究会：pp. 135-202
- 三好栄太郎 2015「南九州における古墳時代中期の腸扶柳葉鏃」『Archaeology from the South』Ⅲ、本田道輝先生退職記念論文集、本田道輝先生退職記念事業会：pp. 233-245
- 吉村和昭 1988「短甲系譜試論—銀留技法導入以後を中心として—」『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』第13冊、奈良県立橿原考古学研究所：pp. 23-39
- 渡邊加奈子 2010「畿内における古墳時代の刀子—大和地方を中心に—」『古代学研究』第185号、古代学研究会：pp. 21-37
- 渡辺みどり 1998「古墳時代後期の円環系銅釧の研究」『峰考古』第13号、宇都宮大学考古学研究会：pp. 95-122

第4章 まとめ

高塚横穴群は、かつて熊本県阿蘇郡高森町大字永野原字境ノ口に所在した。そこは、宮崎県との県境に面した場所であり、東に向かうとすぐに宮崎県西臼杵郡高千穂町となる。阿蘇外輪山の南東側、日向灘に注ぐ五ヶ瀬川の最上流域にあたり、地形は阿蘇火山噴出物が堆積した凝灰岩台地である。現在、横穴群は採石のため完全に失われている。

高塚横穴群1～3号墓の発掘調査が実施されたのは1988年6月のことである。しかし、その後、簡単な報告がなされたことはあったが[野田1988・2007]、正式な発掘調査報告書が刊行されることはなかった。また、この発掘調査が実施される以前には、当横穴群から横矧板鋌留短甲が不時発見されていた。その存在は一部には知られていたが[野田2007]、詳細が報告されることはなかった。

高塚横穴群が築かれた場所は、相当に山深い谷あいの奥地である。しかし、そこから東に進めば高千穂町を經由して延岡市（日向灘）に達し、西に進めば阿蘇カルデラ盆地の南側、南郷谷（高森町内）に入ることができる。また、北は大分県竹田市に、南は宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町に通じている。今、現地立つと、なぜこのような場所が横穴群の造営地に選ばれたのかと思わせるような辺鄙なところであるが、周囲を広く見渡せば阿蘇地域東辺の東西南北を結ぶ要衝の地の1つであることがわかる。また、短甲をはじめとする出土遺物の事前調査によって、その内容を明らかにすることは、九州島内のみではなく少なくとも西日本における情報伝達・文物交流のあり方を探るうえできわめて有益なのではないかと思われた。

そこで、本研究では、高塚横穴群出土遺物の調査・分析を行うことにより、古墳時代の阿蘇地域を介した交通ルート的一端を明らかにすることを目指した。当初は出土遺物の検討のみに主眼を置いていたが、はからず平成28年(2016年)熊本地震後の野田拓治氏(高塚横穴群発掘調査担当者)宅の片付け作業の過程で、1～3号墓発掘調査時作成の実測図や写真等が発見されたことから、横穴構造や遺物出土状況についても検討することが可能となり、一部に不足はあるもののなんとか発掘調査報告書としての体裁も整えることができた。そうした検討の成果は前章までに詳述されているが、以下ではそれらの要点を簡単に整理したうえで、高塚横穴群の九州島内における位置付けについて考えてみたい。

第1節 発掘調査資料・出土遺物の調査の成果

1 横穴群および横穴の構造

横穴群 発掘調査された横穴は3基であるが、野田拓治氏が「三基を調査し、さらに数基の存在を確認した」と記していることから[野田2007:p.104]、少なくとも5基以上で群をなしていたと思われる。発掘調査の実施以前に短甲が不時発見された横穴の存在も念頭に置けば、もう少し基数が増える可能性がある。

横穴 横穴の構造が分かるのは、発掘調査された1～3号墓の3基である。いずれも南東方向に開口する(以下、混乱を避けるため、玄室の前壁側を東として記述する)。3基とも、玄室の平面形は奥壁側がやや狭くなる台形状で、天井部は棟線や軒先線が明確に表現されない低いドーム形である。玄室床面の中央部には羨道から続く中央通路があり、その両側に屍床が1箇所ずつ配されている。いわゆる川の字形の屍床配置である。中央通路と屍床とは削り残された低い仕切りによって隔てられている。屍床の前壁沿いには枕が造り付けられている。閉塞は、羨門に凝灰岩製の板石を立てかけることによってなされている。前庭部は逆台形状の平面形をなすと思われる。

1～3号墓の玄室を比較すると、いずれも台形状だが1号墓がもっとも方形に近く、2号墓、3号墓の順に前壁幅に対する奥壁幅の割合が小さくなる。後述する出土鉄鏃の時期的位置付けを参考にすれば、1号墓、2号墓、3号墓の順に築造されたと想定されるから、方形に近い台形状と明確な台形といったこの玄室平面形の違いは、前者から後者への時期的な形態変化を表しているにとらえられる。3号墓玄室の平面形は1・2号墓よりもかなりいびつであるので、精巧なものから粗雑なものへの変化としても理解できよう。さらに、被葬者数との関連も考慮すべきなので一概にいえないかもしれないが、造り付け枕の数が1号墓では計4つ、2号墓では計2つ、3号墓では計1つとなっているから、造り付け枕の数の減少傾向もうかがえる。なお、写真から判断するかぎり、1・2号墓に比べて3号墓玄室壁面の赤色が不明瞭であるため、赤色顔料（ベンガラ）の塗布も厚いものから薄いものへ変化している可能性がある。

2 出土人骨

1号墓 第1屍床（左屍床）から、1体の人骨が出土した。男性とされる〔野田1988〕。頭位方向を東（前壁側）とし、仰臥伸展葬である。一方、第2屍床（右屍床）からは、3体の人骨が出土した。すべて男性とされ、もっとも中央通路側の1体が西頭位、ほかの2体が東頭位である。いずれも仰臥伸展葬である。

2号墓 第1屍床（左屍床）、第2屍床（右屍床）とも1体ずつの人骨が出土した。第1屍床の人骨は女性、第2屍床は男性とされ、いずれも東頭位、仰臥伸展葬である。

1号墓、2号墓の人骨とも、詳細な鑑定結果を掲載することができなかった。この点は今後に残された大きな課題である。なお、3号墓では人骨は出土していない。

3 出土遺物

（1）種類と数

出土遺物の種類と数については、発掘調査直後にまとめられたもの〔野田1988〕と現存数には少なくない異同がみられる。また、出土位置が不明となっている遺物も若干存在する。そのため、出土遺物の種類と数の本来の姿を、いま正確に記すことは不可能である。したがって、ここでそれをまとめることはせず、本書28ページの表1・2で出土遺物の種類と数のまとめにかえたい。

（2）1号墓出土遺物

第1屍床 現在確認できる第1屍床の出土遺物には、鉄剣（短剣）、鉄鏃、刀子がある。ここで出土した人骨は1体のみであるから、それら遺物の副葬時期の同時性はきわめて高い。鉄鏃には長頸鏃と平根系の鏃があり、それらと刀子がひとまとまりとなって人骨の足元で出土した。鉄鏃には、圭頭鏃の特徴と長頸鏃の特徴を併せもつ長頸柳葉鏃や平根系の圭頭鏃といった南九州に比較的多い型式が一定数含まれる。鉄鏃の時期は、古墳時代中期後葉から後期初頭、須恵器編年ではTK 23～MT 15型式段階頃に位置付けられる。

第2屍床 現在確認できる第2屍床の出土遺物には、鉄刀（短刀）、鉄鏃、刀子、玉類（管玉・ガラス玉）がある。ここで出土した人骨は3体であり、被葬者と副葬品との対応関係は厳密には確定できない。とくに、鉄器はすべて右側壁沿いで出土しているため、追葬時の片付け行為の影響を受けている可能性も考慮される。ただし、出土位置から、管玉は中央の被葬者（3号人骨）に、ガラス玉は右端の被葬者（4号人骨）にともなうものと思われる。鉄鏃と刀子1点は右側壁沿いの奥壁側でまとまって出土したが、鉄鏃はその出土位置からA～Cの3群に分けられる。A群は長頸鏃のみ、B群は長頸片刃鏃と平根系鏃、C群は大型の平

根系鏃のみで構成されており、鉄鏃型式ごとに副葬位置が区別されていた可能性が高い。鉄鏃の時期は、A群が中期末、TK 47 型式段階に、B群が中期後葉から後期初頭、TK 23～MT 15 型式段階頃に位置付けられ、C群はA・B群と同様の時期と推測される。すなわち、分け置かれた鉄鏃のまとまり相互に明確な時期差は認められない。このことから、すべての鉄鏃が1回の埋葬行為にとまなう可能性、あるいは複数回の埋葬行為の集積だとしても異なる埋葬同士の時間的懸隔がそれほど大きくはない可能性が考えられる。なお、第1屍床と同様、鉄鏃には南九州に比較的多い型式が一定数含まれている。また、円文を線刻する超大型の特殊な鉄鏃の出土も注目される。

(3) 2号墓出土遺物

第1屍床 現在確認できる第1屍床の出土遺物には、鉄刀（大刀）、鉄鏃、刀子がある。ここで出土した人骨は1体のみであるから、それら遺物の副葬時期の同時性はきわめて高い。鉄刀は直角片闊隅抉尻先細莖タイプで、6世紀前半を中心とした年代が与えられている型式である〔臼杵 1984〕。鉄鏃と刀子は左側壁沿いの中央付近（被葬者の左腰あたり）でまとまって出土した。鉄鏃は、圭頭鏃と長頸鏃の特徴を併せもつ長頸柳葉鏃、平根系の圭頭鏃や腸抉柳葉鏃など、南九州に比較的多い型式がほとんどである。その時期は、中期後葉から後期前半、TK 23～TK 10 型式段階頃に位置付けられる。なお、出土人骨は女性とされているので、鉄鏃等の武器がともなっていることが注意される。

第2屍床 現在確認できる第2屍床の出土遺物には、鉄刀（大刀）、鉄鏃、骨鏃、刀子がある。第1屍床と同様、ここで出土した人骨は1体のみであるから、それら遺物の副葬時期の同時性はきわめて高い。鉄刀は直角片闊隅抉尻先細莖タイプで、6世紀前半を中心とした年代が与えられる〔臼杵 1984〕。鉄鏃と骨鏃、刀子は右側壁寄りの中央付近（被葬者の右腰あたり）でまとまって出土した。鉄鏃と骨鏃はその出土位置からA・Bの2群に分けられる。A群は長頸鏃のみ、B群は平根系鏃と骨鏃のみで構成され、型式ごとに分け置かれていたと考えられる。鉄鏃の時期は、後期前葉から中葉、TK 10 またはMT 85 型式段階に位置付けられる。なお、南九州で多く出土する骨鏃が副葬されている点は注目される。

中央通路 現在確認できる中央通路の出土遺物には、鉄鏃と馬具（轡・辻金具・鉸具）がある。鉄鏃は短莖鏃の1点のみである。馬具のうち轡は北山2号墳型に相当し〔岡安 1984〕、後期前葉、MT 15～TK 10 型式段階に位置付けられる。辻金具と鉸具は、その轡に接した出土位置および出土点数から、面繫に関するものと推測できる。なお、これら中央通路出土の遺物は、第2屍床に近接した位置で出土していること、中央通路出土轡と第2屍床出土鉄鏃の時代的位置付けに大きな齟齬がないことから、第2屍床の被葬者にとまなう可能性が高いと考えられる。

(4) 3号墓出土遺物

第1屍床 現在確認できる第1屍床の出土遺物には、鉄刀（大刀）、鉄鏃、刀子、砥石、鉄釧がある。ここでは人骨は出土していないが、それら遺物の多くが左側壁沿いでまとまって出土していることから、同一時期の副葬である可能性も考慮される。鉄刀は撫角片闊隅抉尻先細莖タイプと思われ、6世紀前半から7世紀初頭に用いられた型式とされる〔臼杵 1984〕。鉄鏃はその出土位置からA・Bの2群に分けられる。A群は長頸鏃と短莖鏃のみ、B群は平根系鏃のみで構成され、型式ごとに分け置かれていたと考えられる。鉄鏃の時期は、後期中葉、MT 85 型式段階を中心にTK 43 型式段階までに位置付けられる。鉄鏃には南九州に比較的多い型式が一定数含まれている。砥石や鉄釧の出土も注目される。それらは全国的にも出土がみられるが〔角南・田部 2002, 鹿野 2006, 小高 1989, 渡辺 1998〕、九州前方後円墳研究会による集成にもとづけば、南九州の地下式横穴でも比較的多い器物である〔九州前方後円墳研究会 2001〕。なかでも、主環の鉄棒

の断面形が円形の小環付鉄釧は南九州での出土が目立ち、注意すべきものである。

第2 屍床 現在確認できる第2 屍床の出土遺物には、鉄鏃と刀子がある。第1 屍床と同様、ここでも人骨は出土していないが、いずれも屍床東側の近接した位置で出土していることから、同一時期の副葬である可能性が考慮される。鉄鏃はその出土位置からA・Bの2群に分けられる。A群は長頸鏃のみ、B群は平根系鏃のみで構成され、型式ごとに分け置かれていたと考えられる。鉄鏃の時期は、後期中葉、MT 85 型式段階を中心にTK 43 型式段階までに位置付けられる。南九州に比較的多い型式の鉄鏃が含まれている。

(5) 不時発見遺物

現在確認できる不時発見遺物には、短甲、鉄剣、鉄鏃がある。これらのうち、短甲は1～3号墓発掘調査以前に不時発見されたのち地権者（甲斐裁氏）宅で保管されていたもの、鉄剣と鉄鏃は2002年7月に熊本県教育委員会に寄託されたものである。鉄剣・鉄鏃の発見時の状況は不明であるが、おそらく1～3号墓の発掘調査担当者である野田拓治氏（熊本県教育委員会）が地権者の甲斐裁氏から預かったものと思われる。とすれば、短甲発見時に同時に回収されたものである可能性が高いと考えられる。

短甲は、前後胴7段構成、右前胴開閉式の横剗板鉾留短甲である。大型鉾であること、後胴上段帯金の結合に用いられる鉾の数が上下各4鉾ときわめて少数であること、地板の形状が不整形であることなどから、もっとも新しい段階の鉾留短甲であると評価できる。時期は、中期末、TK 47 型式段階に位置付けられる。鉄鏃は3点あり、中期後半、TK 23～TK 47 型式段階頃に位置付けられる。これら鉄鏃は、1～3号墓出土の鉄鏃に比べて明らかに古相の傾向がうかがえる点は重要で、短甲にともなうものと判断しても時期的な矛盾は生じない。

第2節 横穴群の評価

1 横穴群の時期

1号墓は古墳時代中期後葉から後期初頭、TK 23～MT 15 型式段階頃に、2号墓は第1 屍床の鉄鏃を根拠とすれば中期後葉から後期前半、TK 23～TK 10 型式頃、第2 屍床と中央通路の出土遺物を重視すれば後期前葉、TK 10 型式段階前後に、3号墓は後期中葉、MT 85 型式段階を中心にしてTK 43 型式段階までに築造されたと推測できる。また、不時発見の短甲と鉄鏃が同じ横穴に副葬されていたとすれば、その横穴は中期後葉、TK 23～TK 47 型式段階頃に築造されたものと思われる。

すなわち、現状の資料から判断すれば、高塚横穴群の造営開始時期は中期後葉にさかのぼり、後期中葉まで造営が継続したと推測できる。各横穴の築造順序は、短甲出土の横穴がもっとも古く、次いで1号墓、2号墓、3号墓の順であったと判断できる。

2 横穴群の史的意義

横穴の構造とその系譜 高塚横穴群に築かれた横穴の構造的特徴を今一度整理すれば、①玄室平面形は奥壁側がやや狭い台形状であること、②玄室天井部は低いドーム形であること、③玄室両側壁沿いに1箇所ずつの屍床が配置され、また屍床の前壁沿いには造り付けの枕が設置されること、④屍床と中央通路は削り残された低い仕切りによって隔てられること、⑤玄室壁面に赤色顔料（ベンガラ）が塗布されること、⑥凝灰岩板石によって閉塞されること、とまとめることができる。

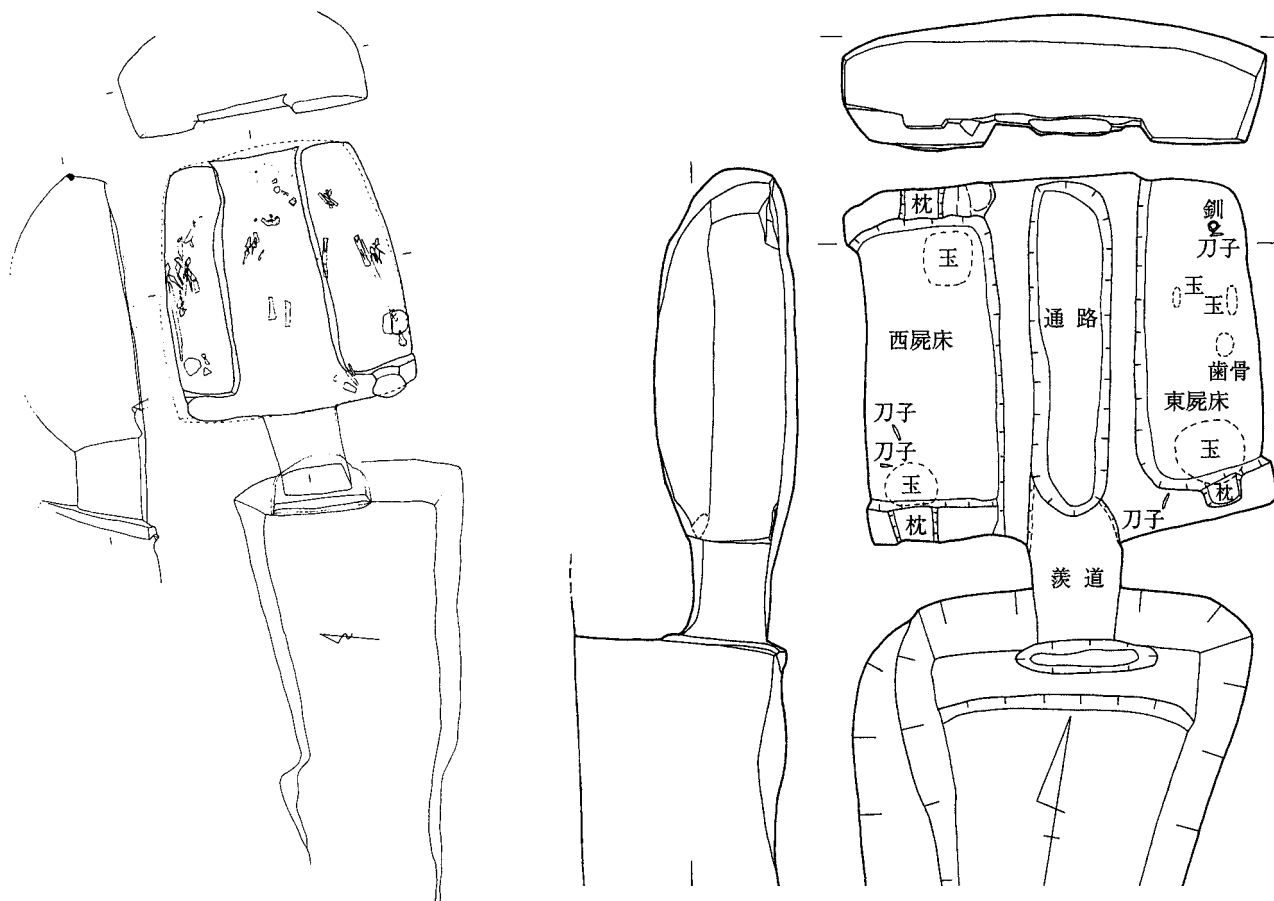
こうした特徴を有す横穴は、これまでの研究でも指摘されているように、宮崎県西臼杵郡高千穂町を中心とした五ヶ瀬川上流域に多く分布する(図82-1~3)。長津宗重は「五ヶ瀬川上流域の横穴墓」としてこの種の横穴をていねいに紹介しており[長津1991: pp. 9-13]、また面高哲郎はこの種の横穴を第三類に分類し、それは宮崎県内では五ヶ瀬川上流域にしかみられないこと、明確な屍床を配すというその構造は肥後地域からの影響を受けたものである可能性が高いことを指摘している[面高1997: pp. 489-493]。藤本貴仁は、西臼杵地域(五ヶ瀬川上流域)におけるこの種の横穴の変遷を検討し、その築造は5世紀末頃に開始され6世紀代には終了すること、その構造は中央通路幅が屍床幅よりも広いものから狭いものへ、また中央通路床面のレベルが屍床床面よりも高いものから低いものへ、さらに造り付け枕の数が少ないものから多いものへ変化する傾向があることを述べている。また、当地域の横穴の出現時期は肥後地域の横穴よりも古いとみられることから、その系譜を肥後地域に求めると時期的齟齬が生じること、それよりは豊後地域の太田川上流域の初期横穴との関連を考慮すべきであることを指摘した[藤本2001: pp. 590-591]。

こうした先行研究を参照すれば、高塚横穴群に築かれた横穴は、宮崎県高千穂町域を中心とした五ヶ瀬川上流域の横穴と同じに分類できるものであることは明らかである。現在の県境にとらわれず、五ヶ瀬川上流域の横穴として一体的にとらえられるべきものである。

ところで、高塚横穴群1~3号墓にみられる構造の時期的変化は、上述の藤本貴仁の見解とは若干異なっている。中央通路幅は1号墓の段階から一貫して屍床幅よりも狭く、また中央通路床面と屍床床面のレベルは1号墓では中央通路の方がわずかに高いが、次の2号墓ではほぼ同じであり、しかし3号墓になるとふたたび中央通路の方がわずかに高くなっている。造り付け枕の数は、藤本の指摘とは逆に、減少傾向にある。こうした点から想像されるのは、横穴の細部の構造変化は、造営主体ごとに異なっていた可能性である。とくに造り付け枕の数は、同じ横穴への埋葬が予定される親族組織の規模の大小にも大きく左右されると思われるから、枕の数の違いを時期差という理由のみで解釈するには限界がある。藤本の指摘をふまえて、近接する横穴群であったとしてもその細部の構造変化は同じでない可能性も念頭に置きながら、さらに多くの事例の検討を行う必要があるだろう。

なお、明確な屍床を配するという構造の系譜をどこに求めるのかについては、私は横穴に限って考察する必要はないと考える。横穴式石室を含めた追葬可能な横穴系埋葬施設全般を視野に置けば、肥後地域にその系譜を求めることは十分に可能であると思う。ただし、コの字形屍床配置ではなく川の字形屍床配置が主流となる点は、五ヶ瀬川上流域の特徴といってよい。さらに周囲に類例を求めれば、大分県竹田市にも枕付き屍床を玄室側壁沿いに配す類似の横穴(稲荷山横穴群3号墓)があり(図82-4)、そのことは五ヶ瀬川上流域(宮崎県高千穂町周辺)と太田川上流域(大分県竹田市周辺)とのあいだに密接な交流関係があったことを暗示している。これは、両地域の横穴(高塚横穴群と扇森山横穴)から構造の酷似した短甲が出土していることの意味を考察するうえでも重要な示唆を与える事実である⁽¹⁾。

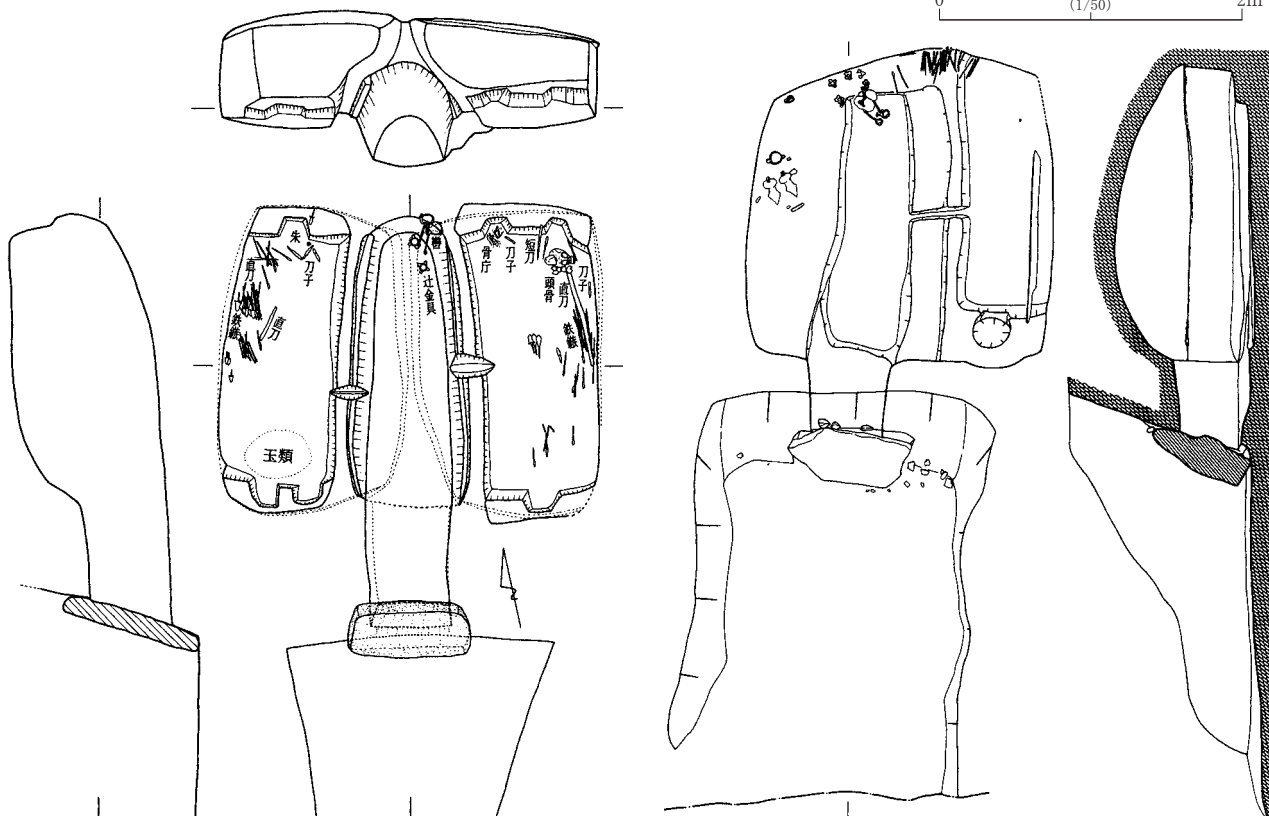
遺物にみる地域的つながり まず、遺物の種類や出土状況からうかがえる五ヶ瀬川上流域の横穴の特徴をみておこう。これに関しては、面高哲郎による次のような的確な整理がある。すなわち、「副葬品の組み合わせは、剣・刀・鎌・刀子を中心として玉類の装身具、馬具類が加わるが、現在のところ、鏡は一面もなく、耳環についても一点も出土していない。また、須恵器・土師器が副葬品として玄室内から発見された例はない。玄室内から須恵器などの土器類が確認されていないことは、この地域の一つの特徴といえる」[面高1997: pp. 492-493]。高塚横穴群出土遺物の内容もこれに完全に合致する。くわえて、類例は少ないが、高塚横穴群の調査成果を勘案すれば、砥石や鉄釧を副葬することがある点も、当地域の横穴の特徴の1つとして数えてもよいのかもしれない。砥石は高千穂町春姫登横穴から、鉄釧は高千穂町吾平原北横穴群6号墓から出土している。また、轡と辻金具の中央通路への副葬は高千穂町押方南平横穴群55-1号墓(図82-3)で



1. 宮崎県高千穂町春姫登横穴

2. 宮崎県高千穂町吾平原北横穴群6号墓

0 (1/50) 2m



3. 宮崎県高千穂町押方南平横穴群 55-1号墓

4. 大分県竹田市稲荷山横穴群3号墓

図 82 五ヶ瀬川上流域および大野川上流域の横穴の諸例

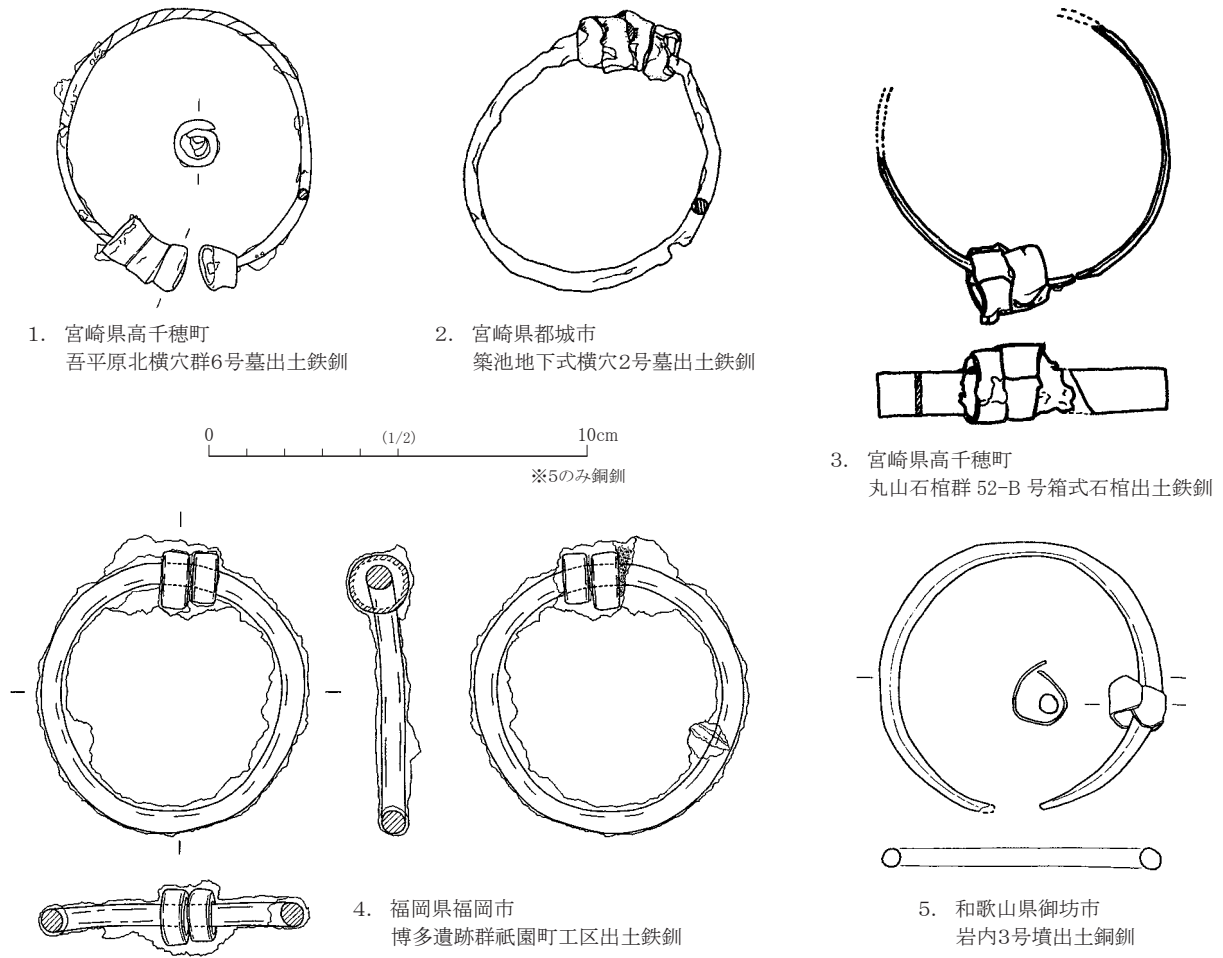


図 83 小環を付す釦の諸例

もみることができ、そうした馬具副葬位置の共通性も特徴の1つといえるだろう。

さて、上述してきたように、高塚横穴群出土遺物には南九州とのつながりをうかがわせるものが少なからず存在する。なかでも鉄鏃にその傾向が顕著である。すなわち、圭頭鏃と長頸鏃の特徴を併せもつ長頸柳葉鏃 [橋本 2003 : p. 203] や平根系の圭頭鏃 [高木 1981・1982]、弱い山形突起を有し腸袂が弧を描きながら外側に開く平根系の腸袂柳葉鏃 [三好 2015] といった南九州で多く出土する型式が一定数含まれているのである。ほかに、骨鏃 [菊地 2013] や主環の断面形が円形の小環付鉄釦 (図 83) も南九州との関連を強く示唆する遺物である。こうした点から、高塚横穴群の造営主体が南九州との密接な交流関係を有していたことは明らかだろう。

また、1号墓第2屍床で出土した円文を刻む超大型の特殊な鉄鏃 (図 42-31) とよく似た複雑な透孔を有する大型の平根系鉄鏃が、熊本県阿蘇郡西原村きつね塚古墳群中の石棺から出土している [小谷 2010]。正式には未報告の資料だが、その実測図はかつて広島市弘住遺跡の発掘調査報告書に掲載された [阿部 1983 : p. 24]。この鉄鏃の野田拓治氏によるより詳細な製図済みの線画が残されていたので図 84 に提示する。これをみれば高塚横穴群出土の鉄鏃と酷似していることは明らか

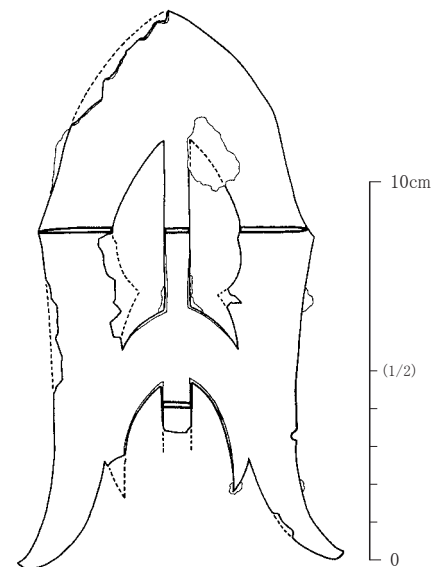


図 84 熊本県西原村きつね塚古墳群石棺出土鉄鏃実測図

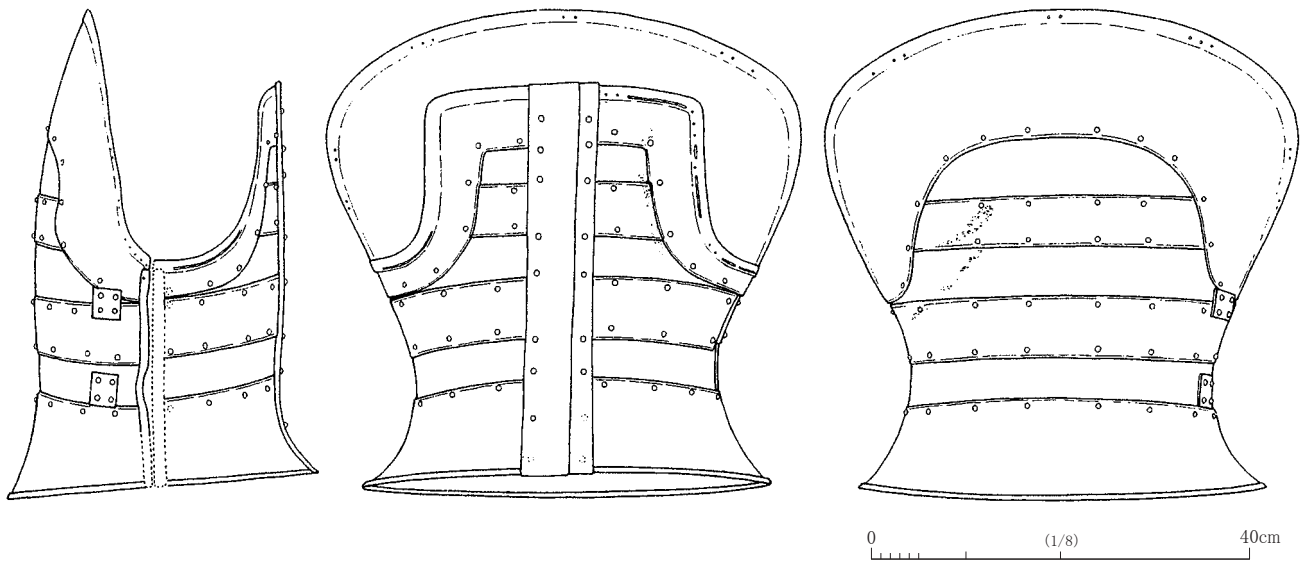


図 85 大分県竹田市扇森山横穴出土短甲実測図

かで、こうした複雑な構造の共通性から、少なくともそれらの製作者がきわめて近い関係にあったと想定することは許されよう。西原村は、高塚横穴群が築かれた阿蘇外輪山南東の反対側、外輪山の南西に位置している。高塚横穴群とは阿蘇カルデラ盆地南部の南郷谷を經由して、あるいは外輪山の南辺を通じて結ばれており、このよく似た特殊な鉄鍔の両地域での出土は古墳時代阿蘇ルートが存在を具体的にうかがわせるものである。

さらに、横矧板鉾留短甲の副葬は、高塚横穴群の造営主体と近畿中央政権との関連の密接さも雄弁に物語る。また、当地と同じ阿蘇外輪山東側に位置する大分県竹田市扇森山横穴で構造の酷似した短甲（図 79・85）が出土していること、その扇森山横穴の北約 150 m に築かれた稻荷山横穴群 3 号墓（図 82- 4）が五ヶ瀬川上流域の横穴とよく似た屍床構造をとることはきわめて示唆的である。五ヶ瀬川上流域（高千穂町周辺）の首長と大野川上流域（竹田市周辺）の首長が密に連絡を取り合いつつ、同じ時期に近畿中央政権のもとに出仕し、同型式の短甲の配布を受けた可能性さえ想像させる。

このように、阿蘇火山の山深い谷あいにも営まれた高塚横穴群であるが、それは南九州を中心とした九州島の各地さらには近畿中央政権とも密接につながった首長により造営された横穴群と評価できる。

今後、今回の報告に盛り込むことができなかった出土人骨の形質的な調査・分析の実現を模索しつつ、阿蘇火山周辺の古墳あるいは集落のさらなる検討を通じて、古墳時代に阿蘇地域が果たした役割についての考察を深めていきたい。

（杉井 健）

註

（1）田代健二は、山国川の下流域、大分県中津市三光に所在する上ノ原横穴群の 21 号墓が T K 47 型式段階に位置付けられること、その玄室は縦長台形状の平面形でドーム形の天井形態であること、玄室両側壁に沿って遺体が安置されることなどに注目し、五ヶ瀬川流域の横穴はこうした山国川下流域の横穴の影響により出現した可能性を想定している [田代 2005 : pp. 39-40]。

第 2 部第 4 章 引用・参考文献

- 阿部 滋 1983 「熊本県阿蘇郡西原村字小森さつね塚古墳出土大型鉄鍔実測図」『弘住遺跡発掘調査報告』広島県の文化財第 25 集、広島市教育委員会 : p. 24
- 池邊千太郎 2001 「豊後地域における横穴墓の様相」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第 I 分冊、第 4 回九州前方後円墳研究

- 会資料集、九州前方後円墳研究会：pp. 567-584
- 石川恒太郎 1983「一本木横穴」『高千穂町遺跡詳細分布調査報告書』高千穂町教育委員会：p. 13
- 石川恒太郎・内藤芳篤 1979「丸山石棺群発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第21集、宮崎県教育委員会：pp. 19-36
- 岩井顕彦編 2014『和歌山県御坊市岩内3号墳―日高川流域の中期古墳―』岩内3号墳刊行会
- 岩永哲夫・田ノ上哲 1978「築池地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第20集、宮崎県教育委員会：pp. 77-87
- 白杵 勲 1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号、古墳文化研究会：pp. 49-70
- 宇野慎敏 2011「肥後横穴墓の動向とその背景」『熊本古墳研究』第4号、熊本古墳研究会：pp. 23-34
- 緒方俊輔編 2006『吾平原北第6号横穴墓』高千穂町文化財調査報告書第15集、高千穂町教育委員会
- 岡安光彦 1984「いわゆる『素環の轡』について―環状鏡板付轡の型式学的分析と編年―」『日本古代文化研究』創刊号、古墳文化研究会：pp. 95-120
- 小高幸男 1989「古墳出土釧の基礎的研究―金属製釧について―」『君津郡市文化財センター研究紀要』第3号、君津郡市文化財センター：pp. 19-90
- 面高哲郎 1997「横穴墓の形式とその分布」『宮崎県史』通史編 原始・古代1、宮崎県：pp. 483-500
- 鹿野 壘 2006「古墳出土の砥石」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2004年度共同研究成果報告書』財団法人大阪府文化財センター：pp. 175-188
- 菊地芳朗 2013「骨格製品」『古墳時代の考古学』第4巻、副葬品の型式と編年、同成社：pp. 219-231
- 城戸 誠・佐伯 治 1987「稲荷山横穴墓群」『菅生台地と周辺の遺跡』XII、大分県竹田地区遺跡群発掘調査報告、竹田市教育委員会：pp. 233-236
- 九州前方後円墳研究会 2001『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第4回九州前方後円墳研究会資料集
- 小谷桂太郎 2010「きつね塚古墳出土の鉄鏃」『西原村誌』西原村：p. 128
- 鈴木一有 2012「線刻鉄鏃の系譜」『マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第173集、国立歴史民俗博物館：pp. 457-475
- 角南聡一郎・田部剛士 2002「古墳出土砥石の基礎的研究―近畿地方の事例―」『奈良大学大学院研究年報』第7号、奈良大学大学院：pp. 303-328
- 曾我部長良 1975『日向の横穴』私家版
- 曾我部長良 1986『日向の横穴 続編』私家版
- 田代健二 2005「横穴墓の成立過程」『古文化談叢』第53集、九州古文化研究会：pp. 31-46
- 高木恭二 1981「圭頭斧箭式鉄鏃について」『城二号墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第3集、宇土市教育委員会：pp. 44-71
- 高木恭二 1982「圭頭斧箭式鉄鏃再考」『肥後考古』第2号、肥後考古学会：pp. 36-41
- 高木正文 1983「阿蘇外輪山上の城山横穴群」『えとのす』第22号、新日本教育図書：pp. 66-68
- 高千穂町教育委員会 1996『吾平原横穴墓群発掘調査現地説明会』
- 高橋 徹 1980「短甲について」『宝剣山古墳』佐伯市向渡町所在古墳調査報告、佐伯市教育委員会：pp. 21-27
- 田中 茂 1993「平清水横穴群」『宮崎県史』資料編 考古2、宮崎県：pp. 42-54
- 長津宗重 1991「日向の横穴墓」『おおいた考古』第4集、大分県考古学会：pp. 7-25
- 長津宗重 1993「吾平原横穴群」『宮崎県史』資料編 考古2、宮崎県：pp. 28-32
- 永友良典 1993「丸山石棺群（奥鶴石棺群）」『宮崎県史』資料編 考古2、宮崎県：pp. 45-48
- 野田拓治 1988『高塚横穴群発掘調査報告会資料』熊本県教育庁文化課・高森町教育委員会
- 野田拓治 2007「古墳時代」『白水村史』白水村史編纂委員会：pp. 86-120
- 橋川敬子 1998「ガラス玉からみた埋葬順序及び相対年代の試論」『宮崎考古』第16号、宮崎考古学会：pp. 106-115
- 橋本達也 2003「副葬鉄器からみる南九州の古墳時代」『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』第6回九州前方後円墳研究会発表資料集、九州前方後円墳研究会：pp. 197-218
- 日高孝治 1993「田原横穴群」『宮崎県史』資料編 考古2、宮崎県：pp. 42-44
- 平野芳英・山本京子編 1981『阿蘇町塔ノ木古墳群ドンベ塚・阿蘇町御塚横穴群A・B穴』研究室活動報告13、熊本大学文学部考古学研究室
- 福岡市埋蔵文化財センター 2009「資料紹介2：博多遺跡群祇園町工区から出土した古墳時代の鉄釧と鏡」『福岡市埋蔵文化財センター年報』第27号、福岡市教育委員会：pp. 21-22
- 藤本貴仁 2001「日向地方の横穴墓」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第I分冊、第4回九州前方後円墳研究会資料集、九州前方後円墳研究会：pp. 585-606

第4章 まとめ

- 北郷泰道 1993「下赤谷横穴群」『宮崎県史』資料編 考古2、宮崎県：pp. 26-27
- 北郷泰道 1993「押方南平横穴群」『宮崎県史』資料編 考古2、宮崎県：pp. 38-41
- 北郷泰道 1993「春姫登横穴」『宮崎県史』資料編 考古2、宮崎県：pp. 49-51
- 北郷泰道・田尻隆介 1981「南平横穴墓発掘調査（55- 1号～2号）」『宮崎県文化財調査報告書』第23集、宮崎県教育委員会：pp. 1-31
- 北郷泰道・田尻隆介 1989「春姫登横穴墓」『陣内遺跡（第2次調査）・丸山石棺群（第3次調査）・春姫登横穴墓』高千穂町文化財調査報告書第8集、高千穂町教育委員会：pp. 105-124
- 松本健郎 1982「中九州の横穴」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』下巻、森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会：pp. 1215-1240
- 真野和夫 1976「竹田市扇森山横穴出土遺物」『大分縣地方史』第84号、大分縣地方史研究会：pp. 84-88
- 美濃口雅朗 2001「地域の概要－肥後－」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第I分冊、第4回九州前方後円墳研究会資料集、九州前方後円墳研究会：pp. 525-558
- 三好栄太郎 2015「南九州における古墳時代中期の腸袂柳葉鏃」『Archaeology from the South』III、本田道輝先生退職記念論文集、本田道輝先生退職記念事業会：pp. 233-245
- 渡辺みどり 1998「古墳時代後期の円環系銅釧の研究」『峰考古』第13号、宇都宮大学考古学研究会：pp. 95-122

第2部 挿図出典

- 図16：野田民子氏提供
- 図17：杉井健撮影
- 図42-31：鈴木 2012
- 図72～78：橋本達也氏提供
- 図79：杉井健撮影
- 図82- 1：北郷・田尻 1989、2：緒方編 2006、3：北郷・田尻 1981、4：城戸・佐伯 1987
- 図83- 1：緒方編 2006、2：岩永・田ノ上 1978、3：石川・内藤 1979、4：福岡市埋蔵文化財センター 2009、5：岩井編 2014
- 図84：野田拓治氏原図
- 図85：真野 1976

第3部 阿蘇市上御倉古墳・下御倉古墳の 測量調査報告

第1章 上御倉古墳・下御倉古墳の位置と調査経過

古墳の立地 上御倉古墳は熊本県阿蘇市一の宮町手野宮の前 2295 番地、下御倉古墳は同 2288 番地に所在する。下御倉古墳は上御倉古墳の東約 55 m にあり、両者あわせて手野古墳群〔乙益 1962〕あるいは西手野古墳群〔野田 1983〕と呼ばれる。そこは、阿蘇谷北東隅の北外輪山裾部、象ヶ鼻と古城ヶ鼻に挟まれた谷筋にあたり（図 86、図版 36）、古墳の北東すぐには國造神社が鎮座している。

過去の調査 上御倉古墳、下御倉古墳とも横穴式石室を内部主体とし、いずれの石室も江戸時代には開口していたらしい〔乙益 1962〕。これら石室の実測図がはじめて提示されたのは、『熊本県文化財調査報告』第 3 集〔乙益 1962, 以下 1962 年報告〕においてである。新聞報道によれば、熊本県立山鹿高等学校考古学部による両古墳の実測調査が 1958 年 8 月下旬に実施されているから〔熊本日日新聞社 1958.9.2〕、1962 年報告掲載の実測図はこのときに作成されたものの可能性があるが、確証を得ない。上御倉古墳石室羨道の前門近くに立ててあった板石に白色と黄色による装飾文様が描かれているとされたのも、この山鹿高校による調査時である〔熊本日日新聞社 1958.9.2, 原口 1976〕。しかし、現在、この板石の存在は確認できない。なお、両古墳ともこれまでに墳丘測量図が提示されたことはない。

ところで、1962 年報告に示された石室実測図には水準線が描かれていない。そのため、断面図の水平はスケールバーを基準に推測するしかないが、そうした場合、上御倉古墳では羨道の天井面が羨門に向かってレベルを下げ、一方、下御倉古墳ではレベルを上げるような印象を受ける（図 87）。これらのうち、少なく

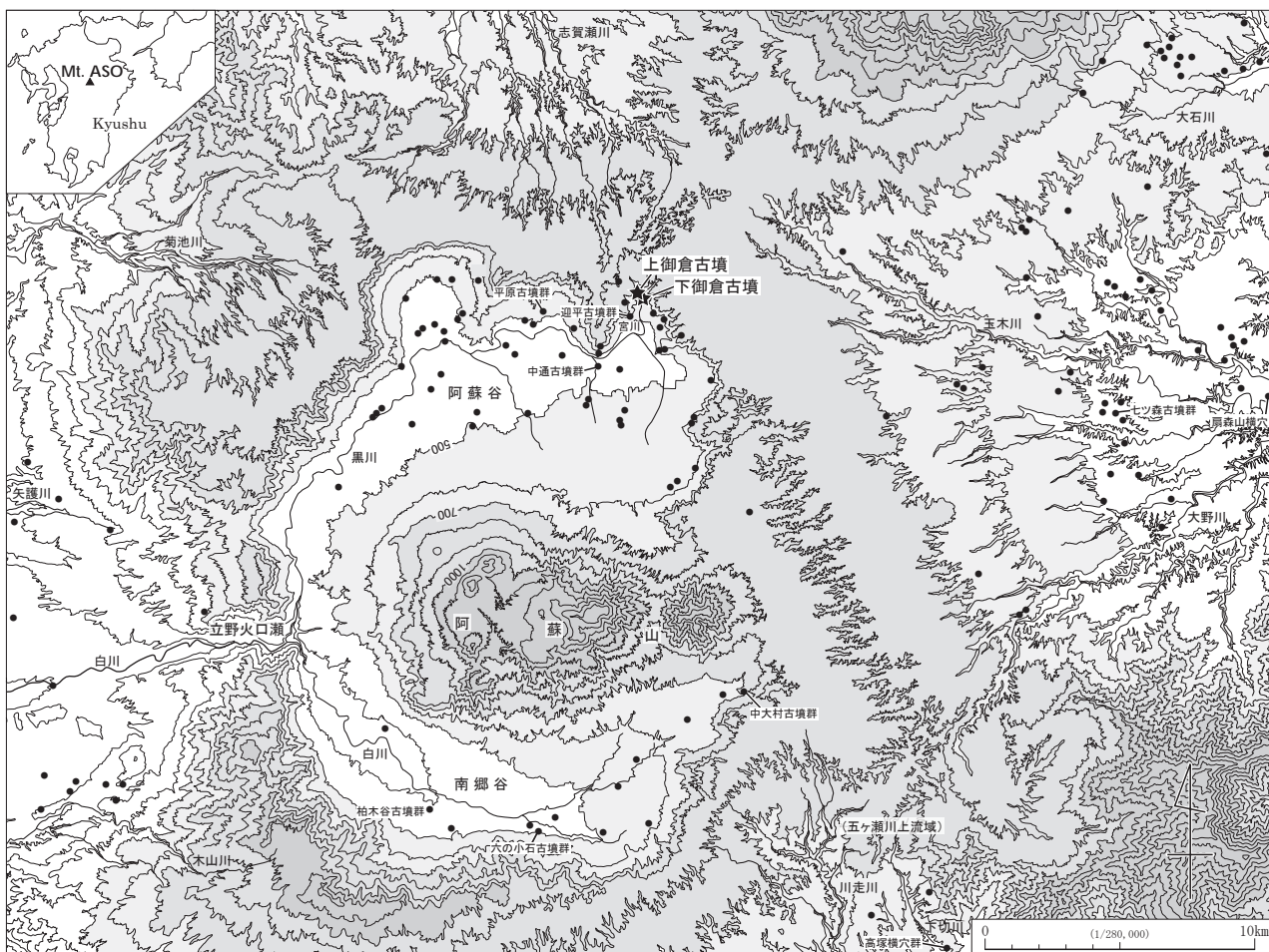


図 86 阿蘇地域の古墳分布と上御倉古墳・下御倉古墳の位置

とも今回報告する上御倉古墳については、1962年報告から受ける印象とは異なり、羨道の天井面はほぼ水平である。今後、下御倉古墳についても確認する必要があるだろう。なお、『熊本県装飾古墳総合調査報告書』によれば、上御倉古墳からの出土遺物には直刀1点、刀子片1点があるとされるが〔原口1984〕、他の文献ではこれを確認できない。また、野田拓治は「上御倉古墳前庭部付近から須恵器類とともに円筒埴輪の破片を採集した」と記すが〔野田1983：p.41〕、円筒埴輪の存在は確認できない。

今回の調査 熊本大学文学部考古学研究室では2001年度から、熊本県地域における古墳動向の解明を調査・研究活動のテーマの1つとし、県内各地で継続的に古墳の調査を行ってきた。2010年度からは阿蘇地域をフィールドに加え、阿蘇市長目塚古墳出土遺物の再整理作業や平原古墳群の発掘調査などを実施してきた。ここで報告する上御倉古墳および下御倉古墳の調査もその一環となるものである。

上御倉古墳では、横穴式石室の現状実測から調査を開始した。2015年7月18日、9月1～10日の計11日間で石室の実測調査を、9月14・15日にはSfM (Structure from Motion) による石室の3次元計測を実施した(第1次調査)。3次元計測を行ったのは、玄室床面に落下している石屋形の屋根石が障害となり安全に脚立を据えることができなかつたため、オルソ画像を作成し玄室高所の実測図を補填することが目的であった。そうしたなか、はからずも翌2016年4月に発生した平成28年熊本地震により、文化財にとっての3次元データの重要性を痛感することとなった。

2016年度は熊本地震の影響を考慮し、阿蘇地域での調査の実施を断念した。しかし、2017年度には関係各位のご援助を得て調査を再開することができた。4月27日、8月26日～9月4日の計11日間で上御倉

表7 測量基準点の現場座標

基準点	X座標(m)	Y座標(m)	標高(m)	備考
F01	-14.000	0.000	549.509	上御倉 石室中軸上
F02	-14.000	-2.000	549.698	
F03	-14.000	5.000	549.138	
F04	-6.000	-2.000	553.485	
F05	-4.000	-2.000	554.951	
F06	0.000	-2.000	555.871	
F07	0.000	0.000	555.861	上御倉 玄室内原点 S00 と同一点
F08	0.000	-8.000	553.878	
F09	0.000	2.000	555.297	
F10	-3.000	0.000	555.324	上御倉 石室中軸上
F11	7.000	0.000	553.044	上御倉 石室中軸上
F12	-3.678	3.915	553.947	
F13	-5.566	14.513	549.472	
F14	6.736	9.335	550.948	
F15	15.406	4.419	549.356	杭撤去
F16	2.870	12.305	550.635	
F17	12.863	23.519	546.367	2015年 A7 と同一点
F18	-23.197	1.193	546.045	杭撤去
F19	-20.411	-10.301	548.582	杭撤去
F20	-23.070	14.495	545.975	杭撤去
F21	15.835	32.748	545.579	
F22	7.402	24.387	546.299	
F23	9.464	49.790	545.670	
F24	2.539	56.264	544.268	
F25	-2.976	57.352	545.975	
F26	-4.572	55.464	546.945	下御倉墳頂
F27	5.700	60.838	542.994	
F28	-7.949	55.844	545.581	
F29	-19.204	46.662	545.615	
F30	17.081	65.683	542.199	駐車場
F31	24.785	60.157	542.203	駐車場
F32	5.717	69.524	540.457	杭撤去
F33	5.113	76.856	540.176	杭撤去
F34	1.162	61.142	543.284	
F35	-9.378	56.046	544.776	
F36	-17.756	50.580	544.382	杭撤去
F37	-16.944	57.526	542.805	杭撤去
F38	-10.853	61.685	543.015	下御倉 石室前
F39	-18.050	71.141	539.610	杭撤去
F40	-12.953	75.975	540.343	杭撤去

表8 測量基準点の国土座標

基準点	X座標(m)	Y座標(m)	標高(m)	備考
F01	-46.6667	0.0000	549.509	上御倉 石室中軸上
F02	-46.6667	-6.6667	549.698	
F03	-46.6667	16.6667	549.138	
F04	-20.0000	-6.6667	553.485	
F05	-13.3333	-6.6667	554.951	
F06	0.0000	-6.6667	555.871	
F07	0.0000	0.0000	555.861	上御倉 玄室内原点 S00 と同一点
F08	0.0000	-26.6667	553.878	
F09	0.0000	6.6667	555.297	
F10	-10.0000	0.0000	555.324	上御倉 石室中軸上
F11	23.3333	0.0000	553.044	上御倉 石室中軸上
F12	-12.2600	13.0500	553.947	
F13	-18.5533	48.3767	549.472	
F14	22.4533	31.1167	550.948	
F15	51.3533	14.7300	549.356	杭撤去
F16	9.5667	41.0167	550.635	
F17	42.8767	78.3967	546.367	2015年 A7 と同一点
F18	-77.3233	3.9767	546.045	杭撤去
F19	-68.0367	-34.3367	548.582	杭撤去
F20	-76.9000	48.3167	545.975	杭撤去
F21	52.7833	109.1600	545.579	
F22	24.6733	81.2900	546.299	
F23	31.5467	165.9667	545.670	
F24	8.4633	187.5467	544.268	
F25	-9.9200	191.1733	545.975	
F26	-15.2400	184.8800	546.945	下御倉墳頂
F27	19.0000	202.7933	542.994	
F28	-26.4967	186.1467	545.581	
F29	-64.0133	155.5400	545.615	
F30	56.9367	218.9433	542.199	駐車場
F31	82.6167	200.5233	542.203	駐車場
F32	19.0567	231.7467	540.457	杭撤去
F33	17.0433	256.1867	540.176	杭撤去
F34	3.8733	203.8067	543.284	
F35	-31.2600	186.8200	544.776	
F36	-59.1867	168.6000	544.382	杭撤去
F37	-56.4800	191.7533	542.805	杭撤去
F38	-36.1767	205.6167	543.015	下御倉 石室前
F39	-60.1667	237.1367	539.610	杭撤去
F40	-43.1767	253.2500	540.343	杭撤去

古墳墳丘の測量調査を、9月6～8日にはSfMによる墳丘の3次元計測を実施した（第2次調査）。測量は、レベルを使って等高線を探し、その座標をトータルステーションで計測して方眼紙に記入、等高線を描くという方法によった。この方法は、電子平板に比べて学生の地形を読む力の向上には有効であり、また従来の平板に比べると距離誤差の心配はない。測量の基礎を教育する大学にとってはもっともふさわしい方法の1つだろう。なお、上御倉古墳の墳丘周辺で須恵器片数点を採集した。

2018年度には、下御倉古墳墳丘の測量調査を実施した（第3次調査）。

調査期間は8月24日から9月2日までの計10日間である。測量方法は上御倉古墳で用いたものと同じである。ただし、3次元計測は行っていない。なお、下御倉古墳では石室の入口が完全に埋没しており進入が不可能であったため、石室の実測調査はできなかった。

今後、古墳群としての評価を行ううえでは、下御倉古墳の石室の図面作成が不可欠である。しかし、そのためには石室の埋土を掘り下げる必要があるため、将来の保存・活用を見据えた慎重な調査計画を立てることが求められよう。容易ではないが、その実現を模索したいと思う。

(杉井 健)

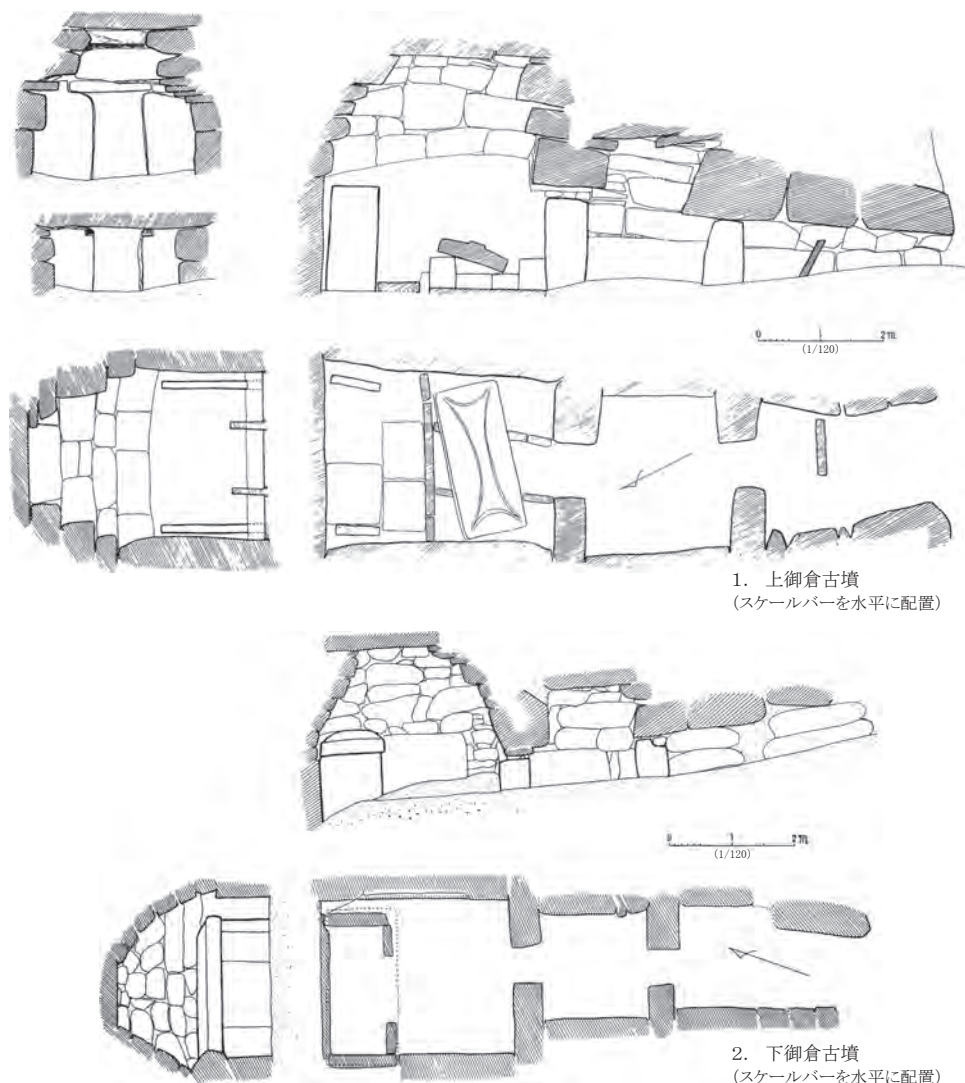


図87 1962年報告掲載の上御倉古墳・下御倉古墳石室実測図

第3部第1章 引用・参考文献

乙益重隆 1962「阿蘇谷の古墳群」『熊本県文化財調査報告』第3集、熊本県教育委員会：pp. 41-70

熊本日日新聞社 1958.9.2「阿蘇に初の装飾古墳 一の宮町『上御倉』を調査」

野田拓治 1983「阿蘇の古墳文化」『えとのす』第22号、新日本教育図書：pp. 38-49

原口長之 1976「上御倉・下御倉古墳（県史跡）」『熊本の装飾古墳』熊本の風土とこころシリーズ7、熊本日日新聞社：pp. 118-119

原口長之 1984「上御倉古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第66集、熊本県教育委員会：pp. 73-

第2章 上御倉古墳・下御倉古墳の墳丘の構造

上御倉古墳・下御倉古墳は、阿蘇カルデラ盆地の北半部を占める阿蘇谷の北東隅、北外輪山の麓に位置する(図1, 図版36)。そこは、北外輪山から南へ突出する2つの岬状の地形、象ヶ鼻と古城ヶ鼻に挟まれた谷筋にあたり、黒川右岸に注ぐ宮川が南流している。宮川の中流右岸には國造神社が立地し、そのすぐ南を宮川の支流、宮園川が東流する。國造神社神殿からみれば、上御倉古墳は宮園川を挟んだ南南西約150m、下御倉古墳は南約150mの地点にあり、そこは東に傾斜する斜面地である。

上御倉古墳と下御倉古墳は約55mの距離を隔てて東西に並ぶ。西に位置するのが上御倉古墳で、下御倉古墳はそこから東に斜面をやや下った場所に立地する。この2つの古墳は、あわせて手野古墳群〔乙益1962〕あるいは西手野古墳群〔野田1983〕と呼ばれる。現在、2つの古墳のあいだには阿蘇淡水魚センターがあり、古墳周囲には鱒などを飼育するための水槽がいくつか築かれている。1976年12月の空中写真(図版36-1)や戦後すぐに米軍によって撮影された空中写真をみれば、センターの建物や水槽が築かれる以前から2つの古墳のまわりには段々畑が広がっていたことがわかる。いまもかつての段々畑の地形は残されているが、耕作は行われていない。

上御倉古墳の墳丘 上御倉古墳は、阿蘇淡水魚センター西側の小道をはさんで立地している(図88)。この小道は古墳の周囲を取り囲むようにめぐっており、その造成によって墳端のほとんどが削平されている。なかでも、淡水魚センター敷地に面する墳丘東側の削平がはげしく、削平面の高さが2mを超える箇所もある。また、北側の小道沿いも削平が顕著である。現在、墳丘はその北西斜面を除いて樹木に覆われ、また淡水魚センターに面した大きな削平面には植栽が行われている。

さて、上御倉古墳は、横穴式石室を内部主体とする円墳である。石室は墳丘の南南西方向に開口する(図版38-2)。石室の主軸方向はN 23° 14' 45" Eである。

墳丘最高点の標高は555.888mである。標高555.0～555.2mあたりを境にしてその上方は傾斜がゆるやかになり、墳頂にはわずかな平坦地形が形成されている。ただし、明確な水平面をなしているわけではない。

墳丘の西側から北側の斜面は、ほかと比べて傾斜がゆるやかである。西側は21～22°、北側は25°前後の傾斜であるが、東側では30°前後となる。石室が開口する南側の墳頂から羨門天井石にかけてがとくに急傾斜で、37°前後の傾きがある。

墳丘の北東側から東側では、墳頂からの斜面が標高551.2～551.0m付近で緩傾斜となり、550.2～550.0mあたりにかけて平坦面を形成している。そして、北東側では大きくえぐるような削平がおよんでいるため平坦面以下の墳丘面は残存しないが、東側では550.0m付近からふたたび墳丘面が傾斜し墳頂に至る。こうした状況をみれば、当古墳は2段築成であり、ここにみられる平坦面は段築テラス面を反映したものであると推測できる。しかし、この平坦面は墳丘の南側に連続しない。また、本古墳は西から東への傾斜地に立地しているため、墳丘の北側から西側においてはもともとの地形がこの平坦面の標高よりも高い位置にある。こうしたことから、段築が墳丘を全周していたとみるよりは、旧地形傾斜の下方、すなわち墳丘の東側を中心とした範囲にのみ形成されていたとみる方が蓋然性が大きい。なお、墳丘南側の石室開口部の西側では標高550.6m付近、東側では550.0m付近から傾斜がゆるやかになり、549.0m前後にかけて平坦地形となっている。ここは石室の前庭部から墓道にかけての場所であるから、この平坦面はそれらに関連するものの可能性が高い。

ところで、墳丘東側の平坦面の標高550.0～551.2mを後述する石室各部の高さと比較すれば(図89)、羨道右側壁腰石上面の550.1m前後、羨道天井石下面の550.5m前後、前室左右側壁腰石上1段目石材上面

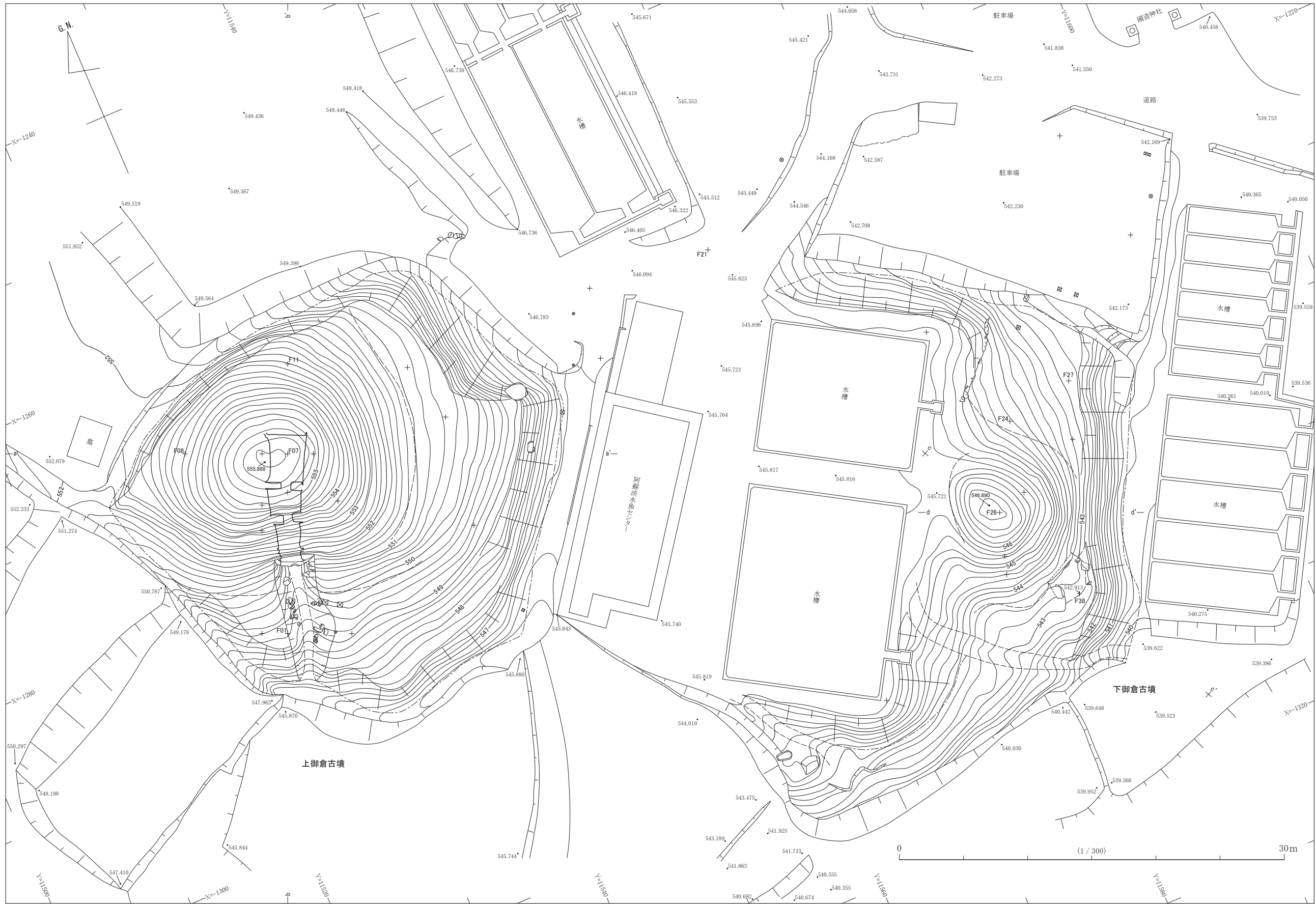


図 88 上御倉古墳・下御倉古墳墳丘測量図

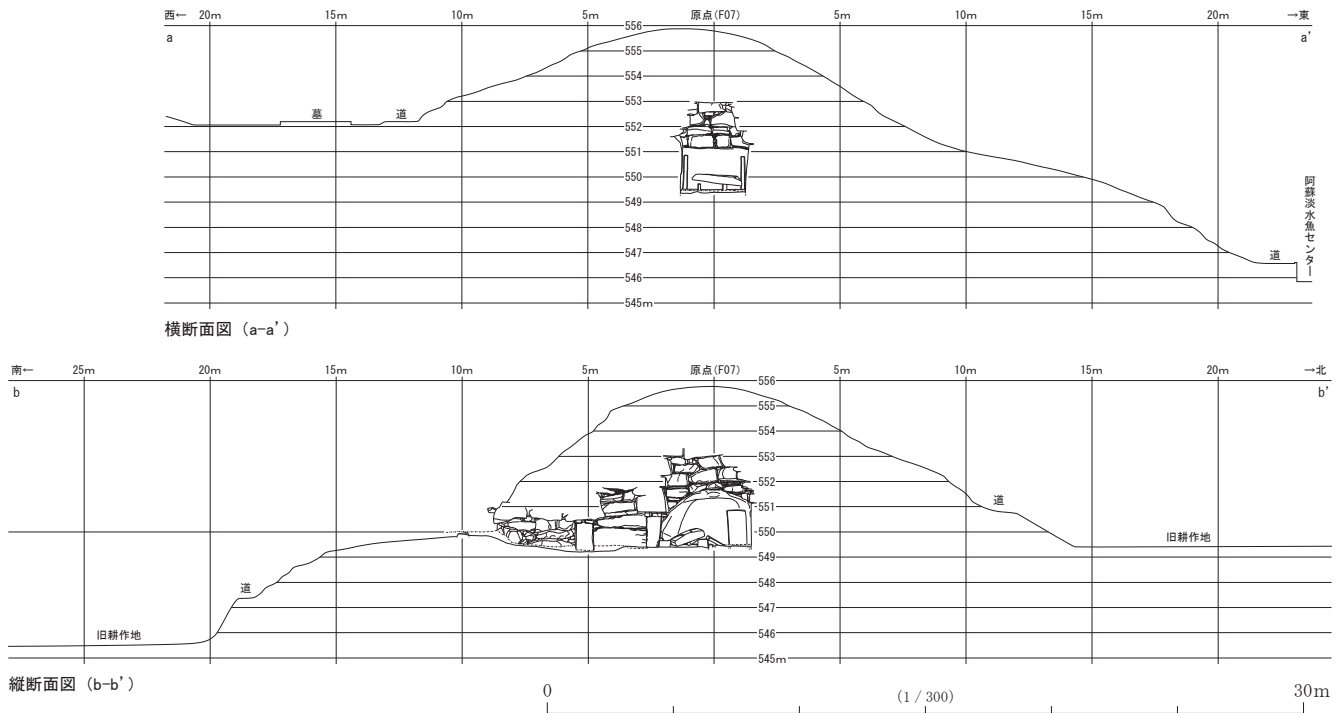


図 89 上御倉古墳墳丘横断面図・縦断面図

の 550.6 m 前後、玄室楣石下面の 550.8 m、玄室右側壁腰石上面の 551.0 ~ 551.4 m、玄室奥壁腰石上面の 551.2 m といった数値に近い値であることがわかる。こうした点から、墳丘段築 1 段目と石室下半の構築が密接な関連をもって行われた可能性が高いと推測される。

現状の墳丘残存部の規模は、直径 33 ~ 35 m 程度、北側からみた高さ約 3.7 m、南側からの高さ約 9.7 m である。上述したように、墳端のほとんどが削平されているため、本来の墳丘の大きさを推定することはきわめて難しい。そこで、現状の墳丘を取り巻く小道は墳端部を削平することによって形成されたと考えられること、淡水魚センター敷地に面する部分や墳丘の北側がとくに大きな削平を受けていると予想されることを念頭におきつつ、墳丘周囲の小道がほぼ内側に含まれる正円を描いてみると、直径 37 ~ 38 m の円墳となった (図 90)。この場合、石室の位置が墳丘の中心線よりかなり西側に片寄ることになるが、段築を施すなどの造作により東側をとくに強調した墳丘構造であった可能性を想定し、1 つの試案として提示する。

なお、墳頂面から玄室天井石下面までの距離は約 2.8 m である。羨門の前には墓道状の落ち込みがあり、その長さは約 9 m である。墳丘面の各所では葺石と思われる石材が観察される。野田拓治は円筒埴輪片を採集したと記すが [野田 1983]、今回の調査では見出すことができなかった。

下御倉古墳の墳丘 下御倉古墳は、上御倉古墳の東約 55 m に位置する (図 88)。横穴式石室を内部主体とする円墳で、石室は南南東方向に開口

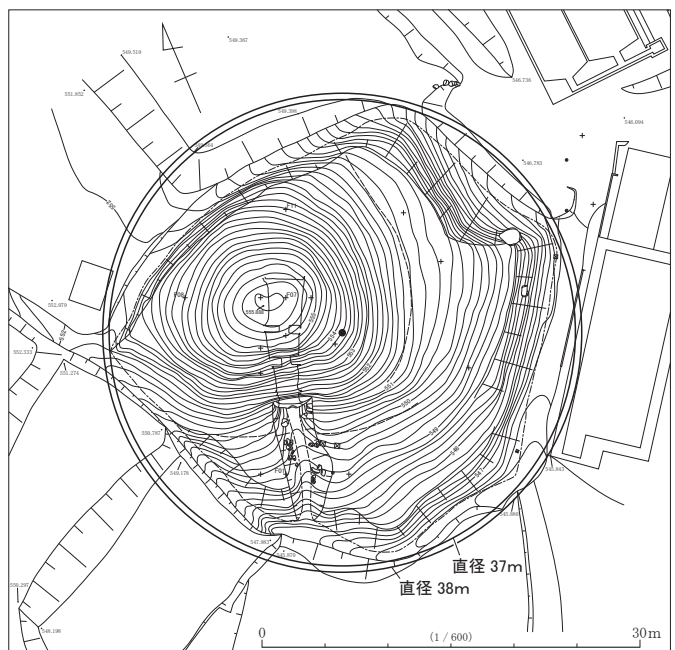


図 90 上御倉古墳墳丘形態復元想定図

第2章 上御倉古墳・下御倉古墳の墳丘の構造

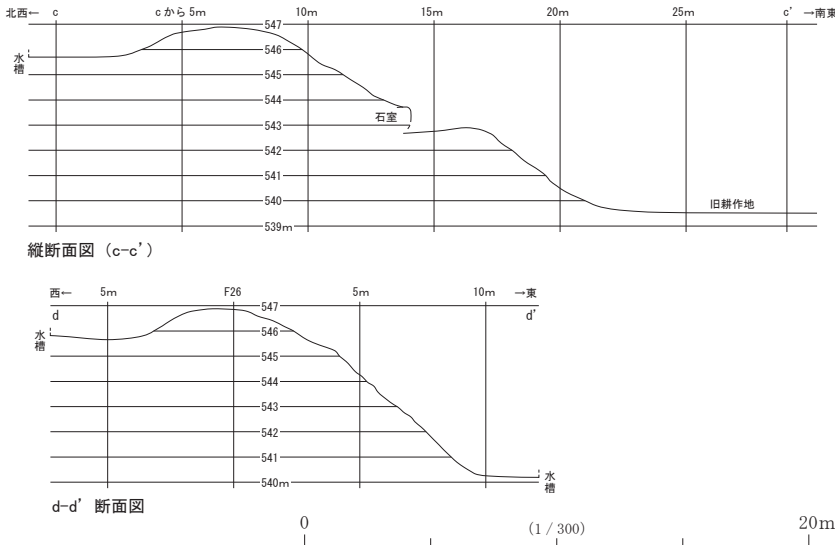


図 91 下御倉古墳墳丘断面図

する(図版 39)。石室の羨門天井石が墳丘南斜面にみえているが、その下面近くまで土砂が堆積しているため、現在、石室内に立ち入ることはできない。

墳丘の東西には水槽が、北には駐車場が、南には旧耕作地が存在する。それらの造成により、墳丘は大きく削平されていると推測される。とくに、東側の水槽に面する斜面は 40° を超える急傾斜となっており(図 91 の d-d' 断面図)、削平の激しさがうかがえる。

墳丘最高点の標高は 546.890 m

で、上御倉古墳に比べて約 9 m 低い。墳頂に平坦面は存在しない。

墳丘西側の水槽構築面からみた墳丘の高さは約 1.1 m とかなり低い。一方、東側の水槽構築面からは約 6.7 m の高さがある。墳丘の北側は南側に比べて傾斜がややゆるやかである。北東側では、標高 544.0 ~ 544.5 m 前後を境に緩傾斜となり、平坦面を形成する。そして、そのままのなだらかな傾斜を保って北側の駐車場に達している。しかし、この北東側の平坦面は、墳丘東側には継続しない。東側斜面は、途中で平坦面を形成することなく墳頂から下方の水槽構築面に達している。他方、南側では標高 543.5 m 付近で緩傾斜となり、542.8 m あたりにかけて平坦面を形成する。そしてふたたび斜面となり南側の旧耕作地に至る。ところで、この墳丘北東側および南側にみられる平坦面は、その高さが石室羨門天井石上面の標高約 543.5 m とおおよそ一致するから、石室構築にかかわるものである可能性が高い。また、石室床面よりも上位であることから、段築テラス面を反映したものと推測できる。こうした点より、当古墳は 2 段築成と判断できる。ただし、水槽造成による盛土がなされている可能性を考慮する必要があるが、墳丘西側にはこの平坦面はめぐっていない。したがって、上御倉古墳での想定と同じく、下御倉古墳においても段築は墳丘を全周するものではなく、墳丘の東側を中心とした範囲にのみ行われていたとみるべきであろう。

上述したように、墳丘周囲の削平が著しいため、墳端の位置を推測することは困難である。石室開口部南側の斜面が段築 1 段目斜面の削平により形成されたものとみてよいのであれば、墳端はすでに失われている可能性が高いが、その平面的な位置は現状の斜面と旧耕作地との接点よりもいまま少し南側に位置するとも想定できる。とはいえ、おおよそ斜面と旧耕作地との接点付近と仮定した場合、その墳頂からの距離は約 15 m となり、復元される直径は約 30 m となる。これは、かつて乙益重隆が記した数値、「直径 30 m に近く、高さは約 4.5 m」に近似する[乙益 1962:p. 56]。この半径 15 m の円を描けば、北は駐車場南側の小道の手前、南は水槽南端の手前にまで達するが、はたしてその場所に墳端を設定できるのかどうかはまったくの不明である。なお、石室に関連する部分では、上御倉古墳と同規模の墓道が付設されていたとすれば、その半ばは失われている可能性がある。また、墳丘面では葺石と思われる石材が観察された。

(安原 真衣・杉井 健)

第3部第2章 引用・参考文献

乙益重隆 1962 「阿蘇谷の古墳群」『熊本県文化財調査報告』第3集、熊本県教育委員会：pp. 41-70
 野田拓治 1983 「阿蘇の古墳文化」『えとのす』第22号、新日本教育図書：pp. 38-49

第3章 上御倉古墳の石室の構造

上御倉古墳の内部主体は、複室構造・両袖式の横穴式石室である（図 92, 図版 49）。その複室は、藏富士寛の分類によれば、「前室がしっかりとした空間をもつ室空間創設型」〔藏富士 2009 : p. 12〕に該当する。全長（奥壁から羨門に架かる天井石前面までの水平距離）は、10.2 m である。石材は阿蘇溶結凝灰岩を主とし、玄室屍床の一部に安山岩が用いられる。石室主軸は国土座標北から $23^{\circ} 14' 45''$ 東に振れ、石室は南南西方向に開口する。なお、石室主軸は、玄室幅のほぼ中央を通るように設定したものである。

以下の記述においては、石室主軸上で石屋形前の基準点を F 07 とし、その地点で直交するラインを 0 m ラインと表記する。例えば、1 m ラインの場合は F 07 から羨道方向に 1 m 地点の石室横断ラインを示す。また石室の左右については、羨道側から玄室側をみた場合の左右とする。

玄室（図版 40～43・50） 玄室の平面形は、石室主軸方向に長い長方形である。その平面規模は現状の床面で、長さ 3.67 m（主軸）、幅 2.70 m（0 m ライン）である。また、左・右側壁沿いでの長さはそれぞれ 3.65 m・3.70 m、前壁・奥壁沿いの幅は 2.55 m・3.06 m である。このことより、前壁側から奥壁側に向かうにつれやや幅広になっていることが分かる。

玄室床面は現在、若干の土砂に覆われている。今回の調査は石室の現状実測を目的としたため、本来の床面の検出は行っていない。そのため、築造当初の床面の様相は不明である。したがって、後述する高さに関する数値は、いずれも現状の床面からの計測値である。しかし、石屋形の床面に石敷きとみられる石材が露出していることから、土砂による埋没は軽微なものと推測される。

前壁は、玄門を構成する 2 つの立柱石の上に長大な楣石を置き、方形石材を 2 段積みすることで形成される。左立柱石は前後長約 50cm、前面の幅（玄室壁面からの突出長）86cm、後面の幅（前室壁面からの突出長）1.1 m、現状床面からの高さ 1.35 m である。一方、右立柱石は前後長約 65cm、前面の幅 85cm、後面の幅 84cm、現状床面からの高さ 1.05～1.25 m を測る。右立柱石は高さが不足するため、石材を 1 段積みすることで、左立柱石の上面と高さをそろえている。また、右立柱石は側壁から独立しているのに対し、左立柱石は側壁に組み込まれている。

これら立柱石の上に置かれる楣石は、左右長 2.55 m 以上、上下長約 1.0 m、下面における前後長 1.05 m である。楣石の両端は左右両側壁の腰石に架け渡されている。なお、右側腰石の上辺右角については L 字形の割り込みが施され、楣石と組み合わせられる。こうした石材の上辺角を L 字状に加工し、そこに上位石材の下辺角を組み合わせる技法、いわゆる切組積みは玄室の各所にみられる。

こうして形成された玄門の各部寸法を示すと、上辺幅 75cm、現状床面での下辺幅 75cm、現状床面からの高さ 1.39 m である。また、主軸上での奥行きは 57cm である。

楣石より上位の石材は、およそ 68° の傾斜角で積み上げられている。積み上げに際しては、隅角消しの造作が行われるとともに、大型石材の間に板石や小石材が積まれ、各段上面が水平になるよう調整される。なお、楣石上部 2 段目石材の上辺右角には L 字形の割り込みが施され、側壁石材と組み合わせられている。

奥壁および左右両側壁は長大な腰石を 1 石配置し、その上に方形の石材を持ち送りながら積み上げることで形成される。奥壁の腰石は、上辺長約 2.65 m、現状の床面での下端長 3.02 m、現状床面からの高さ 1.6～1.7 m である。腰石上部には石材が 4 段積み上げられ、1 段目から徐々に持ち送られている。その傾斜角は約 48° であり、石室内でもっとも内傾している。

左側壁の腰石は上辺が大きく丸みを帯びているため、現状床面での下端長のみを示すと、3.65 m である。また、現状床面からの高さは、最大 2.15 m を測る。腰石上位の石材は 3 段積みだが、丸みを帯びる腰石上

辺左右を埋めるように石材が充填されたのちに行われている。腰石上1段目の石材から持ち送られており、その傾斜角は約 58° である。一方、右側壁の腰石は、上辺長約3.4 m、現状床面での下端長3.70 mであり、現状床面からの高さは1.55～1.95 mである。腰石上部の石材は3段積みで、1段目から 62° の角度で徐々に持ち送られている。腰石上2段目中央の石材の上辺右角にはL字形加工が施され、切組積みされる。なお、左右側壁および奥壁では、腰石上位の石材から隅角消しの造作が行われている。また、壁面各所にみられる石材どうしの隙間には、白色粘土が充填されている。こうした造作は玄室のみならず石室各所で確認できる。

天井は2枚の石材で構成されている。その平面形はいびつな六角形を呈する。奥壁側の石材のほうが大きく、天井面の3分の2を占めている。天井石下面の標高は、前壁際・奥壁際ともに553.00 mであり、現状床面からの高さはおよそ3.58 m（0 mライン）である。

遺体安置施設（図版43・50） 玄室には遺体を安置する施設として、石屋形と2つの屍床が存在する。

石屋形は奥壁に平行して設置されている。屋根石は前方へ落下しており、2つの屍床および中央通路を覆っている。現在では、屋根石を支えていた2枚の側石のみ原位置を保っている。当石屋形は、玄室から独立していること、阿蘇石等の特別な石材を使用し、精緻な加工を施すなど、構築の主体者として石工の関与が想定できるものであることから、石屋形I類に分類される〔藏富士2010〕。

落下している屋根石は、前壁側長辺が2.4 m、奥壁側長辺が2.25 m、短辺は左右ともに1.10 mである。このことから、前壁側長辺が若干長いことが分かる。厚さは23～35 cmである。屋根石は寄棟造を模しており、棟部分は浮き彫りにより表現されている。現状の前壁側の面がもっともていねいに面取りされていることから、この面が前壁側に向いていたと推測される。つまり、目に触れる部分を重視し、よりていねいな調整が行われたとみられる。なお、石材下面は平坦に整形されている。

屋根石を支えていた2枚の側石は、大型の板石である。左側石は現状床面からの高さ1.30～1.35 m、幅70 cm、厚さ16 cm、一方右側石は現状床面からの高さ1.35 m、幅82 cm、厚さ13 cmである。両側石の間隔は上面で2.2～2.3 mであり、屋根石長辺の長さとも一致する（図版50）。屋根石を原位置にもどして石屋形の内法を復元すると、上端・下端の幅はそれぞれ2.12 m・2.15 m、高さ1.40 m、奥行き1.16 mとなる。左右側石のほかに、玄室内には石屋形の部材（袖石か）と考えられる方形の板石が3枚存在する。1枚目は右側壁に立てかけられており、長さ60 cm、幅50 cm、厚さ15 cmを測る。2枚目は石屋形左側石の前面に倒れ込み、奥壁側の辺が土に埋没している。現状での長さ65 cm、幅75 cm、厚さ10 cmを測る。残りの1枚は石室左側壁の実測図に示されているように、屋根石に覆われた状態で横たわっている。そのため詳細な法量は不明であるが、厚さは12 cmと他の2点と変わらない。なお、この石材の隅角にはL字状加工が施されている。

先述の通り、石屋形の床面は石敷きとみられ、前後2列にわたり確認できる。以下、奥壁側の列を後列、前壁側の列を前列とする。後列には、奥壁に沿って2枚の石材が配置される。左・右石材の幅はそれぞれ0.95 m・1.2 m、長さはともに80 cmである。一方、前列には、幅1.05 m、長さ55 cmの石材が1枚設置されている。これら石敷き上面の標高は549.45 mであることから、その他の床面における築造時のレベルもこの数値と大きく変わらないものと思われる。

なお、1962年報告掲載の実測図（図87-1）をみると、石敷きの状況が若干異なっている。まず、後列には石屋形の左側石に接した1枚の石材しか表されていない。一方前列には、2枚の石材が描かれている。1枚は今回報告の石材と同位置にあり、この石材の左側にもう1枚石材が設置されている。後者の位置には現在、上述の倒れた板石が存在するが、これが1962年報告に描かれた床面石材と同じものかどうかは判然としない。約60年の間に掘り起こされた可能性も考えられる。

石屋形の前面には一定の空間が設けられ、玄門側の屍床と空間を区切るための仕切りが設置される。仕切りは3枚の石材で構成され、0.15 mライン上に奥壁と平行になるように配置される。両端の石材は、長さ

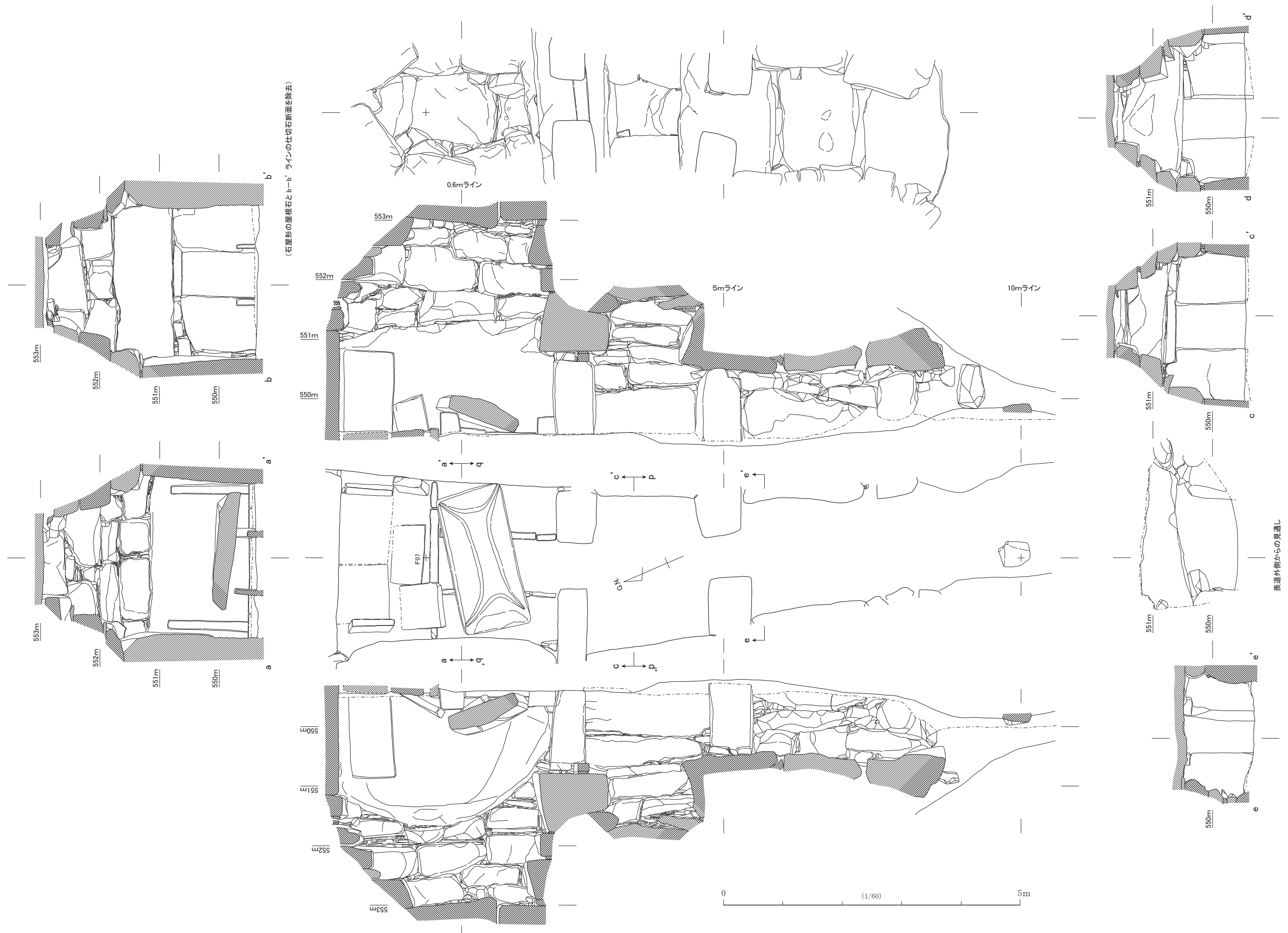


図 92 上御倉古墳石室実測図

43cm、幅10～15cmであり、両石材とも側壁に接する辺の隅角が丸く加工されている。これらに挟まれる石材は、長さ1.75m、幅16cmである。なお、3枚の石材の上面は標高549.5mでそろえられている。

2つの屍床は、玄門から続く中央通路を挟んだ左右に側壁と平行になるように設置されており、石屋形とあわせてコの字形の屍床配置となる。両屍床は奥壁側の小口および中央通路側の側辺に板石を立てることで形成される。奥壁側小口の石材は、石屋形との空間を区切る仕切り石を兼ねている。中央通路側の側石は、左側屍床で3枚、右側屍床で4枚の板石で形成される。これら石材の高さはそれぞれ異なり、両屍床とも奥壁側と前壁側の小口に接する石材が20～25cmほど高い。左側屍床は長さ2.0m、幅70～75cm、右側屍床は長さ2.0m、幅80cmであり、およそ同じ大きさである。

なお、1962年報告の石室右側壁図(図87-1)と比較すると、いくつかの相違点がみられる。まず、中央通路床一面に1枚の石材が配置されている様子が見取れるが、現状でこの石材は確認できない。また、右側屍床の側石はいずれも現状より15cmほど高く、石材の形状がより明瞭にうかがえる。このことから、中央通路および屍床は現状で15cm程度土砂に埋没している可能性がある。

前室(図版44・45) 前室の平面形は、石室主軸方向を短軸とする長方形である。その平面規模は、現状の床面で長さ1.91m(主軸)、幅2.46m(3.5mライン)である。また、左・右側壁沿いでの長さはそれぞれ2.1m・1.65mと、左側壁側のほうが長い。後壁(玄室側壁面)・前壁(羨道側壁面)沿いの幅はそれぞれ2.7m・2.35mを測り、後壁に向かって若干幅広になっていることが分かる。

床面は土砂に覆われており、屍床や石敷きなどは確認できない。しかし現状床面の標高は549.25～549.45mと玄室床面の標高と大きく変わらないことから、埋没は軽微なものと推測される。

後壁は2つの立柱石の上に楣石を配し、その上に石材を1段積みすることで形成される。左立柱石の上辺右隅には方形の削り込みが施されており、そこに長方形の石材が組み込まれ、右立柱石の上へと架け渡されている。こうした方形削り込みは後述の前門左右立柱石の羨道側にもみられる。前室からみた玄門の寸法は、上辺幅73cm、現状床面での下辺幅75cm、現状床面からの高さ1.2mである。

左右両側壁は、腰石を1つ配置し、その上部に石材を4段積みすることで形成される。左側壁の腰石は上辺長約2.1m、現状の床面での下辺長2.1m、現状床面からの高さ70～75cmである。この石材の上辺両角には、L字形加工がみられる。腰石上位の石材から約56°の傾斜角で持ち送られている。一方、右側壁の腰石は上辺長約1.7m、現状の床面での下辺長1.65m、現状床面からの高さ75～80cmである。腰石上位の石材から約62°の傾斜角で持ち送られている。なお、前室壁面においては隅角消しの処理は行われていない。

前壁は、2つの立柱石の上に巨大な楣石を置き、その上に石材を1段積みすることで形成される。左立柱石は前後長約75cm、前面の幅(前室壁面からの突出長)95cm、後面の幅(羨道壁面からの突出長)70cmである。一方、右立柱石は前後長60～80cm、前面の幅68cm、後面の幅45cmである。2つの立柱石はいずれも側壁に組み込まれている。両立柱石に載せられる長大な楣石は、羨道の天井石も兼ねている。この石材は左右長2.2m以上、上下長約1.05m、下面における前後長1.6mであり、左右両端は側壁へと組み込まれている。前門の各寸法を示すと、上辺幅75cm、現状床面における下辺幅71cm、現状床面からの高さ1.2mである。また、奥行きは72cm(主軸)である。

天井は1枚の石材で構成され、平面形は石室主軸方向に長い長方形を呈する。天井高は、現状の床面から2.3m(3.5mライン)である。また、天井石下面は水平で、その標高は551.75mである。

羨道(図版46・47・48-1) 羨道の概要について述べる前に、その範囲について示しておく。まず側壁の範囲は、平面図で確認すると、左側壁が前門立柱石から数えて4つ目の石材、右側壁が前門立柱石から数えて2つ目の方形石材と認識する。この場合、両側壁よりも羨門の天井石のほうが前方に突出するため、

前門から羨門に架かる天井石前面までを羨道の範囲と捉えると、長さは3.33 m（主軸）となる。また、前門・羨門沿いにおける幅は、現状の床面で1.95 m・1.85 mを測る。なお、羨道部分は石室主軸に対して5°程度東へと振れている。

羨道床面は現在、土砂に覆われている。現状の床面の標高は、前門部で549.25 m、羨門部で549.85 mと入口側に向かって次第に高くなる。羨道床面が一定の高さで構築されたとすれば、羨道入口付近は60cm程度土砂に埋没している可能性がある。

前門は2つの立柱石に天井石が置かれることで形成される。羨道部から前門をみた場合、左右立柱石の上辺角には方形削り込みが確認できるが、長方形の石材は架け渡されていない。羨道からみた前門の寸法は、上辺幅75cm、現状床面における下辺幅80cm、現状床面からの高さ1.27 mである。

側壁の様相は、左右で大きく異なる。まず、右側壁についてみると、前門側に腰石が配置される。当石材の右端は土砂に埋没しているため現状での長さを示すと2.08 m、高さは最大85cmである。この腰石に接して、幅64cm、現状床面からの高さ82cmの方形石材が設置される。当石材は羨道へ突出せず、側壁に組み込まれているが、その形態から羨門立柱石とみられる。この立柱石は1962年報告の実測図（図87-1）には表現されておらず、今回認識に至ったものである。腰石および立柱石上には1～2段の石積みが行われ、壁面が形成される。なお、立柱石より南側、つまり石室の外へと続く石積みは、前庭部にともなうものと考えられる。次に左側壁をみると、前門立柱石に接して腰石が配置される。この石材は、長さ1.92 m、現状床面からの高さ34cm前後と、右側壁のものに比べてやや小ぶりである。また、腰石の隣に右側壁のような立柱石はなく、大小の石材が配される。これら石材と腰石上に石材が積まれ、標高550.10 mで水平にそろえられている。その上に2段目石材が積まれ、壁面が形成される。なお、右側壁はほぼ垂直であるが、左側壁は67°の傾斜角で持ち送られている。

先述の通り、羨門立柱石は右側壁にのみ設けられる。しかし、左側壁の羨門部に配置された石材（平面図上で前門立柱石から数えて4番目の石材）も、やや高さのある方形石材である。しかし、大部分が土砂に埋もれており、その全形が不明なため、立柱石と判断することは難しい。今後調査により確認すべき課題である。なお、羨道外からみた羨門の寸法を示すと、上辺幅1.8 m、現状床面における下辺幅1.67 m、現状床面からの高さ77cm前後である。

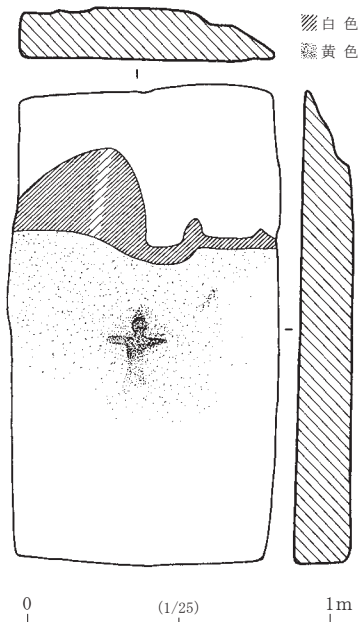


図93 原口長之によって示された板石と装飾文様

天井部は前門の楣石を兼ねる石材を含め、巨大な石材3枚で構成される。1962年報告の実測図（図87-1）では天井が羨門に向かってレベルを下げるようにみえるが、実際にはほぼ水平である。その天井石下面の標高は550.45 mである。天井高は、現状の床面から前門部・羨門部でそれぞれ1.26 m・0.77 mを測る。

石室構築の手順 石材の積み方から、石室構築の手順をおおまかに復元することができる。はじめに玄室から順に腰石および立柱石を配し、石室全体のプランを形成する。その後、羨道部の左右壁を積み上げ、完成させると同時に、前室左右壁の腰石上1段目石材も積み上げる。この際、羨道部の左右壁の石積み上面と前室左右壁の腰石上1段目石材上面は標高550.60 m前後にそろえられる。この標高は、墳丘構造で述べた通り段築テラス面の標高と近似することから、石室と墳丘の構築は密接な関連性をもって行われたとみられる。続いて前門の楣石を積み、羨道部分に天井石を架構することで、羨道を完成させる。その後、玄門の楣石を配置し前室の壁面を持ち送りながら積み上げ、最後に天井石を架構

する。玄室については、楣石上面の標高 551.80 m で一度高さをそろえるように左右壁および奥壁を積み上げる。その後も、標高 552.30 ～ 552.60 m、標高 553.00 m で石材上面をそろえつつ、壁面を持ち送りながら積み上げていく。最後に天井石を架構し、玄室が完成となる。

装飾と赤色顔料 過去の調査では、羨道の前門付近に倒れた板石に装飾が確認されたと報告されている(図 93) [原口 1976]。その板石は厚さ 15cm、上下端の幅約 80cm、左右の長さ約 1.5 m の長方形を呈するものであり、白色で連山が描かれ、その下方は黄色に塗られた後、人物が描かれていたという。また人物は地塗りと同色であったため、腰部から下は明瞭でなかったとされる。

当板石は羨道からみた前門の寸法より一回り大きいこと、また倒れていた位置から判断して、前門閉塞石と思われる。残念ながら今回の調査では、この板石を確認することはできなかった。しかしながら、玄室から羨道の壁面にかけて赤色顔料の痕跡が確認できることから、少なくとも石室壁面に赤色顔料が塗布されていたのは確実である。ただし、かつて板石に確認されたという上記装飾文様は、ほかにみられないものであることから、誤認であった可能性も考慮すべきかもしれない。

なお、本書第4部第2章では、当石室の玄室で採取された赤色顔料の分析結果が志賀智史によって示されている。それによれば、パイプ状粒子と螺旋状粒子が含まれるベンガラとのことである。詳しくは、本書の当該箇所を参照していただきたい。

(山元 瞭平)

第3部第3章 引用・参考文献

- 乙益重隆 1962 「阿蘇谷の古墳群」『熊本県文化財調査報告』第3集、熊本県教育委員会：pp. 41-70
- 藏富士寛 2009 「九州地域の横穴式石室」『九州系横穴式石室の伝播と拡散』日本考古学協会 2007 年度熊本大会分科会 I 記録集、北九州中国書店：pp. 3-20
- 藏富士寛 2010 「石屋形・石棚—石屋形・石棚の出現・展開とその歴史的意義（予察）—」『先史学・考古学論究』V - 下巻、龍田考古会：pp. 597-617
- 原口長之 1976 「上御倉・下御倉古墳（県史跡）」『熊本の装飾古墳』熊本の風土とこころシリーズ7、熊本日日新聞社：pp. 118-119

第4章 上御倉古墳採集遺物

上御倉古墳の調査では、古墳の墳丘斜面において複数の須恵器・土師器片を採集した。こうした土器は、墳丘祭祀にともなうものとも考えられる。ここでは図示が可能な須恵器について報告するが、それ以外のいくつかは図版 48-2 に示す。

須恵器 図 94-1 は須恵器の坏身である。復元口径 12.8cm、受け部径 15cm を測る。立ち上がりは 1.5cm と短く、やや内傾して伸びる。口縁端部は丸く仕上げられる。内外面とも回転ナデ調整である。焼成は良好で、内外面とも灰色を呈する。

2 は須恵器の高坏である。坏部の底部付近のみ残存する。外面は時計回りにヘラケズリが施され、内面は不定ナデにより調整される。外面には脚部の剥離痕のほか、透かしを施す際についた工具痕も観察される。焼成はやや甘く、内面灰色、外面灰白色を呈する。なお、内面に降灰が確認できないため、有蓋高坏である可能性が高い。

3 は須恵器の甕であり、頸部から肩部にかけて残存する。器壁は 1.2cm 前後と厚く、大型品と推測される。外面は縦方向の平行タタキで調整され、内面には同心円文当具痕が残る。頸部には内外面ともにヨコナデが施される。焼成は良好で、内外面ともに灰色を呈する。

小 結 時期を推定できる遺物は、1 の須恵器坏身のみである。これは、口径や受け部の形態から TK 43 型式段階に比定されるものである。上御倉古墳は、従来の認識によれば前方後円墳集成編年 [広瀬 1991] 10 期に位置付けられていることから、互いの年代観に矛盾は認められない。

(山元 瞭平)

第3部第4章 引用・参考文献

広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編、山川出版社：pp. 24-26

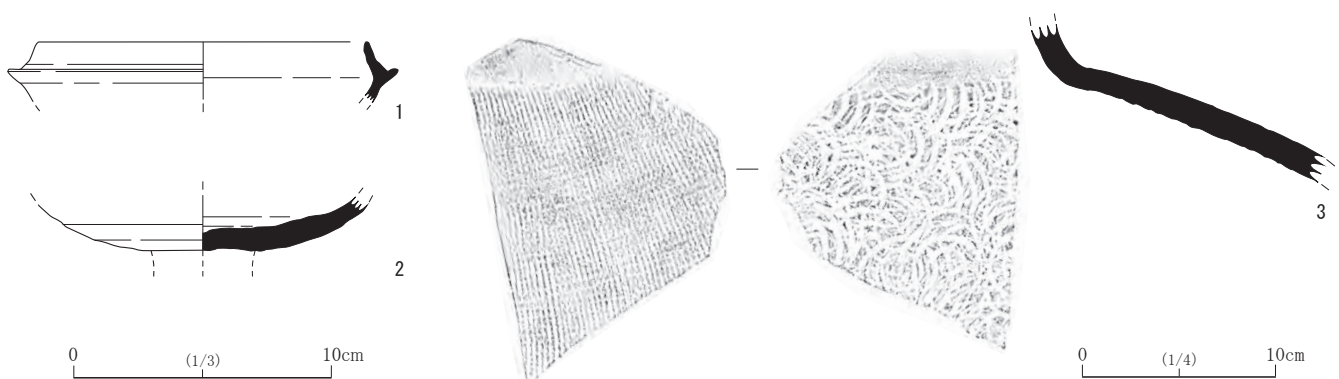


図 94 上御倉古墳採集須恵器実測図

第5章 まとめ

上御倉古墳・下御倉古墳は、熊本県阿蘇市一の宮町手野宮の前 2295 番地・2288 番地に所在する。そこは、阿蘇谷北東隅の北外輪山裾部、象ヶ鼻と古城ヶ鼻に挟まれた谷筋にあたる。下御倉古墳は上御倉古墳の東約 55 m に位置し、両者あわせて手野古墳群 [乙益 1962] あるいは西手野古墳群 [野田 1983] と呼ばれる。

上御倉古墳では 2015 年度に石室実測調査、2017 年度に墳丘測量調査を、また下御倉古墳では 2018 年度に墳丘測量調査を行った。上御倉古墳については、石室、墳丘の 3 次元計測もあわせて実施した。

上御倉古墳 上御倉古墳は、横穴式石室を内部主体とする円墳である。墳丘は西から東への傾斜地に立地している。墳丘周囲には小道がめぐっており、その造成にともない墳端の多くが削平されている。墳丘は 2 段築成であり、墳丘の北東側から東側の標高 550.0 ~ 551.2 m に段築テラス面とみられる平坦面が存在する。しかし、墳丘南側に平坦面は継続しておらず、また北および西側は旧地形が平坦面の標高よりも高い位置となることから、段築は墳丘を全周するものではなく、墳丘東側にのみ形成されたと推測される。墳丘規模は、周囲の小道を内側に含む正円を描いた場合、直径 37 ~ 38 m に復元できる。この場合、石室の位置は墳丘の中心線よりかなり西側に片寄るが、段築を施すなどの造作により東側をとくに強調した墳丘構造であったものと考えられる。

内部主体は複室構造・両袖式の横穴式石室であり、石室は墳丘の南南西方向に開口する。石室構造の特徴を整理すると、以下の 3 点にまとめられる。

1. 前室の天井は羨道部より高く、室空間をなす（室空間創設型）。
2. 玄門および前門の両袖石が内側に突出し、明確な門構造を呈する。
3. 玄室には石屋形と 2 つの屍床があり、これらはコの字形に配置される。

こうした構造的特徴は、熊本県菊池川流域における横穴式石室とおおむね一致する。菊池川流域では、時期が下るにつれて前室空間が拡大することが指摘されており [古城 2009]、前方後円墳集成編年 10 期には玄室・前室・羨道の幅がほぼ同程度となる。また、当該期には腰石技法の一般化や使用石材の大型化も確認されている。上御倉古墳の場合は、腰石技法・石材の大型化が確認できる一方で、玄室・前室幅に対して羨道幅はやや狭くなることから、集成編年 10 期のなかでも古相の様相を示しているといえる。こうした見解は、墳丘採集の須恵器が TK 43 型式段階に比定されることとも矛盾せず、上御倉古墳は集成編年 10 期前半頃、つまり 6 世紀後葉頃の築造と考えられよう。

なお、石室構造の類例として、大分県別府市鬼ノ岩屋 1 号墳が挙げられる (図 95-2)。当古墳は直径約 31 m の円墳で、内部主体は上御

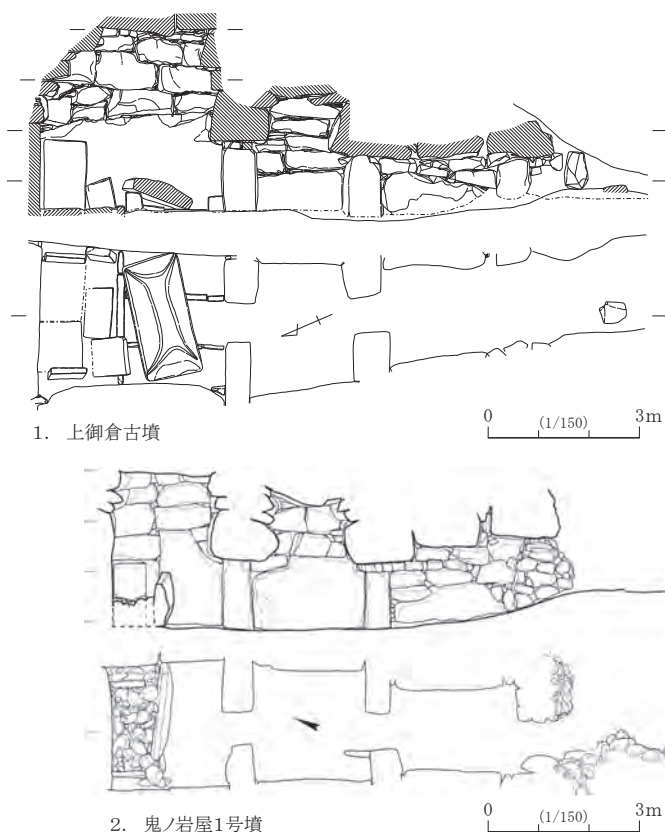


図 95 上御倉古墳と鬼ノ岩屋 1 号墳の石室の比較

倉古墳と同様に複室構造・両袖式の横穴式石室である。玄室プランは正方形のため、上御倉古墳に比べて規模は小さいが、玄室奥壁側に石屋形が配置されているほか、玄門両立柱石の前室側の上辺角には方形割り込みが施されるなど、上御倉古墳との類似性がうかがえる。時期は、石室構造および出土須恵器の型式から、TK 209 型式段階頃と推定されている [秦 2016, 玉川 2016]。こうした石室の導入背景や上御倉古墳との関連性については、今後検討すべき課題である。

下御倉古墳 下御倉古墳も横穴式石室を内部主体とする円墳で、西から東への傾斜地に立地する。上御倉古墳以上に、その墳丘は周囲が大きく削平されている。墳丘は2段築成と思われ、墳丘の北東側では標高544.0～544.5 m以下において、南側では542.8～543.5 mの高さに段築テラス面と考えられる平坦面が存在する。しかし、その平坦面は墳丘を全周せず、段築は墳丘の東側を中心とした範囲にのみ行われていたと思われる。墳丘規模は削平が著しいため不明とせざるを得ないが、石室開口部南側の斜面とその下方の旧耕作地との接点付近に墳端を仮に求めれば、直径30 m程度となる。ただし、まったく確証を得ない。

横穴式石室は南南東方向に開口する。羨門天井石が顔をのぞかせているが、堆積する土砂のため石室内部に立ち入ることはできない。したがって、現状では1962年報告提示の実測図(図87-2) [乙益 1962] をもとに考えるしかないが、それによれば上御倉古墳と同じく複室構造・両袖式の横穴式石室であることがわかる。全長は1962年報告によれば8.80 mで、10.2 mの上御倉古墳の石室よりはやや小規模である。玄室には石屋形が設置されているが、その左側石が玄室左側壁に組み込まれたようになっている点の特異である。両側壁沿いの前壁側にはおそらく屍床が存在すると思われる。前室幅は明らかに玄室幅よりも狭く、羨道幅とほぼ同じである。この点は、前室幅が玄室幅に近似する上御倉古墳の石室との顕著な相違点である。羨道天井面が羨門に向かってレベルを上げるように描かれているが、上御倉古墳の調査結果を念頭に置けば、おそらく本来の天井面は水平をなすのではなかろうか。腰石上の壁体石材が不定形かつ小型であること、前室幅が狭いことを根拠にすれば、上御倉古墳の石室よりは若干古く位置づけられる可能性がある。

今後の課題 上御倉古墳・下御倉古墳は古くから開口し、阿蘇地域を代表する古墳として広く知られていたものの、石室実測図が公開されていたのみであった。そのため今回の調査では、墳丘測量を実施し、また上御倉古墳については石室を再実測して、墳丘・石室構造に関する基礎資料の収集に努めた。しかし、下御倉古墳の石室については観察することさえできず、その構造検討は将来の課題として残された。今後、下御倉古墳石室調査の実現を模索しつつ、これら両古墳の阿蘇地域全体のなかでの位置付けについてもさらに考察を深めていきたい。

(山元 瞭平・杉井 健)

第3部第5章 引用・参考文献

- 乙益重隆 1962 「阿蘇谷の古墳群」『熊本県文化財調査報告』第3集、熊本県教育委員会：pp. 41-70
- 玉川剛司 2016 「別府市内の横穴式石室」『実相寺古墳群—別府の大型横穴式石室墳に関する総括調査報告書—』別府市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集、別府市教育委員会：pp. 149-154
- 秦 広之 2016 「鬼ノ岩屋1号墳の調査」『実相寺古墳群—別府の大型横穴式石室墳に関する総括調査報告書—』別府市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集、別府市教育委員会：pp. 101-110
- 古城史雄 2009 「肥後の横穴式石室」『九州系横穴式石室の伝播と拡散』日本考古学協会 2007 年度熊本大会分科会 I 記録集、北九州中国書店：pp. 21-45

第3部 挿図出典

- 図87：乙益 1962
 図93：原口 1974
 図95-2：秦 2016

第5部 総括

総括

本研究では、古墳時代の阿蘇地域を介した情報伝達・文物交流のあり方を明らかにするため、熊本県域および大分県域の古墳や古墳出土遺物の調査・分析に取り組んできた。そうした活動を通じて得られた成果の一端は本書の第2～4部に記した。そのなかではじつにさまざまな論点が提示されたが、九州島内における地域間交流の実際を指し示すものとしては、次のような事象が指摘された。

熊本県高森町高塚横穴群に関しては、圭頭鏃と長頸鏃の特徴を併せもつ長頸柳葉鏃や平根系の圭頭鏃、弱い山形突起を有し腸袂が弧を描きながら外側に開く平根系の腸袂柳葉鏃、骨鏃、主環の断面形が円形の小環付鉄釧の出土から南九州との関係が、また構造の酷似した短甲の出土や横穴構造の類似から五ヶ瀬川上流域（高千穂町周辺）と大野川上流域（竹田市周辺）との関係が、さらに複雑な形状の透孔を穿つ平根系大型鉄鏃の存在から阿蘇外輪山南辺の東側と西側の関係がうかがえた。

熊本県阿蘇市上御倉古墳・下御倉古墳に関しては、上御倉古墳の横穴式石室と大分県別府市鬼ノ岩屋1号墳の横穴式石室とのあいだに構造上の類似性が認められた。

田中裕介が調査した大分県豊後大野市漆生古墳群に関しては、その大久保2号墳、3号墳の主体部が石棺蓋あるいは石蓋で被覆する岩盤剝抜墓であることが確認され、その種の墓制は熊本県山鹿市灰塚古墳や同県宇土市西潤野1号墳でみられることから、大野川中流域と肥後地域とのあいだに何らかの関係があったことが推測された。

志賀智史が分析した阿蘇地域のベンガラに関しては、上御倉古墳のベンガラだけにパイプ状粒子と螺旋状粒子が含まれていること、また下御倉古墳のベンガラには砒素や鉛が含まれていることが報告された。このことから、上御倉古墳と下御倉古墳に用いられたベンガラは、不定形粒子のみで構成され砒素等を含まない阿蘇谷西部産のベンガラではないこと、砒素を含む下御倉古墳のベンガラは大分県別府市周辺に産するものである可能性が高いこと、上御倉古墳のベンガラは古墳所在地（阿蘇谷東部の西手野地区）周辺の湧水地点で採取された原料によるものである可能性が考えられることが示された。また、高塚横穴群の短甲裾部に附着したベンガラは、阿蘇谷西部産のベンガラであるとされた。つまり、古墳時代中期までは阿蘇谷西部に産する褐鉄鉱（リモナイト）由来のベンガラがおもに利用されているが、後期の下御倉古墳や上御倉古墳ではそのベンガラが用いられていないことが明らかとなった。

さて、最後に、古墳時代の阿蘇ルートを考えるうえでの論点のいくつかを整理し、終わりとしたい。

まず、村上恭通や野島永をはじめとする多くの論者が以前から注目するように、弥生時代後期の阿蘇地域では鉄関連遺物・遺構の出土がきわめて多いことである〔村上2007：pp.80-85，野島2009：p.45の第22図〕。かつて村上は、この背景について、「大規模あるいは拠点集落における鍛冶遺構の存在がより明確な阿蘇山西側の白川流域を例にとれば、上流域の外輪山内部やその他の地域で産出される鉄石を原料として入手し、流域の拠点集落の周囲で製錬し、その素材を基に鉄器を製作するという工程が想定される」と述べた〔村上1992：pp.78-79〕。つまり、阿蘇カルデラ盆地の北側、阿蘇谷の西部に産する褐鉄鉱（リモナイト）を原料とした鉄製錬が、弥生時代後期に阿蘇地域周辺で行われていたと想定したのである。

しかしその後、この在地の原料を用いた鉄製錬の存在を強調する論調はやや影を潜める。村上の2007年の著書では、阿蘇地域周辺で弥生時代「後期中葉以降、鉄器の大規模生産が維持される背景には小規模な

鉄生産による素材の自給も想定されているが、舶載素材への高い依存は否定できず、当然そこには北部九州との関係あるいは有明海沿岸地域を介した入手ルートを想定することができる」とされたのである〔村上 2007 : p. 83〕。つまり、阿蘇谷産の褐鉄鉱(リモナイト)を製錬して鉄素材を獲得したとみるのではなく、主として北部九州を通じて朝鮮半島産の鉄素材を入手していたとみるわけである。そして、熊本県側の白川・菊池川流域や大分県側の大野川流域を含めた阿蘇地域周辺には、北部九州との強い関連を示す銅戈や銅矛、舶載鏡片、小型仿製鏡、銅鏃などといった青銅器が多くもたらされているが、「阿蘇地域を含む中九州が当該期にかくも強い北部九州との関係を維持している背景にはこの阿蘇地域に何らかの求心性が潜在していたためと思われる。おそらくそれは赤色顔料として九州各地で頻用されたベンガラ(弁殻)の存在がその一つの理由としてあげられよう」と述べ〔村上 2007 : p. 83〕、阿蘇地域から搬出される交易品としてベンガラを第1に考える視点を示したのである。

明確な鉄製錬の痕跡が阿蘇地域で確認されていない現状において、交易品としてのベンガラの生産を最重要視する立場は十分に理解できる。ただ、感覚的なものでしかないが、ベンガラを鉄素材や青銅器の対価とするのはいささかバランスを欠くように感じられ、また、朝鮮半島からもたらされた鉄素材をわざわざ遠く離れた阿蘇地域にまで運んで加工する必要性を合理的に説明するのは相当に難しいように思う。

近年、阿蘇市下扇原遺跡で出土した鍛冶関連の溶着遺物を分析した大澤正己は、1180℃以上、1310℃前後までの温度上昇があった可能性を指摘した〔大澤 2010 : p. 233〕。また、野島永らや松井和幸は、阿蘇谷産の褐鉄鉱(リモナイト)を原料とした鉄製錬実験を行い、磁性をもつ含鉄物質が生成されたことを報告している〔野島・平尾 2015, 松井 2016〕。さらに松井は一步踏み込み、「弥生時代の日本列島の鉄をめぐる状況は、中国大陸や朝鮮半島からの鉄器や鉄素材を加工する方法と、阿蘇リモナイトを原料とするような原始的な製鉄方法が一部西日本地域で混在して見られたと推定される」と述べた〔松井 2016 : p. 244〕。

弥生時代後期の阿蘇地域周辺で突出した数の鉄器が出土することの理由はいまだ明確でないが、松井和幸が推測し、また以前に村上恭通が考えたように、阿蘇谷西部に産する褐鉄鉱(リモナイト)を原料として当該時期に鉄精錬が行われていた可能性を今一度検討の俎上に載せてもよいのではないだろうか。それが認められるとすれば、弥生時代後期の阿蘇地域周辺で鉄器の出土が多いことの理解も容易になる。また、ベンガラが鉄精錬の副産物であった可能性も浮上する。さらに、阿蘇谷西部で隆盛を誇った弥生時代後期の集落が古墳時代前期に継続しないこと〔杉井 2018a〕の背景も構想しやすくなるのではないか。すなわち、古墳時代前期、近畿中央政権が北部九州地域の勢力と結びながら朝鮮半島南部に産する良質な鉄素材の安定した入手に成功し、それを鍛錬しての優良な鉄器の大量生産が可能となったことにより、北部九州勢力にとっても、輸入鉄素材の加工に比べると非効率な阿蘇産褐鉄鉱(リモナイト)を原料にした鉄精錬および鉄器生産にわざわざ頼る必要がなくなったのではなかったか。社会・経済環境がまったく異なるが、アジア太平洋戦争のさなかに国内の鉱石の増産がはかられ、阿蘇リモナイトも大量に八幡製鉄所に運ばれて製鉄の原料とされていたが、戦後の高度経済成長期、海外鉄鉱石が安定的に輸入できるようになると鉄原料としての阿蘇リモナイトの価値が完全に失われた状況にも対比できそうである。それはともかく、弥生時代後期から古墳時代前期への移行期における阿蘇谷西部での集落の衰退には、阿蘇産褐鉄鉱(リモナイト)を用いた鉄精錬・鉄器生産の急激な衰退が大きく影響したと考えてみてはどうだろうか。

次に、阿蘇カルデラ盆地(阿蘇谷・南郷谷)における古墳時代前期の古墳や集落の様相が不明瞭である点が挙げられる。古墳時代前期には方形周溝墓や墳丘をもたない石棺墓が中心であったと想定されるが、埋蔵文化財の調査体制が十分に整う以前に阿蘇谷での圃場整備が進められたこともあって、それらの具体的な様相はよく分かっていない。ただ、弥生時代後期にみられる集落の隆盛、古墳時代中期以降の大型古墳や後期

以降の横穴式石室墳の盛んな築造状況に比べると、古墳時代前期はその地域活力が大幅に低調な時期であったことはほぼ確かなようである。そうした視点で周囲をながめると、阿蘇外輪山の東側、大分県竹田市の菅生台地に2基の前方後円墳を含む前期の古墳群、七ツ森古墳群が造営されていることは注目される。七ツ森古墳群からは三角縁波文帯三神三獣鏡（福永伸哉舶載鏡編年D段階）の出土も伝えられている。七ツ森古墳群から阿蘇谷まではおよそ15～16kmの距離しかないが、それにもかかわらず阿蘇谷では三角縁神獣鏡はもちろんのこと前期の有力な古墳さえほとんど知られていないのである。すなわち、古墳時代前期においては、九州島の東西を結ぶ阿蘇ルートのうち、菅生台地と阿蘇谷とのあいだは極端にその連絡の程度が低下した可能性が考えられるのである。前期の有力前方後円墳の築造場所や銅鏃等の分布から推測すれば、おそらく当期では、九州島の東西を南北につたう沿岸ルートの重要性がより大きくなっていたと考えられる。熊本県域の宇土半島基部地域や八代・芦北地域で出土した三角縁神獣鏡⁽¹⁾も九州島の西岸をつたう沿岸ルートによってもたらされたものと思われる。

そうした状況に変化が生じるのは、古墳時代中期中葉である。河川づたいに進む内陸ルートの重要性が高まるのである。阿蘇谷の中通古墳群に、墳頂100mを超える前方後円墳、長目塚古墳が築造されるのもこの時期である〔杉井編2014〕。古墳時代中期に内陸ルートが重視された可能性については、これまでも幾度か言及しているが〔杉井2012, 杉井編2014〕、阿蘇地域を考えるうえで注意すべきなのは、現状の資料によるかぎり、阿蘇カルデラ盆地内で帯金式甲冑の出土が知られていないことである。阿蘇外輪山の東側に位置する高塚横穴群や扇森山横穴からは短甲が出土しており〔本書第2部〕、また西方の合志川中流域では熊本市北区植木町マロ塚古墳〔杉井・上野編2012〕等で複数の甲冑の出土が知られている。阿蘇カルデラ盆地を避けるようなこの甲冑の分布状況については、今後の資料の動向にも注意しながら、その理由を探っていく必要がある。

肥後（熊本県）地域という点に着目すれば、阿蘇地域では確かな装飾古墳が知られていない点にも注意を払う必要がある。本書第3部でも述べたように、上御倉古墳を装飾古墳と判断することについては、現状の資料状況によるかぎり躊躇を感じる。しかし、横穴式石室構造が類似する大分県別府市鬼ノ岩屋1号墳は装飾古墳である。また、阿蘇外輪山北側の日田盆地や玖珠盆地にも装飾古墳が築造されている。そうした周囲の状況にも目配りしつつ、阿蘇地域の古墳の特徴をより明確にすることが求められる。

阿蘇地域の古墳時代については、まだまだ不明な点が多い。なかでも、その集落の動向はほとんど明らかにされておらず、今後の重要な検討課題である。また、阿蘇カルデラ盆地のなかでも南側の南郷谷については未報告の資料が多いこともあって、その古墳時代の様相はよく分かっていない。

今後、そうした点にも注意しながら、阿蘇地域に関する調査研究をさらに進めていく決意である。

（杉井 健）

註

(1) 熊本県宇土市城ノ越古墳出土1面、伝八代郡出土1面、伝葦北郡出土3面がある。伝葦北郡出土の三角縁神獣鏡に関しては、近年、森下章司により新たな資料1面の発見が報告され計3面となった〔森下2013〕。

第5部 引用・参考文献

- 大澤正己 2010 「下扇原遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『小野原遺跡群』第2分冊、熊本県文化財調査報告第257集：pp. 231-239
- 杉井 健 2012 「マロ塚古墳出現の背景」『マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第173集、国立歴史民俗博物館：pp. 541-562
- 杉井 健 2018a 「弥生時代後期集落の消長よりみた古墳時代前期有力首長墓系譜出現の背景—なぜそこに古墳は築かれたのか—」『古代東アジアにおける倭世界の実態』国立歴史民俗博物館研究報告第211集、国立歴史民俗博物館：pp. 351-407
- 杉井 健 2018b 「古墳時代中央政権の外交政策と国家形成」『待兼山考古学論集』Ⅲ、大阪大学考古学研究室30周年記念論集、大阪大学考古学研究室：pp. 239-254
- 杉井 健編 2014 『長目塚古墳の研究—有明海・八代海沿岸地域における古墳時代首長墓の展開と在地墓制の相関関係の研究—』2010年度～2013年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書、熊本大学文学部
- 杉井 健・上野祥史編 2012 『マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第173集、国立歴史民俗博物館
- 杉原 實編 2015 『第一阿蘇鉦山 株式会社日本リモナイト 創立50周年記念誌』株式会社日本リモナイト
- 野島 永 2009 『初期国家形成過程の鉄器文化』雄山閣
- 野島 永 2014 「研究史からみた弥生時代の鉄器文化—鉄が果たした役割の実像—」『農耕社会の成立と展開—弥生時代像の再構築—』国立歴史民俗博物館研究報告第185集、国立歴史民俗博物館：pp. 183-212
- 野島 永・平尾英希 2015 「リモナイトによる製錬実験(1)」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第7号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室：pp. 85-91
- 福永伸哉 2006 『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会
- 松井和幸 2016 「弥生時代鉄精錬の可能性—熊本県阿蘇のリモナイト—」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室50周年記念論文集・文集』人島大学考古学研究室50周年記念論文集・文集刊行会：pp. 231-246
- 村上恭通 1992 「中九州における弥生時代鉄器の地域性」『考古学雑誌』第77巻第3号、日本考古学会：pp. 63-88
- 村上恭通 1997 「肥後における鉄研究の成果と展望」『肥後考古』第10号、肥後考古学会：pp. 1-19
- 村上恭通 2007 『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
- 村上恭通 2010 「肥後・阿蘇地域における弥生時代後期鉄器の諸問題—下扇原遺跡を中心として—」『小野原遺跡群』第2分冊、熊本県文化財調査報告第257集：pp. 283-299
- 森下章司 2013 「林裕己氏蔵三角縁神獣鏡と伝葦北郡出土鏡」『横浜ユーラシア文化館紀要』第1号、横浜市ふるさと歴史財団横浜ユーラシア文化館：pp. 37-42
- 山内裕子 2013 「古代製鉄原料としての褐鉄鉦の可能性—パイプ状ベンガラに関する一考察—」『古文化談叢』第70集、九州古文化研究会：pp. 243-252

古墳時代阿蘇ルートの研究

－阿蘇地域に築かれた古墳に着目して－

2014年度～2017年度科学研究費補助金
基盤研究（B）研究成果報告書

発行年月日 2019年3月29日

編集 杉井 健

発行 熊本大学文学部

〒860-8555 熊本市中央区黒髪 2-40-1

電話：096-344-2111（代表）

印刷 シモダ印刷株式会社

〒862-0951 熊本市中央区水前寺 2-16-16

電話：096-383-5512
